

魔法少女リリカルなのはViVid一人喰らいし、古の血一

ダラケー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある管理世界で発見されたロストログアである細胞―『アマゾン細胞』。

それを体内に投与すれば人並外れた力を手に入れられるが引き換えに人を食らわねば生きてはいけなくなる怪物―『アマゾン』へと変わり果てる。

時空管理局のシグナムは一人の少年と出会う。

その少年はアマゾンの中でも最強種『仮面ライダー』であった。

目次

リユイとその他の設定	1
出会う烈火と小さき狩人	4
hunting	00
hunting	01
hunting	02
hunting	03
hunting	04
hunting	05
hunting	06
hunting	07
hunting	08
hunting	09
hunting	10
hunting	11
hunting	12
hunting	13
hunting	14
hunting	15
hunting	16
番外編1	50
リユイVSミウラ 前編	53
リユイVSミウラ 後編	56
コラボ編1 出会う大天使と小さき狩人	

番外編 2

hunting	29	134
hunting	28	131
hunting	27	128
hunting	26	125
hunting	25	122
hunting	24	119
hunting	23	117
hunting	22	114
hunting	21	110
hunting	20	108
hunting	19	105
hunting	18	102
hunting	17	99

出会う子孫と小さき狩人

kamenrider×kamenrider	91
kamenrider×kamenrider	88
kamenrider×kamenrider	86
kamenrider×kamenrider	82
kamenrider×kamenrider	77

コラボ編 2 出会う次元の旅人と小さき狩人

specialhunting	04	68
specialhunting	03	65
specialhunting	02	62
specialhunting	01	59

お正月回！

カルジーナ編

hunting

30

138

hunting

31

142

hunting

32

144

hunting

33

147

hunting

34

150

hunting

35

154

番外編3

クリスマスの時のオリ主人公の話し

158

恐怖のたまり場

hunting

36

162

hunting

37

164

hunting

38

167

hunting

39

171

hunting

40

173

hunting

40

175

hunting

41

177

hunting

42

181

hunting

43

184

hunting

44

186

hunting

45

191

hunting

46

193

hunting

47

196

出会う強者の少女たちと小さき狩人

h u n t i n g	h u n t i n g	h u n t i n g	アマ ゾン レス トラ ン	h u n t i n g	h u n t i n g	h u n t i n g	h u n t i n g	h u n t i n g	傷 つ い た 小 さ な 心	h u n t i n g	h u n t i n g	h u n t i n g	最 凶 の 狩 人	h u n t i n g	h u n t i n g	h u n t i n g	h u n t i n g	h u n t i n g	h u n t i n g	出 会 う 世 界 の 破 壊 者 と 小 さ き 狩 人	h u n t i n g	h u n t i n g	h u n t i n g	h u n t i n g
6 8	6 7	6 6		6 5	6 4	6 3	6 2	6 1		6 0	5 9	5 8		5 7	5 6	5 5	5 4	5 3	5 2		5 1	5 0	4 9	4 8
254	252	247		244	241	239	237	234		231	228	225		222	220	217	214	212	209		206	203	200	198

hunting	75	319
小さな狩人と優しき狩人		
hunting	76	314
hunting	75	310
再戦・最凶の狩人		
hunting	74	307
hunting	73	305
hunting	72	299
hunting	71	295
小さな心を揺さぶる疑問・不安		
hunting	70	291
2019年―2020年 年末年始		289
母の日		287
特別回 父の日		283
番外編 3		
er!Part3		279
Extra hunting		
cooking		
hamburger		
er!Part2		275
Extra hunting		
cooking		
hamburger		
er!Part1		272
Extra hunting		
cooking		
hamburger		
特別回・医者で、ゲーマーで、ライダー！		
cross hunting		266
戦々恐々の狩人		
hunting	69	260

h u n t i n g	7 6	
h u n t i n g	7 7	
小さな狩人と野生の狩人		
h u n t i n g	7 7 . 5	
懐かしき思い出		
h u n t i n g	7 8	
番外編 4		
h u n t i n g (?)		
特別編 混血と狩人と異世界の敵		
特別編 暗黒との邂逅 (前編)		
特別編 暗黒との邂逅 (後編)		
特別編 暗黒の戦士		
特別編 邂逅の混血たち		
		353
		349
		344
		341
		338
		333
		330
		326
		322

リュイとその他の設定

八神 リュイ

身長：127cm

体重：27kg

年齢：約8歳（細胞の成長具合から判断）

シグナムが検挙したテロ組織にて捕らわれていた子。

アマゾンの遺伝子と人間の遺伝子の両方を持っており、アマゾンと人間のハーフ。

スズランの様に白い髪に、赤い目をしている。

年齢は細胞分裂などの具合から10歳未満と推定されている。

ただどしいが、喋ることは出来る。

ただし、「な」行だけは「にゃ」行になっている。

シグナムに保護されてから彼女に懐いており、いつしか母親と思うようになってる。

仮面ライダーアマゾン ガンマ

リュイが変身するアマゾン。

アマゾンの中でも最強種と位置付けられており、別名【アマゾンライダーガンマ】。

普段は胎内に溶け込んでいるベルト【アマゾンズドライバー】の左側のグリップを捻って「あまぞん…」と言いながらも一度グリップを捻って変身する。

白い純白の全身で、青い目をし、両腕と両足そして背には鋭いカッターがあるのが特徴。

武器はグローブとブーツの部位にはカッター（【アームカッター】と【レッグカッター】）と左側のグリップ【バトラーグリップ】を引き抜いて変幻自在の手持ち武器（【アマゾンブレイド】【アマゾンウィップ】【アマゾンスピア】【アマゾンサイズ】）を状況に応じて使用することもある。

ガンマに変身後は戦闘に集中しているために喋ることがあまりな

い。

戦闘後、変身解除時に変身の反動なのか眠ってしまうが、緊迫した状況などでは変身解除後も起きている時がある。

アマゾン細胞

とある管理世界に突如発掘された遺跡から発見された細胞型のロストロギア。

しかし、細胞型のロストロギアはあまり聞かれていなかった為に当初は古代の細胞か何かかと推測されていた。

実験体 アマゾン

時空管理局が呼称する怪物たちの総称。

とある製薬会社によりウイルス程度の大きさだったアマゾン細胞を人間大にまで成長したもの。

アマゾンはタンパク質を補給しなければならないが、普通の家畜の肉では維持できず、唯一維持できるのが人間の肉のみ。

故に覚醒したアマゾンは目に入った人間を見境もなく捕食しようと襲いかかる。

個人的なのは不明だが個体により、その容姿や能力が違う。

またアマゾンは元来、本能のまま暴れるか人間を喰らうことしかないが中には人間のように言語を喋る個体や2体以上の複数体のグループを作る個体がいる。

時空管理局が実験施設に来たときに施設が爆発、約4000体のアマゾンが野に放たれることなる。

しかもアマゾンの大半は人間に姿を変えて生活を送っているために発見が困難を極める。

一応の処置としてレジスターと言われる腕輪をしているが、服などで隠れてしまい、見つけるのは不可能で、アマゾンとなった時に発せられる信号のみが唯一の索敵手段となる。

アマゾンレジスター

4000体のアマゾン及びリュイが腕にしている腕輪。

中には食人衝動を抑える薬が入っており、定期的に自動で投与される。

ただし、中の薬は2年分しか入っておらず、薬が切れるとたちどころに衝動に襲われて怪物になる。

レジスターは目の部分が青だが、薬が切れてアマゾンが覚醒すると赤となり居場所を教える追跡機能を備える。

リュイの付けているのはレジスターをはやてたちが独自に改良しており、青いままでもリュイの位置を特定できる機能が備わっている。

なお、中身の薬品についてはまだ成分分析が出来ておらず研究施設内に保管されていた予備の薬をリュイに投与している。

出会う烈火と小さき狩人

h u n t i n g 00

薄暗い通路に並ぶ檻、その中の一つにまだ幼い男の子が1人で檻の中に入れられていた。

服は着ておらず、上腕二の腕あたりに目のような部分が青く輝いて、何かの顔に見える腕輪をしていた。

細い手足には太い枷を嵌められており自由を制限されている。

薄暗いなかで蠟燭が唯一の灯りとなっていた。

そんな薄暗い場所に足音がすると1人の男が男の子の織りの前に来た。

男「おい、餌だぞ」

檻の前に男が来て僅かに開いている隙間に皿を入れると来た道を戻っていった。

皿の上には生の状態での肉があった。

男の子は差し出された皿に乗せられている生肉を手に取り何の躊躇いもなくかぶり付いた。

血と生肉の生臭さが鼻につく。

しかし男の子は食べ続けた。

ものの数分で生肉を食べ終えた男の子は空の皿を通路に出し血と脂で汚れた手を舐め始めた。

手を舐め終えた男の子は檻の隅まで歩くと両足を抱えるように座った。

そして目を瞑って眠り始めた。

毎日こんな感じだ。

毎日のように生肉を出されて食べ、血と脂で汚れた手を舐めて眠る。

それが男の子の毎日だった。

今日もそうなるだろうと思っていた。

だが、それは違った。

男A 「くそっ！管理局が!!」

男B 「実験体を移動させろ！」

男の子が眠っていると地上から男の子に生肉を出した男を含め、複数の男たちの怒声と慌てたが聞こえて目が覚めて起き上がった。

? 「逃がすか!!」

「うわああああああ!!」

男たちの他に今まで聞いたことがない女性の声があるとドアが壊れたのか、バラバラになったドアだったものと一緒に男たちが雪崩のように落ちてきた。

男たちが落ちた後、一人の女性が降りてきた。

八重桜のロングヘアをポニーテール纏め、刀を右手に持った女性だった。

? (きれいな…ひと…)

鉄格子まで近寄り、女性を見た男の子は正直にそう思った。

「く、くそ…まさかよりによって武装隊のシグナムがくるなんて…ひい!」

シグナム 「ロストロギア不法所持で…ん？」

刀を男たちに向かって構え何かを言っている女性「シグナム」は視線を感じて横を見ると男の子と目が合った。

男A 「今だ!!」

シグナムが男の子の方を向いている一瞬の隙に男たちが逃げ出した。

シグナム 「あ、待て！」

逃げていく男たちに気づいたシグナムは追いかけてしようとしたが直ぐに男の子のいる檻に近付いた。

シグナム 「今出してやるからな。離れてなさい」

優しくそう言うと言った男の子は鉄格子から離れた。

男の子が離れたを見たシグナムは持っていた刀「レヴァンティン」で檻の鉄格子を斬った。

鉄格子を斬ったシグナムは檻の中に入ると男の子の手足に嵌められていた鎖を斬った。

シグナム「もう大丈夫だ」

シグナムはそう男の子に微笑みながら言う。

？「ありが…とう…」

小さいながらも確りとした声でシグナムに礼を言った。

シグナム「礼には及ばん…！」

お礼を言われたシグナムだったがふと男の子の二の腕に嵌められている腕輪が視界に入って驚いていた。

シグナム「お前、まさか…!？」

後ろから来る殺気にシグナムは気付き檻を出た。

男B「た、助けてくれー!!」

さつき逃げた男の片割れが血相を変えて走ってきた。

なぜか体は血だらけであった。

？「グガゴオオオオオオオオオオオオオオ!!」

男B「うわあああああああ!!」

男の上に何かが乗っかり、馬乗りになった。

シグナムは男に馬乗りになったのが人間ではないことは直ぐに分かった。

体は馬乗りにされている男より一回り大きく、外見はカブトムシに似ており、頭だけでなく両腕の甲辺りにも角のようなものが付いた怪人で、左腕には男の子と同じ形で、赤く光っている腕輪を付けていた。

？「グガゴオオオオオオオオオオオオオオ!!」

男B「ぎゃあああああああ!!」

怪人は男の腹部辺りに噛み付き、内蔵を引きずり出して捕食し始めた。

男B「あ…ああ…」

内蔵を食われ、傷口から血が流れる男は直ぐに息絶えてしまった。

シグナム「実験体か！」

怪人を「実験体」と呼び、シグナムはレヴァンティンを構えた。

すると男の子が檻から出てシグナムの前に来た。

シグナム「何をしてる!?危険だ！」

シグナムが叫ぶと男の子はシグナムの方を向いた。

？「はんていんぐ…する…」

シグナム「ハンティング？」

首を傾げるシグナムを他所に男の子は怪人の方に向き直った。

男の子が怪人に向き直ったのと同時に腰からベルトが浮かび上がるように現れた。

男の子は浮かび上がったベルトの左側のグリップを持つと思いきり捻った。

【GA・M・MAー！】

グリップを捻ると両目のような赤い部分に血走りのような模様が入り、英語風に『ガンマ』と聞こえた。

？「あまぞん………」

【ANCI・AN・ANCIENT!!】

ボソリと男の子がそう言うのと同時に再びグリップを捻った。

グリップを捻った瞬間、男の子を中心に熱波と衝撃波が起きながらその姿を変えた。

白い純白の全身で、両腕と両足そして背には鋭いカッターがあり、青い目をした戦士に変わった。

ガンマ「…アマゾンライダー…ガンマ…hunting star
t…」

流れた液体がガンマの純白の体を黒く汚す。

しかし黒い液体はすぐに蒸発、両断されたカブトアマゾンの肉体も黒い液体となり、ドロドロに溶けたかと思いきやすぐに蒸発していった。

ガンマ「……」

カブトアマゾンの体が溶け、液体となった後で跡形も無くなく蒸発するのを見届けたガンマは残された腕輪を拾い上げた。

ガンマ「…ハズレ…か…」

ガンマは拾い上げた腕輪をマジマジ見た後、そう言つてグシヤリと握り潰しポイと捨てした。

ガンマ「……」

腕輪を捨てたガンマがシグナムの方を見るとベルトが消え、周囲に今度は冷気が一瞬だけ起きると元の男の子の姿に戻った。

シグナム「お前はいつたい…」

そうシグナムが聞いた瞬間、男の子がいきなりその場に倒れた。

シグナム「お、おい!？」

いきなり倒れた男の子に驚いていたシグナムは慌てて駆け寄り、抱き上げた。

? 「すー…すー…」

抱き上げられた男の子は気持ち良さそうに寝息を立てて眠っていた。

シグナム「寝てるだど!？」

眠っていることを見て、心配して損したシグナムは呆れてしまった。

シグナム（いつたい、この少年は何者なんだ?）

カブトアマゾンと互角以上に戦っていた男の子の力を思い出した。

シグナム（確か、仮面ライダーアマゾンYだったな…起きたら色々聞かねばなるまい）

そう思いながらシグナムは眠っている男の子を抱えて部屋を後にしたのだった。

?「……………」

その男の子が目を覚ますとベッドの上に寝かされていた。

?「ここ…どこ…?」

起き上がって周囲を見回した。

服は入院服のような服を着せられていた。

?「気が付いた?」

?「?」

声を聞いてその方向を見るとそこには短い金髪の髪、白衣の下には茶色い制服のようなのを着た女性がいた。

シヤマル「あ、私はシヤマル。時空管理局の医師よ」

?「かんり…きよく…?」

小さいがはつきりとした発音で言うと男の子は首を傾げた。

シヤマル「そうよ。それで君は自分の名前、分かる?」

?「なまえ?」

自分の名前が分からないのか男の子は再度首を傾げた。

シヤマル「分からないの?」

首を傾げた男の子がシヤマルは聞くとコクリと頷いた。

シヤマル「そう…じゃあ、ご両親とか家族とか分かる?」

自身の名前が分からなくても、家族がいなくか聞くが、男の子は首を横に降った。

シヤマル「……………」

首を横に降った男の子を見て、シヤマルの中で、ある確信が過った。

シヤマル「そっか。ごめんなさいね、変な質問して」

名前も分からず、家族もない男の子にシヤマルは優しく言う。

シヤマル「それじゃあ、質問も終わったし…」

男の子からある程度聞いたシヤマルは隣のベッドに置いてある金属のプレートからあるものを取り出した。

シヤマル「少し痛いけど、我慢してね?」

笑顔で取り出した【注射器】を取り出して男の子に言う。

男の子「ひっ!?!」

そんなシャマルを見て、男の子は怯えてしまっていた。

数時間後のシグナムは本局の病棟に来ていた。

理由はシグナム自身が出会ったあの男の子に会うためだ。

男の子がいる病室まで来た時、中から声が聞こえた。

シャマル『ちよつと、大人しくして!』

慌てるシャマルの声。

男の子『やー!!』

嫌がる男の子の声もした。

シャマル『直ぐに済むから、ね?』

男の子『やー!!』

シャマル『え、ちよつ：痛い、痛い!!』

2人の声から何があったのか大体分かったシグナムはため息を吐きながらも病室のドアを開けた。

ドアを開けたのと同時に男の子が飛んで来てシグナムに抱くとブルブルと小動物のように震えていた。

シャマル「あ、良かった。シグナム、その子を押しさえてて」

髪はぐちやぐちやになり、白衣はシワだらけで右手に中身が空の注射器を持ったシャマルがシグナムにそう言った。

どうやら採血の為の注射のようだが男の子は恐がって逃げているようだ。

シグナム「その前にその凶器を降ろせ」

シャマル「え?凶器?」

シグナム「この子は注射に怯えているんだ。早く隠せ」

シャマル「え?あ…」

シグナムに言われて気付いたシャマルは注射器を近くのベッドの中に隠した。

シャマル「ほ、ほら恐いの無くなったよ」

男の子「やー!!」

シャマル「ええ!?!」

何もないアピールをするシャマルだが、恐がる男の子にショックを受けてしまう。

「どうやら男の子の中で、シャマルは怖い人のイメージになってしまったようだ。」

シグナム「医者が嫌われてどうする…」

シャマル「面目ないわ…」

怖がられてしまい完全に落ち込むシャマルにシグナムは呆れていた。

その後、男の子の採血はシグナムに抱きついたまま行われた。

採血が済むと男の子はシグナムに抱きついたまま眠ってしまった。

シグナムに抱き着いて、安心したのか、恐怖で張り詰めた緊張の糸が緩んでしまったのだろう。

シャマル「はあ…注射器一本で嫌われるなんて…」

シグナム「致し方なからう。注射器を持って笑顔で追いかけてくれば、誰だって怖いものだ」

眠っている男の子はシグナムから離れようとしなかったためにベッドに腰かけて言う。

シャマル「そうよね。とりあえず貴女が言っていた通りならこの子は実験体の可能性があるわ」

男の子のことは調査チーム内だけでしか知られていないがシャマルには報告が来ている。

シグナム「ああ…だが子供の姿をしている実験体などいるのか？」

シャマル「さあ…でも、この子についているレジスターや名前や家族がないことを含めると、この子は実験体としか言いようがないわ」

男の子の左腕に嵌められている腕輪「アマゾンズレジスター」とさつきまでの会話、そして採取した血の入った容器を見ながらシャマルは言う。

シグナム「期待しているぞ。シャマル」

シャマル「ええ。任せて！」

期待されて、シャマル意気込むのであった。

時空管理局、それは実行部隊として次元航行艦船や武装隊などの強力な戦力を有している、この世界最大の組織である。

内部は次元の海に本局を置く【海】こと次元航行部隊と次元世界ミッドチルダに本部を置く【陸】こと地上部隊に分かれており、主に受け持つ案件の違いから異なる性質を有している。

治安維持を担う軍隊や警察、そして法務執行を担う裁判所としての機能を合わせ持っており、魔導師という人材が圧倒的に少ないという事実からも、優秀な能力と本人の協力意志さえあれば、前科を持つ人間や逮捕された人間でも、短期の更生期間を経て時空管理局員として迎える事が可能となっている。

実験体ことアマゾン対策は、主にこの組織が担当しており、海と陸を統合した部隊が捜査を行っている。

そして、今日はアマゾンの対策を話し合う会議なのだが、いつもなら緊張で空気が張り積める会議室は違っていた。

理由はシグナムに抱きついたまま眠っている男の子であった。

あの後、会議に出る時間となったシグナムは男の子をベッドに戻そうとしたが、全く離れず結局この状態で会議に出席することとなった。

会議に出ないのも手だったが真面目な彼女にそれは出来なかった。

はやて「し、シグナム、その子は？」

上官で対策本部本部長兼シグナムとシャマルたちの主、「八神 はやて」が男の子を見て、聞いてきた。

シグナム「後で説明します…」

聴かれたシグナムは顔を赤くして言う。

流石の【烈火の将】の肩書を持つシグナムですからこの状況は恥ずかしいようだ。

だが、男の子はそんなのお構い無し…と言うより、完全に安心しきった顔で眠っていた。

はやて「そうか…ほな、会議を始めよか。リイン」

はやてもシグナムの今の姿に内心戸惑いながらも会議を始めるところにした。

リイン「では会議を始めさせていただきます。まず……」

はやての隣にいた少女【リインフォース・ツヴァイ】こと【リイン】が会議を始めた。

リイン「つと、ここまでがアマゾンたちの特徴です。それで、今後の対策なのですが……」

リインが報告書を読みながら、話している時、「ぐううううう」つと、お腹が鳴る音が会議室に響いた。

音が出た方を見るとシグナムにその視線が集まった。

はやて「シグナム、まさか……」

シグナム「わ、私ではありません!!」

見られたシグナムは直ぐ様否定する。

男の子「おなか……すいた……」

声を見るといつの間にか男の子が起きて、シグナムを見ていた。

はやて「お腹すいたんか？」

さっきのお腹の音が男の子から聞こえてはやてが聞くと男の子は頷いた。

どうやらお腹がすいて目を覚ましたようだ。

はやて「そうか。誰かこの子を……」

会議室にいる誰かに、はやては指示しようとするが、男の子はシグナムの制服をぎゅつと握りしめていることに気づいた。

はやて「……シグナム、その子と一緒に昼食とってき」

シグナム「な、なぜ私なんですか？」

はやて「簡単や。まだ、シグナムにしか懐いておらんからな」

聞かれたはやてが言うと、シグナムも自身の制服を男の子がギュツと握りしめていることに気づいた。

シグナム「……分かりました」

確かに、今の男の子は自身以外にまだ心を開いていないことを理解したシグナムは了承する。

はやて「会議の結果は追って連絡するから」

シグナム「はい」
男の子を降ろし、手を繋ぐと一緒に会議室を出ていったのだった。

会議室から出て、10分後、管理局の食堂にシグナムは男の子と来ていた。

丁度、昼休みらしく辺りの席は局員で一杯であったがなんとか席を見つけて男の子を座らせると食事を取りに行った。

男の子は少し不安そうにしていたために、シグナムは2人分のサンドイッチを持って戻ってきた。

シグナム「ほら、これはお前の分だ」

サンドイッチが2つ入っている袋をシグナムは男の子に差し出した。

男の子「ありが…とう…」

シグナムからサンドイッチの入った袋を受け取って、男の子は言う。

男の子「いただきます…」

受け取った袋を取って、サンドイッチを取り出した男の子は食べ始めた。

シグナムも男の子の隣に座わり、袋からタマゴサンドを取って食べ始めた。

男の子が食べているサンドイッチはハムとキャベツが挟まっている。

シグナム「美味しいか？」

シグナムなら聞かれて男の子はサンドイッチを食べながら頷いた。
シグナム（アマゾンには確か人肉しか食べないはずだが…）

サンドイッチを美味しそうに食べている男の子を見て、シグナムはそう思っていた。

なぜなら、本来のアマゾンは人間の肉しか食さない。

しかし、男の子は豚肉であるハムだけでなく、キャベツも確り食べていた。

？「あれ？シグナムじゃない」

シグナム「テストタロツサか」

声を掛けられて、反応すると金髪のストレートで、黒の管理局の制服を着た女性―本局次元航行部隊執務官「フェイト・T・ハラオウン」が来ていた。

フェイト「隣開いてる？」

シグナム「ああ、構わない」

男の子「……」

フェイトが座るなり男の子は食べる手を止めてシグナムの背の陰に隠れた。

フェイト「その子は？」

シグナム「訳ありだな。昨日検挙した犯罪組織の根城にいたのを保護したんだ」

まだ検査結果が出ていないので、男の子がアマゾンであることを隠しておき、表上ではシグナムが誘拐された子供を保護して親を探していることになっている。

フェイト「そう…でも私、凄い警戒されてない？」

シグナム「恐らくシヤマルだな」

フェイト「え？」

シグナム「実はな…」

シグナムはフェイトにシヤマルが男の子に嫌われる羽目になったことを話した。

つまり金髪の人に男の子は少なからず警戒してしまうことを話したのだ。

フェイト「あ…それは警戒されるはずよね…」

シグナムから話を聞いたフェイトは自身を男の子が警戒することとに納得した。

？「……」

シグナムと楽しく会話しているフェイトの顔を男の子は顔だけ出してじーっと見つめていた。

フェイト「こんにちわ」

男の子が見つめているのに気付いたフェイトは男の子が恐がらなないように笑顔で挨拶した。

？「こん…に…ちわ…」

シグナムの背の陰に隠れてはいるが挨拶した。

フェイト（か…かわいい!!）

フェイトの煩惱を感じたかは定かだではないが何かを感じた男の子はビクツとなつてシグナムの背の陰に再び隠れた。

？「やっぱり…きんいろ…こわい…」

フェイト「ええ!？」

ぼそりと呟いた男の子の言葉が聞こえて、子供には懐かれやすいと自負していたフェイトはガビーンとショックを受けた。

シグナム「はあ…」

これにはため息をついて呆れてしまうシグナムであった。

時空管理局にある武装隊のオフィスにて、シグナムは自身のデスクに座り会議の結果である資料を読んでいた。

方針はこれまでと変わらずアマゾン及びアマゾン細胞を不法に所持している犯罪組織の摘発並びにアマゾンの撃滅または捕獲であった。

シグナム（2年前にあんなことが無ければな……）

資料を読み終えて、シグナムはそう思っていた。

2年前に何があったかと言うと、とある管理世界に発掘された遺跡の中から見つかった細胞型のロストログア：後にアマゾン細胞と呼ばれる細胞である。

アマゾン細胞は投与された生物は身体能力を飛躍的に上げ、人並み外れた力が手に入る

しかし、投与された生物を瞬時に怪物へと変化してしまう。

さらにアマゾン細胞はたんぱく質を好む。

だが、普通の肉などではアマゾン細胞は満足せず唯一満足させられるのが、人間の肉。

アマゾン細胞を投与されれば人食い怪物と成り果ててしまうのだ。

管理局は直ぐにアマゾン細胞を封印しようとするがとある製薬会社がアマゾン細胞を奪取。

アマゾン細胞を使用した非合法の実験を行っていた。

それはアマゾン細胞を人間大にまで成長させた人工人間である通称【実験体】の製造である。

さらに、その実験体を使用した生物兵器を開発し、闇のマーケットや紛争地域などに売り付け、利益を得ようとしていた。

事態を重く見た管理局上層部は直ちに製薬会社の調査を開始。

物証を揃えた上で、製薬会社の研究施設を突き止めた管理局は局員を向かわせる。

しかし、研究施設への突入寸前で、施設が謎の爆発を起こした。

爆発により研究員は全員死亡し、実験体は全滅したかに思われている

た。

だが、後の事後処理にて回収された研究データから約4000体もの実験体が製造され、爆発に紛れて全てが野に放たれていた。

さらに最悪なことに一部をアマゾン細胞がテロ組織などに横流しされていた。

野に放たれた実験体4000体を管理局はその元となった細胞から「アマゾン」と呼称して対応しているのだ。

シヤマル「あ、シグナム。こんな所にいたのね」

2年前の事件の資料を読んでいると、シグナムを探していたであろう書類を持ったシヤマルがやって来た。

シグナム「シヤマルか、どうした？」

シヤマル「あの子の検査結果が出たの」

持っていた書類を見せながらシヤマルはシグナムを探していた理由を言う。

シグナム「そうか…で、どうだった？」

シヤマル「それが妙なの」

シグナム「妙？」

結果を聞いてきたシグナムにシヤマルは信じられないというような顔をしていた。

シヤマル「あの子には確かにアマゾン細胞があったわ。でも同時に人間の細胞もあったわ」

シグナム「なに、人間の細胞もか!？」

シヤマルの言葉を聞いてシグナムは驚いて声を上げた。

シヤマル「ええ」

驚くシグナムにシヤマルは頷いて書類を渡した。

書類を受け取ったシグナムは書類を見てシヤマルが言っていたことが本当だと認知せざるをえなかった。

アマゾン細胞から生み出されたアマゾンは細胞すべてがアマゾン細胞のみの人工生命体である。

しかし、あの男の子はアマゾン細胞だけでなく人間の細胞も持っている。

書類を見たシグナムの中にある仮説が出来た。

シグナム「まさか：あの子はアマゾンと人間の子なのか？」

人間とアマゾンの血を持つ忌み子、それがあの男の子であると。

シヤマル「分からないわ。でもそうでなければ説明がつかないの」
「どうやらシヤマルも同じ考えであつたようだ。」

シヤマル「はやてちゃんには何て言うの？」

シグナム「主はやてには次の会議で私が直接言っておくつもりだ」

シヤマルからはやてには忌み子かもしれない男の子のことをどう話すかと聞かれてシグナムはそう答える。

シヤマル「そう：」

シグナムの言葉を聞いてもなお、シヤマルは少しの心配していた。

その時、局に緊急事態を知らせるサイレンが鳴り響いた。

緊急事態の警報が鳴り響く少し前、管理局の病棟に一人の男性が搬送されてきた。

医師A「バイタルは!？」

看護婦A「かなり酷い状態です!」

医師B「傷も深く、出血も多いです!」

医師A「くそつ、実験体に受けた傷が深すぎる…急いでシヤマル先生を呼んでこい!」

看護婦B「はい!」

搬送されてきた男性の容態に焦りながらもなんとか対処しようとする医師や看護婦たち。

すると男性が一人の看護婦の腕を掴んだ。

男性「こ…こ…は…?」

看護婦C「時空管理局の病棟ですよ」

聞かれた看護婦Cがそう答えると男性は辺りを見回した。

男性「お前…旨そう…だな…」

看護婦C「え?」

男性が言った意味が分からない看護婦Cは首を傾げた時、男性の顔の一部が火傷をしたように爛れ、さらに体からは煙まで上がっていた。

男性の体から出る煙が一気に吹き上がり、高熱と衝撃波が起きて男性の姿を変えた。

?「バロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

煙が晴れるとそこには像に似た顔で、巨漢の怪人になった。

看護婦C「きゃああああああああああああああああ!!」

医師A「あ、アマゾンだあ!!」

男性がアマゾンに変わったことに周りの医師や看護婦たちが驚き悲鳴を上げた。

?「バロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

看護婦C「ひっ!い、いやああああああああああ!!」

白い純白の全身で、両腕と両足そして背には鋭いカッターがあり、青い目をした戦士【仮面ライダーアマゾンガンマ】に変身した。

少年が変身したのを目の当たりにしたナースは驚き口をパクパクさせていた。

ガンマ「グルルルル…ガアアアアアアアアアアアアッ!!」

象型のアマゾン「『エレファントアマゾン』に構えたガンマはエレファントに向かって走りだした。

エレファント「バロオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!」

ガンマ「ハッ!!」

迫り来るガンマにエレファントは長い鼻を動かしてガンマを叩き潰そうとするがガンマは体を回転させながら右腕のカッターを使い、エレファントの鼻を切断した。

切断された鼻は床に落ち、水揚げされた魚のようにビチビチと動いた。

エレファント「バロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!?」

鼻を切断されたエレファントは怯む。

ガンマ「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

エレファントが怯んだ隙に接近しようとするガンマ。

その時、エレファントの切断され床に落ちた鼻がガンマの首に巻き付いた。

ガンマ「ぐ…が…」

首を絞められるガンマは走るのを止めて鼻をほどこうと足掻く。

エレファント「バロオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!」

ガンマ「がはっ!!」

そこへエレファントがタツクルしてきてガンマを吹き飛ばした。吹き飛ばされたガンマは壁に激突して床に倒れ込んだ。

ガンマの首に巻き付いた鼻はピクピク動いているが直ぐに動かなくなかった。

エレファント「バルルルル…」

タツクルしたエレファントは倒れ込んだガンマに近付く。

ガンマ「フツ、ハアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

エレファントが近くに来た瞬間、ガンマはエレファントの足を掴んで持ち上げる形で立ち上がった。

エレフアント「バロオオオオオオオオオオ!!」

足を掴まれ持ち上げられたエレフアントはそのまま後頭部床にぶつける。

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

足を掴み立ち上がったガンマはエレフアントを振り回しす。

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

5周くらいしてガンマはエレフアントの両足を離し、投げだ。

エレフアント「バロオオオオオオオオオオオオオオ!!」

投げられたエレフアントは窓ガラスを突き破り外に放り出された。

ガンマ「……」

エレフアントの後を追おうとしたガンマだが窓枠に飛び乗り看護婦Cの方を見た。

ガンマ「すぐに：おわるから：」

そう言つてガンマは壊れた窓から飛び降りた。

エレフアントとガンマが飛び降りた所は8階部分。

そこから平気で飛び降りたのだ。

エレフアント「バ　ル　ル　ル　…　バ　ロ

オオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ガンマが着地するとエレフアントが咆哮を上げて構えていた。

ガンマ「ハアアアアアアアアアアアアアア!!」

エレフアント「バロオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ガンマも構えると走りだし、同時にエレフアントも走りだした。

その時、二人の目の前に何かが飛んできた。

ガンマ「!？」

エレフアント「バロオオオオオオオオオオオオオオ!!」

これには驚き二人は動きを止めた。

飛んできた何かは軌道はそれぞれだったが同じ方に戻った。

二人はその方向を見ると黒い髪に、黒い服で首からは何かの顔の装飾がされたネックレスをしている青年がいた。

その青年の両手に、さっきの二本の刀があった。

？「やれやれ、何かの気配を感じてきてみれば…化けモノ同士の争いに出くわすとわね」

右に持った剣を構えながらそう言う青年。

？『ゼロ、彼らはホラーじゃないわ。関わらない方がいいわよ』

ゼロと呼ばれる青年が首に下げているネックレスの装飾が言った。

ゼロ「確かにね。でもシルヴァ、オレたちは守りし者だよ？例え相手がホラーじゃなくても守りし者としての責務を果たさなきゃ」

言われたゼロはシルヴァと呼ぶ首飾りに言う。

シルヴァ『はあ…あなたってヒトは…』

ゼロに言われて呆れたように、シルヴァはため息を吐いた。

シルヴァ『早めに言っとくけど白い方は敵意を出してるけど警戒に近いわ。で、象の方だけど…』

ゼロ「それはオレも分かる。敵意剥き出し…いや、獲物を睨む野獣かな。象は敵、でしょ？」

シルヴァが言うよりも早くエレファントアマゾンが敵であるとゼロは言う。

シルヴァ『分かってるならいいわよ』

ゼロ「ありがとう、シルヴァ」

シルヴァに礼を言うときゼロは剣を構えた。

ゼロ「ハッ!!」

剣を構えたのと同時にゼロは跳躍してエレファントアマゾンの前にまで接近した。

エレファント「バロオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!」

対するエレファントは巨漢に相応しい大きさの剛腕を振るってゼロを殴ろうとする。

ゼロ「フツ、ハッ！」

しかしゼロは避けようとせずに二本の剣を交差させてエレファントの攻撃を防ぐと弾いてエレファントの懐に入るとエレファントの腹部を斬り裂いた。

男の子「ん…?」

エレファントアマゾンとの戦いの後、男の子が目を覚ますと病室のベッドに寝かされていた。

シヤマル「あ、起きた?」

男の子「ひっ!」

自身の視界にシヤマルが映ると、男の子は涙目になった。
そして…。

男の子「びやああああああああああああ!!」

シヤマル「ちよ、ちよつと…べぶっ!」

悲鳴を上げてベッドから飛び降り、シヤマルの顔を踏んづけ、扉を開けて逃げ出した。

シヤマル「ま、待って〜」

くつきりと男の子の足跡が顔に付けたシヤマルは涙目になりながらも後を追いかけた。

男の子「ひいっ!!」

自身の後を追いかけてくるシヤマルを見て男の子は更に悲鳴と速度を上げて逃げる。

シヤマル「な、なんで逃げるのー!」

男の子が自身から逃げる理由が分からず、シヤマルは叫ぶ。

男の子「ひっ!!」

しかしそんなシヤマルの姿は男の子の視点では悪魔のような姿をした人物に見えていた。

はやて「はあ…」

部隊長室にてはやてはため息を吐く。

理由は、自身の目の前にある大量の書類の山である。

全部さきのガンマとエレファントアマゾンの戦闘による被害報告書である。

? 「大丈夫ですか?」

はやての横を小さな小ど…おつとと、小さく可愛らしい少女がやってきた。

はやて「大丈夫や。ありがとうなりイン」

微笑みながら小さく可愛らしい少女―『リインフォースII』こと『リイン』に言う。

すると部隊長室のドアがノックされた。

はやて「入ってええよ」

シグナム「失礼します」

扉を開けて、部隊長室に入ってきたのはシグナムだった。

はやて「シグナム…どないしたんや？病棟での調査にいつとたんやないんか？」

病棟に調査へ向かったハズのシグナムが何故か部隊長室に来たのか聞く。

シグナム「主ははやて、その…お話ししたいことがあります」

はやて「ん？なんや？」

シグナム「実は私が保護した子のことなのですが…」

はやて「あの子がどうかしたんか？」

シグナム「それが、あの子がアマゾンであることが分かりました」

はやて「そうか、やっぱりやね…」

シグナム「え？知っていたんですか？」

はやて「目撃や監視カメラに出とったからな。次の対策会議であの子の処遇を話し合う予定や」

エレファントアマゾンから看護師を救うために変身し、中庭で戦闘したために、変身する時の映像が監視カメラや周囲にいたスタッフたちに見られており、それがはやてにまで報告が上がってきていたのだ。

シグナム「そうですか…それとあの少年に付いてもう一つお伝えしたいことが…」

そうやってシグナムはシャマルから受け取ったあの少年の検査結果の書類をはやてに差し出した。

はやて「これは？」

シグナム「あの少年の検査結果です。アマゾン細胞と同時にあの少年には人間の細胞も発見されました」

はやて「!？」

シグナムの話聞いたのはやては内心驚いた。

しかし驚きを顔に出さず、はやては冷静に書類を手に取って見た。書類には確かにアマゾン細胞と人間の細胞のことが書かれていた。はやて「これが事実って確証はあるんか？」

信じられないのはやてはシグナムに聞くと、シグナムは頷く。

シグナム「はい…完全なアマゾンなら肉しか食べないハズです。しかし、あの子は出された食事を残さず食べてました」

はやて「なるほどな…」

シグナムから話を聞いて納得したのはやて。

するとまた部隊長室のドアが開いた。

男の子「ぐすっ…」

ドアを開けたのは話の中心であった男の子が半泣きで入ってきたのだった。

男の子「うう…」

半泣きのまま、男の子はシグナムに近づいていくと抱きついた。

シグナム「ど、どうしたんだ？」

男の子「あく…ま…」

シグナム「悪魔？」

”悪魔”と聞いて、シグナムは首をかしげた。

すると部隊長室のドアが不気味に開いた。

男の子が何かに怯え、泣きそうになっていると部隊長室の扉が不気味に開いた。

そこから現れたのは…。

シヤマル「みくつくくけくたく」

不気味に開いた扉からホラー映画の悪霊のような顔で部屋に入ってきたのはシヤマルだった。

男の子「ひっ!?!」

ホラー映画のような登場をしたシヤマルを見て、男の子はすっかり怯えてしまっているのか、すぐにシグナムの後ろに隠れてしまった。シヤマル「さあ、大人しく…」

ゆっくりとシヤマルはシグナムの後ろに隠れた男の子に近づく。

シグナム「大人しくするのはお前だ!!」

シヤマル「きやう!?!」

男の子に近づくシヤマルの頭にシグナムが空手チョップを叩き込んでダウンさせた。

シヤマル「な、なにをするのよ、シグナム!!」

空手チョップを叩き込まれ、痛む頭を押さえながらシグナムに抗議するシヤマル。

シグナム「完全に怖がっているだろ!しかも、主はやての前だぞ!」

シヤマル「え、あ…」

シグナムに言われて見ると、呆れたようすでため息を吐くはやてと自身に怯え、フルフルと小動物のように震えていふ男の子が目についた。

はやて「シヤマル、とりあえず外に出とって」

シヤマル「え…でも…」

外に出るように言われて抗議しようとするシヤマルだったが、それより早くはやてが言った。

はやて「ええから!出とって」

シヤマル「は、はい…」

再度はやてに言われてシヤマルは渋々と部隊長室から出ていった。シヤマルが出て行くとはやてはシグナムの後ろに隠れている男の子に近付いた。

男の子「……」

近付いてきたはやてに、男の子はシグナムから少し顔を出して見る。

はやて「ごめんな、シヤマルには後でちゃんと言うとくけんな」
屈んで、はやては男の子と同じ目線になって言う頭を撫でた。

撫でられている男の子は最初、突然撫でられてビックリして、ビクツとなったが、シヤマルを追い払った（と言う名の退室命令を出した）はやては敵ではないと分かったのか頭を撫でられても嫌がったり、逃げようとしたりしなかった。

？「ありが…とう…」

小さいながらも確りとした声で、男の子ははやてにお礼を言った。

はやて「礼には及ばんよ。ウチの人が迷惑かけたんやしな」

お礼を言われたはやては、そう言うのと立ち上がってシグナムの方を見た。

はやて「シグナム…後でちと話があるんやけど、ええか？」

シグナム「はい」

そう聞くとシグナムは頷いた。

はやての目にはあることを決意した目になっていることにシグナムは気付いていたのだった。

その日、シグナムは男の子と共に自身が暮らしている八神家の家に来ていた。

男の子「……………」

シグナムに連れられて来た男の子は少し不安な表情でシグナムを見ていた。

シグナム「大丈夫だ。私がついている」

そんな男の子を安心させるために、シグナムは頭を撫でた。

男の人「うん……………」

シグナムに頭を撫でられた男の子はまだ不安な表情であるが少し和らいでいた。

男の子が八神家に来た理由は数日前の本局の部隊長室のこと。

男の子をリインが連れて、病室に戻している頃、シグナムははやてと2人だけで話をしていた。

シグナム「い、今…なんと仰いました!?!」

はやてが言った一言を聞いたシグナムは驚いた。

はやて「せやからあの子をウチらで預かるんや」

あの男の子をはやては自身の家、つまり八神家に迎え入れると言
う。

シグナム「し、しかし、あの男の子はアマゾンですよ!?!」

はやて「せやけど、あの子はウチらと同じ人間や。ウチはな、アマ
ゾンでも人間と共存出来るならしてみたいんや…」

あの男の子はアマゾンである前に、人間であると微笑みながらそう
言うはやて。

はやて「それにな…」

シグナム「はい?」

はやて「あの子、シグナムに一番よく懐いとる時の顔が一番可愛い
かったんよ」

シグナム「そこですか!?!」

はやて「せや、まあヴィータたちにはウチから言つとくから手続きは頼んだで」

と男の子を八神家で預かることとなったのだ。

シグナム「じゃあ、入るぞ」

男の子「……………」

コクリと頷いてシグナムの後ろにピッタリとついていく。

シグナムが玄関のドアを開けて2人は中に入った瞬間、『パーン』という音が響いた。

『八神家へようこそ!!』

玄関に入ると動物のお面をしてクラツカーを持った、おさげに結った赤髪をした少女『ヴィータ』、妖精か悪魔かの風貌をしたリインみたいな小さな少女『アギト』、はやてと大柄で青い毛並みをした狼『ザファイラ』がそう言った。

しかし…。

男の子「うう…」

クラツカーの音に驚いた男の子はシグナムの後ろに隠れてしまっていた。

そんな男の子を見てはやてたちは少し2人を待たせて集まった。

ヴィータ「うおいいいいいい、逆に怖がつてんぞ!どーすんだよ!」

アギト「やべーぞ、このままだとシグナム以外あたしら全員シャマルと同格にされちゃうよ!!」

はやて「なんとかさせえへんとなあ…ん?」

円陣を組んで小声で話していると男の子がシグナムの後ろからジーツとある人物を見ていた。

男の子が見ている人物…というか狼であるザファイラであった。

はやて「ああ、ザファイラ」

ザファイラ「はい?」

はやて「あのな、ごによごによ、ええか?」

ザファイラ「は、はあ…構いませんが…大丈夫ですか?」

はやて「大丈夫や」

なにやらはやてに耳打ちされたザファイラは男の子の前まで歩いてきた。

シグナム「ザファイラ? どう…」

ザファイラ「触って良いぞ」

シグナムが聞くより早くザファイラがそう言った。

ザファイラがそう言う少年はシグナムから離れてザファイラのモフモフの体を触り始めた。

しかも逆撫で…。

男の子「もふもふで…きもちいい…」

ザファイラ「むっ…き、逆撫では…」

逆撫でを嫌がろうとしたザファイラにはやてが口パクで「そのままや!」と指示を出した。

ザファイラ「仕方ない…むぐっ…」

そんなザファイラの顔に男の子は頬をすりすりした。

? 「ワンワン…もふもふで…きもちいい…」

シグナム(な、なんなのだ!? あの子がただザファイラを撫でているだけなのにこんなに興奮してしまうんだ!?)

ザファイラを撫でている男の子を見てシグナムは興奮してしまっていたのだった。

男の子をザファイラで少し落ち着かせ、リビングに案内していた。
はやて「改めて八神家へようこそ」

落ち着いた男の子にはやては改めて歓迎する。

男の子「やがみ…け…」

はやて「せや、あんたは今日からウチらの家族になるんや」

男の子「かぞ…く…」

あまりピンと来ていないのか、男の子は首をかしげる。

ヴィータ「そうだぜ。お前はアタシらの弟になるんだよ」

男の子「おとうと…」

アギト「ああ。弟だ」

あまり実感がないのか、男の子は首をかしげたままだった。

はやて「今は実感が持てへんやろうけど、ゆつくりでええからウチらと仲良うしようや。な？」

はやてがそう言うのと男の子はコクリと頷いた。

はやて「あ、自己紹介がまだやったな。ウチは八神はやてや」

男の子「はや…て…」

ゆつくりで小さくもはつきりと言った。

ヴィータ「アタシはヴィータだ」

男の子「び…た」

少し発音が違うがヴィータを見ながら名前を確認する。

ヴィータ「そうだ、ヴィータだ」

間違いを分かっているながらも指摘するのはどうかと考えたヴィータは肯定する。

ザファイラ「私はザファイラだ」

男の子「ワンワン…」

ザファイラ「いや、私はザファイラだ。ワンワンではなく…」

男の子「ワンワン…」

はやて「もう諦めりいザファイラ」

ザファイラ「むう…」

訂正してもらおうとしたザフィーラだったが、男の子の中で完全に「ワンワン」となってしまうていた。

「はやて「そんで君が抱きついとるのが…」」

男の子「しぐ…なむ…」

はやてが言うより早く男の子はシグナムの名前を言った。

はやて「知つとったんか？」

シグナム「そう言えば色々な人から私の名前を聞いていたからそれで覚えたんでしょう」

はやて「なるほどな」

シグナムの推察に納得する。

確かにフェイトやシャマル、はやてと出会ってきた相手からシグナムが呼ばれていれば自然と覚えてしまったのだ。

アギト「アギトだ。よろしくな」

？「……」

アギトの名前を聞いた男の子は首を傾げた。

はやて「聞き取れへんかったんかな？」

ヴィータ「じゃあ、ゆつくり言ってみたらどーだ？」

アギト「そうか、私はアギトだ。ア・ギ・ト」

？「……」

ゆつくり言ってみるも男の子は首を傾げていたが…

？「かめん…らいだー…？」

なんの迷いもなく男の子がそう言うと、聞いたアギトはずっこけてしまった。

アギト「違う！私は『目覚めろ、その魂』とかキャッチコピーにしてないからな!!」

平成2作目の仮面ライダーと勘違いされてアギトは慌てる。

？「ちがう…？」

アギト「違う違う！」

？「ふつうの…アギト？」

アギト「ふつうのって意味が分かんないけど仮面ライダーじゃないなら…」

？「どうの…」

アギト「今度はそつちかよおおおおおおお！？」

はやて「なんでこの子、ゲームに出る塔を知つとるんやろ？」

シグナム「さあ？なぜでしょう？」

今度は某ゲームに出る塔に間違われてしまい叫んでしまったアギトに、塔のことを知っている男の子に疑問を持ってしまふはやてとシグナムであった。

はやて「そや、一つ忘れとった!」

一通り自己紹介を終わらせた後、はやてがポンと手を叩いて何かを思い出して言う。

男の子「?」

首を傾げている男の子にはやては意味深そうな笑みを見せた。

はやて「八神家に来たお祝いや、名前を考えたんよ」

シグナム「それってもしやこの子の…」

ヴィータ「そうだぜ」

アギト「いつまでも君とかこの子とかじゃ分かりづらいだろ?」

シグナム「確かにそうだな。で、この子の名前は?」

シグナムが聞くとはやてが言った。

はやて「名前はリュイ、『八神 リュイ』や」

リュイ「やがみ…りゆい…」

アギト「そうだ、お前の名前はリュイだ」

リュイ「ボクの…なまえ…」

嬉しそうに笑うリュイ。

はやて「気に入ってくれて良かったわ」

名前を気に入ってくれたことにはやてたちも笑っていた。

しかし次の瞬間だった…

シャマル「ただいま。今、帰りました」

リビングのドアが開き、シャマルが帰ってきたのだ。

リュイ「ひっ!」

『ま、マズイ!!』

涙目になるリュイと焦り出すはやて、ヴィータ、シグナム、はやて、ザフィーラ。

リュイ「ひいい!!」

リュイはシャマルの顔を見るなり、悲鳴を上げてなきそうになる。

シャマル「あれ?この…ぼばあ!」

リュイを見たシャマルだったが、瞬間にシグナムが顔面に空手

チョップを叩き込んで昏倒させた。

リュイ「うう…グス…グス…」

トラウマを見たリュイは小動物みたいにカタカタ振るえながら泣くのを我慢していた。

ヴィータ「折角良い雰囲気だったのに…」

アギト「なに、台無しにしてんだよ」

倒れているシャマルにヴィータとアギトが不機嫌に言った。

シャマル「わ、私…なにかした〜？」

対するシャマルは昏倒しながらも顔に涙を流しながらそう言った。

はやて「てかシャマルにはリュイを見張り役に付けとったけど…」

リュイ「うう…」

はやてが疑問を口にしてるとリビングのドアの前にリュイが顔を出していた。

リュイ「ごめんなさいです…シャマルを止められなかったです…」

申し訳ないと謝るリュイ。

はやて「はあ、とりあえずリュイ。こっちおいで」

呼ばれてリュイははやての元に行く。

はやて「リュイ〜、まだ紹介してなかったんやけど。この子がリュイ
ンや」

怯えているリュイにはやてはリュイを紹介した。

リュイ「リー…ん？」

ヴィータと同じく少し発音が変だがリュイを見ながら言った。

リュイ「そうです。リュイです〜」

はやて「で、さつきシグナムが倒したのがシャ…」

リュイ「あくま…!」

シャマル「悪魔!?!」

自己紹介しようとした矢先にリュイに悪魔と呼ばれてシャマルは驚いた。

シャマル「いや、私はシャマ…」

リュイ「あくま…!」

シャマル「だから私は悪魔じゃなくてシャマ…」

リユイ「あーくーまー!!」

シャマル「ええく!?」

リユイの中でシャマルは『悪魔』として認知されてしまったようだ。はやて「もう諦めりい、悪魔シャマル…」

ヴィータ「そうだぜ。悪魔シャマル」

はやてとヴィータの2人がポンとシャマル肩を叩いて言った。

シャマル「そ、そんなく」

ショックを受けてヘナヘナと座り込むシャマルであった。

シグナム「ん？なんだ？腕がしび…!？」

翌朝、寝ていたシグナムは腕に妙な痺れを感じて目を覚ますとリュイがシグナムの腕を枕にして気持ち良さそうに隣で眠っていた。

シグナム「な…なあ!？」

驚くシグナムだがリュイを起こさないように動かないようにしていた。

シグナム（な、なぜリュイがここに!?! 確か自分の部屋で寝かせたはずだぞ!?!）

昨日のことを思い出すシグナム。

昨日はリュイを迎える為のサプライズがあつて疲れてしまったリュイを用意されたリュイ用の部屋に連れていき寝かせて、自身も自室で一人で寝た…そこまで覚えている。

リュイ「しぐ…なむ……」

寝言を言いながら寝ているリュイの息がシグナムの顔に当たる。

はやて「シグナムく？朝や…つて何しとるん？」

そこへはやてがシグナムを起こしに来て現状を見た。

シグナム「あ、主はやて!こ、これはその…」

慌てて起き上がってしまうシグナム。

リュイ「うくん…」

シグナムが起き上がってしまい浮かび上がり布団に叩きつけられたリュイが目を覚ました。

はやて「あ、リュイ。おはようさん」

リュイ「おは…よう…はや…ぱば…」

シグナム・はやて「ん?…」

目を擦りながら言ったリュイの言葉にはやてとシグナムは硬直した。

はやて「り、リュイ…今、なんて言うた？」

リュイ「?…」

首を傾げるリュイ。

そして…

リュイ「はや…ぱぱ…」

はやて「ぱ…ぱ…パパー!」

明らかに無垢な瞳で『パパ』と言われてははやてはあんぐりと口を明けて、膝から崩れ落ちた。

シグナム「あ、主はやてー!!」

リュイ「??」

慌てて駆け寄るシグナムとよく分からないように首を傾げるリュイであった。

アギト・ヴィータ「あはははははは!!」

リビングで、ことの顛末を聞いたアギトとヴィータの笑い声が響いた。

はやて「2人とも笑いきや!!」

相当シヨックなのか、爆笑する2人にはやては言う。

ヴィータ「悪い悪い。でもはやてがパパって可笑しくて…ぶふふ!!」

アギト「無垢な瞳ではやパパ…ぶっ…」

壺にはまったのか噴き出しそうになるヴィータとアギト。

リン「因みに私はなんて呼ぶんです?」

少し興味津々にリンがリュイに聞いてくる。

リュイ「リー…ねえね…」

リン「ね、ねえね!」

今まで小動物に近い扱いをされていたリンにとって嬉しい一言だった。

ヴィータ「なら私は!」

アギト「私はなんだ!」

リンが姉と呼ばれてヴィータとアギトが聞いてきた。

リュイ「びー…ねえね…あぎ…ねえね…」

ヴィータ・アギト「うおおおおおおおおおおおおお!!」

2人もまた姉と呼ばれて嬉しくなり叫ぶ。

シャマル「じゃあ、私は？」

リュイ「……」

シャマルが聞くがリュイはプイとそっぽをむいた。

シャマル「あ、あれ？おーい、リュイくーん」

リュイ「……」

リュイはシャマルに顔を合わせまいとまたそっぽをむいた。

はやて「諦めりいや、シャマル」

シャマル「はう……」

ガクリと項垂れるシャマルであった。

ザフィーラ「私はなんだ？」

リュイ「ワンワン……」

ザフィーラ「やはりそれか……」

リイン「それならシグナムはなんて呼ぶんです？」

リュイ「しぐ……ま……」

『!?!』

シグナム「!?!」

リュイの一言に全員に衝撃が駆け巡った。

何の戸惑いもなくシグナムのことを『ママ』とよんだのだから。

リュイが八神家の面々をどう呼ぶか分かったあと、何とか『パパ』呼ばわりから立ち直ったはやてとリイン、アギトが作った朝ご飯が並べられていた。

並べ終わると全員が所定の席についた。

因みにリュイはシグナムの右隣だ。

はやて「それじゃあ…」

「「「「いったきまーす！」「」」」」

リュイ「いただき…ます…」

朝ご飯を食べ始める面々。

はやて「リュイ、ごはんどうや？美味しいか？」

リュイ「うん…おいしい」

はやて「それはよかったで」

リイン「リインとアギトの作ったのはどうです？」

リュイ「おいしい…よ」

出された料理を美味しそうに食べていた。

はやて「ほな、行ってくるで」

朝ご飯のあとザフィーラ以外の全員が管理局の制服に着替えて出勤する用意をすると玄関前まで来ていた。

リュイ「どこに…いくの…？」

不安そうな眼差しではやてたちを見るリュイ。

はやて「大丈夫や。直ぐに帰ってくるからそれまでザフィーラと一

緒に大人しゅう留守番しといて。ええな？」

リュイ「うん…」

いまだ不安な眼差しではあるが頷くリュイ。

アギト「あれ？なんか忘れてないか？」

ヴィータ「そうか？」

本局へ向かう時、アギトがそう言った。

はやて「そう言えば確かになんか忘れとるよな…」

シグナム「ザファイーラと一緒に居ますから大丈夫とは思いますが」
はやて「せやな。ほな、今日は早く終わらせてリユイを安心させようや！」

「」「はい！／おう！」「」

リユイ「すー…すー…」

その頃、リユイはザファイーラの体を枕に窓際で日向ぼっこして寝ていた。

ザファイーラもまた日向ぼっこしてリユイと寝ていた。

リユイ「うう…」

突然、呻くリユイ。

昔の夢を見ていたからだ。

暗い部屋にたった一人、緑の液体が入った入れ物に入れられ、動かないように手足には鎖を嵌められて酸素マスクで呼吸程度しか出来なかった。

寂しく、怖かった…このまま一人で死ぬのかと思った。

でも辺りが目映く光った。

気が付くと辺りは部屋ではなく真っ白で冷たい地面の上に倒れていた。

起き上がると灰色の雲が空を覆い、上から白く冷たいモノが降っていた。

手足を見れば鎖は無くなって自由になっていた。

早くこの場から離れないといけない…そう思ったリユイは立ち上がって走り出した。

ザファイーラ「リユイ…リユイ！」

リユイ「！」

ザファイーラに呼ばれてリユイは目を覚ました。

ザファイーラ「大丈夫か？」

最初、ザフィーラが言っていることがよく分からなかったがいつのまにか涙を流していたことにリュイは気がついた。

リュイ「だい…じょうぶ…」

涙を拭ってそう言うリュイ。

ザフィーラ「そうか…それならば良いのだが。そろそろ昼になる、食べるか？」

リュイ「うん…」

ザフィーラに言われてリュイは立ち上がり昼ごはんを食べることになった。

リュイを八神家に迎え入れて翌日、八神家の面々はショッピングモールに来ていた。

理由はリュイの服などの日用品を買いにだ。

今リュイが着てるのは『エリオ・モンディアル』という元機動六課の少年が着ていたのをフェイトから貰っているのだがいくつかりユイのサイズに合わないのがあり買い出しに来たのだ。

はやて「これも似合うなあ…いや、こつちもかな？」

アギト「いや、リュイにはこつちが…」

リイン「それよりこつちがいいです！」

シャマル「えー、だぜんこ…」

ヴィータ「お前のは絶対にリュイが着ないから却下だ」

シャマル「そんな!？」

子供用の洋服店にてはやて、アギト、リイン、シャマル、ヴィータの5人によるリュイの服選びが行われておいた。

因みに当の本人であるリュイはシグナムとザファイラと共に外で待っていた。

リュイ「ん…?」

ベンチに座り足をプラプラしていたリュイは唐突にベンチから降りてある露店に向かった。

そこはアクセサリー店でルビーやエメラルド、サファイヤに似た色をしたアクセサリーがあった。

キラキラと日の光で輝くアクセサリーにリュイは興味津々に見ていた。

その中で藍色でYの形をした首飾りのネックレスを見ていた。

店員「あら、いらっしやい。ボウヤ一人？」

アクセサリーを見ていたリュイに店員の女性が話し掛けてきた。

話し掛けられたリュイは女性を見ながら首を横に振った。

店員「じゃあ、お母さんやお父さんは？」

リュイ「しぐまなら…そこ…」

まだ気付いていないシグナムを指差して言うリュイ。

店員「そう、綺麗なママさんね。じゃあ、これはボウヤにあげるわ」
店員はリュイが一番興味を示していたネックレスをリュイの首に掛けた。

リュイ「ありが…とう…」

店員にお礼を言うところリュイはシグナムの元に戻っていった。

シグナム「ん？どうしたんだリュイ、その首飾りは？」

リュイ「もらった…」

シグナム「誰にだ？」

リュイ「あそこの…おみせ…あれ？」

露店の方を指差して言ったがそこには露店は無くなっていた。

露店が無くなっていることにリュイは首を傾げた。

はやて「へー、気前がよかったんやなその店員さん」

「買い物をし終え、家に帰ったあとリュイの首飾りを見ながら言うは
やて。」

シグナム「はい。しかしリュイが言っている店が無いんです」

はやて「無い？移動したんかいな？」

シグナム「それが探したのですが見当たらず…」

はやて「それは変な店やなあ」

シグナムから話を聞いて、代金も受け取らず、雲のように消えた店
の子とを聞いてはやては考える。

シグナム「はい…ところで主はやて」

はやて「ん？なんや？」

シグナム「リュイはどこに？それにアギトたちもいないようですが
…」

はやて「ああ、実わな…ふふふ…」

聞かれたはやては不適に笑った。

するとアギトが来た。

アギト「はやて、リュイの準備出来たぞ！」

はやて「おお！そうかいな、なら連れてきてや」
アギト「おうよ！」

そうはやてが言うのとアギトはどこかへ行ってしまった。
数分後：

アギト「連れて来たぞ」

シグナム「なっ!？」

はやて「うんうん。ウチの読みに狂いはなかったな」

アギトが連れて来たリュイの姿にシグナムは絶句、はやては満足そうであった。

リュイははやてたちが新しく買ったディズニー映画の熊の顔がプリントされた服を着ている。

だがそこはいい、問題は下半身だ。

シグナム「は、はやて!?!なんでリュイにスカートを!?!」

そう、リュイは黄色いスカートを履いていた。

はやて「可愛いからいいかなと…ダメ…やった？」

シグナム「分かてるならしないでいただきたい!!」

はやてに怒鳴るシグナム。

この後、はやてたちが買った服（主に下の方）の全てがスカートだと分かりはやてを含めた服を買った5人全員がシグナムのお説教を喰らうこととなりシグナム自身がリュイを連れて買い直すハメとなった。

とある場所にリュイに首飾りを渡した店員の女性がいた。

店員「種は蒔いた…いつか、この世界にいる別次元の戦士たちと貴方が出会う時、その首飾りは力を貸してくれるわ。でも、それを使いこなせるかは貴方次第よ、八神　リュイ…アマゾンライダーガンマ。ウフフフフ…」

笑いながら女性がそう言うと、金色で、両肩部には無数のトゲを備えた突起が付いた鎧を纏い、闇夜の空を飛翔して消えていった。

番外編1

リュイVSミウラ 前編

その日、リュイはヴィータとザフィーラ（人間形態）と一緒に家の近くにある砂浜に来ていた。

因みにザフィーラが人間になってリュイは少し驚いていたが耳が狼の時とそう変わらないので直ぐに馴れた。

砂浜には10代くらいの少年少女たちがいた。

八神家では格闘技道場をしていて少年少女たちはその門下生たちだ。

ヴィータ「よし、みんな集まってんな。今日は紹介したい奴がいる」

ヴィータはそう言うと後ろに隠れていたリュイを前に出した。

ヴィータ「ほら、自分でやるんだぞ」

最初は不安そうだったがヴィータにそう言われてリュイは頷いた。

リュイ「や…やがみ…りゅい…です…」

少しもじもじしながらも頑張つて言うリュイ。

すると一人の少女がリュイの前に出た。

ミウラ「君がリュイくんなんだ。ボクはミウラ『ミウラ・リナデイル』。よろしくね」

少女『ミウラ・リナデイル』は右手を差し出して握手を求めた。

リュイは反対の手でそれに応じた。

これを見たザフィーラとヴィータは互いに顔を見合つて笑った。

なぜこうなっているのかと言うと実はリュイに色々な人と触れ合ってもらおうとはやてが言い出して手始めに道場の子たちと触れ合わせようとなったのだ。

しかし門下生たちもいきなりリュイと会わせれば戸惑う者もいるだろうと言うことで予めミウラにリュイのことを話して最初に話し掛けて欲しいと根回ししておいたのだ。

案の定、ミウラが最初に話し掛けたお陰でほかの門下生たちもリュ

イに話し掛けてきた。

リュイも少々戸惑いながらも話し掛けてきた門下生と話していた。
ヴェータ（上手くいったみたいだな）

小声でザフィーラに言うヴェータ。

ザフィーラ（ああ。こうも上手くいくとわな）

ザフィーラもまた小声で言う。

ミウラ「あのリュイくん」

リュイ「なに？」

ミウラ「ボクと手合わせしてもらえませんか？」

「なっ!？」

リュイ「え…?」

ミウラの発言に驚くヴェータとザフィーラに対してリュイはキョトンとしていた。

ミウラ「良いですよね？」

同意を求めるようにヴェータとザフィーラの方を見ながら言う。

ヴェータ「い、良いわけねー…」

リュイ「いいよ」

ヴェータ「はあ!？」

サラッと同意してしまったりリュイにヴェータは驚いてしまった。

リュイ「みうらと…てあわせ…する…」

ミウラ「ありがとう！」

ヴェータ「ち、ちよ…」

淡々と話が進んでしまいヴェータたちは焦りだす。

リュイは人間の見た目だが半分はアマゾンである、力の差が有りすぎるのは明白だからである。

ミウラ「じゃあ、さっそくあつちで手合わせしましょう」

リュイ「うん…」

ミウラに手を引かれてリュイは行ってしまう。

残りの門下生たちも行ってしまう。

ヴェータ「ちよつと待てええええええええええええ!!」

ヴェータの声を上げてミウラの肩を掴んで止めた。

ミウラ「な、なんですか？」

ヴィータ「なんだもくそもねえ！なんでリュイと手合わせしたがるんだよ!？」

ミウラ「え？リュイくんも格闘技してるんじゃない？」

ヴィータ「なんでそうなる？」

ミウラ「えーつとリュイと握手した時、リュイくんの手からマメの感覚があったのでしてるのかなって…」

ヴィータ「いや、それは…」

リュイの手にはたまにだが確かにマメがあるがそれはアマゾンとの戦闘でなったなどと言えるハズもなく言葉に悩むヴィータ。

ザファイラ「ならしてみるといい」

ヴィータ「!？」

言葉に悩むヴィータを他所にザファイラがそう言った。

ミウラ「ありがとうございます、師匠！」

ザファイラの一言にミウラは喜んで言う。

ヴィータ（おいしいいいい！どういうつもりだザファイラ!?)

ザファイラ（ここで下手な弁解をする方が不味い。ならば敢えてやらせてやれば良いわけだ）

ヴィータ（だがリュイはミウラたちとは違うんだぞ!?)

ザファイラ（大丈夫だ、リュイもその辺りは考えて手加減はするはずだ。リュイを信じようではないか）

リュイを信じようと言われてヴィータもそれ以上は何も言わなかった。

リユイVSミウラ 後編

―浜辺―

ミウラと手合わせすることになったリユイ。
門下生とヴィータ、ザフィーラが見守るなか軽くピョンピョン跳ねたりして準備体操していた。

リユイ「んー…」

準備体操しているリユイは両手首に付けたリストバンドを見た。

付け慣れていないので違和感があるのだがこれはリユイのアマゾンとしての力を制御するリストバンドで事情を聞いたはやてが急拵えで作ったものだ。

急拵えなために制御がどこまで持つか分からないが無いよりかは遥かにましである。

ミウラ「そろそろいいかな？」

リユイ「うん…」

両者が同時に構えた。

ヴィータ「んじゃ、試合…開始!!」

ヴィータの合図と共にリユイは真っ先に動いた。

ミウラ「はやい!？」

合図と共に真っ先に動いたリユイに驚くミウラ。

リユイ「ハアツ!!」

目の前まで接近したリユイは左拳を繰り出すがミウラは首を動かして回避するが少し頬を掠めた。

ミウラ「くっ…」

頬を掠めただけなのにミウラは少し体勢が崩れた。

ミウラ（す、凄い…掠っただけで体勢が崩された…）

リユイのパンチ力にミウラは驚く。

ミウラが一瞬驚く間にリユイはバク転して距離を取った。

ミウラ（距離を取った!…これなら離れている隙を…）

バク転しているリユイに合わせるようにミウラが接近するがリユイは逆さの状態から体を回転させて回し蹴りを繰り出した。

ミウラ「うわっ!？」

咄嗟にガードするがほとんど威力を抑えきれず吹き飛ぶ。

リュイ「よい…しよ!」

ミウラを吹き飛ばしたリュイは立ち上がって構える。

「す、すげえミウラより強いぞ!」

「道場で一番強いミウラが圧されてる!」

リュイの強さに門下生たちは興奮しているが対するヴィータとザフィーラはリストバンドが効いてないんじゃないのかとハラハラしてそれどころではなかった。

ミウラ「うっ…」

回し蹴りを受けて吹き飛びながらもミウラは何とか持ちこたえていた。

そんなミウラを見てリュイは追撃しようと接近する。

ミウラの前まで接近すると低い姿勢になった。

ミウラ（アツパー!）

アツパーが来ると思いミウラはガードに入るが…

リュイ「ハッ!!」

ミウラ「ふえ!？」

ガードを予測していたかのようリュイはアツパーと見せかけて右足を伸ばしてミウラの足を払った。

足を払いミウラの体勢を崩したリュイは左足だけで軽く跳躍した。

リュイ「あ…」

しかし跳躍したは良いがリストバンドの効果なのかあまり跳ばず、更にバランスを崩してミウラの上に乗っかってしまう形になった。

ミウラ「ん!？」

リュイに乗っかれてしまったミウラは大変な状態になっている事に気付いた。

リュイの唇がミウラの唇に重なり、キスしている状態になっていたからだ。

これにはミウラは顔が真っ赤になってしまった。

リュイ「う…」

対するリュイはキスしていた事など気にせずに立ち上がった。

ヴェータ「リュイ、ミウラ！大丈夫か!？」

リュイとミウラを心配してヴェータとザフィーラ、門下生たちが近付いてきた。

リュイ「うん…大丈夫…」

ミウラ「……………」

大丈夫と言うリュイに対してミウラは完全にオーバーヒートして
いて動けずにいた。

ヴェータ「おい、ミウラく?」

呼び掛けるヴェータ。

ミウラ「はっ!ボクはいつたい…」

ヴェータ「いや、それはこつちの台詞だよ…」

リュイ「みうら…だい…じょうぶ?」

ミウラ「リュイくん…!!」

リュイの顔を見た瞬間ミウラの脳内にさっきのことが過った。

ミウラ「はう…」

また顔が真っ赤になって気を失った。

ヴェータ「ミウラ!?おい!!」

再び呼び掛けるヴェータだが…

【反応がないただの屍のようだ】

ヴェータ「うおいいいいいいいい!!?何があつ
たあああああ!!」

反応がないミウラを見てヴェータの叫び声が響き渡ったのだった。

コラボ編1 出会う大天使と小さき狩人
special hunting 01

—浜辺—

その日、リュイとシグナムは浜辺で散歩していた。

リュイ「おく…」

波を見るのが初めてなのか引いたら追いかけて、迫ってくると逃げるを繰り返していた。

シグナム（あんなにはしゃいで…アマゾンとはいえまだ子供か…）
微笑ましくリュイを見ているシグナム。

リュイ「つめたい…きもちいい…」

足に波が浸かって気持ちよかったのかバシャバシャと走り出した。
リュイ「ん？」

走り出したリュイはあるものを見て立ち止まった。

それを見たリュイは慌ててシグナムの方へ戻っていった。

シグナム「どうした、リュイ？」

リュイ「ひと…たおれてる…」

シグナム「なに!？」

慌ててリュイが指差した方へ向かうシグナム。

その場所に行き着くと一人の少女が倒れていた。

シグナム「おい、確りしろ!おい!」

?「うう…」

シグナム「意識はあるな…」

少女にまだ意識があると分かったシグナムは少女を背負った。

シグナム「急いで帰るぞ、リュイ」

リュイ「うん…」

急いで家と走り出す二人であった。

—部屋—

?「うっ…くっ…!？」

少女が目を覚ますと見知らぬ屋根よりも目の前にリュイがいて少し驚いた。

リュイ「……………」

対するリュイは急に少女が目を覚ましたのを見ると自身の額を少女の額にくっ付けた。

？「ちよつ…な、なにをして…」

リュイの行動が分からず焦る少女。

シグナム「リュイ、そろそろお昼…」

部屋の扉が開いてシグナムが入って現状を目の当たりにして硬直した。

部屋の扉は少女が寝てるベッドの丁度、左斜め下であり、シグナムから見ればリュイが少女にキスしているように見えたのだった。

リュイ「しぐまま…?」

硬直しているシグナムを見てリュイは不信に思っ近づいて足元をつついた。

シグナム「はっ！り、りりりり、リュイ！い、今何を…ま、まさか、あの不審者とせ、せせせせせせ、接吻をしたんじゃ…」

リュイ「せつぷん…?…おでことおでこなら…くつつけた…」

シグナム「は？」

リュイ「ねつないか…みた…それつて…せつぷん…?」

シグナム「いや、すまない。それは違うから忘れてくれ」

リュイ「?」

よく分からないリュイは頭にハテナマークを作りながら首を傾げた。

リュイ「それより…しぐまま…おねーちゃん…おきた…」

シグナム「そうか」

リュイに言われてシグナムは少女に近付いた。

シグナム「気分はどうだ？」

？「人を不審者呼ばわりしてそれを聞きますか？」

シグナム「一応な」

？「まあ、気分はいいです。あの、ここどこなんですか？」…

シグナム「ここはミッドチルダにある我々の家だ」
？「み、ミッド…チルダ？」

聞いたことのないと言うようで少女は首を傾げた。

シグナム「その様子だとどうやら次元漂流者のようだな」

？「次元漂流者…ですか？」

シグナム「詳しい話はリビングで我らが主がお話になるが、これだけは言っておく。お前を見つけたのはこの子だ」

シグナムはリュイの頭を撫でながら言う。

？「そうなんだ…ありがとね、助かったわ」

リュイ「うん…ねえ…おねーちゃんの…なまえ…なに？」

A A「私はアークエンジェルよ」

リュイに名前を聞かれて少女は『アークエンジェル』と名乗った。

ーリビングー

シグナムとリュイに連れられてアークエンジェルはリビングに来
ていた。

はやて「おっ、もう目が覚めたんか」

アークエンジェルたちがリビングに行くとはやて、シャマル、
ヴィータ、アギト、リイン、ザフィーラ（狼形態）がいた。

AA「はい。手当てして頂いてありがとうございます」

はやて「気にせんといて。困ってる人がいるなら助けるのが当然や
からな」

にこやかに笑いながらアークエンジェルに言うはやて。

はやて「それでアンタの名前は？」

AA「あ、私はアークエンジェルって言います」

名前を聞かれてアークエンジェルは名乗る。

はやて「アークエンジェルやね、うちは八神 はやてや」

ヴィータ「アタシはヴィータ」

アギト「アギトだ」

リイン「リインです」

シグナム「私はシグナムだ」

ザフィーラ「ザフィーラだ」

AA「犬が喋った!?!」

ザフィーラが喋ったのを見てアークエンジェルは驚く。

はやて「まあ、それも含めてお話するけど、アンタを助けたんがう

ちらの可愛い末っ子の…」

リュイ「やがみ…りゆい…です…」

一通り自己紹介するはやてたち。

はやて「んじゃ自己紹介も終わったことでアークちゃんといろいろ
ちよう難しいお話せなアカンからリュイはヴィータとザフィーラと
一緒に道場のみんなの所にいつてき」

AA（アークちゃんって…）

リュイ「うん…」

ヴィータ「ほら、行くぞ」

はやてに言われてリュイはヴィータ、ザフィーラと共に家を出た。
はやて「ほな話そうか。まずはアークちゃんのことからや」

はやてに言われてアークエンジェルは頷いて話した。

自身が何者で、何と戦っているかを。

そしてある海域の攻略任務で敵と交戦している中、目の前が真っ白
になって意識を失ったと言う。

本当は話してはいけなかったがこの人たちになら話してもいいよ
うな気がして話したのだ。

はやて「なるほどな。アークちゃんたちは艦娘って言う昔の軍艦の
魂が人の型をした戦士で、深海棲艦ちゆう謎の敵と戦い続けとるわけ
か」

簡潔にまとめてはやてはアークエンジェルに確認する。

AA「はい。だいたいはそんな感じですよ」

はやて「そうか…ならば次はこつちやね。もう分かっているとは思って
どここはアークちゃんがいた世界とは違う世界や」

AA「異世界…」

はやて「せや。この世界は次元を隔てて幾つもの世界が存在してる
んや。そんな次元世界でごく稀にやけど次元震言う現象が起きるん
よ」

AA「次元震？」

はやて「まあ、簡単に言えば別世界に行けちゃうことや。でそれに
巻き込まれてもうた人を次元漂流者言うんよ」

AA「じゃあ、私もその次元震に巻き込まれて…」

はやて「恐らくな」

AA「帰る手立てはあるんでしょうか？」

はやての説明を聞いてアークエンジェルは恐る恐る聞く。

はやて「大丈夫や。アークちゃんのおった世界の手がかりさえあれ
ば直ぐには無理やけど送ってあげられるで」

AA「そうですか。ありがとうございます！」

はやて」ううん。気にせんどいてよ
にこやかに言うはやてだった。

—浜辺—

アークエンジェルがここに来て早数週間が過ぎていた。

こちらの世界にも慣れてきたアークエンジェルは浜辺にてザフィーラ、ヴィータとリュイと散歩していた。

この数週間間にアークエンジェルはこの世界についてさまざまなことをはやてたちから聞いた。

大昔の文明が残した負の遺産とも言うべき『古代遺物』ロストログニアのこと、その中で今現在ミッドチルダに猛威を振るっている怪物—実験体こと『アマゾン』のこと、それらを封印、あるいは利用している犯罪者を取り締まる『時空管理局』のこと、そしてリュイのことを…。

リュイ「あーく…」

AA「ん?どうしたの?」

リュイに呼ばれて見るとリュイの手に純白と言っていいほど綺麗な白色をした巻き貝の貝殻があった。

リュイ「あーくに…あげる…」

どうやらアークエンジェルに渡したくて持ってきたようだ。

AA「ありがとう」

リュイから貝殻を受け取るアークエンジェル。

AA（ドミニオンたち…いまどうしてるかしら…）

貝殻を見てアークエンジェルはふとそう思った。

リュイ「あーく…さびしい?」

AA「え?」

リュイの突然の一言にアークエンジェルは少し驚く。

リュイ「もとの…せかい…にはやく…かえりたい?」

どうやらリュイはアークエンジェルの気持ちを何となくだが感じていたようだ。

AA「うん…少し寂しいかな。でもリュイくんみたいに優しい人がいるからあまり寂しくないよ」

リュイの頭を撫でながらそう言う。

ヴィータ「おーい、そろそろ帰るぞー！」

AA「はーい。行こう」

リュイ「うん…」

ヴィータの声が聞こえてアークエンジェルとリュイは歩く。

その時だった…

リュイ「！」

突然、リュイがアークエンジェルの頭を掴んで砂浜すれすれまで屈ませた。

AA「え!?!」

何をされたのか分からないアークエンジェル。

だが少し遅れてアークエンジェルとリュイから少し先の砂浜に黒い何かが落ちて爆発した。

AA「今のは!?!」

見覚えがあるのだったアークエンジェルは空を見ると空に複数の黒い飛行機のようなモノが飛んでいた。

AA（あれは深海棲艦の艦載機!?!どうして…!?!）

嫌な予感として視線を海上に向けるとそこには一人の人物がいた。

AA「空母 フ級!?!」

大きな帽子のようなものを頭に乗せ、黒いマントを羽織り、ステツキのようなものを手に持っている人物―深海棲艦の『正規空母 フ級』に驚くアークエンジェル。

ヴィータ「おい、お前ら！怪我はねーか!?!」

そこへ騎士服姿になったヴィータと人間形態になったザフィーラが来た。

ザフィーラ「なんだ、奴は？人間…なのか？」

AA「いいえ、アレは私の世界にいるハズの敵、深海棲艦の正規空

母 フ級です！」

ヴィータ「アイツらも次元震でこっち来たってのか」

ザフィーラ「なら倒すしかあるまい」

ヴィータ「だな」

深海棲艦のことはアークエンジェルから聞いているためアイゼン

を構えるヴィータ。

だが：

リユイ「びーねえね！」

何かを感じたリユイは咄嗟にヴィータを突き飛ばした。その瞬間、リユイが砲撃のようなのを喰らい爆発した。

A A 「り、リユイくん!？」

ヴィータ「リユイ!!」

リユイが爆発して驚く二人だった。

砲撃の直撃を受けてしまったリュイにアークエンジェルは慌ててしまう。

しかし…

リュイ「うう…」

爆煙が薄くなると呻き声のようなのが聞こえる。

ガンマ「ウオアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

雄叫びと共に爆煙を振り払い現れたのはリュイのもう一つの姿―

『仮面ライダーアマゾン ガンマ』だった。

ヲ級「!?!」

ガンマの登場にヲ級は驚いて一瞬だけ怯んだ。

ヴィータ「大丈夫みたいだな。リュイ、お前はあのクラゲ野郎を倒

せ!アタシはザフィーラとハエを叩き落とす!」

ガンマ「うん…!」

ヴィータの指示を受けてガンマは頷いた。

指示を出したヴィータはザフィーラと共にヲ級が放った艦載機を

撃破しに行く。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアア!!」

跳躍してヲ級に向かっていくガンマ。

バイオレント ブレイク!!

空中にてガンマはバトラーグリップを引き抜いて槍―『アマゾンス

ピア』を出すと柄の部分に持ち代えてヲ級に向かって投げた。

投げられたアマゾンスピアを見てヲ級は少し動いて回避しようと

するが被っている帽子のようなモノ―艤装の右側の砲を貫いて破壊

された。

ガンマ「はずした…」

本当は一撃で仕留める気でいたがヲ級は少し動いてかわされてし

まったことにガンマは少しながらショックを受けるが直ぐに浜に着

地して構える。

ガンマが着地したのを見たヲ級は頭に被っている帽子のような艤

装の生き残っている左側の砲を向ける。

AA「そうはさせない!!」

砲を向けるヲ級にアーケエンジェルは艤装を展開して陽電子破城砲『ローエン格林』の照準を合わせる。

AA「ローエン格林、発射!!」

照準を合わせてヲ級に向かってローエン格林を発射する。

ローエン格林のビームを見て慌ててヲ級は砲を射つのを止めて回避行動に入る。

ガンマ「ナイス…」

バイオレント ストライク!!

ローエン格林のビームが空を切った時、ガンマは再び跳躍して右側のグリップを捻ると右足を突き出して繰り出す必殺技―『バイオレント ストライク』を繰り出した。

ヲ級「!?!」

まさかの攻撃にヲ級は回避行動が間に合わなかった。

ガンマ・AA（とった／取った!!）

二人は同時にそう思った時だった。

ガンマ「ガアアツ!?!」

突然の別方向から砲撃されてガンマは浜に吹き飛ばされる。

ガンマ「グルルルル……」

吹き飛ばされながらもガンマは立ち上がってヲ級がいる方とは別方向を睨むガンマ。

ガンマが睨む先から筋骨隆々の四肢をもつ双頭の魔獣を従えた、黒いドレスの妖しい美女が現れた。

魔獣の両腕と首には枷がはめられており、その見た目にも溢れんばかりの凶暴性をさらに強調している。

女性のほうは角が左側に一本だけで、垂れた前髪二束が眉間のあたりでクロスしていて肩を露出した膝丈の黒いドレスは胸元に模様が入っておりスカートはバルーン風に膨らんでいて脚は黒いタイツにスタッズのついたゴツイ装飾の靴、二の腕まであるロンググローブを身に着けて妖艶な雰囲気醸していた。

ヴィータ「新手か!？」

魔獣と女性を見て驚くヴィータ。

AA「戦艦水鬼!?なぜここに!？」

女性「『戦艦水鬼』の出現にアークエンジェルは驚く。

ガンマ「?」

アークエンジェルの言った意味が分からないガンマは首を傾げる。

AA「とある海域で深海棲艦たちのボスよ。なんでここにいないのかは分からないけど…」

ガンマ「てきなら…たおす…」

戦艦水鬼に構えるガンマ。

AA「でも戦艦水鬼って海域の島にしかいないと思ったんだけど…なんで海上に?」

戦艦水鬼がいることにアークエンジェルは疑問に思いながらも構える。

戦艦水鬼「ヤクタタズノ…クステツガ!!」

恨みを言うように戦艦水鬼は魔獣に似た姿をしている艦装から砲撃を始めた。

ガンマは左に飛び、アークエンジェルは海上に向かっていく。

AA「MS隊、発艦!!」

海上に出るなりアークエンジェルはハッチを開いて『X105 ストライクガンダム』と数十機の『M11C ムラサメ』を発艦させた。

AA「いくら戦艦水鬼でもMSで倒せない相手じゃない」

AA「MS隊、攻撃開始!!」

AAの指示でストライクを先頭に戦艦水鬼の頭上からMS隊が迫るが…

?「シャバアアアアアアアアアアアアアアア!!」

MS隊が戦艦水鬼を頭からビームライフルで攻撃しようとした瞬間、戦艦水鬼の艦装からニユルリと湧き出るように1匹の蜘蛛の姿をした怪人が出現し、口から紫色の糸玉を噴射した。

突然、現れた蜘蛛怪人の攻撃にストライクと前方のムラサメ隊はギリギリでかわしたが後方を飛んでいたムラサメ数機が糸玉に絡まり、

残りは四肢のいずれかに糸玉が絡み付いた。

ムラサメに絡み付いた糸玉はジュウーとボディーを溶かしながら浸食し、破壊した。

AA「なにあれ!？」

ムラサメ隊を破壊した糸玉を繰り出す蜘蛛怪人に驚くアークエンジェル。

?「シャバアアアアアアアアアアア!!」

MS隊を退かせた蜘蛛怪人はアークエンジェルに向かってMSを破壊した糸玉を繰り出そうとしていた。

ガンマ「ガアアツ!!」

?「!？」

糸玉を繰り出そうとした蜘蛛怪人の後ろからガンマが襲い掛かってアークエンジェルへの攻撃を防ぐ。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアア!!」

アームカッターで蜘蛛怪人の右肩を斬り付けた。

斬られた右肩は切断されて、結果的に蜘蛛怪人は右腕丸ごと失い傷口からドス黒いアマゾン特有の黒い液体が噴き出る。

?「シャバアアアアアアアアアアアアア!!」

傷口を押さえて蜘蛛怪人は後退する。

ガンマ「typeはinsect:modelはtarantula:遠距離攻撃型:なら:」

蜘蛛怪人「『タランチュラアマゾン』に構えた時だった、上空に退避していたストライクがビームライフルを発砲した。

緑色のビームがガンマに迫る。

ガンマ「!？」

突然のビームにガンマは反応が遅れてしまった。

ビームはガンマのすぐ横を通り過ぎてガンマとタランチュラアマゾンが乗っている艦装の手を貫いた。

どうやらタランチュラアマゾンに集中していたガンマを背後から襲おうとしていたようだ。

それが分かったガンマはアークエンジェルにお礼を言う代わりに

親指を立てた。

アークエンジェルも親指を立てる。

手を貫かれて激しく体を動かす艀装。

ガンマ「クツ!!」

激しく体を動かす艀装にガンマは慌てて後ろに飛んでアークエンジェルの艀装の上に乗った。

AA（あれ？意外と軽い…）

乗ってってきたガンマが予想以上に軽かったことにアークエンジェルは驚いた。

ガンマ「あーく…」

AA「なに？」

ガンマ「そろそろ…ちから…でなくなる…つぎで…きめよう…」
そう言うガンマをアークエンジェルはよく見ると少し呼吸が乱れていた。

AA「分かったわ。決めましょう」

ガンマ「うん…!!」

戦艦水鬼と合流してきたヲ級に構えるアークエンジェルとタランチュラアマゾンに構えるガンマはそう言った。

タランチュラ「シャバアアアアアアアアアアアアアア!!」

ガンマに向かってタランチュラアマゾンは口から糸玉を繰り出す。

ガンマ「ハアアツ!!」

糸玉をガンマは右手で掴み受け止めて見せた。

しかしMSを浸食するほどの酸性を見せた糸玉を受け止めたのに関わらずガンマの右手は浸食すら見せていなかった。

タランチュラ「ギギ？シャバアアアアアアアアアアアアア!!」

首を傾げるタランチュラだが直ぐ様何十発の糸玉を繰り出した。

ガンマはそれら全てを体で受け止めて見せた。

直ぐにガンマの姿は糸玉に覆われてしまうが…。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアア!!」

覆っていた糸玉全てをアームとレッグカッターで斬り刻んで無傷の姿で現れた。

タランチュラ「ギギツ!!」

無傷で現れたガンマにタランチュラアマゾンが驚いて後退する。

パイオレント パニツシュ!!

その隙にガンマは右側のグリップを捻ると両腕のアームカッターが大型化した。

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

吠えたガンマはタランチュラアマゾンに向かっていく。

タランチュラ「シヤバアアアアアアアアアアア!!」

タランチュラアマゾンも糸玉を繰り出しながらガンマに向かっていく。

二人が交差した瞬間、何かが飛んだ。

タランチュラ「……………」

飛んだのはタランチュラアマゾンの首で、首を失った体は傷口から血を噴水のように噴き出しながら海中に落ちた。

タランチュラアマゾンが海中に落ちたのと同時に空中で身動きが取れないガンマに向かって戦艦水鬼とヲ級が砲を向ける。

2体の砲撃が始まった…がガンマの姿はそれと同時に消えた。

戦艦水鬼・ヲ級「!?!」

突然消えたガンマを探して辺りをキョロキョロする

辺りにいなく残っていた上空を見るとストライクの肩に乗ったガンマの姿があった。

しかし2体が驚いたのはそこではない、ストライクを筆頭にタランチュラアマゾンの糸玉から逃れていたムラサメ隊がビームライフルを向けていた。

AA「全機、発射!!」

アークエンジェルの指示で一斉にトリガーを引いた。

無数の緑色の光が戦艦水鬼とヲ級を襲う。

辺りが蒸気で覆われる。

戦艦水鬼「アアアアアアアアアアアアアアアア!!」

蒸気突き破るようにボロボロの戦艦水鬼がアークエンジェルに

向かっていく。

艦装も半分体を失っているがせめてアークエンジェルだけでもと戦艦水鬼の想いに応えようと迫る。

AA「ゴッドフリート、照準…」

225cm2連装高エネルギー収束火線砲『ゴットフリートMk.71』の照準を合わせるアークエンジェル。

だが戦艦水鬼たちはそれより早く着くと確信していた。

アークエンジェルの武装は確かに強力だが照準が合わず外れれば大したことはない、仲間である他の艦娘はいない、アークエンジェル一人なら道連れで倒せると思っただろう。

そう、アークエンジェル一人なら…

バイオレント ストライク!!

ガンマ「ハアアアアアアアアアアアアアア!!」

ストライクの肩から跳躍し、右側のグリップを三度捻ったガンマはバイオレントストライクを繰り出して艦装に止めを刺した。

AA「ゴッドフリート、撃てえー！ー！ー！ー！！」

艦装が殺られて速度が落ちた戦艦水鬼に向かってアークエンジェルはゴッドフリートを発射した。

戦艦水鬼「アアアアアアアアアアアアアアアア……」

悲鳴に似た断末魔を上げて戦艦水鬼は消滅した。

AA「やった！」

小さくガッツポーズするアークエンジェル。

AA「はっ、そういえばリュイクくんは!？」

ヴィータ「ここだよ、ここ」

アークエンジェルがキョロキョロしているとヴィータの声が聞こえて見るとヴィータとザフィーラがおり、二人の方に上昇して見ると気持ち良さそうにザフィーラの背中で寝ているリュイクの姿があった。

ザフィーラ「海に落ちる前に回収出来てよかった」

ヴィータ「あーあ、とんだ散歩になったぜ。早く帰ろうぜ」

AA「そうですね」

ザフィーラ「ああ」

ヴィータに言われて3人は浜に着地して帰路についていった。

—エピローグ—

AA「みなさん、短い間でしたがお世話になりました」

次元世界に行き来する船が離着陸する次元港にてアークエンジェルは大量の荷物を持って八神家の面々に挨拶をしていた。

深海棲艦の襲撃後、家に帰ったあとはやてたちに事情説明した晩にアークエンジェルの世界から通信があり、それを頼りにアークエンジェルの世界を割り出して今日がはやてが艦長をしている次元航行船で帰る日なのだ。

因みに大量の荷物はアークエンジェル自身がいなくなっって心配した姉妹艦や提督、仲間の艦娘に渡すお土産である。

ヴィータ「気にすんなよ」

シグナム「そうだ。我々以外にも自分の世界を守る者がいると分かったんだからな」

アギト「あつちに帰っても頑張れよ」

ライン「皆さんに渡すお土産は忘れずにです」

シャマル「元は軍艦でも今は女の子なんだから健康にもきよつけてね」

ザフィーラ「修練も忘れずにな」

それぞれが伝えたいことをアークエンジェルに言う。

リュイ「あーく…」

最後に残ったリュイは少しもじもじしていた。

AA「ありがとうね。リュイくんのおかげで私は無事にまた皆の所に帰れるわ」

もじもじして先が進まないリュイの頭を撫でてそう言うアークエンジェル。

そんなアークエンジェルを見てリュイは意を決した顔をした。

リュイ「あーく…ちよつと…かがんで…」

AA「ん？なに…」

リュイに言われて屈んだ瞬間、リュイはアークエンジェルの右頬に

キスをした。

「「「「なっ!?!」」」」

AA「えっ／＼／＼!?!」

突然のこと過ぎてアークエンジェルは勿論、はやて以外の八神家面々は驚愕した。

1秒と満たないキスをしたリュイは恥ずかしかったのか直ぐにシグナムの後ろに隠れた。

はやて「ほな、行こうか」

AA「は、はい…」

呆けているアークエンジェルに、にやけながらはやてはそう言う二人は船に乗る。

はやて「じゃ、アークちゃんの世界に向かって出港や!!」

はやての号令の元、船が出港した。

AA(ばいばい。リュイくん…また会える日が来るなら今度はドミニオンたちと行くわ)

客室にて手を振るリュイを窓から見下ろしながらアークエンジェルはそう思うのだった。

コラボ編2 出会う次元の旅人と小さき狩人
k a m e n r i d e r × k a m e n r i d e r

— 廃工場 —

ミッドチルダにある廃工場。

人気はなく、埃まみれで静かなこの場所に突如、壁を突き破って2体の怪人と1人の人物が入ってきた。

怪人は像のような巨漢の怪人—『エレファントアマゾン』2体と黄色い体表面、緑色の胸部装甲、青い釣り目をした複眼を持ち、グローブとブーツの部位にはカッターのような突起物がある仮面ライダー、『仮面ライダーアマゾン ガンマ』だ。

エレファントA 「ガオガアアアアアアアアアアアアア!!」

エレファントB 「グガジアアアアアアアアアアアアア!!」

2体のエレファントアマゾンはガンマに威嚇の咆哮を上げる。

ガンマ 「グルルル…」

対するガンマも喉を鳴らしながら2体を威嚇する。

ガンマ 「ハアアアアアアアアアアアアアア!!」

先に動いたのはガンマだった。

両前腕のカッター、アームカッターを構えて向かっていく。

エレファントA 「ガオガアアアアアアアアアアア!!」

迎え撃たんとエレファントアマゾンAが動く。

ガンマ 「アアアアアアアアアアアア!!」

エレファントアマゾンAと交差する寸前、右側のグリップ—『バトルグリップ』を引き抜いた。

バイオレント ブレイク!!

ガンマ 「ウオアアアアアアアア!!」

エレファントA 「ガオガアアアアアアアア!!」

グリップを引き抜いたガンマは『アマゾンブレイド』をエレファントの背中に突き立てた。

ガンマ 「セヤアアアアアアアア!!」

そこからガンマはブレイドを上へ動かして最終的にはエレファントアマゾンAの上半身を真っ二つにした。

真っ二つにされたエレファントアマゾンAは黒いドロドロの液体になった。

エレファントB「グガアアアアアアアアアア！」

相方が一撃で倒したガンマにエレファントアマゾンBは後退りして逃げ始めた。

ガンマ「ウアアアアアアアアアアアアアア!!」

逃げ出したエレファントアマゾンBを見たガンマはブレイドを一且戻すと再び引き抜いた。

バイオレント ブレイク!!

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアア!!」

再び引き抜いた時、ブレイドではなく『アマゾンウィップ』になっており、ガンマはウィップを伸ばしてエレファントアマゾンBの首に巻き付かせた。

ガンマ「ヌウアアアアアアアアアアアア!!」

ウィップがエレファントアマゾンBの首に巻き付いたのを確認したガンマは力一杯に引っ張った。

エレファントB「グガアアアアアアアアアア!!」

力一杯に引っ張られたエレファントアマゾンBはガンマの方に引き寄せられた。

エレファントアマゾンBが自身に来るのを見たガンマは左側のグリップ『アクセラレーター』を捻った。

バイオレント パニッシュ!!

『バイオレント パニッシュ』と音声の流れると両腕のカッター『アームカッター』が大型化した。

ガンマ「ウオアアアアアアアアアア!!」

大型化したアームカッターで引き寄せたエレファントアマゾンBの腰部を斬り、上下に切断した。

上下に切断されたエレファントアマゾンBも黒いドロドロの液体になった。

カッターが元の大ききさになったガンマは2体の亡骸である液体に近付いて何かを拾った。

ガンマ「ハズレ…か…」

拾ったのをグシャリと握り潰してポイッと捨てた。

捨てたあとその場を去ろうとした時だった。

？「仮面ライダーがポイ捨てとは感心せんな」

ガンマ「!？」

無人のハズのこの場所に声が聞こえてガンマは驚いて振り向くと巨大なトランプが高速で回転しながら突っ込んで来ていた。

ガンマ「があっ!!」

トランプを避けきれずまともに喰らい、ガンマは倒れてしまう。

ガンマを倒したトランプはたて向きになるとその場で停滞しながら回転、姿を変えた。

トランプは白一色の人物になった。

シャドウ「ふはははははははははは！如何かな？このジェネラルシャドウの攻撃わ！」

『ジェネラルシャドウ』と名乗る人物は笑いながら言う。

ガンマ「ぐっ…ガアアアアアアアアアアア!!」

対するガンマは何とか立ち上がった。

シャドウ「流石は仮面ライダー…いや、アマゾンライダーと言うべきかな？しかし！」

立ち上がったばかりのガンマの目の前に一気に近付いたシャドウは腰に携えていたサーベル―『シャドウ剣』を引き抜いてガンマを突いた。

シャドウ「そらそらそらあ!!」

ガンマ「グアアアアアアアアアアア!!」

シャドウの素早い突き攻撃にガンマは吹き飛び鉄骨の柱に激突してしまう。

ガンマ「ぐっ…!？」

立とうとしたガンマだがダメージが大きすぎたのか直ぐに倒れて気を失ってリユイの姿に戻ってしまった。

シャドウ「これで終いだ」

そう言つてシャドウはシャドウ剣を振り上げた時だった。リュイの背後から弾丸が飛んできてシャドウを強襲した。

シャドウ「い、今のは!？」

弾丸が飛んできた方向を見ると銃を構えた一人の仮面ライダーがいた。

シャドウ「な、何者だ!？」

クライム「俺はクライム、仮面ライダークライムだ」

体にバーコードに似たのが描かれた灰色の仮面ライダー――『仮面ライダークライム』はそう名乗った。

シャドウ「クライム!?!あの異世界に渡つては悪の組織を潰しているあの仮面ライダーか!?!」

クライム「まあ、どんな風に言われてるかしらねーけどチビ相手に少し大人気ないだろ?」

シャドウ「ふん。仮面ライダーは誰だろうとこのジェネラルシャドウは容赦はせぬ!」

クライム「なら、行くぜ?」

シャドウ剣を構えるシャドウと銃を構えるクライム。

一足即発の空気が漂う、その時だった…。

?「リュイー!リュイ、どこだー!」

誰かを呼ぶ声が近くから聞こえた。

シャドウ「どうやら邪魔が入ったようだな。去らばだ!!」

シャドウ剣を納めながらクライムに言つてシャドウは体を回転させながらトランプとなり工場の屋根を突き破りどこかへ飛んでいった。

クライム「あ、ちよつと待てよ!!」

飛んでいったシャドウにクライムは見上げながら叫ぶがすでにシャドウの姿は無かった。

クライム「くそつ、逃げられたか…」

仕方なくクライムは氣を失っているリュイに近づいた。

クライム（氣を失つてるだけみたいだな）

リユイを抱えようと手を伸ばした時だった、クライムの首にシヤド
ウ剣ではない刀が突き付けられた。

クライム「え？」

振り向くと八重桜のロングヘアをポニーテール纏め、刀を右手に
持った女性―『シグナム』と大きな犬―『ザファイラ』がいた。

シグナム「貴様、リユイに何をしている？」

怒りの籠った声でクライム言うシグナムだった。

―数分前―

シグナム「ザファイラ、リュイはいたか？」

ザファイラ「いやいやない。だがこの近くなのは確かだ」

散歩中にいなくなったらリュイをシグナムとザファイラは慌てて辺りを捜していたが見付けられずにいた。

シグナム「どこに行っただ、リュイ…」

不安がシグナムを包む。

その時、近くの廃工場から大きな物音が響いて見ると屋根から何か飛び出してどこへ飛んでいった。

ザファイラ「なんだ!？」

シグナム「あの廃工場からか！」

何かが飛んでいった廃工場に向かう二人。

シグナム「リュイー!リュイ、どこだー!!」

呼びながら中に突入すると体にバーコードに似たのが描かれた灰色の仮面ライダーがリュイに何かしようとしていた。

シグナム「奴め!!」

灰色の仮面ライダーを見てシグナムはバリアジャケットを纏いレヴァンティンを出して首に突きつけた。

クライム「え?」

首にレヴァンティンを突きつけられて灰色の仮面ライダー、『仮面ライダークライム』は驚いて振り向いてきた。

シグナム「貴様、リュイに何をしている?」

ザファイラ「!？」

いつもクールなシグナムが珍しく怒りで満ちているのを感じてザファイラは少しビクツとした。

クライム「いや、危ないところを助けただけだっ!」

シグナム「言い訳は局で聞く!」

クライムに斬りかかるシグナム。

クライム「問答無用かよ!？」

驚きながらもクライムは跳躍して空中回転してからのシグナムの後ろを取る。

シグナム「逃がさん!!」

追撃しようとクライムに向かうシグナム。

クライム「あーめんどくせえなあ」

そう言っただけクライムは1枚のカードを取り出して銃に差し込んだ。

KAMEN RIDE TORANS

『KAMEN RIDE TORANS』と音声の流れるとクライム

は銃を向け、トリガーを引いた。

トリガーを引くと紫黒色で、左肩から斜めにタイヤのようなのをつけた仮面ライダー―『仮面ライダートランス』が現れた。

シグナム「なにつ!?!」

突然現れたトランスに驚いて止まるシグナム。

クライム「その人を抑えてろ!」

クライムの指示を聞いてトランスはシグナムに襲いかかる。

シグナム「くつ!」

トランスの攻撃をシグナムはレヴァンティン盾にして防ぐ。

トランス「ハッ!」

一旦距離を取ったトランスは拳を握ると再びシグナムに接近する。

シグナム「レヴァンティン!!」

接近するトランスを見てシグナムはレヴァンティンに指示をする
とレヴァンティンは形を長剣型になりカートリッジ1つを消費した。

シグナム「紫電一閃!!」

魔力を刀身に集めて縦の斬撃を繰り出す技―『紫電一閃』を繰り出した。

トランス「フツ!!」

シグナムの繰り出した紫電一閃を跳躍してかわしてそのまま空中
回転してキックを繰り出した。

シグナム「チッ!」

後ろに飛びキックを回避する。

クライム「さてと今の内に…」

シグナムがトランスと戦っている隙にクライムは離脱しようとする。

ザフィーラ「そうはいかん！」

クライム「うおっ!？」

離脱しようとしたクライムの背後からザフィーラ（人間形態）が羽交い締めにする。

クライム「いつの間にな!? くそっ!」

ザフィーラ（最初からいたのだが…まあいいだろう）

狼での姿が多いザフィーラは自身の人間形態での影の薄さ少しシヨックを受けながらも羽交い締めにしたクライムの首にチョップを叩き込んだ。

クライム「がっ……………」

チョップを叩き込まれたクライムはバタリと気を失った。

クライムが気を失って変身が解けたのと同時にトランスの姿が無くなった。

—取調室—

「氏名『神崎 隴』、職業は無職。 あちこちの異世界を渡っては悪の組織を撃滅しているが八神部隊長の子…もとい養子であるリュイくんを襲い変質な行為をしようとしたところを管理局の武装隊所属のシグナム隊長たちに拿捕…で合ってるかな？」

取調室にて係りの男性局員が仮面ライダークライムこと『神崎

隴』に報告書の内容を言ったあと確認する。

隴「後半だけ間違いだらけだ!!」

机を叩きながら言う隴。

ザフィーラに気絶させられたあと、管理局のベッドで目を覚まして直ぐに取調室に連れてかれて事情聴取されていた。

「そう言われてもシグナム隊長がそう言っているんだから…」

隴「俺はシヨタコンじゃねーよ！俺はむしろそのリュイってチビを助けたんだ!!」

「とか言ってそこから変質行為をしよう…」

朧「断じてしない!!」
怒りながらそう言う朧だった。

―地下―

どこかの地下にてシャドウは膝を付いて人物の前にいた。
その人物は体が少し透けているので立体映像だと分かる。

シャドウ「申し訳ありません。仮面ライダークライムに邪魔をされました」

そう言つてシャドウは立体映像の人物に向かって謝罪していた。

? 『仮面ライダークライム：ヤツメ、コノ世界ニ現レルトハ：何トシテモコノ世界ノ仮面ライダーヲ必ず抹殺セヨ!!』

シャドウ「ハッ」

人物に言われてシャドウは返事をした。

k a m e n r i d e r × k a m e n r i d e r

―病室―

リュイ「うーん…」

リュイは気が付くと見知ったベッドに寝かされていた。

シグナム「リュイ！」

はやて「良かった、目が覚さめたんやな」

リュイ「しぐまま…はやばば…」

シグナムとはやての顔を確認するなりリュイは起き上がる。

シグナム「大丈夫か？どこか怪我はないか？」

リュイ「うん…おにーちゃんが…たすけて…くれた…」

シグナム「お兄ちゃん？……………ま、まさか…」

リュイのこの一言を聞いてシグナムは青ざめる。

はやて「どないしたん？シグナム」

青ざめるシグナムを見てはやては聞く。

シグナム「り、リュイ、そのお兄ちゃんは何て名前だ？」

恐る恐る聞くシグナム。

リュイ「なまえは…くらいむ…ってしやどうが…いった…」

シグナム「やつはりっ!!」

クライムと聞いてシグナムは立ち上がってどこかへ行ってしまった。

はやて「どこに行くんやシグナム!？」

シグナム「少し取り調べ室に!!」

はやて「なんなんやいったい…」

シグナムの行動に呆れてしまうはやてだった。

―取り調べ室―

シグナム「本当にすまなかった!!」

取り調べ室に入るなりシグナムは局員を外に出して臙に謝っていた。

臙「やっと分かってくれたか…」

漸く誤解が解けたと分かり言う朧。

シグナム「すまない。こつちはリュイがいなくなつて慌てていたものでな」

朧「もういいよ。分かってくれたんならよ」

リュイ「どら…ごん…」

朧「ん!？」

シグナム「り、リュイ!？」

声に反応して振り向くと朧の背中を見るリュイに二人は驚く。

シグナム「いつからいたんだ!？」

リュイ「しぐままの…せなかに…くつついてた…」

シグナム「背中にか!？」

リュイ「うん…」

朧「おい、それよりリュイだったか?なんでこれを知ってるんだ?」

そう言つて朧は上着を脱いで背中を見せた。

朧の背中には龍の紋様(首から下で両手には無い)が描かれていた。

シグナム(う…美しい…)

朧のそれを見たシグナムは魅了された。

シグナム「こ、これはどうしたんだ?」

リュイが聞くより早くシグナムが聞いてきた。

朧「さあ。でも有無であり有無でも無く神であつて神でも無く人であり人でも無く中途半端な存在であり中途半端な存在でも無く抑止力であり抑止力でも無く自分であり自分でも無く俺であり俺でも無く——だからだ」

そう言う朧。

リュイ「よく…わかんない…」

朧の言つた意味が分からないリュイは首を傾げる。

朧「まあ、まだチビのお前には分かんないだろうな」

脱いでいた上着を再び着てそう言う朧だった。

k a m e n r i d e r × k a m e n r i d e r

―部隊長室―

シグナムから謝罪をされたあと、隼ははやてに話をしに部隊長室にいた。

はやて「なるほどなあ。そのジェネラル・シャドウ言う敵からリュイを守ってくれたんに心配し過ぎて何も考えられへんかったシグナムと戦うことになってしもうて、ザフィーラに気絶させられて今に至るちゆうわけかいな？」

隼「そうだよ」

今までの経緯を簡潔にまとめて確認するはやてに隼は不機嫌そうに言う。

はやて「まあ、勘違いした本人も反省してることやし…主であるウチの顔を立てて許してや」

隼「あんたに言われるまでもなく許すよ。それより、俺が話してたシャドウはどうなった？」

はやて「ああ、それなアンタが言うジェネラル・シャドウやけど…いまんとこどこの管理世界にも出現しとらんよ」

リン「どこか別の世界に行ったんじや…」

隼「いや、奴がそう簡単に獲物を諦める訳がない」

その時、部隊長室に警報が鳴り響いた。

はやて「どうしたんや!？」

通信を繋ぐはやて。

『八神部隊長、大変です！アマゾンではない謎の怪人たちが局の病棟を襲撃して……』

通信に出た局員が話している途中で途切れてしまった。

隼「どうやら俺の出番みたいだな」

はやて「怪人たちは任せて大丈夫なん？」

隼「任せとけ。この世界にはこの世界を守る仮面ライダーがいるだろ?」

そうやって隼は踵を返して歩きだした。

? 「そうはいかんぞ」

「!?!」

謎の声と共に3人の目の前に揺らめく灰色壁が現れた。

はやて「なんや!？」

隳「こいつは…まさか!？」

壁が消えるとそこには一人の白いスーツを来た男性がいた。

隳「何者だ?」

アポロガイスト「我が名は偉大なる超シヨツカーの幹部 アポロガイスト」

アポロガイストと名乗る白いスーツの男性。

隳「超シヨツカー?聞かない名だな」

アポロガイスト「死に行く貴様らに多くは語らん。アポロチェンジ!!」

男性が「アポロチェンジ」と叫ぶと姿が変わった。

白いマントを羽織り、太陽をモチーフにしたような顔をした赤い体に、刃の付いた丸い盾と銃と剣が一体になったサーベルを持った姿になった。

アポロガイスト「仮面ライダークライム、八神はやて、リインフォースII、貴様らはここで死ぬぞ!」

隳「悪いがここで死ぬ予定は無いんでな」

K A M E N R I D E K U R A I M !!

隳「変身!!」

何処からか銃とカードを出して、カードを銃に装填して音声の流れると自身の頭上に上げてトリガーを引くと隳の姿が変わった。

体にバーコードに似たのが描かれた灰色の仮面ライダー『仮面ライダークライム』に変身した。

はやてもバリアジャケツトを纏い、臨戦する。

クライム「行くぜ!」

アポロガイスト「行くぞ!!」

ガンマ「ハアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

バイオレント ストライク!!

襲撃があつた病棟にてガンマがバイオレントストライクで全身を黒で統一された数十人の人物たちの集団を粉碎した。

なんでこうなつたかと言うと病室にてシグナムと遊んでいたリュイだったが突如病室が爆発した。

幸いリュイとシグナムは大した怪我はしなかったがシグナムが気を失つてしまい、さらに足が瓦礫に挟まって動けなくなつてしまつた。

助けようとした矢先に全身を黒で統一された数十人の人物たちの集団が現れて戦闘になつてしまつたのだ。

ガンマ「しぐまま！」

集団を粉碎してシグナムを助けようと近寄るガンマ。

ガンマ「いま…たすける…」

そう言つてシグナムの足に乗っている瓦礫を退かそうとする。その時だった。

巨大なトランプが高速で回転しながら突つ込んで来ていた。

ガンマ「!!」

瓦礫を退かすのを中断してガンマは後ろに飛んで回避する。

シャドウ「やはり2度目は喰らわぬか」

ガンマに回避されたトランプは縦になつて高速回転して人―ジエネラル・シャドウになった。

ガンマ「しゃどう…」

シャドウ「覚えていたか。だが今度は逃さん!!」

シャドウ剣を出してガンマに構える。

バイオレント ブレイク!!

ガンマはバトラ―グリップを引き抜いてアマゾンブレイドにして構える。

シャドウ「行くぞ!!」

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

両者、同時に動いた。

互いの刃が交差する。

k a m e n r i d e r × k a m e n r i d e r

―ガンマVSジェネラル・シャドウ―

時空管理局の病棟区の通路にてガンマとジェネラル・シャドウが剣劇を繰り広げていた。

気を失って動けないシグナムを戦いに巻き込まないために巧くシャドウを人気のない通路にまで誘導したのだ。

シャドウ「ふん！」

ガンマ「があっ!!」

シャドウはガンマの斬撃を回避しつつ隙にシャドウ剣でガンマの胸部の中心を突いてダメージを与えた。

シャドウ「ふむ…見事に誘導されてしまったな」

周りを見ながらガンマに言うシャドウ。

ガンマ「ここから…ほんばん…」

アマゾンブレイドを仕舞、構えるガンマ。

シャドウ「よかろう。来るがいい!!」

シャドウ剣を構えて言うシャドウ。

ガンマ「ウオアアアアアアアアアアアアアア!!」

雄叫びを上げながらガンマはシャドウに向かっていく。

―部隊長室―

アポロガイスト「ムン!!」

クライム「オラアツ!!」

はやて「ハッ!!」

部隊長室では超ショッカーの幹部 アポロガイストと仮面ライ

ダーククライム、そしてはやてによる銃撃戦が繰り広げられていた。

はやて「ハッ！」

アポロガイスト「アポロマグナム!!」

はやて「きやつ!!」

はやての魔力弾を盾―『ガイストカッター』で防いだのと同時に銃と剣が合体した対戦車兵器・アポロマグナムのカウンター攻撃が決

まった。

アポロガイスト「ここまでのようだな。八神 はやて」

アポロマグナムの剣部分を向けるアポロガイスト。

クライム「ハアアツ!!」

ATK RIDE BLAST

そこへクライムのブラストがアポロガイストを強襲した。

アポロガイスト「ぬう…流石は異世界の組織を壊滅させている仮面ライダーだな。だが！」

指を鳴らすとはやてとクライムの前にアポロガイストが現れた時の壁が現れた。

「「アクマイザー!!」」

サーベルを持った悪魔に似た姿をした3人の怪人どが現れた。はやて「なんや!」

クライム「アクマイザーのザタン、イール、ガーラかよ…」

アクマ族の戦士『ザタン』『イール』『ガール』に驚く。

ガーラ「ヌアアアアアアアアアアアアア!!」

クライムとはやてが驚いている内にガーラが迫ってきた。

クライム「つたくしょうがねえな」

そう言つてクライムは何処からか1枚のカードを取り出してクライムドライバーに装填した。

KAMEN RIDE ZERO

トリガーを引くとクライムの姿が変わった。

灰色のバーコードのような姿から色透明のような祭司の姿をした仮面ライダー『仮面ライダーゼロ』になったのだ。

アポロガイスト「なに!」

はやて「姿が変わった!」

クライムの姿が変わつたのを見てアポロガイストやはやては驚いた。

ゼロ（クライム）「ハッ!」

ガーラ「ぐおああああああああああ!!」

ゼロ（クライム）のパンチを喰らつたガーラの腹部が貫かれて爆発

した。

「ガーラ!?」

ガーラが殺られてザタンとイールは驚く。

ゼロ（クライム）「もう一丁行くぜ」

そう言ってクライムは2枚目のカードを出してクライムドライブに装填した。

K A M E N R I D E R A I F

はやて「また変わった…」

朽葉色身体とマントを纏った魔法使いのような風貌をした仮面ライダー『仮面ライダーライフ』になった。

ザタン「おのれ!」

イール「キエエエエエエエイ!!」

サーベルを構えてザタンとイールはライフ（クライム）に向かっていく。

ライフ（クライム）「はあああああ………」

足に力を入れるライフ（クライム）。

その足元には魔方阵が展開されていた。

ライフ（クライム）「はあああああ!!」

「ぐおあああああああああ!?!」

ザタンとイールが目の前まで来た瞬間、回し蹴りを繰り出すと二人の体に魔方阵が移ったかと思いきや爆発した。

クライム「ふう…ん?うおああっ!!」

クライムに戻った瞬間、アポロガイストのガイストカッターが強襲してきた。

アポロガイスト「少々驚いたぞ。貴様がデイケイドと同じ力を使うとわな。アポロマグナム!!」

クライム「ぐあああああああああああああ!!」

続けざまにアポロマグナムを喰らってクライムの体は吹き飛び、部隊長室の窓ガラスを突き破って外に放り出された。

アポロガイスト「貴様を殺すのは奴を倒した後だ」

そうはやてに言うアポロガイストはクライムが突き破った窓か

ら外に飛び降りた。

隴「ぐっ…」

アポロガイストが地上に降り立つと変身が解けた隴が倒れていた。リユイ「うああああああああああああ!!」

そこへ隴の隣にリユイが吹き飛ばされて来た。

シャドウ「とう!!」

アポロガイストの隣にシャドウが着地した。

アポロガイスト「ジェネラル・シャドウか」

シャドウ「貴様はアポロガイスト!?なぜここに!?!」

アポロガイストがいることにシャドウは驚いた。

アポロガイスト「あのお方の命令で貴様の救援に来たやったのだ」

シャドウ「くっ、余計な真似を…」

アポロガイスト「まあいい。そろそろ止めを刺すでしょう」

二人に止めを刺そうとアポロガイストとジェネラル・シャドウが近づいてくる。

隴「おい、リユイ…まだ戦えるか?」

リユイ「うん…まだ…まだ…たたかえる…」

隴「そうか…」

隴の問いに答えるとリユイは立ち上がり、それを見た隴も立ち上がった。

シャドウ「なぜだ!?なぜまだ立ち上がる!?!」

立ち上がったリユイと隴にシャドウは驚く。

隴「お前ら悪党には分かんないだろうな。こいつは例えその身に流れる血が化け物と一緒にでも…暖かく迎えてくれる大切に大好きな居場所と人たちがいる、それを守る為ならどんなに攻撃されても立ち上がる!戦える!それがこいつ…仮面ライダーアマゾン ガンマ、『八神 リユイ』だ!」

アポロガイスト「貴様…いったい何者だ!」

アポロガイストがそう言った時、隴は上半身の服を脱いで龍を見せた。

朧「龍に魅せられ、龍と共に戦う通りすがりの仮面ライダーだ！」
ガンマ

リユイ「アマゾン!!」

朧「変身!!」

K A M E N R I D E K U R A I M C O M P L E T E

立ち上がったのと同時に二人はガンマとクライムに再び変身した。
しかしクライムにいたっては姿が少し変わっていた。

姿はいつもの灰色のバーコードのような姿だが胸部に『ウロボロス』『ディアック』『ディメント』『ジオーネ』『ライフ』『シエイク』『トランス』『ソウル』『ムゲン』の順にカードが配置されている姿―『仮面ライダークライム コンプリートフォーム』だ。

アポロガイスト「悪足掻きが…来い!!」

指を鳴らすとアポロガイストとシャドウの後ろに壁が現れて消えると全身を黒で統一された人物たちが数百人はいた。

クライム「ショットカー戦闘員か…雑魚が何百いようと関係ないがな。行くぜ!」

ガンマ「うん!」

全身を黒で統一された人物たち―数百の『ショットカー戦闘員』にクライムとガンマは向かっていく。

アポロガイスト「行け!」

ショットカー戦闘員『イーツ!!』

同時にアポロガイストの指示でショットカー戦闘員も二人に向かつていく。

ショットカー戦闘員『イーツ!!』

数十体の戦闘員の足元が火を吹いて上空に飛翔したかと思いきやガンマとクライムに向かっていく。

地面に着弾すると爆発した。

特攻型の戦闘員のようなだが二人はそれをすり抜けていく。

クライム「ハッ!」

A T K R I D E B L A S T

一番早く動いたのはクライムで、向かってくる戦闘員たちに向かっ

て拡散型の弾丸を発射し一気に何十人の戦闘員たちを葬った。

ガンマ「ハアアアアアアアアアアアア!!」

バイオレント ストライク

クライムの後ろからガンマが跳んで来てバイオレントストライクを放つて更に何十人の戦闘員たちを葬る。

バイオレント ブレイク

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

バトラーグリップを引き抜いてアマゾンサイズにするなり片っ端から戦闘員たちを切り裂いていく。

クライム「オラアツ!!」

クライムは拡散型と一点型を駆使して戦闘員たちを倒していく。

アポロガイスト「おのれ…」

シャドウ「やはり戦闘員では話にならんか…」

次々に倒される戦闘員たちにアポロガイストとシャドウは呆れていた。

アポロガイスト「我々が手を下すか。アポロマグナム!!」

シャドウ「トランプカッター!!」

アポロガイストのアポロマグナムとシャドウのトランプによる『トランプカッター』が戦闘員ごとガンマとクライムを襲う。

爆煙が辺りを包む。

アポロガイスト「くたばったか…」

ガンマ・クライム「うおおああああああああああ!!」

二人を倒したかと思いきや爆煙を突き破るようにガンマが跳躍し、クライムがクライムドライバーを構えていた。

バイオレント ストライク

FINAL ATK RIDE KURAIM

ガンマ・クライム「ハアアアアアアアアアアアア!!」

ガンマのバイオレントストライクとクライムの『FINAL ATK RIDE』がシャドウとアポロガイストのそれぞれに向かっていく。

シャドウ「ぐああああああああああ!!」

アポロガイスト「ぐっ……くう……ぐがああああああああああ
!!」

シャドウはバイオレントストライクを喰らい吹き飛び、ガイスト
カッターでガードしていたアポロガイストだが威力を抑えきれず
シャドウと同じ位置まで飛ばされた。

シャドウ「ぐおおおお……まさかこのジエネラル・シャドウが負ける
とはこの一戦に悔いはなし……」

一旦は立ち上がるがそう言い残してシャドウは再び倒れて爆散し
た。

アポロガイスト「おのれ……仮面ライダー……覚えている……超ショツ
カーは不滅だ！超ショツカー、超バンザーイ!!」

アポロガイストも立ち上がるがそう言い残してシャドウ同様爆散
した。

クライム「やったな」

ガンマ「うん」

クライムに言われてガンマは頷いた。

―エピローグ―

シャドウとアポロガイストの襲撃から数週間後、朧が異世界へ渡る
ことになった。

はやて「ほんま助かったで。ありがとうな」

朧「礼ならよしてくれ。俺は俺のやることをやったのだけさ」

シグナム「いや、お前がいなければ私たちはシャドウたちに負けて
いただろう」

朧「つたく、素直に気持ちは受け取っておくぜ。あ、そうだリュイ」

リュイ「ん？」

朧「ほれ」

赤い石を投げ渡した。

リュイ「これ……なに？……」

受け取った石を見ながら聞く。

朧「そいつはいつかお前がピンチになった時に役立つ物だ。肌身離

さず持つとけよ。じゃあ皆又何処かで相見えよう！」

と言った瞬間に朧の姿は消えてしまった。

恐らく別の世界に行いったのだろう。

シグナム「仮面ライダークライム、神崎 朧か…不思議な青年でしたね」

はやて「せやな。通りすがりっていうより風来坊やね」

リュイ「また…あえるかな？」

シグナム「きつと会えるさ」

はやて「せやで。なんたつて通りすがりやからな」

再会を楽しみにするはやてたちだった。

出会う子孫と小さき狩人

h u n t i n g 17

リュイが八神家にやって来て早一月、事件は部隊長室で起きた。

はやて「ああー……ああー……ああー……!!」

部隊長室にはやての声が轟いた。

はやて「わ、忘れとったああああああああああああああ!!」

今後の予定表を見ていたはやては頭を抱えて叫んだ。

リイン「ど、どうしたんですか？はやてちゃん」

はやて「これや、リイン！」

予定表のとある日付を指差してリインに見せるはやて。

そこには『全員出張』と書かれていた。

リイン「え？これがどうかしました？」

はやて「全員出張ってことはリュイが独りぼっちになってまうん

やあ!!」

リイン「あ………あああ!!」

はやてに言われてリインも声を上げた。

はやて「……つと言うわけや！リュイを預けられる人、誰かおらん!?!」

『……………』

慌ててシグナムたちに連絡を入れるはやてだが全員、出張のことを忘れていて黙ってしまった。

はやて「仕方ない……急やけどなのはちゃんかスバルに相談してみるか……」

はやてがそう言った時、ヴィータが口を開いた。

ヴィータ『でも、今回リュイが大人しくアタシらの言うこと聞くか?』

シグナム『どうゆう意味だ?』

ヴィータ『ほら、リュイは先月くらいに来たばかりじゃねーか。誰

かに預けるってことは捨てられるって思うんじゃないか?』

ヴィータに言われて全員が黙ってしまう。

確かにまだリュイが八神家に来て、1ヶ月しか経っていない。

たった1ヶ月で、家族に慣れつつあるのに急に他所の家に預けられでもしたら、幼いリュイのことである。

八神家から捨てられてしまったと考えるには十分だった。

はやて「どないしょおおおおおおおおおおおおおおお

!!」

ほぼ詰みの状況にはやての叫びが辺りに響き渡る。

?「ど、どうしたの、急に大声出して?」

はやて「ふえ?」

声の方を見ると書類を持ったフェイトが扉を開けて立っていた。

はやて「ふえ…フェイトちゃん!!」

フェイト「ちよっ、なにになに!」

ダッシュでフェイトに抱き付くはやて。

はやて「実はく!!」

ことの次第をフェイトに話す。

フェイト「なるほど…全員出張なのを忘れてて急遽リュイくんを預かれる人を捜してるわけね?」

はやて「そうです…」

フェイト「なら私に任せてくれない?」

はやて「え?」

シグナム『そうか、確かにリュイはお前にだけは懐きかけていたな』
初めてリュイがシグナムやシヤマル以外と出会いかつ、慣れかけているフェイトを見て言う。

最初こそリュイはシヤマルのせいだ、警戒していたが、白衣を着ていないことやシグナムと親しく話しているのを見て、幾分かフェイトへの警戒心が無くなりつつあったのだ。

フェイト「ええ。だから下手に知らない人に預けるより少しでもリュイくん自身が知っている人の方がいいかなって」

はやて「あ…ありがとう…!恩に着るで、フェイトちゃん!!」

号泣してフェイトの制服を思いつきり濡らす。

フェイト「止めて〜！」

制服を濡らされてしまったフェイトははやてを離そうとしていたのだった。

翌日、はやてたちを見送りにリュイはフェイトと一緒に次元港に来ていた。

昨夜、はやてたちから事情を聞いたリュイは驚いてはいたがはやてたちが帰ってくるのを、フェイトの家で待つてると約束してくれたのだ。

はやて「ほなりユイ、そろそろ行ってくるで」

シグナム「よくテストロスツサ…ふえーとやお世話になる人たちに迷惑をかけるなよ?」

リュイ「うん…」

フェイト「ちよつとシグナム?なんで言い直すの?」

自分の名前をわざわざ言い直したシグナムに聞く。

シグナム「……………では行きましようか、主はやて」

ヴィータ（逃げやがったな…）

ライン（逃げたです…）

アギト（逃げたな…）

言葉が出ずにシグナムは逃げるようにはやてに言い、それを八神家ちびつ子3人組が悟るのだった。

各々、向かう出張先は違うので出発ロビーも違ったがはやてたち（特にシグナム）が乗っている次元航行船が見えなくなるまでリュイは航行船が見える窓から離れなかった。

次元港から車で約一時間の距離にフェイトが住んでいる家に着いた。

フェイト「ただいま」

リュイ「おじやま…します…」

車を車庫に入れて家のドアを開けるフェイト、リュイはその後ろに着いてきていた。

? 「お帰り、フェイトちゃん」

? 「お帰りなさい、フェイトママ!」

リビングから左側に髪を纏めた女性と金髪の少女が出迎えに出てきた。

フェイト「ただいま、なのは、ヴィヴィオ」

フェイトは同居している時空管理局教導官『高町 なのは』とその娘『高町 ヴィヴィオ』に言う。

ヴィヴィオ「ねえ、フェイトママ」

フェイト「どうしたの？」

ヴィヴィオ「リュイクんって子はどこにいるの？」

フェイト「え？あれ？」

ヴィヴィオに言われて横を見るとリュイがいなくなっていた。

すると後ろから引っ張れる感覚がして見ると少し怯えた表情をしたりリュイがフェイトの後ろに隠れて服を強く握っていた。

ヴィヴィオ「その子？」

フェイトの後ろに隠れているリュイを見てヴィヴィオは聞く。

フェイト「うん、リュイクんだよ」

なのは「でも少し怯えてない？」

フェイト「うーん：多分、ヴィヴィオの髪が原因かな」

ヴィヴィオ「ええ!？」

リュイが怯えている原因が自身だと言われてヴィヴィオはショックを受ける。

なのは「どういうこと、フェイトちゃん？」

フェイト「実は私もシグナムから聞いたんだけど、リュイクンは

……」

シグナムから聞いたたりリュイが怯えてしまうことになった原因をフェイトは2人に話した。

なのは「なるほど、笑顔で注射器を持って近付いて来たシャマル先生がトラウマになって髪が金色の人を見ると警戒しちゃう訳か」

フェイト「そうなの」

怯える原因になった理由を聞いて苦笑いする。

するとヴィヴィオがリュイに近付いて来た。

ヴィヴィオ「ごめんね、知らなくて。でも私はシャマル先生みたい

に怖くないよ」

笑顔でリュイに言うヴィヴィオ。

ヴィヴィオをリュイは観察するようにつめた。

フェイト「大丈夫よ。この子はヴィヴィオって言って、とっても優しい子だよ」

観察するようにヴィヴィオを見つめるリュイにフェイトはそう言う。

フェイトの言葉を聞いてリュイはヴィヴィオの前に出た。

リュイ「びびお…」

ヴィヴィオ「うん！高町　ヴィヴィオだよ！よろしくね、リュイくん!!」

名前を呼ばれてヴィヴィオは嬉しそうに言うのだった。

ヴィヴィオの部屋にてリュイはヴィヴィオと対戦ゲームをしていた。
た。

下の台所にてフェイトとなのはは昼食の準備をしており、その間の暇潰しだ。

ヴィヴィオ「ま…負けたく」

画面に出た『You Lose』を見てヴィヴィオは気落ちした。
リュイ「かった…」

対してリュイは『You Win』の文字が画面に出ていた。

ヴィヴィオ「まさかこうも早く超えられちゃうなんて…」

最初対戦ゲームをする時、やり方が分からなかったリュイにヴィヴィオは丁寧に教えてやると最初の一戦以外ヴィヴィオは負け越していた。

ヴィヴィオ「リュイクんってゲーム強いんだね」

リュイ「びびおも…つよい…」

ヴィヴィオの顔を真っ直ぐ見ながらリュイはそう言う。
すると…。

なのは「二人ともく、ご飯出来たよ〜！」

ヴィヴィオ「はい。行こうリュイクん」

リュイ「うん…」

なのはに呼ばれて二人は部屋を出た。

二人がリビングに行くときテーブルに沢山の料理が並べられていた。
ヴィヴィオ「うわあ〜、こんなに沢山作ったの!?!」

なのは「うん、リュイクんが沢山食べるって聞いたからフェイトちゃんと張り切って作ったんだ」

ヴィヴィオ「それにしても、多すぎない?」

そう言うヴィヴィオの視線の先にはタワーのように山盛りになっている唐揚げ、エビフライ、サラダなどがあった。

フエイト「ちよつと多かつたかな？」

なのは「ま、まあヴィヴィオも成長期とかだし大丈夫だよ！」
ヴィヴィオ「ええ〜…」

なのはの台詞にヴィヴィオは呆れていた。

リュイ「おいし〜そう〜…」

山盛りの料理を見てリュイは食べたくてうずうずしていた。

なのは「それじゃあ、食べようか？」

なのはに言われて席に着くヴィヴィオ。

リュイはヴィヴィオの隣に座った。

なのは「それじゃあ〜…」

「「いただきます!!」」

リュイ「いただきます〜ます〜…」

手を合わせていただきますして食事始めるなのはたちだった。

食事しているとリュイは途中途中でなのはの顔を見ていた。

なのは「ん？私の顔に何か付いてる？」

視線に気付いたなのはが聞くとリュイは横に振った。

ヴィヴィオ「どうしたの？」

リュイ「ん〜…きいてた…のと…ちがう…」

フエイト「それってなのはが？」

リュイ「うん〜…」

なのは「何を聞いたの？」

リュイ「えつと〜び〜ねえねが〜…」

それは昨晚のこと。

ヴィータ「いいか？リュイ、絶対になのはを怒こらせるなよ？」

リュイ「なん…で…？」

ヴィータ「アイツは管理局で白い悪魔って言われてるからだ。もし

も怒らせたら…お話しと言う料理にされちまうぞ。いいな？」

リュイ「う、うん〜…」

ヴィータに言われてリュイの中で、なのはへの恐怖が出来そうになつた。

リュイ「…つていつてた…」

ヴィヴィオ・フェイト「……………」

ヴィータから聞いたなのはのことをリュイが話し終わると、ヴィオとフェイトは顔をひきつらせた。

なのは「あはははははは…そうかあ、ヴィータちゃんがそんな事を…じゃあ、出張から帰ったらお話ししないとね」

片やなのは、黒い笑みを浮かべながら言う。

ヴィヴィオ・フェイト（ま、マジだ…ヴィータ（副隊長）…ご愁傷
さまです…）

心の中で、ヴィータに合唱するヴィヴィオとフェイトだった。

リュイ「ん〜♪」

対するリュイは唐揚げを頬張って幸せそうに笑っていた。

八神家出張の間高町家に預けられているリュイ。

今日はヴィヴィオと一緒に公園に来ていた。

理由は昨日の晩、ヴィヴィオにミウラとの手合わせ（リュイ本人は手合わせの意味をまだちゃんと理解していないが、猫のじゃれ合い的なものと思っている）の話をしたら格闘技をしているヴィヴィオである、食いつかないわけがなく出張先にいるはやてたちに連絡して許可を貰いヴィヴィオの格闘技の師匠である『ノーヴェ・ナカジマ』の引率の元、チームナカジマの面々と模擬戦をすることになったのだ。

因みにヴィータにも許可を貰っているとブラックオーラ全開なのはが現れて何やら話しており、ヴィータは泣きながら頭を下げていたが途中でブツンと通信を切った。

通信を切ったなのは顔は不適に、それは不適に笑っていた…ブラックではなくダークネスなオーラを出しながら…

それを見たヴィヴィオとフェイトは合掌していたがリュイは意味が理解できず、首をかしげていた。

ヴィヴィオ「あ、おーい！ノーヴェ〜！」

先に公園で待っていた女性に手を振るヴィヴィオ。

手を振られた相手『ノーヴェ・ナカジマ』も手を振り返す。

ノーヴェ「おせーぞ、ヴィヴィオ。そいつか？昨日話してたのは？」

ヴィヴィオの後ろにひよっこりと顔を覗かせるリュイを見るノーヴェ。

ヴィヴィオ「うん。そうだよ」

リュイ「やがみ…りゅい…です…」

ヴィヴィオの前に出て名乗るリュイ。

ノーヴェ「リュイか…私はノーヴェ・ナカジマ。ヴィヴィオの師匠…てか格闘技を教える。でこっちにいるのが…」

コロナ「初めまして、コロナ・ティミルです」

リオ「リオ・ウエズリーだよ」

水玉模様のキャンディを模した髪留めでツインテールにしている

少女『コロナ・ティミル』と八重歯のある元気っ子の『リオ・ウエズリー』が名乗る。

ノーヴェ「それで最後が…」

アインハルト「アインハルト・ストラトスです。皆さんとは僭越ながら一緒に練習をさせてもらってます」

碧銀の髪でツインテールで大きな赤いリボンと左が青、右が紺のオッドアイが特徴の少女『アインハルト・ストラトス』が名乗った。

ノーヴェ「ま、自己紹介もこれくらいにしてリユイは準備運動してろよ。で最初にリユイとやるのは…」

アインハルト「あの…差し支えなければ私からやらせてもらってもいいでしょうか？」

ノーヴェ「お、珍しいな。お前が最初に手を上げるなんてな」

自分から模擬戦すると言い出したアインハルトにノーヴェは言う。

アインハルト「いえ。何となくあの子とはやってみたいと心が言ってるんです」

ノーヴェ「そうか。お前らは異存はないか？」

ヴィヴィオ「アインハルトさんなら最初でいいよ！」

リオ「ヴィヴィオに同じく！」

コロナ「私もです」

アインハルトが先にリユイと模擬戦することにヴィヴィオたちは反対せずに言う。

ノーヴェ「よし。んじやアインハルトとリユイは準備運動しろ。あとはその間に次やる順番を決めろよ？」

「「はい！」」

ノーヴェに言われてヴィヴィオたちは元気良く返事をしたのだった。

ノーヴェ「よし、2人とも準備はいいな？」

アインハルト「はい」

リュイ「うん…」

準備運動が終わった2人にノーヴェが聞くと返事をした。

ノーヴェ「それじゃあ、始めっ!!」

開始の合図をノーヴェが出すと、アインハルトとリュイは動いた。

アインハルト（まずは様子見…）

最初は相手の出方を伺おうとした矢先、リュイは跳躍して踵落としを繰り出した。

アインハルト「ふっ!!」

両腕をクロスさせて踵落としを防ぐアインハルト。

リュイ「はっ!!」

防がれながらもリュイは反動を利用して空中回転して踵落としを連続で繰り出した。

アインハルト「くっ!!」

流石のアインハルトも2連続の踵落としは予期できず後ろに飛んで回避した。

リュイ「とつとつ…」

回避されたリュイは踵が地面にぶつかる前に体勢を変えて着地した。

アインハルト（あの技…どこかで…）

リュイの繰り出した2連続の踵落としを見てアインハルトの中で何かが引っ掛かった。

アインハルト「今度はこちらから行きます」

しかしアインハルトは直ぐに切り替えて離れた分から一気にリュイに接近する。

接近して来たアインハルトを見てリュイはバク転して下がる。

アインハルト「逃しません!!」

バク転して下がるリュイを追撃しようと迫るアインハルト。

リュイ「はあ!!」

アインハルト「!?」

逆立ちになった状態でリュイは回転し、ミウラの時に繰り出して見せた回し蹴りだ。

アインハルト「くっ?!」

回し蹴りに阻まれてアインハルトは下がる。

リュイ「はっ!!」

アインハルトが下がったのを見てリュイは地についた両手をバネのように動かして両足キックを繰り出した。

アインハルト「きゃっ!!」

両足キックを喰らってアインハルトは倒れる。

アインハルト（やはりこの戦い方…どこかで…）

リュイの繰り出す攻撃に、アインハルトに刻まれた古代ベルカの記憶に引っ掛かる感じがしていた。

リュイ「はっ!!」

立ち上がったリュイは止めの左ストレートを繰り出すが…。

ノーヴェ「そこまで!!」

ノーヴェのストップが掛かり、リュイはパンチをアインハルトの顔の寸で止めた。

ノーヴェ「この試合、アインハルトの負けだな」

アインハルト「そのようです」

年下相手に負けたことをノーヴェに言われるが、アインハルトは悔しがることなく認めた。

リュイ「はーる…」

呼ばれて見るとリュイが手を差し伸べていた。

（はーるって…私／アインハルト／さんのこと!?）

『はーる』と言われて周りど驚きつつも差し出された手を取って、アインハルトは立ち上がった。

アインハルト「ありがとうございました。リュイくん」

立ち上がってアインハルトは模擬戦でのお礼を言う。

リュイ「ありがとう…」

リュイもまたお礼を言う。

アインハルト（私の思い過ごしですね。彼とは今日初めて会った：初めて？いえ、どこかで……気のせいですね）

リュイとの模擬戦を通して、アインハルトは自身の中に刻まれた古代ベルカの記憶に引つ掛かっていたが直ぐに思い過ごしだろうと判断する。

リオ「2人にとも凄かったよ!!」

コロナ「リュイくんアインハルトさんに勝つなんて凄いや!!」

模擬戦を終えた2人にヴィヴィオたち3人が駆け寄って言う。

ヴィヴィオ「よおし、次は私とやろう!」

リオ「え、次は私だよ!」

コロナ「違うよ、私とだよ!」

ノーヴェ「お前ら：決めつけて言っただろ…」

口論を始めるヴィヴィオたちを見て、ノーヴェは呆れてしまった。

女性「うう…」

すると、口論するヴィヴィオたちの近くにある茂みから1人の女性が突然出て倒れた。

ノーヴェ「お、おい!大丈夫か!」

倒れた女性にノーヴェは駆け寄る。

その後ろからヴィヴィオたちも来た。

ノーヴェ「酷いケガだな。今日の連中はここまでだ、アタシはこの人を病院までおくつ…」

リュイ「によーえ!!」

突然リュイがノーヴェを突き飛ばした。

次の瞬間、ノーヴェがいたところの地面が粉々に砕けた。

さつきまでいた場所を見ると、そこには大きなハサミがあり、地面を砕いていた。

?「チィ：仕留メそこナツたか…」

ノーヴェが駆け寄った女性はそう言って立ち上がった。

地面を砕いたハサミは女性の右腕だった。

ノーヴェ「ま、まさか：アマゾンか!」

ノーヴェエがそう言うのと女性の顔の一部が火傷をしたように爛れ、さらに体からは煙まで上がっていた。

女性の体から出る煙が一気に吹き上がり、周囲に強烈な衝撃波と高熱が生じ、木葉や茂みの葉を燃やしながら姿を包み込んだ。

煙が晴れると右腕だけでなく左腕もハサミになり、尾骨辺りからは先に鋭い針を持った尻尾が生えているアマゾンが現れた。

ノーヴェエ「マジかよ……くそつ、アインハルト！ ヴィヴィオたちを連れて早く逃げろ!!」

？「逃ガスか!!」

怪人はそう言うのと尻尾を地面に突き刺すと公園を囲むようにドーム型の壁が現れた。

？「全員ココデ、私が食ウンダヨ!!」

ハサミを構えながらアマゾンは皆を見て言うのだった。

女性が変貌したアマゾンによって公園に閉じ込められたヴィヴィオたちは公園中を走っていた。

サソリアマゾン「ほらほら、早く走らナイと食べチャウわよー!!」
その後ろから『サソリアマゾン』が草食動物を追いかける肉食動物のように追いたてていた。

ノーヴェ「くそっ!」

追いたてるように迫るサソリアマゾンにノーヴェは舌打ちした。

1人だけなら良いがヴィヴィオたち練習生、そしてヴィヴィオたちより幼いリュイを守りながらでは戦えないと判断して一緒に逃げた。

リュイ「……」

一方でリュイはガンマに変身してサソリアマゾンを仕留めたいと思っではいるがはやてたちとの約束を思い出していた。

はやて「ええか?リュイ、絶対にヴィヴィオたちの前で変身したらアカンで」

リュイ「なんで…?」

変身したらダメと言われてリュイは首をかしげて、聞いた。

はやて「リュイも分かっと思うけど、リュイ自身もアマゾンや。変身したらヴィヴィオたちに嫌われてまうかもしれんからや。いいな?ウチとの約束や」

リュイ「うん…」

はやてに言われて絶対に変身しないと約束する。

リュイ「くっ…」

はやてとの約束を守ろうと、腰に手をやったが直ぐに離してヴィヴィオたちと一緒に走るのに集中した。

コロナ「きやつ!」

コロナが木の根に足を引っ搔けて倒れてしまった。

『コロナ／さん／ロコ！』

立ち上がろうとしたコロナをサソリアマゾンが追い付いて踏みつけて押さえた。

サソリアマゾン「オやおや、可哀想ニお嬢ちゃんが最初ノ犠牲者のヨウダナ」

顎を左右に開いてコロナを捕食しようとした。

ノーヴェ「や、やめろー!!」

ノーヴェが叫んだ時、リュイがサソリアマゾンにタックルをかましてコロナから引き離れた。

ヴィヴィオ「リュイくん！」

サソリアマゾン「コノガキが…食事ノ邪魔ヲシヤガツて…まずハお前から食つテヤル!!」

食事の邪魔をされたサソリアマゾンは怒りだしてリュイに襲い掛かった。

しかし、リュイはすでにアマゾンズドライバーを出して左側のグリップを持ち、捻った。

GA・M・MA!

グリップを捻ると両目のような赤い部分に血走りのような模様が入り、英語風に『ガンマ』と聞こえた。

?「あまぞん……」

ANCI・AN・ANCIENT!!

ボソリとリュイはそう言ったのと同時に再びグリップを捻り変身した。

サソリアマゾン「グオオオオオオオオオオオオオオ!!」

変身した衝撃でサソリアマゾンは吹き飛ばされるが木にハサミを引っ掻けて倒れないようにした。

ヴィヴィオ「り、リュイくんが…」

リオ「アマゾンになっちゃった…」

リュイがガンマに変身して驚くヴィヴィオたち。

ガンマ（はやばば…ごめんなさい…やくそく…やぶった…でも…）
変身してしまったガンマはやてとの約束を破ってしまったことを

後悔しながら、チラリとヴィヴィオたちを一瞬だけ見た。

今自分が変身しなかったらコロナはサソリアマゾンに食い殺されていた。

そう考えて、ガンマは直ぐにサソリアマゾンに構え、臨戦するのだった。

サソリアマゾン「貴様、アマゾンだつタノカ!？」

リュイがガンマに変身したのを見てサソリアマゾンは驚く。

サソリアマゾン「何故ダ!何故、人間ノ味方ヲする!?!貴様はアマゾントシテの本分ヲ忘れタノか!!」

ガンマ「そんなの…知らない…」

サソリアマゾン「!?!」

ガンマ「ハアアアアアアアアアア!!」

サソリアマゾン「グおっ!!」

一瞬でガンマは間合いを詰めて蹴りをくりだしてサソリアマゾンを吹き飛ばした。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアア!!」

サソリアマゾンを掴むと右腕のアームカッターで胸部を斬りつけた。

サソリアマゾン「グガアアアアアアアアアアアアア!!」

胸部を斬られて傷口から黒い血が吹き出た。

ガンマ「ハアアアアアアアアアア!!」

左腕のアームカッターで斬りつけようとする。

サソリアマゾン「2度ハ喰ラウかあ!!」

そう言つてサソリアマゾンは尻尾を伸ばして針を出すとガンマの背中に刺した。

ガンマ「ガアアアアッ!?!」

背中に針を刺されて怯むガンマ。

サソリアマゾン「ヌアアアア!!」

その隙を突いてサソリアマゾンはガンマを蹴り引き離れた。

ガンマ「ガ…グ…」

蹴られたガンマは立ち上がろうとするが立てず膝を着いた。

サソリアマゾン「ほう、まだ毒ガ効かナイか。本来は即効性ナノだがな」

そう言いながらサソリアマゾンは毒針のある尻尾を向けて近付く。

サソリアマゾン「苦しいか？ダガ直ぐに楽ニシテやる」

ガンマに止めを刺そうと尻尾を構えたその時だった。

ガンマ「グ：ウアアアアアアアアアアアアアアア!!」

バイオレント ブレイク!!

気迫で立ち上がって毒針の尻尾をかわしてアマゾンズサイズを出してサソリアマゾンの首に突き立てた。

突き立てられた首から黒い血が噴水のように吹き出た。

サソリアマゾン「ガアアアアアアアアアアアアアア!?ば、バカ…な

…この…わた…シガ…マケ…」

そこまで言ってサソリアマゾンの体はドロドロの黒い液体になった。

同時に公園を囲っていたのが消えた。

蒸発したサソリアマゾンの液体の中から出てきアマゾンズレジスターをガンマはいつものように確認すらせずに、踏みつけて破壊した。

変身を解いてヴィヴィオたちを見ると、ヴィヴィオたちはすっかり怯えてしまっていた。

リュイ「びび…」

ヴィヴィオ「来ないで！」

近付こうとしたリュイにヴィヴィオはそう言った。

リュイ「うう…」

ヴィヴィオに言われてリュイは背中を見せてどこかに走っていった。

リュイがいなくなったあと直ぐに冷たい雨が降り始めた。

まるで悲しみに流れる涙のように雨は降るのだった。

はやて『リュイがヴィヴィオたちの前で変身した!』
サソリアマゾン襲撃から程なくして、なのはたちから連絡を受けた
はやては驚いて声を上げた。

なのは「うん…」

フェイト「ノーヴェの話だとコロナちゃんを助けるために変身した
みたい…」

はやて『そうか…でヴィヴィオはどないしてるん?』

なのは「ショックで部屋に引きこもってるよ」

なのはたちには予めリュイのことを言つといたためあまり驚き
はない。

しかし、ヴィヴィオにとっては相当なショックだったに違いはな
かった。

はやて『なんや悪いことしてしもうたな…じゃあ今からにでもリュ
イを迎えに…』

フェイト「それが、リュイクンアマゾンを倒したあとどこかに行つ
たみたいで…まだ帰ってきてないの」

はやて『な、なんやてええええー!?!』

リュイがいなくなつたつ聞いてはやての声が響き渡つたのだった。

リュイ「……」

一方でリュイはミッドの町を一人で歩いていた。

冷たい雨が体を濡らしている。

ヴィヴィオ『来ないで!』

リュイの中でヴィヴィオの言葉が突き刺さっていたがそれよりも
堪えたのはヴィヴィオの敬遠をした目に堪えていた。

今までそんな目をされたことがなかったために悲しかったのだ。

そんなことを考えてるとリュイは誰かにぶつかった。

不良A「つてえな。どこみてんだよガキ」

リュイがぶつかった相手は数人の不良だった。

リュイ「ごめん…なさい…」

不良A「ああ、聞こえねえよ！」

ぶつかられた不良がリュイの胸ぐらを掴んで持ち上げた。

リュイ「う…うう…」

胸ぐらを掴まれて息苦しくなるリュイ。

不良A「ちゃんと謝れよ！」

息苦しいと分かっているがそう言う。

あとの不良たちは笑いながら見ていた。

周りの人は余計なことに巻き込まれたくないのか助けようとしなかった…一人を除いて…。

？「お前たち子供相手に何している？」

不良A「ああん？」

肩を掴まれて振り向くと一人の男性がいた。

不良A「なんだよ、おっさん。邪魔すんなよ！」

リュイを離して男性に掴み掛かるが男性は掴んできた不良の腕を掴んで捻った。

不良A「いででで！」

？「目上相手に対しての礼儀がなっちゃいないな」

不良B「この！」

見ていた不良の一人が男性に殴りかかってきた。

？「ふん」

男性は殴りかかってきた不良を蹴り飛ばした。

？「止めておけ。お前らと俺とじゃ実力の差がありすぎる」

不良を蹴り飛ばした男性は警告するように言う。

不良C「なんだとお！」

不良D「一斉にやっちまえ！」

一斉に男性に襲いかかる。

？「やれやれ…」

呆れるように言うとう男性は捻っていた不良を離して蹴り飛ばすと襲いかかってきていた不良全員を殴り、蹴り飛ばした。

不良A「な、なななな…」

男性の強さに最初の不良は驚いていた。

？「だから言っただろ：実力の差がありすぎるってな」
笑ってはいたが直ぐに不良を睨む男性。

『ひ、ひいいい〜!!』

男性に睨まれて不良たちは蜘蛛の子散らす勢いで、一斉に逃げ始めた。

？「大丈夫か、坊主」

不良たちがいなくなつて男性はリュイを見た。

リュイ「ありが：とう：」

立ち上がつてお礼を言うと、その場を去ろうとした。

？「全く：ん？」

自身も去ろうとしたが倒れる音がして見るとリュイが倒れていた。

背中が真っ赤になり、雨の水により血が流れていた。

？「おい、坊主!」

慌てて男性がリュイに駆け寄つて抱き上げた。

リュイ「はあ：はあ：はあ：」

抱き上げられたリュイは呼吸が荒れ、顔色も悪かった。

？「ワタル、この子毒に犯されてるよ」

『四十万 ワタル』に話しかける子供の声がして懐から手鏡のような形で中央に一つ目の模様がしたのを取り出した。

ワタル「ウルバ：この坊主は助かるか？」

『ウルバ』と呼ばれる手鏡にワタルは聞く。

ウルバ『さあね。でも今ならまだ間に合うんじゃない？』

ワタル「だな。マスターの所に行くぞ」

ウルバ『分かったよ』

リュイを抱えて立ち上がるとワタルはどこかへ走り出したのだつた。

シグナム「テストアロツサ！」

ヴィータ「なのは！」

連絡を聞いてはやて、シヤマル、リイン、ザファイラより先にシグナムとヴィータはミッドチルダへ戻りなのはとフェイトとターミナルで合流していた。

ヴィータ「はやてから聞いたけどリュイがいなくなっただって本当か？」

なのは「うん……」

フェイト「ごめん、私たちがちゃんと見てなかつたから……」

連絡を聞いたヴィータが確認するとなのはとフェイトは頷いて言う。

シグナム「リュイ……」

リュイがいなくなっただと聞いて、シグナムは心配そうな表情をす

る。

フェイト「一応、ノーヴェたちも捜してくれてはいるけど……」

ヴィータ「ともかく早くリュイを捜しに行こう。シグナム」

シグナム「あ、ああ。分かっている」
一刻も早く見つけねばならないと、シグナムたちもリュイを捜しに向かうのだった。

ワタル「おい、マスター。いるか？」

リュイを抱えたワタルはあるバーに入店していた。

バクラ「なんだ？まだ店は始まってないぞ」

店の奥から左腕がない男性、この店のオーナー『バクラ』が現れた。

ワタル「悪いがコイツを診てやってくれ」

リュイをテーブルの上に寝かせてバクラに言う。

バクラ「なんだこのガキ……お前の子か？」

リュイを見て、冗談交じりにバクラはワタルに聞いてくる。

ウルバ『はあ!?!なに言ってるんだよ、そんなわけ……』

ワタル「俺の…弟子だ」

バクラ「なるほどな」

ワタルの言葉に納得したようにバクラは言うとりユイの容態を見る。

ウルバ『ちよつと、ワタル!?何を言ってるの!?!』

ワタルの発言に驚きウルバは聞いてきた。

ワタル「仕方ないだろ。あーでも言わないと治療してもらえそうにないだろ」

ウルバにワタルはそう言う。

バクラ「まあ、治療はしてやるが助かるかは分からんぞ」

ワタル「分かってる。頼んだぜ、マスター」

バクラ「おい、どこ行く気だ?」

ワタル「ホラー退治だよ。いつも通りのな」

バクラ「そうかい。なら治療費はツケにしとくぞ」

ワタル「はいはい」

そう言つてワタルは外に出ていった。

ウルバ『ワタル。この辺りのホラー退治は絶狼の管轄のハズだよ?』

バーを出たワタルにウルバはそう言う。

ワタル「ん?そうだったか?」

ウルバ『そうだよ。もしかしてあの子の親を捜すつもり?ホラーに襲われたんならもう…』

ワタル「それら本当に弟子にしないとな」

ウルバ『もう、真面目に考えてよ』

とぼけるように言うワタルにウルバは少し怒った口調で言う。

ワタル「だが意外と生きてるかもな」

ウルバ『なんで分かるのさ?そんな奇跡があるって』

ワタル「俺の勘だよ」

ウルバ『頼りにならない勘だね』

ワタル「うるさい。さっさと捜しにいくぞ」

そう言ってワタルは歩き始めるのだった。

シグナム「リュイ…」

リュイがいなくなつて、すでに3日が過ぎていた。

この3日間、休まずに駆けずり回り続けたのか、流石のシグナムにも疲労が出ていた。

シグナム「どこに行つてしまつたんだ…リュイ…」

疲労している体に鞭打つてリュイを捜そうとするシグナムだったが、足を滑らせて倒れてしまった。

シグナム「くっ…リュイ…」

立ち上がつてシグナムは捜そうとするがフラついてしまう。

シグナム「くっ…」

フラついたシグナムはまた倒れてしまった。

そんなシグナムを建物の上から見る人物がいた。

？「旨そうだな…」

倒れているシグナムの体を見て舌鼓をうつと人物は建物から飛び降りて着地した。

シグナム「何者だ？」

自身の前に着地した人物から感じられるただならぬ気配にシグナムは警戒する。

？「ひ…ひひひ…ひひひひ…」

不気味に笑いながら人物の姿が変わつていく。

体が膨らみ脱皮でもするかののように姿を現したのはガーゴイルのような姿で背中の左側は悪魔、右側は天使の羽が付いた怪物だ。

シグナム「アマゾン？…いや、違う…アレはまさか!？」

現れた怪物をアマゾンと思つたシグナムだが直ぐに違つと判断した。

？

「キ

シャ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

雄叫びを上げた怪物はシグナムに接近する。

シグナム「レヴァ…くっ!」

レヴァンティンを出そうとしたがリュイを捜すためにろくに休んでいなかったので疲労で出せなかった上に膝を着いてしまった。

？「キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
動けないシグナムに怪物は接近してくる。

シグナム「主はやて…リュイ…」

ここまできとシグナムが思ったその時だった、後ろから空き缶が飛んで行き怪物の顔面を直撃した。

？「ギギャツ!?!」

空き缶に当たり、怪物は怯んで足を止めた。

シグナム「いったい誰が…」

空き缶が飛んで来た方を振り向くとそこにはワタルが歩いてきていた。

ワタル「大丈夫か、お嬢さん」

シグナム「お前は…」

ワタル「ただの通りすがりだ」

シグナムに聞かれてワタルはそう答える。

ウルバ『ワタル、コイツただの素体ホラーだよ。成長する前に討滅したほうがいいよ』

ワタル「みたいだな」

ウルバに言われたワタルは跳躍すると陰我を喰らう怪物『ホラー』の前に着地すると持っていた刀を鞘から引き抜いたのと同時に首を斬った。

ワタル「この程度なら、鎧を召喚するまでもないな」

首を斬り落とし、黒い霧のようになって消滅したホラーを見てワタルは言う。

ワタル「ちよつと聞きたいんだが、しぐまま”って知ってるか？とあるガキが呟いていたことなんだが」

ホラーを倒したワタルは刀を鞘に納めてシグナムに聞く。

シグナム「まさか…リュイを知っているのか!?!」

ワタルからその言葉を聞いたシグナムは聞き返した。

ワタル「どうやら当たりみたいだな」

聞き返してきたシグナムの言葉を聞いてワタルは笑った。

ワタル「ついて来い、そのリュイってガキは俺の知り合いの所にいる」

ワタルはそう言って歩きだした。

シグナムは疲れていたハズだが、リュイの居場所が分かるかもしれないという気持ちに押されて立ち上がりワタルのあとをついていったのだった。

ワタルに連れられてシグナムはバクラがオーナーをしているクラブバー『LUPO』に来ていた。

ワタル「マスター、いるか？」

店内に入ったワタルはバクラを呼ぶ。

バクラ「何だ？まだ店は開けてないぞ」

店の奥から現れたバクラはワタルの後ろにいるシグナムを見て言う。

ワタル「あの子供の母親だ」

バクラ「……ついてきな」

ワタルからシグナムがリュイの母親だと聞くとバクラは2人を二階に案内した。

シグナム「リュイ!!」

二階に案内されて部屋に入るなりベッドの上に寝かされているリュイを見てシグナムは駆け寄る。

バクラ「体を蝕んでいた毒は完全に取り除いた。だが、まだ意識は戻ってない」

今のリュイの状態をバクラは言う。

シグナム「リュイを助けてくれて感謝する」

ワタル「そう言うな。俺は守りし者として当然のことをしただけだ」

礼を言われ、ワタルは腕を組んでそう言う。

シグナム「そう言えば聞きたかったのだが……お前はまさか……魔戒騎士なのか？」

ワタル「何故それを……」

”魔戒騎士”かとシグナムに聞かれてワタルは少し警戒する。

シグナム「勘違いしないでくれ。私は一度その話を聞いたただけだ」
ワタル「どうい……」

ウルバ『まさかお姉さん……闇の書の守護プログラム?』

シグナムの言葉にワタルは頭の中が混乱したが、ウルバが聞いてきた。

シグナム「そうだ」

ワタル「なに？」

シグナム「今は夜天の魔導書だが…」

ワタル「守護プログラムが何で子供の世話なんてしているんだ？」
闇の書のこととは魔戒騎士や魔戒法師の間でも最大級の危険物対象なのだからワタルもある程度は知っていたがリュイとの関係を聞いてみる。

シグナム「それは…」

ワタルに聞かれてシグナムは話した、リュイと出会ったことや世話をすることになったことを…。

ワタル「なるほどな。悪い組織から救出して養子にしたということか」

シグナム「そうなる」

ワタルの確認にシグナムは言う。

シグナム「ではリュイを連れ帰っていいか？主はやてたちが心配しているだろうだから」

バクラ「そうだな。そうしてくれるとこっちは助かる」

シグナム「では…」

バクラから許可を貰い、リュイを抱えるシグナム。

シグナム「いつかこの礼は必ず」

ワタル「気にするな」

シグナムに言われてワタルは言う。

シグナム「世話になった」

頭を下げてシグナムはLUPOを出て行った。

バクラ「まさかあの闇の書が夜天の魔導書になっていたとわな」
帰っていくシグナムを二階から見ると言うバクラ。

ワタル「その主と守護プログラム…いや、ヴォルケンリッター四騎士は時空管理局で活躍中らしいからな」

バクラ「世の中分かんねえもんだな」

ワタル「だな」

少し可笑しくなつて笑う二人だった。

リュイ「ん…」

自身の体を感じる温もりで、リュイは目を覚ました。

シグナム「気が付いたか。リュイ」

リュイ「しぐ…まま…!!」

シグナムを見るなりリュイは暴れて逃げようとする。

シグナム「離さないぞ、リュイ」

リュイ「……」

離してくれそうにないシグナムを見てリュイは暴れるのをやめた。

シグナム「どうして勝手にいなくなったりした？」

リュイ「……」

シグナムに聞かれてリュイは何も言わなかった。

シグナム「ヴィヴィオのことか？」

リュイ「うん…」

シグナムに言われてリュイは頷いた。

ヴィヴィオのように怖がつてしまい敬遠をした目は初めてだったからだ。

シグナム「ヴィヴィオたちに言っていないなかった私たちも悪い。だがリュイ、これだけは分かっている欲しい」

リュイ「？」

シグナム「例えお前がどんな姿であろうとヴィヴィオたちはお前を受け入れてくれるハズだ」

リュイ「そう…かな…」

少し不安がつて言うリュイ。

シグナム「大丈夫だ。私も一緒に行つてやるから」

リュイ「うん…びびおたち…しんじる…」

シグナム「ああ。そうだ」

リュイの言葉を聞いてシグナムは優しく微笑んで言うのだった。

その日、リュイの搜索に協力してくれたノーヴェエたちにお礼を言い
にナカジマ家に来ていた。

シグナム「……………で、なぜお前がリュイを抱いている!?!」

リュイを抱いて頭を撫でる『ウエンデイ・ナカジマ』を見てシグナ
ムは言う。

リュイと共に来たはいいがチャイムを鳴らして速攻で扉が開いた
かと思いきやリュイを抱きしめたのだ。

ウエンデイ「いやー、写真を見てからずっと抱いてみたいと思っ
たツスから。でもでも嫌がってはないうツスよ!」

シグナム「胸に顔が埋もれて息が出来ていないだろ!!」

ピクリともしないリュイを見ながらシグナムは言う。

ウエンデイ「ああ!!し、しっかりするツスー!!」

慌ててリュイをウエンデイは自身の胸から離れた。

リュイ「ぷはっ…はあ…はあ…はあ…」

かなり苦しかったのかりュイは息を荒らして、ウエンデイから逃げ
るようにシグナムの方へ向かって行く。

ウエンデイ「ごめんす…」

リュイ「うー…」

謝るウエンデイだったが、リュイは怖がって隠れてしまった。

チンク「なにをしてるんだ。お前は」

ウエンデイの後ろから眼帯をした少女『チンク・ナカジマ』が言う。

デイエチ「ごめんね、妹がいきなり」

さらに後ろから『デイエチ・ナカジマ』が来て謝る。

ギンガ「シグナムさん、いらっしやい。その子がリュイくん?」

そしてナカジマ家の長女『ギンガ・ナカジマ』が来てシグナムに言
うとリュイを見て言う。

シグナム「ああ。ノーヴェエは?」

ギンガ「ノーヴェエなら今、ヴィヴィオたちを呼びに言ってるどころ
よ。待ってる間家に上がってください」

シグナム「そうさせてもらおう」

ギンガに言われてシグナムはリュイを連れて、ナカジマ家に上がるのだった。

ギンガ「改めて私はギンガ・ナカジマ。この家の長女よ」

リュイ「ギンガ？」

ギンガ「そう、ギンガよ」

チンク「チンクだ。ナカジマ家の次女だ」

リュイ「ちんちん？」

『ぶーっ!!』

ギンガは普通に呼んだのに、何故かチンクを“ちんちん”と呼んで全員が吹き出した。

チンク「違う違う！チンクだ、チンク!!」

リュイ「ちんく…」

卑猥に聞こえる名前を言われたチンクは慌てて訂正させる。

デイエチ「私はデイエチだよ」

リュイ「ていが？」

デイエチ「デイガつて…私は超古代の光の巨人じゃないから…でもいつか」

ウエンデイ「ウエンデイツス！」

リュイ「ういんでい？」

ウエンデイ「伝説ポケモンじゃないツスよ!」

自己紹介するチンク、デイエチ、ウエンデイたちだったが、リュイに名前を間違われまくって慌ててしまうのを見てギンガとシグナムは笑いを堪えていた。

リュイ「やがみ…りゆい…です…」

ギンガたちが自己紹介し終えて、リュイ自身も挨拶する。

ウエンデイ「話に聞いてたツスけどわざとっぽく感じるツス」

シグナム「何か言ったか？」

ウエンデイ「な、なんでもないツス……」

シグナムから感じる殺気にウエンデイは訂正する。

シグナム「リュイはこう見えて言はずらい発音はそれに近いで補つてるんだ。あまり変なことを言うなよ？」

ゲンヤ「おーい、今帰ったぞ〜」

リュイ「!?」ビクッ

シグナムが話しているとナカジマ家の大黒柱『ゲンヤ・ナカジマ』が帰って来たのと同時にリュイはシグナムの背中に隠れてしまった。

ギンガ「お帰りお父さん」

ゲンヤ「ああ。ん？シグナムじゃないかってその子は？」

隠れているリュイを見てゲンヤは聞いてくる。

リュイ「うゝ…」

凄く怖がっているようすでリュイはシグナムに隠れていた。

ゲンヤ「スゲー警戒されてるな」

あまり男性と会ったことのないリュイは怖がってしまった。

ギンガ「リュイくん、この人はこう見えて怖い人じゃないよ」

ゲンヤ「おい!？」

実の娘に”こう見えて”と言われてショックを受けるゲンヤ。

リュイ「こわく…ない？」

ウエンデイ「パパりんは全然怖くないツス！頼りになる人ツス！」

リュイ「……………」

ギンガとウエンデイに言われてリュイはゲンヤを見る。

ゲンヤ「ゲンヤ・ナカジマだ。ギンガたちの父親だ」

自身を見てきたリュイにゲンヤは自己紹介したが、リュイはすぐに隠れてしまった。

リュイ「ん……………」

だが、まだ怖いのかリュイはシグナムの背中に隠れてしまった。

ギンガ「あー…これは怯えちゃってるわね…」

シグナム「んー…リュイの周りには男があまりいないからなあ…」

ゲンヤ「そ、そうか…」

怯えてしまったリュイを見て、ゲンヤはショックを受けていたのだった。

『……………』

ナカジマ家にてリュイとノーヴェエに連れられたヴィヴィオ、アインハルト、コロナ、リオの間に気まずい空気が流れていた。

ノーヴェエ「かなり気まずい空気だな」

シグナム「ああ。だが当人同士で話さねばなるまい」

気まずい空気を感じてノーヴェエたちは言う。

このままじゃダメだと思いを決してリュイは口を開いた。

リュイ「みんな…ご…ごめん！」

アマゾンだったことを隠していたことを言っつてヴィヴィオたちに頭を下げて謝るリュイ。

ヴィヴィオ「り、リュイくんが謝ることじゃないよ！」

アインハルト「むしろ謝るべきなのは私たちです」

コロナ「リュイくんは私たちを守ろうとして危ない目にあつてたのに…」

リオ「なのに私たち、リュイくんを酷い目で見て…傷付けちゃた…だから…」

「…ごめん！／なさい！」

自分たちを守るために命をかけてくれたリュイを酷い目で見てしまったことを謝る4人。

リュイ「びびお…はる…ころ…りお…」

謝られてリュイは少し困惑していた。

こんな時、何と声をかければいいのか分からずにいた。

ノーヴェエ「よし、仲直りしたんならもう良いじゃねーか。これ以上何か話すこともないだろ？」

困惑しているリュイにノーヴェエが助け船を出して言う。

ノーヴェエに言われてリュイたちは頷いた。

その後、ナカジマ家でリュイたちは夕御飯を食べて帰ろうとしていた。

ヴィヴィオ「あ、リュイくん！」

帰ろうとしたリュイにヴィヴィオが呼び止めた。

呼び止められたリュイはヴィヴィオたちの方を振り向いた。

ヴィヴィオ「あの…リュイくん…その良かったら私たちの合宿、一緒に行きませんか？」

リュイ「がっしゆく？」

リオ「うん。リュイくんの格闘技…私たちも参考にしたいし…」

コロナ「私たちとの模擬戦もまだだからね」

理由を言う面々。

リュイ「しぐまま…」

合宿の誘いを受けてリュイはシグナムを見た。

その目には行って良いかなという目であった。

シグナム「良いんじゃないか？リュイが行きたいなら、私は構わない」

リュイの意を汲んだのと何よりリュイ自身に良い経験になるかもしれないと判断してシグナムは言う。

リュイ「……………うん…いく！」

ヴィヴィオ「本当!?やった!!」

シグナムから許可を貰ってリュイは嬉しそうに頷き、返事を聞いてヴィヴィオも頷いて言う。

ノーヴェ「ならお嬢たちに1人追加って連絡しとかないとな。詳しい

日程は後でシグナムさんの端末に送りますよ」

シグナム「そうしてくれ」

リュイが来ると確認したノーヴェはそう言うのだった。

番外編2

お正月回！

はやて「新年、あけまして…」

「「「「「おめでどうございますー」「」「」「」」」」

リュイ「おめで…とう…」

今回のリュイたちは新年と言うわけで八神家、高町家とオマケ（アインハルト、リオ、コロナ、ミウラの）4人で新年会が開かれていた。「誰がオマケですか!?!」

ヴィヴィオ「ど、どうしたのみんな…」

リオ「いや、なんとなく…」

ミウラ「僕たちのこと…」

コロナ「悪く言われた気がして…」

アインハルト「はい…」

リュイ「？」

ヴィヴィオ「それより、リュイくん。どうかな、私の着物姿」

リオ「あ、それなら私も！」

コロナ「私だって！」

アインハルト「私も！」

ミウラ「僕だって！」

くるりと回ってリュイにアピールするヴィヴィオたち（ミウラは少し恥ずかしい様子）。

リュイ「うん…びびおも…りおも…ころも…はーるも…みうらも…きれい…」

ヴィヴィオ「えへへへ、ありがとう！」

リュイに言われて嬉しいヴィヴィオたち。

はやて「しっかし、去年色々あったなあ…」

ヴェータ「新しい家族が増えたからな」

フェイト「シグナムさんがママで、はやてがパパだもね」

はやて「あははは…なのはちやんとフェイトちゃんに近いことがま

さか起こるとは…まあ、ウチはパパやけど…」

今だ『パパ』呼びに少しシヨツクがあるはやて。

リイン「リインとアギトとヴィータちゃんはお姉ちゃんです〜！」
なのは「そうだったね。まあ、そのお姉ちゃんが変なことを吹き込まないように親御さんにちゃんと伝えておくから」

ヴィータの方を見て黒い笑みを浮かべる。

ヴィータ「うぐっ……」

シグナム「ま、まあ、アレはヴィータの言葉のアヤだったのだから許してやってほしい」

シャマル「そうよ…みんなは良いじゃない…私なんて名前すら呼んでももらえないのよ……」

シヨボンっとしてゐるシャマル。

ヴィータ「いや、お前の場合はリユイの第一印象が最悪だったんだろ？」

リイン「笑顔で注射器を持って…」

アギト「病院内を追い回したんだからな」

リユイがシャマルに怖い人のイメージを淡々と語る。

フェイト「流石に私もトラウマになるかな」

なのは「うん」

シャマル「うう…シャマル先生、負けないんだから…リユイクー…」
リユイ「……」↑ササツとヴィヴィオとアインハルトの後ろに隠れる

はやて「諦めりいや、シャマル」

シャマルを肩をポンポンと叩いて言うはやて。

シャマル「はうう〜…」

ヘナヘナと膝を着くシャマルだった。

そんなシャマルの姿を全員が苦笑いしているのだった。

カルジーナ編

h u n t i n g 30

ヴィヴィオ「あ、おーい、リュイクーン！」

次元航行ターミナルにてヴィヴィオが合流してきたリュイとシグナムに手を振っていた。

シグナム「すまない。少し遅くなってしまったか？」

ノーヴェ「いえ、時間ピッタリですよ」

？「あ、この子がリュイクーン？」

やや巻き毛な青いショートヘアと翠色の瞳の女性『スバル・ナカジマ』がリュイを見て言う。

リュイ「……」

知らない人に突然声をかけられてリュイは驚いてヴィヴィオの後ろに隠れた。

スバル「あれ？意外とシャイ？」

ティアナ「知らない人に声かけられたからビックリしただけでしょ」

オレンジ色のロングヘアをした女性『ティアナ・ランスター』が言う。

スバル「ああ、そうか。初めまして、私はスバル、スバル・ナカジマ。ノーヴェのお姉さんだよ」

ティアナ「私はティアナ、ティアナ・ランスターよ」

リュイ「……」

ヴィヴィオ「大丈夫だよ。2人ともいい人だよ」

リュイ「やがみ……りゅい……です……」

ヴィヴィオに言われてリュイはヴィヴィオの後ろから出て来て言う。

ノーヴェ「それじゃあカルナージに……」

『しっばーっ!!』

シグナム「リュイ、きよつけるんだぞ」

メガーヌ「そろそろ帰って来ると思うけど…あ、来たわ」
スバルが聞くとメガーヌがこちらに向かってくる2人の人物を指さした。

エリオ・キャロ「おつかれさまですっ!!」

薪を持って来ているのは『エリオ・モンディアル』と『キャロ・ルシエ』の2人だった。

フェイト「紹介するね、2人とも」

キャロ「キャロ・ルシエです」

エリオ「エリオ・モンディアルです」

アインハルトとリュイに自己紹介する2人。

ルーテシア「因みに1人ちびっ子がいるけど3人で同年よ」

キャロ「何ですと!?! 1.5cmも伸びたのに!!」

ルーテシアの意地悪の言葉にキャロは怒る。

これにアインハルトは驚いていたがリュイはリインやアギトの事例があるのであまり驚かなかった。

アインハルト・リュイ「?!」

気配を感じて振り向くと一体の獣人がいた。

身構える2人。

ヴィヴィオ「あ、アインハルトさん、リュイくん違いますよ!」

ルーテシア「この子は私たちの大事な家族の召喚獣 ガリユールよ」

アインハルト「し、失礼しました!」

リュイ「ごめんなさい…」

勘違いしていたことを謝る2人。

メガーヌ「さて、お昼前に大人のみんなはトレーニングでしょ、子供たちはどこに遊びに行く?」

ノーヴェ「やっぱりまずは川遊びかなと。お嬢も来るだろ?」

ルーテシア「うん!」

ノーヴェ「アインハルトとリュイもこっち来いな」

アインハルト「はい」

リュイ「うん…」

なのは「じゃ着替えてアスレチック前に集合しよう!」

チビツ子ズ『はいっ！』

ノーヴェ「こつちも水着に着替えてロツジ裏に集合！」

大人組『はーいっ！』

それぞれのいく場所を決めて言う。

しかしヴィヴィオたちの方はリュイに関して、あることが分かってしまうのだった。

リオ「あたしいっちはーん!!」

ヴィヴィオ「あ、リオずるーいっ!」

川辺に来たヴィヴィオたちは川までかけっこしていたらしく言う。
ヴィヴィオ「アインハルトさんとリュイクンも早く来てくださー
いっ!」

振り向いて2人を呼ぶヴィヴィオ。

ノーヴェ「ホレ、呼んでるぞ」

呼んでいるヴィヴィオにノーヴェはアインハルトとリュイに言う。

アインハルト「ノーヴェさんできれば私は練習を……」

ノーヴェ「まあ、準備運動だと思って遊んでやれよ。それにあのチ
ビたちの水遊びはハードだぜ」

ニツと笑いながらノーヴェは言う。アインハルトは半信半疑のま
ま川に入った。

リオ「あ、アインハルトさんどーぞーっ!」

ルーテシア「気持ちいいよ♪」

入ってきたアインハルトにリオとルーテシアは歓迎する。

しかしリュイとクリスだけは入らなかった。

ノーヴェ「ん? いいぞ、お前も行ってきて」

そうノーヴェがクリスに言う。クリスはジェスチャーで伝えてき
た。

ノーヴェ「なに?」オーバーコート「外 装がぬいぐるみなので濡れると泳げなくな
ります?」……大変だな、お前も。で、リュイは何で行かねーんだ?」
外装がぬいぐるみであるクリスは泳げないと分かり、今度はリュイ
に聞いた。

リュイ「およいだ……こと……ない……だから……およぎかた……わかんない
……」

ノーヴェ「ああ……なるほどな。ならアタシが教えてやるよ」

リュイ「うん……」

泳ぎ方が分からないリュイに泳ぎ方を教えると言うノーヴェ、しか

しその30分後…。

リュイ「けほっ…けほっ…」

四つん這いになって、リュイは噎せていた。

ヴィヴィオ「だ、大丈夫？」

噎せてるリュイを心配するヴィヴィオ。

リュイ「うん…だい…じょう…ぶ…」

ノーヴェ「ま、まさかあそこまで泳げないとは…。」

濡れた服を絞りながらノーヴェは言う。

理由はノーヴェはリュイに泳ぎを教えていたがなんとリュイは全くと言っていいほど泳げず、川に流されてしまったのだ。

しかもリュイが流れたのは川の中でも流れが早くノーヴェが助けに入っようやく追い付いたくらいだ。

アインハルト「ともかくリュイくんが無事で良かったです」

リオ「一時はどうなるかと思ったよ！」

コロナ「うん！」

アインハルトたちもリュイを心配して言う。

ヴィヴィオ「リュイくんに何かあったら大変だよ！」

そう言うヴィヴィオだが…。

ノーヴェ（つてか…もしリュイに何かあったらアタシが八神家の皆さんに袋叩きに合うからな…。）

リュイがあのまま流されて、行方不明になっていたらと思うと八神家…主にシグナムに何をされるかと想像すると恐怖以外に何物でもないと思うノーヴェだった。

なのは「行くよ、ティアナ!」

ティアナ「はい!スバルも準備OK?」

スバル「準備万端!」

フェイト「大丈夫よ」

互いに準備完了を確認しあうのはたち。

なのは「それじゃあ、対アマゾン撃退作戦を開始!」

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

フェイト・ティアナ「!?!」

なのは「ほえ!?!」

ゴングを合図に構えた瞬間、なのはの後ろからいきなりガンマが現れてアームカッターを振り上げていた。

アームカッターで来ると分かっているなのははレイジングハートで防御に回ろうとするがガンマはそれを百も承知であった。

バイオレント・ブレイク!

なのは「なっ!?!」

アームカッターで攻めると見せかけてガンマは、もう片方の手でバトラーグリップを引き抜いてアマゾンスピアを出した。

ガンマ「ヌアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
引き抜いたアマゾンスピアを振るいガンマはなのはを吹き飛ばし

た。

ガンマ「ふうふうう……」

なのはを吹き飛ばしたガンマは近くの屋上に着地して次の獲物に狙いを定めた。

フェイト「ティアナ、スバル!!」

ティアナとスバルが次の狙いだと思ったフェイトが叫ぶがそれはガンマの方が一枚上手であった。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
ティアナとスバルを攻めると見せかけてフェイトに狙いを定めて

いた。

フェイト「ええ!？」

自身を狙っていることだと分かって驚いたフェイトは反応出来なかった。

ティアナ・スバル「「フェイトさん!」」

ティアナとスバルがフォローしようと近付くが…。

ガンマ「ホッ!!」

フェイト「きゃっ!？」

ティアナとスバルがフォローに入ろうとした瞬間、なんとガンマは直前でフェイトを踏み台にして落として狙いを変えた。

しかも、足にかなり力を入れていたのかフェイトは勢いよく地面に叩き付けられた。

スバル「ティアア!」

ティアナ「オーライ!」

狙いを変えてくるを分かっていたスバルはティアナに言う。

ティアナ「シユート!!」

ガンマに向かって^{クラスタ}拡散攻撃で攻撃しつつ爆煙でガンマの視界を奪う。

スバル「おおおおおおお!!」

視界を遮られたガンマの死角からスバルが蹴りを入れに来る。

ガンマ「ヌアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

迫り来るスバルの蹴りをガンマは受け止めて掴んだ。

スバル「うそっ!？」

受け止められた上に捕まれたスバルは驚く。

ティアナ「スバル!？」

爆煙が晴れてスバルの状況を見たティアナも驚く。

ガンマ「ウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

スバル「うわああああああああああああああああ!!？」

掴んだスバルをガンマはハンマー投げのハンマーのように振り回した。

ガンマ「あ…」

スバル「あーーーーーーれーーーーー

ヴィヴィオ「リュイクくん、凄かったよ〜！ってアレ？」

訓練後、リュイの元に来たヴィヴィオ達だがリュイはメガーヌの膝の上で眠っていた。

メガーヌ「訓練が終わって変身を解いたら直ぐに寝ちやったみたい」

ノーヴェ「話には聞いてたけど…本当に寝ちやうんですね」

ルーテシア「…で、なんでママが膝枕してるの？」

メガーヌ「最初は木の根を枕にしてたけどそれだと頭が痛くなりそうだからよ」

ヴィヴィオ「いいなあ…次は私がリュイクくんの膝枕するー！」

メガーヌのヴィヴィオが言うのだった。

その頃、宿泊施設の部屋では…。

なのは「あたたた…」

スバル「ひ、酷い目にあった…」

フェイト「て…手も足も出なかった…」

ティアナ「アマゾンとは何回か戦闘したけど…あの子は別格だわ…」

ボロボロのなのはたちが、ベッドの上でぶっ倒れていた。

なのは「なら明日は試合後に特別メニューで特訓だね」

『ええ!?!』

管理局の白いあk…なのは「テイバインバスター!!」ぎにやあああ

!?!…なのは「時空管理局の教導官、高町 なのはの素晴らしい意見にフェイトちゃん、ティアナ、スバルはやる気満々でしたっ」と

ティアナ「なに勝手に作者を葬って本文を弄ってるんですか!!」

スバル「喜んでませんよ!!」

フェイト「なのは…やり過ぎ…」

作者を抹殺して本文を改ざんしたなのはに文句を言う。

なのは「大丈夫だよ、今こ本人は寝てるからこれ書いてるの作者の

おとうも…」

『それ以上は言っちゃ駄目!!』

メタ話しをしかけたなのはを一齐に注意する。

その夜、目を覚ましたリユイはエリオと2人で露天風呂に入っていた。

ルーテシア曰く、掘ってたら出てきた天然温泉でノリノリで露天風呂に改造したらしい。

エリオ「ふう〜…いいお湯だ〜」

リユイ「……………」

湯船で寛いでいるエリオの横でリユイはあるものをじーつと見ていた。

露天風呂の周りに設置された岩だ。

エリオ「どうしたの、リユイくん?」

リユイ「あのいし…へん…」

見ていた岩を指差して言う。

エリオ「そういえば、隣女湯の方が騒がしかったね…何かいるとか聞こえたけど…」

リユイ「これなら…いた…」

そう言つてリユイは隣の岩陰から白い犬、猿、雉を引っ張り出した。

シロ「え!?!ここどこ!?!」

柿助「地獄温泉に入ってたはずじゃ!?!」

ルリオ「完全に現世だろ!?!」

リユイに引っ張り出させられて驚く白い犬、猿柿助、雉ルリオ。

エリオ「あー…リユイくん、その動物たちは別世界地獄の住人だから帰して上げて」

リユイ「うん……………」

エリオに言われてリユイは白い犬たちを話した。

シロ「な、何か分かんないけど…バイバイ」

柿助「じゃあ、帰ります」

ルリオ「え、これで終わり?」

シロ、柿助、ルリオは自分たちのいる世界に帰って行った。
エリオ（つていうか何で現世と地獄が温泉で繋がってるの!?!）
地獄にいるハズの白い犬たちが来たことに驚いているエリオだっ
た。

リュイ「えりにい…」

エリオ「なに？」

エリオ（エりにい…）

”にいに”と呼ばれて、エリオは少し恥ずかしくなった。

リュイ「いわから…なにか…でた…」

エリオ「ええ!?!」

リュイに言われてエリオは辺りを警戒する。

?（アレが噂のアマゾンつ子かあ…最初は潜伏してた場所がバレて

焦ったけど、このあたしの敵じゃな…）

水中で隠れている侵入者が…。

リュイ「いた…」

?「へっ？」

リュイに侵入者は足を掴まれて持ち上げられる。

リュイ「ポイ…」

セイン「ええ…?!?!」

持ち上げられた挙げ句に投げ飛ばされる水色の髪に愛嬌のある幼
気な風貌の少女『セイン』は驚き声を上げながら隣に突入した。

スバル「な、なになに!?!」

ティアナ「パイプでも破裂した!?!」

突入したセインが起こした水柱に驚く。

セイン「うう…酷い目にあつた…」

ぷか〜んと浮かび上がってきたセインはそう呟いたのだった。

リュイ「……………」

その日のリュイはメガーヌ、ガリユー、フリード、セインと共に合同陸戦試合を見ていた。

合同陸戦試合のフィールドはルーテシアが造った町のような建造フィールドだ。

本当はリュイ自身も参加したかったが人数的事情で我慢していた。因みに試合は最初は互角だったがなのは、リオ、ヴィヴィオ、ルーテシア、エリオ、スバルのTeam Blueがフェイト、コロナ、アインハルト、キャロ、ノーヴェ、ティアナのTeam Redの内ヴィヴィオとスバルの仲良し格闘型ナックルコンビがノーヴェを、なのはとエリオの元6課の教官&教え子コンビがフェイトを、ルーテシアとリオがキャロとなのはと戦って戦闘不能だったが回復中のアインハルトを相手する《2 on 1》になっていたがコロナが創成魔法で出来た岩石の巨人『ゴライアス』のゴライアスパunchを喰らってリオとルーテシアは撃墜したが2人に勝利して油断していてなのはにコロナは捕獲、キャロは撃墜されていた。

セイン「なあなあ、聞きたかったんだけど…あらら？」

試合を見ているとセインに声をかけられたリュイはメガーヌの方に言っただけで隠れた。

メガーヌ「あらあら、昨日のお風呂でのごことでセインのことを警戒してるみたいね〜」

セイン「ええ!？」

昨夜の侵入のことでリュイに警戒されてショックを受けるセイン。

メガーヌ「謝ったら許してくれるわよ、ね？」

リュイ「うん……」

メガーヌに言われてリュイは頷く。

セイン「その…ごめんな。少し調子に乗りすぎたよ」

後ろ髪を搔きながらセインはリュイに謝る。

メガーヌ「セインもこう言ってるし、許してくれるよね？」

リュイ「うん……」

メガーヌ「じゃあ、改めて。セインはリュイくんに何を聞いたかったのかな？」

セイン「ああ…それは昨日のお風呂であたしの固有能力が発動しているのに何であたしが隠れてる場所が分かったのかな？って」

セインの固有能力は岩や金属などの無機物をすり抜けられる『ディープダイバー』で水中も得意としているのにも関わらずリュイはセインの場所を的確に捉え、投げ飛ばしたから疑問に思っていたのだ。

メガーヌ「そういえばそうね。なんでかしら？」

リュイ「よく…わかんない…」

セイン「よく分かんないって…もしかして勘か何かであたしの居場所を当てたの!？」

リュイ「わかんない…」

メガーヌ「それはそれで凄いわね。あら？」

リュイがディープダイバーを発動していたセインの居場所をどうやって当てていたのか分かんないままになっているとなのはとテイアナが魔力を収束させ始めた。

なのは・ティアアナ「スターライトブレイカー!!」

なのはのモード《マルチレイド》とティアナのシフト《ファントムスターライク》のスターライトブレイカーをぶっぱなした。

収束砲同士がぶつかり合って辺りの建物ごと周囲を破壊し尽くした。

セイン「これ…なんて最終戦争？」

メガーヌ「まあ、収束砲同士がぶつかればね〜」

リュイ「……………」

収束砲同士がぶつかり合って起きた爆発の威力を見て引きぎみのセインとあらあら感てわ言うメガーヌ、そしてリュイは収束砲同士がぶつかり合うのを見て…。

リュイ（にやのはと…てーなどは…おもいつきり…やろ…）
っと思っていた。

メガーヌ「さあて、皆は…」

試合状況を確認するメガーヌ。

結果は…。

フェイト：スターライトブレイカーマルチレイドSLB MR 着弾直前にエリオの一撃で撃墜

エリオ：スターライトブレイカーフアントムストライクSLB PS S 直撃・撃墜

ブランセル『Is it safe?』

コロナ「な、なんとか…」

自身のデバイス『ブランセル』に心配されて言うコロナだが目を回していた。

コロナ：SLB MRをゴライアスで防御するも防ぎきれず行動不能

なのは「あーん、やーらーれーたー!」

なのは：SLB PSを相殺しきれず撃墜

ティアナ「はあ：はあ：はあ：」

ティアナ：SLB MRをなんとか相殺

ティアナ「な、なんとか：残った…」

なのはのSLB MRをなんとか相殺したティアナは直ぐにフィールドの確認をする。

ティアナ「残ってるのは…あたしと…あと2人?こっちに近づいてくる!?!この速度…スバル!?!」

ヴィヴィオ「じゃなくてヴィヴィオです!!」

ヴィヴィオ：LIFE1800/3000

ティアナ「うそお!?!何でほぼ無傷!?!つて来たあ!!」

ヴィヴィオが何故あの破壊力からほぼ無傷でいられたのには理由があった。

スバル「えへへへ、見たか!救急^{レスキュー}魂!」

スバル：SLB PSからヴィヴィオを庇い行動不能

ノーヴェ「あー、くそ!やられた!!」

ノーヴェ：SLB MR着弾後、ヴィヴィオの攻撃で撃墜。

スバルに庇ってもらいヴィヴィオはほぼ無傷でいられたのだ。

ティアナ「この!」

魔力弾を発射するティアナだがヴィヴィオは全て回避して接近す

る。

ヴィヴィオ「ティアナさん、行きます!!」

ティアナ「来なくていいけど!!」

ヴィヴィオがティアナを攻撃しようとした時だ。

アインハルト「霸王…空破断(仮)!!」

ヴィヴィオに向かってアインハルトが現れて『霸王空破断(仮)』でヴィヴィオにダメージを与える。

アインハルト「ティアナさんはやらせませんよ。ヴィヴィオさん」

ティアナ「ごめん、アインハルト。さっきのでやられちゃった」

アインハルト「ええ!?!」

守ったつもりだったがアインハルトだがヴィヴィオは霸王空破断を喰らいながらも単発のソニックシューターを放ってティアナを撃墜していたのだ。

アインハルト「どうやら…私たちが最後のようです」

ヴィヴィオ「はい!行きますよ、アインハルトさん!」

最後はライバル同士の対決になっていた。

セイン「おお、ヴィヴィオと霸王つ子対決だ!」

ルーテシア「ライバル同士の戦いね」

ヴィヴィオとアインハルトの戦いに盛り上がる2人。

リユイ「……」

リユイも釘付けになっているほどだった。

リュイ「くくく」

アインハルト「……………」

その日、リュイはルンルンで、アインハルトはクリスを持って少し緊張していた。

理由は通信端末を弄っているルーテシアだった。

アインハルト（管理局の魔導騎士 八神 はやて司令：…いつたいどんな方なんだろう：リュイクんの保護者で、色々な事件を解決した歴戦の勇士という話だからやっぱり怖い方かな？）

初めて会うはやてのことを色々と考えているアインハルト。

アギト『あー、ルールー！オーツス！』

ルーテシア「おいっす、アギト」

リュイ「あぎねえねく」

アギト『リュイく元気してたか？』

リュイ「うん！」

アギト『それは良かった。シグナムがかなり心配してたからな』

シグナム『なんだ、リュイからなのか!？』

アギト『あ、ちよつ、シグナム!？』

シグナム『リュイイイイイイイイイ!!無事なのか!？怪我はないか!？』

アギトの言葉を聞いて遠くにいたのかシグナムが猛ダツシユで現れて聞いてきた。

リュイ「しぐままくうん…だいじょうぶ…でも…ちよつと…おぼれた…」

シグナム『そうか、良かったあ…って、なんだとおおおおおおおおおおおおおおおお!？』

リュイが無事かと思ったら溺れかけたと聞いてシグナムは大声を上げる。

シグナム『い、いいい、今なんと言った!?溺れた!?溺れたとはどういうことだ!？』

リユイ「によーえから…およぎ…おしえて…もらった…だけ…だよ？」

シグナム『ノーヴェか…帰ってきたら斬る!!』
リユイ「しぐまま？」

いつなく豹変しているシグナムに首を傾げるリユイ。

はやて『シグナムく、そろそろええか?』

奥からはやての声がしてシグナムに言う。

シグナム『あ、はい。今からレヴァンティンの切れ味を上げてきますので』

はやてに言われてシグナムは恐ろしいことを言っただこかへ行ってしまった。

ルーテシア（これ…ノーヴェは帰ったら土に還っちゃうわね…）

ノーヴェのことを（色々な意味で）心配するルーテシアだった。

はやて『はぁーい、ルールー、お久しぶりやー♪』

タヌキの面をして現れるはやて。

ルーテシア「八神司令、お久しぶりです」

リユイ「はやばぱく♪」

はやて『リユイく♪うん、元気そうやね』

ルーテシアとリユイの姿を見て言うはやて。

ルーテシア「あ、それで今日はですね。この子の…」

はやて『あ、聞いてるよー。霸王イングヴァルト陛下の正統血統

ハイデイ・E・S・イングヴァルト、格闘戦技『霸王流』を継承して、ちよつとヤンチャもしてたけど今はノーヴェ師匠やヴィヴィオたちと一緒に魔法戦競技に一生懸命で、ウチのリユイと仲ようしてくれとる真面目で一生懸命なええ子やって。そんな子にならいくらでも協力するよー♪』

嬉しそうに言うはやて。

はやて『えつと公式魔法戦用のデバイスやったっけ?どんなのがええかももう決まっとる?』

アインハルト「あ、は、はい!」

最初のアギトから次のシグナムからのはやてに呆気にとられてい

たアインハルトは少し裏声になりながら待て言う。

リイン『装着型とか、武器型とか…』

アギト『なんでも相談に乗るよー!』

はやての左右からリインとアギトが現れて言う。

アインハルト「えと…その、格闘技だけで戦いたいのので武器ではない方が…」

はやて『そーかー…格闘家さんやもんねー。ほんなら体の動きを阻害するような装着型もよくないかなー。スバルのナツクルやキャリバーもあれ、なんだかんだてまめつちや重いしなー』

リイン『そーなんですよねえー』

アインハルト「ですから…その…この子のような補助・制御型がいなと」

クリスを見せながら言うアインハルト。

はやて『なるほどなー。ほんならクリスの性能を参考ベースにして真正古代ベルカのシステムで組むのがええかな』

クリスを見てはやては言う。

アギト『補助・制御型か、それなら機体自体はすぐにできそうだな』

リイン『ですね。あとは性能設定と調整です』

はやて『そやねー。ほんならアインハルト』

アインハルト「は、はい!」

はやて『覇王の愛機、まずは軽く取りかかってみるな。八神 はやてとリイン&アギトがノリノリで組んであげよ』

リイン・アギト『おまかせだ!／ですー!』

アインハルト「あ、ありがとうございます!」

デバイスを作ってもらえると聞いてお礼を言うアインハルト。

アインハルト「あの…ご迷惑でなければ!一つ聞きたいのですが…」

はやて『ん?なんや?』

アインハルト「あの…八神司令は女装がご趣味の男性の方なんでしょうか?」

アインハルトの問いにはやてはずっこけた。

はやて『ちやうちやう!女や女!!』

アインハルト「え？でもリュイクンがパパと…」
はやて『リュイが呼びやすいようにしたらそうなたんや〜！勘違
いせんどいて〜…』

男性と間違われて泣いてしまうはやてだった。

番外編3

クリスマスの時のオリ主人公の話し

「二二」メリークリスマスス〜！／がうがう〜！「二二」

こたつを囲んで『菱川 零』、『藜 烈火』、『八神 リュイ』、『ガウ』の4人はジュースの入ったコップでクリスマス挨拶&乾杯をしていた。

零「クリスマスつーわけで特別に主役5人が揃ったわけだがバランス的に悪くねーか？ウルトラマン2人いるしよ」

零↓ウルトラマンザージス

烈火↓ウルトラマンオメガ

ガウ↓怪獣王 ゴジラ

リュイ↓仮面ライダーアマゾン ガンマ

烈火「仕方ないですよ。ウルトラマンの方がやり易いって話ですか
ら」

リュイ「うん…」

ガウ「がう」

零「いや、それはウルトラマンゼロだろ？あの奴窃盗しかけた前科
持ちの」

リュイ「ねえ…そんな…わるい…ひとの…はなし…より…たのしい
…はなし…しよ」

烈火「そうですね。折角のクリスマスなんですから楽しい話をしま
しょう」

零「楽しい話つたつてよ…良く良く考えたら俺らって結構闇抱え
てるくね？集まったは良いが何を話すんだよ？」

烈火「作者のプライベートをバラすとかはどうです？」

零「却下！」

烈火「えー」

零「えー」じゃねーよ！んなのバラしたら作者、ここでやっていけ
ねーだろ!!」

烈火「社会的に抹殺しても良いんじゃないや…」

零「俺らの物語が終わるわ!!」

烈火「仕方ありませんね」

零「仕方なくねーだろ！俺は初めてのクリスマスなんだからんなのじゃないのにしよーぜ」

烈火「じゃあどうします？」

零「どうするって、んなの言われてもなあ…」

烈火「じゃあ、プラ…」

零「却下だつっーの!!」

ガウ「がうがう、がうがうー、がうー」

「え？」

リュイ「えつと…はなすなら…それぞれの…すきなひとの…はなしとかしよう…だって」

零「いや、なんでリュイがガウの言葉を理解してるんだよ？」

リュイ「なんとなく…」

烈火「逆に凄いですね。じゃあ、その話をしましょうか」

零「んー…そう言われるとなあ…好きっつーか大切な人ならいるが…」

ガウ「がう？」

リュイ「だれ？」

零「麗那さんかな」

烈火「意外ですね。てつきりお姉さんかと」

零「いやりつ姉もあるが10年以上会ってなかったから実際は顔ほとんど忘れていたからなあ」

リュイ「それで…れいな…さんの…どこが…すきなのか？」

ガウ「がうがう」

零「そうだな。強いて言うなら母親ってやつか」

烈火「なんでまた？」

零「ほら俺ってウルトラマンになる前は施設でモルモットみてーな扱いだったからよ…そんな中で麗那さんだけは母親みたいに接してくれたからな」

烈火「そうですか。それでその人は元気にしてるんですか？」

零「そうかもな…」

烈火（あ…やぶ蛇だったかな）

烈火「じゃあ、次は僕ですね。そうですねえ…僕は華撃団の皆さんかな」

零「ああ、あの防衛チームみたいなやつか」

烈火「はい。華撃団の皆さんとはまだ会って日が浅いですが皆さん懸命で…見てると元気が出るんですよ

零「噂に聞く真宮寺 さくらのおつちよこちよいの舞台はどうなんだ？」

烈火「セツト丸ごと破壊されちゃいますからね。その都度新調しますよ」

リュイ「おつちよこちよい…」

ガウ「がうがう…」

似たような人を思い浮かべるリュイとガウ。

烈火「さて、次はリュイくんだよ」

リュイ「ぼくは…しぐまがすき」

零「チビツ子らしい回答だな」

リュイ「しぐま…やさしい…こわいひとから…たすけて…くれた…」

烈火「なるほどね」

ガウ「がうー」

零「なーに感心してんだよ。次はお前だぜ、ゴジラ」

ガウ「がうー、がうがうーがうーがうー」

リュイ「えつと…がうくんが…すきなものは…かにやでさんだって」

零「かにやで？猫かなんかか？」

ガウ「がうー！がうがうー!!」

烈火「かにやでさんじゃなくて奏さんでしょ？」

リュイ「さいしよから…いった…」

零「ほお、奏ねえ」

ガウ「がうがうがう、がうー。がうがう、がうーがうー」

リユイ「かにやでは…つよくて…やさしくて…うたがうまくて…たよりに…なるだつて」

零「へー、そいつは会ってみたかったな」

ガウ「がうーがうー」

リユイ「いつか…あえるよ…だつて」

零「そうだな。ま、俺らは今まで通り自分たちの世界を守ってこうぜ。世界をまたにかけることがあったら協力しような」

烈火「はい」

リユイ「うん…」

ガウ「がうー」

恐怖のたまり場

h u n t i n g 36

その日、ミッドのとあるマンションにて一人の若い男性が来ていた。

目的の部屋に着くとチャイムを鳴らした。

女性『はい』

チャイムを鳴らすと女性の声がした。

会社員「どうも、水道の修理に参りました」

愛想よく、水道会社の会社員は返事をする。

女性『どうぞ』

会社員の言葉を聞いて女性は鍵を開けて、扉を開いた。

会社員「お邪魔します」

扉が開いて、水道会社の会社員は女性の部屋に入り、扉が閉まったその瞬間だった。

会 社 員 「え …… う、 う わ あ

あああああああああああああああああ!？」

会社員の悲鳴が響くがそのマンションの住人は誰一人として反応する者はいなかった。

シグナム「ここか…」

アギト「らしいな」

その日シグナム、アギトの2人はマンション前に来ていた。

理由は3日前に遡る。

リュイがヴィヴィオたちの誘いで、カルジーナへ向かって2日後、シグナムはアギトとともににはやてに呼び出されていた。

シグナム「潜入調査ですか？」

はやて「せや。ここ3週間の間にミッドチルダのとある一角で行方不明者が続出してるんよ」

シグナム「やはりアマゾン…ですか？」

はやて「まだ分からんけど行方不明者は全員職業も性別も年齢もバラバラやから可能性は高いで」

シグナム「そうですね…」

はやて「本当はリュイにも協力してほしいんやけど…」

アギト「ああ、今日だけリュイが帰ってくるの」

はやて「せや。でも2人には悪いのは分かってるけど…」

シグナム「任せてください、主はやて。アマゾンの1体や2体、私とアギトが斬り伏せてみせます」

はやて「頼んだでシグナム」

そして現在、2人は姉妹という名義ではやてが用意した部屋に入り、荷物を整理していた。

シグナム「くっ、任務でなければノーヴエを八つ裂きにしたものを…」

アギト（あつぶなあ〜！命拾いしたなアイツ…シグナム、リュイのことになると何も見えなくなるからなあ…）

荷物を整理していて黒オーラを出して言うシグナムを見てアギトはそう思うのだった。

アギト「しっかしここまで来るのに住民に会わなかったな」

シグナム「ああ。何人も失踪者出るともつぱらの噂だったから人があまり住んでいないのかもしれないな」

アギト「そうか。ま、ともかく今日は挨拶だけして様子見だな」

シグナム「そうだな」

アギトに言われてシグナムは菓子入りの箱を出した。

すると2人のいる部屋のチャイムが鳴り響いた。

「!？」

チャイムを聞いて2人は構えた。

シグナムはレヴァンティンを待機状態にしてドアに近付いた。チェーンロックを掛けてシグナムはアギトに合図を送った。

シグナムの合図ちを見てアギトも合図ちで返した。

そしてシグナムはノブに手を掛けたのだった。

リュイ「リーんねえね〜！」

次元港ターミナルにて迎えに来ていたラインの側まで駆けていく。

ライン「リュイくん、お帰りなさいです〜！」

リュイ「ただい…ま…！」

迎えに来てくれたラインに抱き付いてリュイは言う。

ノーヴェ「り、ラインさん…し、シグナムさんは…」

少し怯えて、辺りを警戒しながらノーヴェはラインに聞く。

ライン「シグナムはアギトと一緒に任務中です」

ノーヴェ「そ、そうですか…」

シグナムが来ていないと聞いてノーヴェは安堵する。

リュイ「しぐま…きてない？」

逆に少し寂しそうにリュイはラインに聞く。

ライン「大丈夫ですよ。お仕事だからいつ帰れるかは分かりません

がリュイくんが帰って来たから直ぐに終わらせるハズです〜」

寂しそうにするリュイの頭を撫でてラインは言う。

リュイ「うん…！」

直ぐに終わらせて帰ってくると聞いてリュイは頷いた。

ヴィヴィオ「リュイくん、待たね〜！」

手を振りながらヴィヴィオはリュイに言う。

リュイ「バイバイ〜！」

リュイも手を振り返しながらラインと外で待っていたザファイラ

(人間形態) と帰る。

ライン「リュイくん、合宿は楽しかったですか？」

リュイ「うん…びびおたちと…いつぱい…あそんだ…」

ラインに聞かれてリュイは嬉しそうに答えた。

ライン「それは良かったです〜！その辺りの話はシグナムたちが

帰って来たからお話するです」

リュイ「うん…ん…？」

頷いたリュイだったが直ぐに立ち止まった。

ザフィーラ「急に立ち止まってどうかしたか？」

急に立ち止まったリュイを見てザフィーラは聞いてきた。

リュイ「しぐままの…こえが…した…」

リイン・ザフィーラ「え？」

リュイの側まで言葉を聞いてリインとザフィーラは耳を澄ました。

リイン「全然聞こえないです…ザフィーラは？」

ザフィーラ「私もだ。気のせいでは…お、おい!？」

何も聞こえないリインとザフィーラをよそにリュイはどこかへ走り出した。

リイン「リュイくん!？」

ザフィーラ「どこへ行く気だ!？」

走り出したリュイを見てリインとザフィーラは追いかけ始めたが直ぐに見失ってしまった。

リュイ（しぐまま…しぐまま…!）

リインとザフィーラを置いてきぼりにしたリュイの頭の中はシグナムのことしかなかった。

大好きなシグナムの声が聞こえた。

危険の中にいるシグナムの声が…それだけがリュイを突き動かしていた。

リュイ「はあ…はあ…はあ…」

いくらアマゾンの血を引くリュイでも長時間、走れば息切れで足を止めてしまった。

リュイ「はあ…はあ…はあ…ん？」

息を整えているリュイの視界にあるものが映った。

青い塗装がされ、先頭は変身時のアマゾンライダーの顔と同じ形をしているバイクがあった。

リュイ「!？」

バイクに近寄りハンドルに触れるとバチツと電気のようなのが走り慌てて手を引っ込めた。

リュイ「……………」

恐る恐るバイクのハンドルに触れると電気が走ることはなかったが代わりにエンジンが掛かる音がした。

エンジンの掛かる音を聞いてリュイはバイクにまたがった。

リュイ「しぐまま…いま…いくから！」

誰にも教えられた訳でもなくリュイはバイクの動かさし方の手順をやると動かしてシグナムの元へ走り出したのだった。

煙が晴れると女性の姿は変わっていた。

蟻のような顔に、薄い羽に似た装飾がある姿をしたアマゾン―『女王アリアマゾン』であった。

シグナム「やはりアマゾンだったか!!」

備えていたレヴアンティンを展開して女王アリアマゾンに構えた。

女王アリアマゾン「キリヤ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

シグナムに襲いかかる女王アリアマゾン。

シグナム「はああああああああああああああああああ!!」

襲いかかってきた女王アリアマゾンにシグナムはレヴアンティンに炎を纏わせて攻撃した。

女王アリアマゾン「キリヤ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

炎を纏わせた攻撃に女王アリアマゾンは数歩後退する。

女王アリアマゾン「キリユウウウウウウウウウウウ…キリヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

斬られダメージを受けた女王アリアマゾンは雄叫びを上げる。

兵隊アリアマゾン『シャアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

女王アリアマゾンの雄叫びを聞いてシグナムとアギトのいる部屋の左右や上下の階から兵隊アリアマゾンが部屋から出てきた。

アギト「アマゾンがマンシオン中から出てきた!」

シグナム「このマンシオン全体がアマゾンの巣窟だったのか!」

マンシオン全体が女王アリアマゾンと兵隊アリアマゾンたちによりアマゾンマンシオンと化していたことに驚いた。

兵隊アリアマゾン「シャアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

左右の部屋から出てきた兵隊アリアマゾンたちが襲いかかって来た。

シグナム「くっ、はああああああああああああ!!」

先に右側の兵隊アリアマゾンを斬り倒すと一旦は部屋に戻ると左側から現れた兵隊アリアマゾンを斬り倒した。

シグナム「バリケードを築くんだ!」

アギト「わ、分かった！」

シグナムに言われてアギトは急いで手近な椅子やテーブルで入口を塞ぎ始めた。

女王 ア リ ア マ ゾ ン 「キ リヤ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

シグナムも手伝い始めた時、女王アリアマゾンは両肩の後ろから昆虫の脚に似た部位を出すと鞭のように伸ばした。

シグナム「ぐっ!!」

シグナムの肩に鞭が当たった。

鞭にはトゲがあったのかシグナムの服に血が滲み出た。

アギト「シグナム!!」

シグナム「だ、大丈夫だ！」

そう言つてシグナムはレヴァンティンで女王アリアマゾンの脚に似た部位を切断した。

女王 ア リ ア マ ゾ ン 「キ リヤ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!？」

部位を切断されて女王アリアマゾンは後退した。

そして現在に至っている。

シグナム「なんとかして主はやてに連絡しなくては…」

アギト「さつきから連絡しようにも妨害されて連絡出来ないんだ」

シグナム「くっ、完全に袋のネズミか…」

自身たちの状況を言っていると…。

兵 隊 ア リ ア マ ゾ ン 『キ リヤ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

兵隊アリアマゾンたちがバリケードを破ろうと攻めてきた。

シグナム「抑えるぞ！」

アギト「ああ！」

バリケードが破られないように抑える。

兵隊アリアマゾン「シャアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

だが窓ガラスを割つて兵隊アリアマゾンの別動隊が後ろから挟撃してきた。

アギト「り、リュイ!？」

シグナム「何でここに!？」

現れたガンマを見てアギトとシグナムは驚いていた。

兵隊アリアマゾン「シャアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

兵隊アリアマゾンの1体がバリケードをすり抜けて入ってきた。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

入ってきた兵隊アリアマゾンの頭を低くして掴むと膝蹴りを数回叩き込むと手刀で背中から胸部を貫いた。

兵隊アリアマゾン「シャアアアアアアアアアアアアアアアアア……」

背中から胸部を貫かれて兵隊アリアマゾンは力尽きてドロドロの黒い液体となった。

ガンマ「しぐまま……たすけに……きた……めいわく……だった?」

兵隊アリアマゾンを倒したガンマはシグナムに聞いてきた。

シグナム「いや……助かった。今はこの状況を打開するのを手伝ってくれ」

ガンマ「うん……!」

シグナムに言われてガンマは頷くと兵隊アリアマゾンが侵入してきた隙間に入って攻めてきた兵隊アリアマゾンの大群の前に出た。

ガンマ「これ……いじょう……すきに……させない!!」

バイオレント・ブレイク!!

大群の前に出たガンマはアマゾンズスピアを出して構えると突撃した。

兵隊アリアマゾン『シャアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

突撃してきたガンマに兵隊アリアマゾンたちは飛びかかってきた。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

飛びかかってきた兵隊アリアマゾンたちをガンマはアマゾンズスピアを回転させて吹き飛ばした。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

アマゾンズスピアを回転させて吹き飛ばしたガンマは今度はア

ムカッターで手近にいた兵隊アリアマゾンを斬り裂いた。

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

手近にいた兵隊アリアマゾンを斬り裂いたガンマは次にアマゾンズピアを投げ数体の兵隊アリアマゾンたちを貫いた。

兵隊アリアマゾン『シヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

ガンマがアマゾンズピアを投げたのと同時に兵隊アリアマゾンたちは武器が無くなって自分たちが有利になったと思い、再び一斉に飛びかかってきた。

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

飛びかかってきた兵隊アリアマゾンたちを見てガンマはグリップを捻り両腕のカッターが大型化させると飛びかかってきた兵隊アリアマゾンたちを次々に斬り裂いていった。

アギト「す、すげえ…」

圧倒的な数の差はあれどいくら数が多かろうとガンマはそれをものともせず次々に兵隊アリアマゾンの数を減らしていった。

シグナム「このまま、押しきれればいいのだが…」

次々に兵隊アリアマゾンを倒していく状況を見て、少しガンマを心配するシグナムだった。

はやてが心配しているとリインとザフィーラが慌てて入って来た。
はやて「どないしたんや？リユイは？」

リイン「それがリユイクンを迎えに行つて帰っていたんいですか
…」

ザフィーラ「途中でシグナムの声が出たと言つてどこかへ行つてしま
い…」

はやて「なんやて!？」

リインとザフィーラから訳を聞いたはやては驚いた。

はやて「まさか…シグナムとアギトになんかあつてリユイはそれを
感じ取つたんじゃ…」

連絡の無いシグナムとアギトが何らかのトラブルに巻き込まれ、ど
うやったかは分からないがリユイがそれを感じ取つたのではと推測
する。

はやて「こうしちゃおれんな…すぐにシャマルに連絡や！例の特効
薬の出番や！」

リイン「はい！」

はやて「それとヴィータにも連絡や！直ぐに出撃出来るように伝え
て！」

ザフィーラ「分かりました！」

はやての指示を聞いてリインとザフィーラは直ぐに動いた。

はやて（シグナム、アギト、リユイ…無事でいてくれ…直ぐに助け
に行くからな）

3人の安否を心配しながらはやても準備を始めるのだった。

リュイ「はあ…はあ…はあ…」

兵隊アリアマゾンたちとの戦いから約8時間後の真夜中、リュイは壁に寄り掛かって息を荒らしていた。

兵隊アリアマゾンたちは一時引き上げていた。

あれから休み無く襲い掛かってくる兵隊アリアマゾンと戦い続けたのだ。

シグナム「リュイ、大丈夫か？」

リュイ「だい…じよう…ぶ…すこし…やすめば…いいから…」

心配するシグナムにリュイは言うが、その顔色が悪く疲労が顔ににじみ出ていた。

そんなリュイの横にシグナムは座ると自身に引き寄せた。

リュイ「しぐ…まま…？」

突然のことでリュイは混乱していた。

シグナム「今は眠っている。座って寝るよりかは体力回復なるはずだ」

リュイ「うん…」

シグナムに言われてリュイは目を閉じて眠りについた。

シグナム「……………」

眠りだしたリュイの頭をシグナムは優しく撫でた。

シグナム（すまない…やはり我々ではアマゾンはまだ倒せない…まだ幼いお前に頼るしかない自分が不甲斐ない…）

半分アマゾンとは言え、まだ幼いリュイに厳しい戦いを強いることになると感じたシグナムは心の中でそう思っていた。

アギト「なあ、シグナム。1つ提案だけど屋上に行ってみないか？」

シグナム「何を言っている？屋上だと退路が無いぞ」

アギトの提案を聞いて、シグナムは退路がないのに聞いた。

アギト「確かに退路は無いけど入り口は1ヶ所しかない。そこでならここよりかはまともに戦えるし、はやてたちと連絡だって出来るかもしれない」

シグナム「なるほど…確かに今の状況を打開にするならそれしかないかもしれん。だが奴らがいつ攻めてくるか…それに…」

屋上へ行く理由を聞いたシグナムはリュイを見た。

シグナム「さっきの戦いで分かったが、リュイ時間が経つにつれて力が弱くなっている。弱っているリュイにこれ以上戦いを強いるわけには…」

リュイは兵隊アリアマゾンたちが引き上げるまでの約8時間の戦闘で、かなり力を消費しており、最早まともに戦える状態ではないことをシグナムは言う。

アギト「……………」

それはアギトも気付いていた。

リュイ「だい…じょうぶ…」

シグナム・アギト「リュイ!?!」

眠っていたと思っていたリュイが起きていることに驚く。

リュイ「ちから…でない…でも…しぐままたちの…ためなら…がんばれる…」

シグナム「リュイ…」

健気としか言いようがないリュイの言葉にシグナムとアギトの心は突き動かされる。

シグナム「分かった。アギト、直ぐに動けるようにするんだ」

アギト「ああ、任せてくれ！」

シグナムに言われてアギトは準備をする。

シグナム「リュイ、お前はもう少しだけ眠っている。少しでも体力を回復させるんだ」

リュイ「うん…」

リュイもシグナムに言われて再び目を閉じて眠り始めた。

シグナム（次に起きたら…厳しい戦いになるだろう…）

今から起きる戦いにシグナムは嫌な予感がしていたのだった。

まだ日が上るにはまだ時間がある真夜中、1機の大形輸送ヘリがミッドチルダ上空を飛んでいた。

はやて「目的地までどれくらい掛かる?」

ヴァイス『目的地のマンションまで約1時間。にしてもシグナム姐さんたちは大丈夫なのかね』

はやてに聞かれて大形輸送ヘリのパイロットの『ヴァイス・グランセニツク』は言う。

アルト『反応が正しいとマンションの住人全員がアマゾンってことは総数は180体以上ですよ…いくらシグナムさんでも…』

ヴァイス『おい、バカアルト!なに縁起でもないこと言ってるんだよ!シグナム姐さんが負けるわけねえだろ!!』

縁起でもないことを言う女性パイロット『アルト・クラエツタ』にヴァイスは言う。

ヴィータ「アイツら…なに話してんだか…」

ヴァイスとアルトの会話を聞いてヴィータは呆れていた。

ヴァイス『つてか部隊長、1つ聞きたかったんですけど…』

はやて「ん?なんやヴァイスくん」

ヴァイス『シグナム姐さんに子供が出来たって本当なんですかあ!?!』

はやて「あ…ああ、その件ねえ…」

ヴァイスの質問にははやては苦笑いしていた。

この話はシグナムファンの局員たちから散々質問されて来たのだ。ヴァイス『あのガードの固いシグナム姐さんを落とす野郎はいったい誰なんですか!!』

はやて「あ…落ち着いてやヴァイスくん。確かにシグナムに懐いたる子はおるよ。せやけど…」

ヴァイス『やつぱりかあ!どこのどいつだあ!俺のシグナム姐さんのハートを奪った不屈き者はあ!!』

シグナムの子供—リュイのことを聞いてヴァイスは悲鳴の叫びを

上げる。

このヴァイスの悲鳴の叫びを聞いてはやてを含めた女性陣は…。

(あ、もうダメだこれ)

っと思っただとか。

同刻のアマゾンマンションの一室。

シグナム、アギト、リュイが立て籠る部屋では3人の脱出準備が出来ていた。

シグナム「2人とも、準備はいいか？」

アギト「ああ」

リュイ「うん…」

シグナムに聞かれて2人は頷く。

シグナム「よし…ならば行くぞ!!」

シグナムが先陣を切って外へ出る。

それに続きアギトとリュイが外へ出る。

アギト「静かだな…」

シグナム「奴らはアマゾンだ。今は恐らく、今まで殺した人間たちの肉を各部屋で食っている頃だろう」

部屋を出ても兵隊アリアマゾンが1匹もないことを推測する。

シグナム「今の内に階段へ急ぐぞ」

リュイ「しぐまま、あぎねえね！」

シグナム・アギト「!?!」

兵隊アリアゾンたちが、各自の部屋で食事をしている間に通路を通って階段へ向かおうとした矢先、突然リュイが2人を押して前にやった。

兵 隊 ア リ ア マ ゾ ン 『シャ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

2人がさつきまでいた通路の真上が崩落して数体の兵隊アリアマゾンたちが落ちてきた。

シグナムとアギトはリュイに押されて難を逃れたがリュイとは瓦礫により分断されてしまった。

シグナム「リュイ!!」

アギト「待ってる、直ぐに助けるから!」

リュイ「こないで!」

瓦礫を壊してリュイを助けようとするシグナムとアギトにリュイは叫ぶ。

リュイ「ここは…ひとりで…かたづけ…する…だから…しぐままと…あぎねえねは…うえに…はやばたちと…あつて…」

自身が時間を稼いでいる内に屋上へ行くように言う。

アギト「なに言ってるんだよ!?お前1人でどうにか出来ると思ってるのか!」

リュイ「わかんない…でも…しぐままと…あぎねえねを…まもれるなら…こんなの…まけない!」

G A ・ M ・ M A !

リュイ「あまぞん!」

A N C I ・ A N ・ A N C I E N T !!

アマゾンズドライバーを出してグリップを捻ってガンマに変身した。

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

変身して兵隊アリアマゾン2体を押し倒し、アームカッターで首を切り落として倒した。

ガンマ「はやく…はやく…行って!!」

叫ぶようにシグナムとアギトに言う。

シグナム「くっ…アギト、行くぞ!」

アギト「でもリュイを1人には…」

シグナム「リュイ!私と絶対を守る約束をするんだ!絶対に…生きてまた会うんだ、いいな!!」

アギト「あ、おい、離せよ!リュイ、リュイ!!」

リュイを1人には出来ないアギトを見てシグナムはリュイに伝えるとアギトの手を引っ張る。

ガ ン マ 「う ん … ぜ っ た い に … ウ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

シグナムとそう約束したガンマだが、最早長く戦えるだけの力は残されてはいない。

でも、シグナムたちと生きて会うために、力を振り絞って立ち上がり、残り兵隊アリアマゾンたちへ向かって行き、アームカッターで首を、脚を上げてレッグカッターで頭を割るように両断する。

ガンマ「しぐままと…やくそくした…だから…おまえらを…ここで…たおす!!」

騒ぎを聞いて部屋から出てきた新たな兵隊アリアマゾンたちに構えてガンマは言うのだった。

シグナム「はああああああああああああああああああ!!」
兵隊アリアマゾン『シヤアアアアアアアアアアアアアア………』
シグナムの斬撃が屋上への行く手を阻む兵隊アリアマゾンたちを切り裂く。

シグナム「あと少し!止まるなアギト!」

アギト「分かっているよ!」

後ろを振り向かず、2人は屋上へ走る。

兵隊アリアマゾンたちを押し退け屋上への扉を蹴破り屋上に到着した。

シグナム「アギト!」

アギト「ああ!」

シグナムは入り口に構えて兵隊アリアマゾンたちの侵入を防ごうとする。

アギトははやてたちと連絡を取ろうとする。

はやて『アギト、無事やったんやね!』

通信が繋がりはやてがアギトの無事を確認する。

アギト「はやて!大変だ、マンションにアマゾンがいっぱいいて……」

はやて『分かっていると、こっちでも反応を確認しとる。シグナムとリュイは?』

アギト「シグナムはこっちにいます。でもリュイは……アタシらを行かせるために下でアマゾンたちと戦っている。早く助けに行かないと、もうリュイは限界なんだ!」

はやて『大丈夫や、もうちよいしたらそっちに着く。リュイを助け出したらある作戦を執行する。それまで持ちこたえてや!』

アギト「分かった!」

通信を切りシグナムの方を見るとすでに何体もの兵隊アリアマゾンが屋上へ上がってきていた。

アギト「シグナム、ユニゾンだ!」

シグナム「ああ、来い!アギト!!」

液体が噴水のように天に向かって吹き出し、屋上の地面に雨のよう
に降り注いだ。

屋上の地面に雨のように降り注ぐ液体…アマゾンの黒い液体が噴水のように吹き出す。

兵隊アリアマゾン「……………」

首を失った兵隊アリアマゾンは崩れ落ちるように倒れた。

女王 アリアマゾン 「キシヤ

アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

倒れた兵隊アリアマゾンを見て女王アリアマゾンは跳躍し、貯水タンクがある場所に移動した。

ヴァイス「チツ、外したか!」

狙撃銃型のインテリジェントデバイス『ストームレイダー』を構えているヴァイスが舌打ちして言う。

シグナム「ヴァイス!」

アギト『つてことは!』

ヴァイスがいるのを見て上を見ると大型の輸送ヘリが来ていた。

さらにヘリからはやてとライン、ヴィータ、ザフィーラが降りてきた。

はやて「大丈夫か、シグナム!アギト!」

シグナム「主はやて!」

アギト『なんとか無事だ!』

助けに来たはやてに2人は無事を知らせる。

ヴィータ「そいつは良いが…」

ザフィーラ「何だ、このアマゾンの数は!」

ライン「180体以上いるとは聞いてましたがそれ以上はいるです!」

続々と屋上へ雪崩れ込んでくる兵隊アリアマゾンを見て流石に引いていた。

はやて「シグナム、リュイは!?!」

シグナム「下の階です!」

はやてにリュイの居場所を聞かれてシグナムは下の階にいますと言

う。

アギト『下は奴らの巣だから早くしないとリュイが！』

ヴィータ「だったら血路を開かねえとな!!」

早くリュイを助けにいかねえと、アイゼンを構えながらヴィータは言う。

女王 アリアマゾン 「キ シャ

アアアアアアアアアアアアアアアア!!」

兵隊アリアマゾン 『シャアアアアアアアアアアアアアアア!!』

女王アリアマゾンの号令で兵隊アリアマゾンたちが一斉に襲いかかった。

はやて「サクツと行くで!!」

「二」了解!!」

向かってくる兵隊アリアマゾンたちにはやてたちも向かっていく。

一方、アマゾンマンションの下では…。

兵隊アリアマゾン 『シャアアアアアアアアアアアアアアア!!?』

壁に叩き付けられ頭を潰される兵隊アリアマゾン。

辺りには無数の兵隊アリアマゾンたちの死骸とアマゾンの黒い液体が海のようになっていた。

ガンマ「……………」

その中をガンマはゆっくりと歩いていた。

白い体色は倒した兵隊アリアマゾンたちの黒い液体で汚れていた。

ガンマ「いか…なくちや…しぐ…まま…の…ところ…に…」

ゆっくりと歩いていくガンマだがその足取りが重く、フラフラになっていた。

ガンマ「しぐ…ま…ま…」

歩いていたガンマだが変身していたリュイの意識が無くなった。

ガンマ 「グルルルルルル… グガ

アアアアアアアアアアアアアアアア!!」

リュイの意識が無くなったのと同時にガンマの目が青から赤くなり、猛獣のような雄叫びを上げたのだった。

ヴィータ「うおおおおおおおおああああああああああ
!!」

兵隊アリアマゾン『シャアアアアアアアアアアア……』

ヴィータのアイゼンが数体の兵隊アリアマゾンを薙ぎ倒すが、次から次へと新たな兵隊アリアマゾンたちが屋上に現れる。

ヴィータ「くそ……キリがねえ……」

湧き水の如く現れる兵隊アリアマゾンたちを見てヴィータは言う。

はやて「リイン、リュイの居場所は分かるか？」

ユニゾンしているリインにはやては聞く。

リイン『リュイクんのレジスターの反応はゆつくりとこつちに向かつて来てるです！でもアマゾンの数が多過ぎて正確な位置は分からないです……』

シャマルの精密検査の結果で分かったがリュイやアマゾンの上腕二の腕あたりに嵌められている腕輪『アマゾンズレジスター』にはGPSに似た機能あることが分かった。

その反応をGPS代わりにしてリュイの居場所が分かるようにしているのだが、今回のように大量のアマゾンがいられると反応が混ざって分からなくなってしまうのだ。

はやて「そうか……なんとかせなアカンけど、こう数が多いと上手く動けへんな……」

数の暴力で押してくる兵隊アリアマゾンたちにはやてもかなり参っていた。

ヴァイス「くそっ！これじゃあジリ貧だ！」

兵隊アリアマゾンを撃ち抜きながらヴァイスは言う。

女王アリアマゾン「クククク……」

そんなジリ貧状態のはやてたちを見て女王アリアマゾンは笑っていた。

それは人をいたぶるのを楽しんでるようであった。

ヴィータ「あの野郎、アタシらがジリ貧状態のを楽しんでるだろ！」

女王アリアマゾン 「キシヤ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!？」

右肩を斬られて女王アリアマゾンは傷口から血を吹き出しながら倒れた。

ガンマ 「グルルルル ガ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

倒れた女王アリアマゾンにガンマは乗ると顔面を殴り始めた。
殴られ続けて女王アリアマゾンの顔は変形する。

女王アリアマゾン 「キシヤ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

これ以上殴られたらまずいと女王アリアマゾンは生き残った左肩の後ろから蟻の脚状の部位を伸ばして攻撃しようせる。

だがガンマは迫ってくる左肩の蟻の脚状の部位を掴むと力任せに引っこ抜いた。

女王アリアマゾン 「キシヤ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!？」

左肩の蟻の脚状の部位を引っこ抜かれて女王アリアマゾンは悲声を上げる。

兵隊アリアマゾン 『シヤ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

女王アリアマゾンの悲声を聞いて兵隊アリアマゾンたちが貯水タンクの影響から姿を現す。

ガンマ 「グルルルル……」
現れた兵隊アリアマゾンを見たガンマは狙いを変えて向かって行く。

女王アリアマゾン 「キシヤ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ガンマが兵隊アリアマゾンに向かった隙に女王アリアマゾンは逃げようとする。

ガンマ 「グルルル ガ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

バイオレント・ブレイク!!

逃げようとする女王アリアマゾンをガンマはアマゾンズウィップを引き抜いて伸ばして捕らえた。

ガ　ン　マ　「グ　ル　ガ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

女王アリアマゾンを捕らえたガンマは兵隊アリアマゾンたちに向かって投げた。

女　王　ア　リ　ア　マ　ゾ　ン　「キ　シャ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!？」

兵　隊　ア　リ　ア　マ　ゾ　ン　『シャ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!？』

投げられた女王アリアマゾンとぶつけられた兵隊アリアマゾンたちは互いに互いの体が絡まって動けなかった。

ガ　ン　マ　「グ　ル　ガ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

絡まって動けなくなった女王アリアマゾンと兵隊アリアマゾンたちにガンマは向かって行く。

バイオレント・パニツシュ!!
向かって行きながらガンマは両腕のアームカッターを巨大化させた。

ガ　ン　マ　「グ　ル　ガ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

巨大化させたアームカッターでガンマは女王アリアマゾンと兵隊アリアマゾンたちを両断した。

女王アリアマゾン　「キシャアアアアアア……………」
兵隊アリアマゾン　『シャアアアアア……………』

両断された女王アリアマゾンと兵隊アリアマゾンたちはドロドロの黒い液体となって消滅した。

ガ　ン　マ　「ウウ　…　ウウ　…　ウ　ガ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!」

女王アリアマゾンと兵隊アリアマゾンが消滅したのを見て、ガンマは苛立つような咆哮を上げるのだった。

こつちへ連れてくるんや」

今から使用しようとしているのはシヤマルたち医療班が開発したアマゾンにとっては有害な物質が含まれる薬である。

この薬は水に溶けやすく、貯水タンクにこれを混ぜてアマゾンマンシヨン全体にいるアマゾンを一掃しようというのだ。

しかしまだ使用するにはまだ実用段階ではなく欠陥があり人間にも多少なりと有害であることが分かった。

リュイはアマゾンであるのと同時に人間である。

そんな子に薬が混じった水を浴びたりでもしたら何が起きるか分からないのだ。

シグナム「分かりました！」

はやてに言われてシグナムはリュイを止めに向かう。

ガ
ン
マ
ン
マ
ン
ガ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

バイオレント パニツシュ!!

兵 隊 ア リ ア マ ゾ ン 『シヤ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア……』

バイオレント パニツシュの横一閃を喰らいガンマを囲んでいた兵隊アリアマゾンたちは一気に撃破された。

ガンマ「ガルルルル……」

見える範囲の兵隊アリアマゾンを全て倒したガンマは相手を探す。

シグナム「リュイ！」

ガンマ「！」

シグナムの声を聞いてガンマは向いた。

ガ
ン
マ
ン
マ
ン
ガ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

!!

シグナムが分からないのか、ガンマは威嚇するように咆哮を上げるのだった。

ガ マ 「ガ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

戸惑いなくガンマはシグナムにアームカッターで斬りかかった。

シグナム「リュイ!」

斬りかかってきたガンマのアームカッターをシグナムはレヴァン
ティンで受け止める。

ガ ン マ 「グ ガ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

力を入れてレヴァンティンを押してシグナムを斬ろうとする。

シグナム「ぐっ…く…り、リュイ…」

押されるシグナムがそう発するとガンマのアームカッターに入れ
る力が弱くなった。

ガンマ「しぐ…ま…ま…」

レヴァンティンからアームカッターを離しながらガンマは数歩下
がった。

同時に数歩下がると目の色が赤から元の青に戻っていた。

シグナム「リュイ…」

近付くとガンマは変身を解いてリュイに戻った。

リュイ「しぐま…?」

シグナムを見てリュイは首を傾げた。

下の階の通路で、兵隊アリアマゾンたちの相手をしていたのは覚え
ているが、なぜ屋上にいたのか分からないでいた。

シグナム「リュイ、よかった」

元に戻ったリュイを見て、シグナムは安心して抱き締めた。

リュイ「しぐま…いたい…」

シグナム「すまない。リュイ、疲れてるかもしれないが一緒に来て
くれ」

リュイ「うん…」

よく状況が分からないリュイは言われるがままシグナムに抱きつ

いた。

リュイが抱きついたので確認したシグナムは落ちないように抱えると浮遊してはやてたちの方に向かった。

はやて「よし、アギト！放水や！」

アギト「よっしゃあ！」

シグナムがリュイと空から向かって来るのを見たはやての合図でアギトは一旦マンション内に戻ると、スプリンクラーの近くで火を起こして火事だと誤認させて水を噴射させた。

兵 隊 ア リ ア マ ゾ ン 『シヤ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!』

スプリンクラーから出た薬入りの水を浴びて兵隊アリアマゾンたちは体から白い煙を噴射しながら苦しみ倒れドロドロに溶けて死んでしまった。

ヴァイス「おら、これでも食らえ!!」

スプリンクラーから逃れて来た兵隊アリアマゾンにヴァイスはホースと貯水タンクを連結して放水、薬入りの水を浴びせ倒している。

兵 隊 ア リ ア マ ゾ ン 『シヤ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!』

1体また1体と兵隊アリアマゾンたち薬入りの水を浴びて苦しみながら死んでいく。

貯水タンクの水が無くなり水が出なくなった頃、マンションにいた180体近くいた兵隊アリアマゾンたちは1体も残らずにドロドロの液体になって蒸発、レジスターだけが転がっていた。

アギト「終わった…のか？」

ヴァータ「みたいだな…」

ヴァイス「いや、でもシグナム姐さんのところにまだ1匹…」

兵隊アリアマゾンたちが全員倒したと思い、安心してしているとヴァイスがシグナムといるリュイを指差した。

ヴァータ「あれはアタシらの家族だよ。他言したらダメだからな」
ヴァイス「え?!?でもアマゾンですよ?!?まさかシグナム姐さんのこと

をママって言ってるの…」

アギト「お察しの通りだ」

ヴァイス「あのガキ！今すぐ駆逐して…」

シグナムをママと呼ぶ子がリユイだと分かり、ヴァイスは水を浴びせようとした。

はやて「ようしヴァイスくん、この報告書を今日の午後23時59分59秒までまとめて出してや。誤字脱字、コンマ1秒でも遅れたらなのはちゃんが見案した地獄のスペシャル特別訓練メニューの刑に処すからな」

ヴァイス「はあ!?なんでそうなるですか!?!」

はやて「リユイを傷付けようなら帰ったら直ぐに処すで」

ヴァイス「いくらなんでも横暴ですよ!?!」

はやて「やらんのか?」

ヴァイス「やります!ぜひやらせてください!!」

これ以上言ったら何されるか分かったもんじゃないと判断したヴァイスは保身に走るのだった。

しかし結局間に合わずになのはの地獄のスペシャル特別訓練メニューの刑に処されたのはまた別の話である。

シャマル「はい、もう大丈夫よ」

リュイ「うゝ…」

シャマルに言われてリュイはたくしあげていた服を戻してシグナムに抱きついた。

シグナム「よく我慢できたな。偉いぞ、リュイ」

いまだにシャマルを見ただけで嫌がるリュイに我慢したことを誉めるシグナムは頭を撫でる。

シグナム「それであゝ…シャマル。リュイは大丈夫なのか？」

シャマル「言い間違いかけたことは何も言わないでおくけど…そうですね。貴女から聞いた話だけだとまだ何とも言えないわ」

”悪魔”と言われかけたことには言及せずに、シグナムから聞いたガンマの野獣のようになった原因について、シャマルは首を横に振って言う。

シグナム「そうか…」

野獣のように女王と兵隊アリアマゾンたちを襲いかかるガンマの姿をシグナムは思い出していた。

リュイ「しぐまま…はやく…ここ…でたい…」

もう限界が来たのかリュイは今にも泣きそうになる声で、訴えるようにシグナムに言う。

シグナム「ああ、そうだな。ではシャマル後は任せただぞ」

シャマル「ええ。任せて」

残りの検査をシャマルに任せて、シグナムはリュイを連れて診察室を出ていった。

はやて「それでマリーさん。うちの子が乗ってきたバイク…何か分かりました？」

魔導師の装備のメンテナンスなどを担当している時空管理局本局メンテナンススタッフの女性『マリエル・アテンザ』と通信でリュイが乗ってきたバイク―『ジャングレイダー』のことを聞いていた。

事件後、現場にリュイが忘れ物したと言い出してシグナムとはやて

と共に現場に戻って持つてきたのがジャングレーダーだったのだ。

まだ10歳に満たない男の子であるリュイがバイクを使って爆走したことに驚いてしまいはやてとシグナムが動かそうとしたが反応しなかったがリュイが乗ると動き始めたので調査が進められることになったのだ。

マリエル『一言で言えばリュイくん：でしたっけ？その子にしか扱えないことしか：現に普通の人が動かそうにもエンジンすらかからなかったんですよ』

はやて「そうですか…。ありがとうございます、引き続き調査をお願いします」

マリエル『はい、分かりました』

調査を引き続き依頼したはやては通信を切った。

はやて「はあ…」

通信を切るなりはやてはため息をついた。

ここ最近、人を食らうようになるアマゾンの数が増えていた。

今のところはなんとか対処出来ているがこのままでは対処出来なくなってしまう可能性があったからだ。

はやて「早くなんとかせなアカンなあ…」

やれやれと言うように呟くはやての手元にある書類の中に【重要】と掛かれた書類があった。

出会う強者の少女たちと小さき狩人

h u n t i n g 48

アマゾンマンション事件から数週間後、リュイはリインと散歩を楽しんでいた。

リイン「今日はよく晴れた散歩日和で良かったですね、リュイくん」
リュイ「うん……」

穏やかな風や草木、花の香りなどでアマゾンとの戦いを忘れられるのでリュイは楽しんでいたのだ。

リュイ「ん？」

散歩を楽しんでいるとリュイの視界にある人物の姿を捉えた。

? 「あ…アカン…」

木の枝を杖代わりにしてフラフラな足取りのフードを被ったジャージの人物だった。

? 「もう…だ…め…」

バタリと倒れる人物。

リュイ「……………」

そんな人物にリュイは近付くと小枝で人物の頭をツンツンした。

リュイ「しん…でる?…」

リイン「いや、それ行き倒れですう!!」

ジーク「んー、美味しい♪」

リュイとリインが見つけた行き倒れの人物…いや、少女はミウラも今年から参加する格闘技大会『インターミドル』の世界代表戦優勝の経歴を持つ現時点での試合では無敗を誇る最強選手『ジークリンデ・エレミア』は八神家にて食事についていた。

ヴィータ「おいおい…なんでインターミドルのチャンピオンがこんなところにいるんだよ…」

アギト「さ、さあ?」

現れたジークリンデにヴィータとアギトはひそひそ話で話し合う。

リュイ「じーくねえね…大丈夫？」

ジーク「ありがとう。もう大丈夫や」

リュイに心配されてジークリンデはお礼を言う。

リュイ「じーくねえね…はやぱぼと…おんなじ…ことば…」

はやて「せやな。少し親近感が沸くなく」

ジークリンデがはやてと同じく柔らかな関西弁を話すのを見て親近感が沸いていた。

はやて「それならちよつと…」

親近感が沸いたはやてはジークリンデに近寄った。

はやて「も、もうかりまっか」

超ありがちなギャグを言うはやて。

ジーク「は？インターミドルには賞金は出へんよ？」

はやて「……………せやな」

普通に返されてはやては恥ずかしくなって言う。

リュイ「？」

リュイもまたギャグの意味が分かっていなかった。

ミツドの人には関西のギャグは分からなかったようであった。

リュイ「そう言えばですけど何であんな所にいたですか？」

ジークリンデが1人で歩いていたのかと問うリュイ。

ジーク「ああ、それはな…ランニングしていたら迷子になってしまったんよ…」

はやて「ええ…」

アギト「な、なんだよそれ…」

リュイ「よ、予想外です…」

ヴィータ「だな…」

リュイ「じーくねえね…ほうこう…おんち？」

想像していたのよりしようもない理由にはやてたちは呆れて言葉を失っていた。

その後、ジークリンデの保護者が来て連れて帰ったのはまた別の話。

その日、リュイは森の中で一人でウロウロしていた。

今日のはやて、シグナム、ザフィーラ（狼形態）とでタケノコ狩りをしに来ていた。

しかし途中でこの山でアマゾンの気配を感じて、気配がした方へ向かっていった。

いたのは何度も戦ったことのあるエレフアントアマゾンであった。

何度も戦ったことのある相手だけに直ぐに片付けたが、ここがどこだか分からなくなってしまっていた。

リュイ「しぐ…まま…はや…ぱぱ…わんわん…」

まだ幼いリュイは泣きそうになる。

リュイ「うう…ね…むい…」

ガンマに変身した時の衝撃で睡魔に襲われたリュイは膝を着いてしまった。

膝を着いたリュイは立とうとするが立てずに横になって眠ってしまった。

そんなリュイの前に少女と男性が来ていた。

リュイ「うくん…?」

目を覚ましたリュイは見知らぬテントに寝かされていた。

? 「気がついた?」

リュイ「ひっ!」

声に反応して見ると長い金髪で巨乳の少女がいた。

少女の主に金髪を見て涙目になった。

? 「え!?!ちよつと、なんで泣くの!?!」

リュイ「あ、あく…ま…」

? 「ええ!?!」

リュイに悪魔と言われて少女はショックを受ける。

? 「お嬢様」

そこへタキシードを着た執事の男性が入ってきた。

? 「エドガー。どういう訳かこの子に怯えられてしまつて…」

『エドガー』と呼ばれる執事の男性に少女は言う。

エドガー「この怯えようは…トラウマか何かでしょうか?」

? 「では私の何がこの子のトラウマを引き出してしまつているの?」

エドガー「恐らく」

怯えてしまつているリュイの状況を冷静に解析する。

ヴィクトーリア「ごめんなさい。私にはあなたの怖がつている理由が分からないわ。でもこれだけは分かつていてほしいの。私はあなたが思っている悪魔ではないわ。ヴィクトーリア・ダールグリユンよ」

少女「『ヴィクトーリア・ダールグリユン』は名乗る。」

エドガー「私はエドガー。執事をしております」

リュイ「…や、やがみ…りゅい…です…」

名乗られてリュイは自身も名乗る。

ヴィクトーリア「そう。リュイっていうの。いい名前ね」

リュイの名前を聞いてヴィクトーリアは言う。

エドガー「それでリュイ様は何故あのような場所にお一人で?」

リュイ「えつと…」

エドガーの問いにリュイは答えられなかった。

自身がガンマになってアマゾンと戦っていることはヴィヴィオたちなどの一部の特例を除いて秘密(リュイからしたら内緒)にしている。

ヴィクトーリア「何か言えない事情でも?」

リュイ「えつと…たけのこ…」

ヴィクトーリア「タケノコ?」

エドガー「あ、もしかしてご家族とタケノコを探りに来て迷子になつたのでは?」

ヴィクトーリア「そうなの?」

エドガー「うん…」

実際は違うがヴィクトーリアに聞かれて頷いた。

エドガー「では麓の施設で預かってもらいましょう」

ヴィクトーリア「そうね」

ジーク「ヴィクター、おる〜?」

リュイを麓の施設に預かってもらおうと言う話をしているとジークリンデが現れた。

ヴィクトーリア「ジーク!」

リュイ「じーくねえね!」

ジーク「あれ?なんでリュイやんがヴィクターたちとおるん?」

ヴィクトーリアたちと一緒にいるリュイを見て聞く。

ヴィクトーリア「この子と知り合いなの?」

ジーク「前に行き倒れになってたところを助けてくれたんよ」

ヴィクトーリア「行き倒れ!?ちよつとなんで言ってくれなかったの!?!」

行き倒れになったと聞いてヴィクトーリアはジークリンデに詰め寄って聞く。

ジーク「トレーニングしてたら迷子になってもうたんよ〜!」

詰め寄られたジークリンデは言う。

ヴィクトーリア「全く貴女って人は…」

呆れるヴィクトーリア。

ヴィクトーリア「ありがとうね。私の友人を助けてくれて」

リュイがジークリンデを助けてくれたと知ってヴィクトーリアはリュイの頭を撫でて笑顔で言う。

リュイ「どう…いたしまし…て」

ヴィクトーリアがフェイトと同じく金髪だけど怖くないと分かっ
て言う。

その後、施設までリュイを送るとリュイを捜していたシグナムたち
と出会ったことはまた別の話。

その日、リュイは1人でお使いをしていた。少しでも人と慣れてほしいのと社会勉強の一環ではやてが提案したのだ。

因みにお使いの内容は玉ねぎ、ニンジン、ジャガイモ、豚肉である。野菜類は何とか買えたが最後の食材である豚肉だけまだである。何故かと言うと…。

リュイ「どれ…かな…?」

豚肉の種類が多すぎてどれを買えばいいか分からなかったのだ。まあ、ぶつちやけどれでも良いがリュイにはまだ分からなかった。どれにするか悩んでウロチョロしていると誰かにぶつかって倒れてしまった。

? 「ああん?」

リュイ「ひっ!!」

ぶつかった相手である少女に睨まれてリュイは怯えてしまった。

? 「り、リーダー! 怖がってますよ!!」

? 「あ!?! しまった!!」

連れの少女に言われて睨んだ少女は慌ててしまった。

? 「ごめんね、うちのリーダーが」

? 「怪我とかない?」

他の2人がリュイを心配して聞いたり、手を差し伸べて来た。

リュイ「だい…じょうぶ…」

心配されたリュイは差し出された手に掴まって立ち上がると言う。

ハリー「わりいな、いきなり怖がらせちゃって。オレはハリー、ハ

リー・トライベツカ…って言わなくても知って…」

リュイ「しら…ない…」

インターミドルチャンピオンシップの上位選手の1人で『砲撃番長』の異名で呼ばれている『ハリー・トライベツカ』は名乗るがリュイはインターミドル自体知らないで首を傾げて言う。

ハリー「ええっ!?!」

リュイの一言にハリーはショックを受ける。
ミア「も、もしかしてインターミドル知らないとか？」
長身で、長い髪の少女―ハリーの妹分の1人『ミア』が聞く。
リュイ「？」

インターミドル自体知らないのでリュイは余計に分からなくなつた。

ルカ「いやいやいや!?あり得ないでしょ!」

リンダ「結構流行ってるのに知らないの!」

サングラスを掛けた少女、ハリーの妹分の1人『ルカ』とマスクをした少女、同じくハリーの妹分の1人『リンダ』が詰めよって言う。

リュイ「うう…」

2人の迫力に押されリュイはまた涙目になり始めた。

ハリー「怖がつてるだろ!!」

そんな2人にハリーは首根っこを掴んで引き離す。

その時、ハリーの両手に手錠がかかった。

ハリー「コイツは!」

手錠に見覚えがあるハリーは振り向くと1人の少女がいた。

エルス「何小さい子を虐めてるんですか!」

短めツインテールの黒髪で、つるんとしたおでこに眼鏡を掛けている少女―ハリーと同じくインターミドルチャンピオンシップの上位

選手の1人『エルス・タスマン』が言う。

ハリー「いや、虐めてたわけじゃ…」

エルス「問答無用!今のは誰がどう見ても虐めていたでしょ!!」

ハリー「話し聞け、デコメガネ!!」

手錠を破壊しながらハリーはエルスに言う。

エルス「誰がデコメガネですか!!」

こうなつてハリーとエルスの喧嘩が始まってしまった。

ルカ・リンダ「り、リーダー!」

慌ててルカとリンダが止めに入る。

リュイ「ねえ…」

2人が喧嘩しているのをそつちのけでリュイはミアの服を引つ

張った。

ミア「どうしたの？」

リュイ「これ…どれが…いいの？」

ミア「どれどれ…」

お使いの途中だと気付いてメモをミアに見せる。

ミア「あ、これはこつちがおすすめかな」

メモの食材を見て豚のひき肉を取って渡す。

リュイ「ありが…とう…」

ひき肉を受けるとリュイはお礼を言ってレジに向かっていた。

ミア（あ、あのチビツ子の名前…聞いてなかった）

名前を聞き忘れていたことに気付くミアだった。

その日、シグナムは困り果てていた。
理由は……。

シグナム「リュイ…そろそろ離してくれないか？」
リュイ「やつ！」

困っているシグナムの理由、それはシグナムの制服を掴んだリュイであった。

シグナム「頼むから、離してくれ…」

リュイ「やあー!!」

離すように言うシグナムだがリュイは頑なに嫌がる。

実ははやてたちはいつものように出勤だが…1名を除いて。

その1名がリュイの金髪に恐怖を抱かせる根源となったシャマルであったのだ。

シグナム「分かった。今日は出来るだけ早く帰ってくるから今日だけは我慢してくれ。約束だ」

リュイ「やく…そく…」

シグナムに言われてリュイは頷く。

シャマル「大丈夫よ、シグナム。私がついてるから」

シグナム「いや、お前だから心配なんだろう…?」

シャマル「うっ…」

トラウマの原因であることを否定できず、シャマルの心に何かが刺さった。

リュイ「はやく…かえって…きて…」

シグナム「分かっている」

リュイの頭を撫でてシグナムは出勤した。

朝はリュイが気に入っている番組があって大人しくテレビを見ている間に、シャマルは洗濯などの家事を済ませてい。

シャマル「リュイくん…つてアレ？」

お昼時を少し過ぎて自身の残念料理を何とかした後、リュイと遊ば

うとしているシャルルだがリュイの姿は無かった。

シャルル「ど、どこに…」

キヨロキヨロと辺りを見回してリュイを捜す。

リュイ「……」

シャルルがキヨロキヨロしている時、リュイはソファの下に隠れて息を潜めていた。

シグナムが帰ってくるまでの間、シャルルから逃れるために隠れているのだ。

シャルル「みくつけた！」

リュ

イ

「み

ぎや

ああああああああああああああああああああああああああああ!!?」

シャルルに見つかりリュイは悲鳴を上げてソファから抜け出して逃げはじめた。

シャルル「あ、ちよつと!!」

逃げ出したリュイを追いかけるシャルル。

家でドタバタと走り回るリュイとシャルル。

いろいろ壊れる音がしていたがお構いなしに2人は追いかけてくる。

ト○とジェ○ーみたいとは言わないでください。

リュイ「!?!」

逃げていたリュイは行き止まりの所に来てしまった。

シャルル「や、やつと…お、追いついた…」

追い詰めたがかなりお疲れのシャルルは言う。

リュイ「ひっ…」

アマゾンとの戦闘ならどうてことはないリュイだがシャルルにだけはどうしてもだめであった。

リュイ「ひい!!」

ここまでと思つてリュイが身を屈めた時、壁に飾られた絵が落下してきた。

シャルル「危ない!!」

落下してくる絵に気付いてシャルルはリュイに覆いかぶさった。

リュイ「？」

何が起きたか分からないリュイは落ちてる絵と自身に覆いかぶさっているシャマルを見て大体の状況を理解した。

シャマル「大丈夫？リュイくん」

リュイ「あ…あり…が…とう…」

シャマル「どういたしまして」

リュイの頭を撫でてシャマルは言う。

シグナム「帰ったぞ、リュ…イ…」

夕方になって他の面々より先に帰って来たシグナムはある光景を見て驚いた。

それはリュイとシャマルが寄り添って寝ていたのだ。

シグナム「これで少しは仲良くなれたか」

一緒に寝ている2人を見てシグナムは微笑んでそう言うのだった。

n…」

ザファイラが意見を言っていると思いの前に刃があった。

シグナム「何か言ったか？ザファイラ…」

ザファイラ「い…いや…なんでも…ない…」

シグナムの目力にザファイラは引いた。

リュイ「みうら…」

ミウラ「なに？」

リュイ「みうらの…わざ…うけて…みたい…」

ミウラ「え!？」

リュイの一言にミウラは驚いた。

ミウラの技は近接型の収束魔法である『抜剣』だ。

練習で何度も放っているがその都度、標的の棒を破壊している。

それを受けたいなど狂気の沙汰ではない。

リュイ「だめ？」

ミウラ「だ、ダメだよ！危ないし、下手したら大怪我しちゃうよ!!」

リュイ「だいじょうぶ…ちゃんと…うけとめるから…」

ミウラ「で、でも…」

チラリとヴァータたちの方を見る。

リュイのことを過保護しているシグナムに何をされるか分かったものではないのだ。

ミウラの心配ごとが分かったのかリュイはシグナムの方に向かった。

リュイ「しぐま…」

シグナム「どうした？」

リュイ「みうらの…わざ…うけたい…」

シグナム「な!？」

リュイの一言にシグナムは絶句してザファイラを睨む。

睨まれたザファイラは首を横に振って違うとアピールする。

リュイ「ボクが…いったから…ワンワン…かんけい…ない…」

シグナム「だが下手をすれば大怪我に…」

？「そうそう、怪我されたらこっちが迷惑だつて」

声の方を見ると1人の青年が立っていた。

ヴィータ「だ、誰だ？」

海東「僕は海東 大樹。またの名を…」

『海東 大樹』は名乗るとどこからか銃とカードを取り出して銃にカードを装填した。

【KAMEN RIDE!】

海東「変身！」

【DIEND!】

銃を天に向かってトリガーを引くと海東が変身した。

デイエンド「仮面ライダーデイエンド。ただの通りすがりの仮面ライダーさ」

青い体にバーコードに似た姿をした仮面ライダー『仮面ライダーデイエンド』になって名乗るのだった。

シグナム「か、仮面ライダー…：ディエンド？」

突然現れた仮面ライダーディエンドを名乗る仮面ライダーに驚く。

ディエンド「さっそくで悪いけどそっちの仮面ライダーを出してくれないかな？」

ヴィータ「なに？」

ディエンド「この世界にいることは分かってるんだよ。アマゾンライダー ガンマ」

ガンマの絵が描かれたカードを出しながら言うディエンド。

ディエンド「あれ？出てこないならこっちからいくよ」

武器であり変身アイテムである『ディエンドドライバー』のトリガーを引いて発砲する。

ディエンドの弾丸がシグナムたちを通り過ぎてミウラたち門下生に向かっていく。

だが門下生たちに当たる前にリュイがリストバンドで弾丸を弾いた。

ディエンド「!!」

リストバンドで弾丸を弾いたりユイを見てディエンドは驚く。

弾丸を弾いたりユイのリストバンドはボロボロになって外れてしまった。

ディエンド「君、いったい何者？」

リュイ「おにいさんが…さがしてる…の…」

アマゾンズドライバーを出して左側のグリップを捻った。

【GA・M・MAー】

グリップを捻ると両目のような赤い部分に血走りのような模様が入り、英語風に『ガンマ』と聞こえた。

リュイ「あまぞん…」

【ANCI・AN・ANCIENT!!】

ガンマ「ぼく…だよ…」

白い純白の全身で、両腕と両足そして背には鋭いカッターがあり、

青い目をした戦士『仮面ライダーアマゾン ガンマ』に変身して、デイエンドに言う。

デイエンド「なるほど…君がガンマだったか。じゃあ、さっそく始めるかな」

ガンマに変身したりユイを見てデイエンドは新たな2枚のカードを出した。

【KAMEN RIDE RAI!】

【KAMEN RIDE GAI!】

2枚のカードを装填してトリガーを引くと新たな仮面ライダーが現れた。

紅色の体で、左腕にあるエイを模した盾型の召喚機『飛召盾^{ひしょうだて} エビルバイザー』がある仮面ライダー『仮面ライダーライア』。

グレー寄りの銀で、西洋甲冑のような外観をしており、左肩アーマー前部に取り付けられている召喚機『突召機^{とつしょうき} 金属バイザー』がある仮面ライダー『仮面ライダーガイ』の2人の仮面ライダーをデイエンドは召喚したのだ。

ガ
ン
マ
「ウ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

召喚された2人の仮面ライダーに驚きはしたもののガンマは怯まらずに向かつて行く。

デイエンド「へえ、これで怯まないなんてかなりの手練れかな?」
向かって来るガンマを見てデイエンドは感心するように言いながらライア、ガイと共に向かつていくのだった。

？」

【KAMENRIDE IKUSA!】

【KAMENRIDE ZANKI!】

【KAMENRIDE REI!】

加勢しようするシグナムたちにデイエンドは新たに3人の仮面ライダーを召喚した。

聖職者の法衣をイメージしたような仮面ライダー『仮面ライダーイ
クサ』

緑の体色で縁取りと腕が銅色の、1本角の鬼の仮面ライダー『仮面
ライダー斬鬼』。

イエティをモチーフとして、カラーは白の仮面ライダー『仮面ライ
ダーレイ』の3人だ。

デイエンド「行けっ!」

デイエンドの指示でイクサたちはシグナムとヴィータに向かって
いく。

ガンマ「ぐっ…しぐ…まま…」

未知の相手と戦うシグナムたちにガンマは力を奮い立たせる。

ライア「させるか!」

ガンマ「あぐっ…」

力を奮い立たせるガンマにライアは更に首を締め上げる。

それでもガンマは力を奮い立たせてエビルウィップを掴んで引き
千切ろうとする。

ガイ「おらっ!!」

エビルウィップを引き千切ろうとするガンマにガイがメタルホー
ンで攻撃する。

だがガンマはガイの攻撃など意に返さず引き千切ろうとする。

そんな時だった。

デイエンド「ねえ、取引しない?」

ガンマ「?」

デイエンド「君が僕の物になってくれたら君の大切な人たちを助け
てあげるよ」

ガンマが描かれたカードを見せながらデイエンドはガンマに言う。
ガンマ「……」

デイエンドの言葉にガンマは揺らぐ。
いくらシグナムとヴィータが強くて3対2…しかも仮面ライダーが相手では不利であるからだ。

？「そいつの話しには乗らない方がいいぞ」

デイエンド「この声は…」

揺らぐガンマに助言するように1人の男性が現れて言う。デイエンドは嫌な顔をした。

デイエンド「また僕の邪魔をする気かい？士」

こちらに向かってくる男性『門矢 士』にデイエンドは言う。

士「お前が子供相手に大人気なくしてるからだろ？」

デイエンド「じゃあ、どうするつもりだい？」

士「こうするんだよ。変身！」

【KAMENRIDE DECADE！】

腰にベルトを装着してカードを装填すると左右から閉じると仮面ライダーに変身した。

デイケイド「さて、少し手助けしてやるか」

ピンクじみたマゼンタのボディに、バーコード状の縞々フェイスであるエキセントリックな容姿を持つ仮面ライダー『仮面ライダーデイケイド』は言うのだった。

デイエンド「土、また僕の邪魔をする気かい？」

デイケイドにデイエンドは言う。

デイケイド「お前が言うな。まだ戦いのゴングは鳴ってねーんだぞ？」

デイエンド「それがどうしたの？早めに優勝候補を潰せば僕が有利になるし、何より…」

ガンマの描かれたカードを見せるとデイケイドは「はあ…」とため息をついた。

デイケイド「またお宝か？」

デイエンド「そ、この子はどの世界のライダーのも当てはまらない未知数の力を持つてるからね」

デイケイド「はあ…いい加減にしろよ、海東」

デイエンド「僕のことをよく知ってる君なら分かっていると思うけど…すべてのお宝は僕が戴く!!」

そう言ってデイエンドは発砲する。

デイケイド「はッ!!」

発砲されたデイケイドは専用武器である『ライドブッカー』のソードモードでデイエンドの攻撃を斬り落とす。

ガンマ「しぐまま…!」

デイケイドとデイエンドが戦っている隙にガンマはシグナムたちと戦っているイクサ、斬鬼、レイの方に向かっていく。

ライア「デアっ!!」

ガイ「オラア!!」

デイエンドの銃撃を防いだデイケイドにライアとガイが襲い掛かった。

デイケイド「お前らにはこいつで相手をしてやるよ」

そう言ってデイケイドは1枚のカードを出すとデイケイドライバーのバックルを開いて挿入した。

【KAMEN RIDE RYUKI!!】

はははははは!!」

ツボを押されて2人は急に笑い始めた。

変身が解除される程に…。

（デイエンドの変身が解除されてイクサ、斬鬼、レイの3人も消えた。

士「お、おい…はははははは、夏みかん！お前…はははははははははは!!」

夏海「2人揃って周りに迷惑をかけすぎです！」

士と海東の笑いのツボを押した張本人の女性——『光 夏海』は言う。

夏海「ごめんなさい、私の仲間がご迷惑を…お詫びとは何ですが手当をさせていただきます」

相手が消えて困惑しているシグナムたちに夏海は言うのだった。

夏海に案内されたシグナムたちは写真館の待合室にてコーヒーとジュースを出されてもてなしをされていた。

夏海「本当にごめんなさい！」

シグナムたちに夏海が士と海東の代わりに頭を下げる。

因みに士と海東の2人はいまだに【光家秘伝・笑いのツボ】の影響で笑いつばなしで、リユイは変身を解いた時の反動でシグナムに抱っこされて眠っている。

シグナム「いや、気にするな。幸いにして怪我人は出ていないのだからな」

夏海「そう言ってもらえると助かります」

ヴィータ「それでアイツは^{海東}なんでリユイを狙ったんだ？」

夏海「実は…私たち、いろいろな世界を回って旅をしているんです」
ザフィーラ「世界を回って？」

夏海「世界って言っても仮面ライダーがいる世界のことです。そこで私たちはいろいろな仮面ライダーに出会いました」

ヴィータ「その仮面ライダーって何なんだよ？」

【仮面ライダー】という聞きなれないワードにヴィータは聞く。

夏海「仮面ライダーは人々の平和を守るために戦うヒーローのことです。まあ、あの2人は特殊ケースといますけど…」

士と海東の2人を見ながら夏海は仮面ライダーのことを簡潔に言う。

シグナム「それで、なんでリユイが狙われるのだ？」

夏海「海東さんは私たちのようにいろいろなライダーの世界を回っています。そして、その世界のお宝を盗んでいくんです」

ヴィータ「なるほど。アタシらの世界でのお宝が、リユイだったって訳か」

夏海「はい、その通りです。でも、もう大丈夫です。私たちがしっかりと海東さんを見張っておきますから！」

ヴィータ「そいつは安心だな…って、それよりアレはなんとかなん

ねーのか？」

話をしていた時にヴィータがある方向を指差した。
そこには笑いっぱなしになって瀕死になってピクピクと痙攣して
いる土と海東がいた。

夏海「大丈夫です。あの人たちは少し反省するべきです」

そうやって土と海東を放置する夏海。

ヴィータ「なのはみてーに酷いな…」

結構厳しい発言をする夏海にヴィータはそう言う。

リュイ「ん…」

反動が消えたのかリュイが目を覚ました。

シグナム「起きたかりュイ」

リュイ「おはなし…おわった？」

ヴィータ「丁度終わったところだよ」

夏海「それにしても。パツと見は普通の子供なのに仮面ライダーだ
なんて…」

意外そうに起きたリュイを見て言う。

リュイ「？」

夏海の言葉にリュイは首を傾げる。

シグナム「ではそろそろ帰るとするか」

立ち上がってシグナムは言う。

夏海「あ、玄関まで送ります」

そうやって夏海はシグナムたちを見送ったのだった。

その日、シグナムは管理局の医療室に来ていた。

治療のためではなくリュイの検査結果を聞きに来たのだ。

シグナム「シャマル。リュイの結果はどうだった？」

シャマル「それがリュイくんは…その…」

リュイの検査結果をシグナムに聞かれシャマルは言葉を詰まらせる。

シグナム「何か異常が見つかったのか!？」

言葉を詰まらせるシャマルにシグナムは心配して詰め寄る。

シャマル「異常と言えば…異常よ」

リュイを心配するシグナムにシャマルは検査結果を見せる。

シグナム「これは…!？」

検査結果を見たシグナムは驚く。

そこにはリュイの体重が一般的な子供の平均体重の5kgも軽かったのだ。

シャマル「リュイくんはかなり痩せちゃってるわ」

シグナム「そう言えばあまり食事を食べないな…これ以外に何か異常はないのか？」

シャマル「ええ、体重が軽いこと以外は健康そのものよ」

シグナム「そうか…ではリュイが野獣のように狂暴になったのはなぜだ？」

【アマゾンマンション】にて、一時的にリュイが自身にも攻撃するほど凶暴化したことを思い出しながら聞く。

シャマル「多分、リュイくんが野獣みたいになったのは自食作用オートファジーに似た現象だと思うわ」

シグナム「オートファジー？」

【オートファジー】と聞いて、シグナムは首をかしげた。

シャマル「人が飢餓状態になって生命の危機に直面すると自身の細胞を分解して一時的に回避することよ。リュイくんの場合他の生き物を食べようとしていたのかもしれないわ」

シグナム「一時的にアマゾンとしての本能が目覚めたのか……」
シヤマル「ええ。でもシグナムの話聞く限りだと例え自食作用オートファジーが発動しても少なくともシグナム、貴女の言葉だけには反応するみたいだからね」

シグナムの声を聞いて元に戻ったことを聞いていたシヤマルは言う。

シグナム「そうだな」

自食作用オートファジーで凶暴化していたとしても、母親シグナムの声だけは反応し、正気を取り戻せると聞いて、シグナムの中でリュイへの一層の愛情が芽生えた。

シグナムがシヤマルと話をしている時、リュイは家のリビングでザフィーラと留守番をしていた。

リュイ「わんわん…もふもふ…」

相変わらずザフィーラの体をもふもふしていた。

ザフィーラ「り、リュイ…流石にそこは…むぐつ」

犬で言えば1番触ってほしくない鼻辺りを触られてザフィーラは嫌がるがリュイは気にせず触る。

リュイ「!」

ザフィーラを触られていたリュイは誰かの視線に気づいて窓から外を見た。

リュイ「?」

外を見たリュイだったが誰もいなかったので首を傾げる。

ザフィーラ「どうかしたか?」

リュイ「ううん…なんでも…ない…」

ザフィーラに聞かれてリュイはそう答えると再びもふもふし始めた。

?「アレが今の皇子…ただのガキか…」

リュイのいる家から数km離れた木の上で見ているスーツを着た男性がいた。

？「どれだけ俺を楽しませてくれるかな…この俺を…」
不適に笑いながら男性は言うのだった。

最凶の狩人

h u n t i n g 58

リュイ「ここ…どこ…?」

その日のリュイはインターミドルの会場に来ていたが余りにも人が多く、一緒に来ていたはやてたちとはぐれてしまっていた。

今日はミウラが出る大事な試合で応援に来たのだがこの状況なのだ。

必死になつてはやてたちを捜すリュイ。

その時、辺りの風景がガラリと変わった。

色が無くなって白黒に、時が止まったように何もかもが動かなくなっていた。

リュイ「?」

何が起こっているのか、突然のことでリュイは混乱していた。

? 「やつと会えたな」

混乱しているリュイに1人のスーツを着た男性が現れた。

リュイ「おにーさん…だれ?」

ネバー「そうだな…ネバーとでも名乗っておこう」

リュイに聞かれて男性は『ネバー』と名乗った。

リュイ「その…ねばあが…なにか…よう…なの?」

ネバー「ふつ、俺の目的はただ1つ。八神 リュイ…いや、アマゾンガンマ!お前の命だ!!」

ネバーはそう言うのとリュイより黒く、両目のような部分が紫色のアマゾンズドライバーを出して腰に巻いた。

シグマ!

ネバー「アマゾン…」

左側のグリップを捻り、そう言つて再び捻ると辺りに熱気と衝撃波を放ちながら姿を銀色の体表面、わずかにオレンジ色に染まった胸部装甲、紫色の複眼を持つアマゾンライダーになった。

シグマ「仮面ライダー…アマゾンシグマ、見・参…」

シグマ「1!!」

シグマは投げたガンマに一気に追いつくと蹴り上げた。

シグマ「2!!」

蹴り上げたガンマを追って跳躍するとアリーナの方に殴り飛ばした。

シグマ「3!!」

手刀にした手をガンマに向かって繰り出す。

ガンマ「ぐっ…ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ガンマも殺られているばかりにいかずにレッグカッターで対抗しようとする。

2人のアマゾンライダーの姿が重なるとアリーナに屋根を突き破った。

アリーナではインターミドルの予選が行われていた。

しかし突然屋根が崩れたために予選の大会は止まり、ざわついていった。

ザファイラ「何だ!?!」

ヴィータ「屋根が崩れたみたいだがなに…!?!」

突然屋根が崩れたのを見てミウラのセコンド役になっていたザファイラとヴィータは警戒していたが埃が晴れてあったのはシグマの手刀に胸を貫かれたガンマの姿があった。

シグマ「しまった…1手早く過ぎたか」

1手早くガンマを倒したシグマは貫いていた手刀を引き抜いた。

ガンマ「が…あ…ああ…:…:…」

手刀を引き抜かれたガンマは3歩後退して仰向けに倒れてしまった。

誰かの悲鳴がアリーナに響き渡った。

シグナム「リユイ、しっかりするんだ！」

インターミドルの会場から近くの病院にてストラクチャーに寝かされ、運ばれるガンマを呼び掛けるシグナム。

体はボロボロで所々に傷があった。

シグナムの反対側にはシャマルが他のナースたちと走っている。

「すいませんがここまでです」

処置室前でナースに止められるシグナム。

シグナムを止めたナースが入ると運ばれたガンマがいる処置室の扉が閉まった。

シグナム「リユイ……」

拳を強く握りシグナムは怒りを露にしていた。

それは今から3時間前の出来事だ。

ガンマがシグマの前に胸を貫かれ倒れた時だった。

突然現れガンマを倒したシグマに観客は驚いて逃げていた。

シグマ「ふん、この程度か」

倒れたガンマを見てシグマは言う。

シグマ「ん？」

殺気に気付いてシグマは振り向きざまに何かを掴んだ。

巨大化なハンマー——騎士服になりアイゼンを持ったヴィータだった。

その眼光はシグマへの怒りが込められていた。

シグマ「ただの人間が何のようだ？」

ヴィータ「うるせえ！テメエ、よくもアタシらの家族を!!」

シグマ「家族?…ああ、この雑魚のことか？」

倒れているガンマの顔を踏みながらシグマはヴィータを挑発する。

ヴィータ「その足を離しやがれ!!」

怒り任せにアイゼンをシグマから離すと再び振り下ろした。

振り下ろされたアイゼンはシグマの首を1回転させた。

ヴィータ「どう…!？」

殺ったかと思いきやシグマは自身の首を掴むと再び1回転させて元の位置に戻した。

シグマ「何がどうした？」

ヴィータ「ば、化け物かよ……」

何事もなく首を戻して喋るシグマにヴィータは恐怖心を走らせる。

シグマ「失せな、人間！」

エネルギーを纏わせたシグマの蹴りがヴィータの腹部に命中した。

ヴィータ「がはっ!？」

腹部に蹴りを喰らいヴィータはアリーナの柱に叩きつけられた。

シグマ「やはり……人間はつまらん」

一撃でヴィータを倒したシグマは呟く。

はやて「ほならウチらが相手やで!!」

シグマ「ん？」

声の方を見ると本来ならミウラたちの応援をしに来たはやて、フェ

イト、なのはの3人がバリアジャケットを纏っていた。

シグマ「ふん……闇の書……いや、今は夜天の書の保有者とただの魔法

使いか」

はやてたちを見るなりシグマはつまらなそうに言う。

なのは「かなり嘗めてるみたいだから少し頭を冷やそうか？」

つまらなそうに言うシグマになのはレイジングハートを向ける。

だが次の瞬間、シグマは跳躍し右側のアームカッターでなのはの首

を切り落とした……ビジョンが流れた。

「!!?」

ビジョンを見てはやてたちはシグマから距離を取る。

シグマ「いい判断だな。実際に距離を取らないとそうなっていた」

小馬鹿にするようにシグマは距離を取ったはやてたちに言った。

なのは「い、今のって……」

フェイト「自身のイメージをビジョンで私たちに見せた……!？」

はやて「いったい……何者なんや……」

自身のイメージを自分たちにビジョンとして見せてきたシグマに

はやてたちも恐怖心が走る。

シグマ「ふっ、つまり…!?!」

はやてたちの恐怖心を感じていたのかシグマが言っているその後ろからヴィータ以上の殺気に満ち溢れた人物が斬りかかってきた。シグナムだ。

シグナム「貴様が…貴様がリュイをおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

クールな彼女とはかけ離れた怒りと憎悪を露にしながらレヴァンティンを振り下ろした。

シグマ「チツ!」

シグナムの斬撃が速すぎて対応しきれないシグマは右腕を肘から下を斬られるが直ぐに回収して後ろに下がった。

シグマ「今の時代にもお前のような戦士がいたとわな。少々驚いたぞ」

シグナムから感じる怒りと憎悪にシグマは言う。

シグナム「今の私は貴様を斬ることしか考えん。覚悟しろ!!」

レヴァンティンを構えながらシグナムは言う。

シグマ「くくくく、そいつは楽しみだな…つと言いたいが生憎とタムオーバーだ。あばよ!」

そう言っつてシグマはアリーナの壁を破壊して粉塵を撒き散らして姿を眩ましたのだった。

そして事態を收拾するためにはやて、フェイト、なのはは現場に残り、シグナムはガンマを、ザフィーラはヴィータを抱えてシヤマルと共に病院に来たのだ。

幸いにしてヴィータは騎士服のお陰で大事には至らなかつたが胸を貫かれたガンマは緊急手術をすることになったのだ。

シグナム「シヤマル…リュイを…リュイを助けてくれ…」

神にでも祈るようにシグナムは近くの椅子に座って願っていた。

そんなシグナムの姿をザフィーラと処置が終わったヴィータは見ていたのだった。

はやて「シグナム!」

リュイが担ぎ込まれた病院に現場検証していたはやて、なのは、フェイト、そしてインターミドルに参加していたチームナカジマのメンバー(ヴィヴィオ、リオ、コロナ、アインハルト)、ミウラが来た。はやて「リュイは!?!」

シグナム「まだ…手術が終わらないようです…」

なのは「胸を貫かれてたからね…」

ガンマがシグマに胸を貫かれたことを思い出して言う。

シグナム「くっ…私がしっかりしていれば……」

フェイト「アレは誰も対応できないわ。突発的すぎたから……」

シグマとガンマが現れた時にすぐさま反応するのは誰であろうと難しい。

すると『手術中』のライトが消えてシャマルが出てきた。

シグナム「シャマル!リュイは!?!」

シャマル「それが……」

シグナム「リュイ!」

シャマルを退けてシグナムは処置室に入った。

シグナム「!?!」

シグナムが処置室に入るとそこには点滴も何も付けられていないで、ベッドに寝かされているリュイがいた。

シグナム「まさか…そんな……」

リュイを見てシグナムは膝を着いてしまった。

シグナム「リュイ……」

眠っているリュイを見て膝を着いたシグナムは泣きそうになっていた。

リュイ「んく…しぐまママ?」

泣きそうになっていたシグナムの声を聞いてリュイがベッドから起きた。

シグナム「リ、リュイ!?!」

起き上がったリュイにシグナムは驚き、慌てて立ち上がり近寄った。

リュイ「どう…したの…?」

驚いて近寄って来たシグナムにリュイは心配そうにしていた。

シグナム「リュイ…体はもう、大丈夫なのか?」

リュイ「うん…なんとも…ないよ…」

胸を見せてリュイは言うのと、シグマの手刀で貫かれてできたハズの大穴が開いていなかった。

シグナム「よかった…よかった…」

無事なリュイを見てシグナムは自身に抱き寄せるとそう言って泣き始めた。

リュイ「しぐまま?」

泣いているシグナムを見てリュイは首を傾げていた。

そんな姿をはやてたちは見ていてヴィヴィオ、リオ、コロナ、アインハルト、ミウラ、アギト、ライン、付き添いでノーヴェたちは駆け寄った。

はやて「よかった、リュイが無事で」

フェイト「さすがシヤマル先生ですね。傷も残らないくらいに回復させるなんて」

なのは「アマゾンだったから効きすぎたんですか?」

冗談交じりに言う面々に対し、シヤマルは少し浮かない顔をしていった。

ヴィータ「お、おい…どうしたんだよ?」

浮かない顔をしているシヤマルにヴィータは聞いた。

シヤマル「私…何もしてない…」

はやて「え?」

シヤマル「私が処置しようとした時にはもうリュイくんの体は治っていたの…」

フェイト「それって…」

なのは「リュイくんは…ただのアマゾンじゃない?」

人間であろうと、アマゾンであろうと胸を貫かれれば生命の保証は無い。

しかしリュイはシャマルが処置する前に傷が完治していたと聞いて、なのはたちは驚く。

シャマル「ええ。いくらアマゾンでもあんな傷を負えば下手すれば死んでしまうハズ…なのにな…」

致命傷とも言える傷を負ったハズなのに処置する前にすでに回復していたと、生で見ているシャマル自身も驚いた。

はやて「リュイ…」

致命傷を短時間で治し、元気になっているリュイを見てはやては少し心配になっていた。

傷ついた小さな心

h u n t i n g 6 1

シグマ襲撃から数日後。

シグナム「ふむ、良い朝だな」

カーテンを開けて朝日を浴びるシグナム。

リュイ「んゝ…」

朝日を浴びてリュイは眩しいのか日陰を作る。

まだ眠くて仕方ないようだ。

シグマとガンマの戦闘でインターミドルは一時中断ということが決まった。

幸いリュイの正体はバレずに済んだことが八神家や関係者にとっては大きな救いであった。

ただ問題があるとすれば…。

シグナム（また泣いていたのか…）

リュイの顔に涙の痕を見つけてシグナムは思う。

シグマに敗北して以来リュイは毎晩のように泣いているのだ。

悔しくて泣くのならないのだがそれだけではない。

今のリュイは変身して戦うことが出来ないのだ。

3日前のビートルとスタッグアマゾンとの戦いの時である。

当初はリハビリもつもりで戦うはずだったのだが変身して直ぐに発作を起こして戦うことが出来なかったのだ。

その時はシグナムたちによって撃退されたので事なきを得たが：シグマによる敗北の恐怖がリュイの中に根強く残ってしまっているようなのである。

シグナム「リュイ…」

流星のシャマルでも心に根付いてしまった恐怖心まで治すことは出来なかった。

リュイの頭を撫でてシグナムは静かにドアに向かって部屋を出てリビングに向かった。

シグナムがリビングに行くとはやてたちがすでにいた。

はやて「シグナム：リュイの様子は？」

シグナム「昨晚も泣いていたようで今も寝ています」

はやて「そうか」

シグナムからリュイの様子を聞いてはやては言う。

ヴェータ「仮面ライダーアマゾン シグマ：アイツにボロボロにさ

れたんだ。無理はねえよ。実際、あたしだって今でも夢で見る…」

シグマによる恐怖心はリュイほどではないがヴェータも戦ったから分かるように言う。

ザファイラ「何とかしなければいずれ奴はリュイを狙って現れるぞ」

ザファイラの言うとおりである。

いずれガンマことリュイが生きていると分かればシグマは再び姿を現すであろうからである。

その時、もしリュイが今のままでは戦うどころか一方的に殺されてしまうからだ。

はやて「せやな…でもこればかりはウチらでどうこう出来る問題やないで」

シャマル「そうね。これはリュイくん自身の問題だものね」

シグナム「だがどうにかせねば…」

例え戦えなくともリュイが今の状態が続けばリュイ自身にとってよろしくないと考えるシグナム。

リイン「あ、そうです！あれがありました！」

何か思い出したのかリインはリビングを出て自身の部屋に向かった。

リイン「シグナム、明日リュイくんと行くといいですよ！」

戻って来たリインはそう言って2枚の水族館親子ペアチケットを手渡した。

アギト「なるほど、水族館に行ってリュイの心のケアをするわけだな！」

シグナム「そうか…主はやて」

はやて「シフトは何とかしとくから行ってきや」

シグナム「はい」

はやてからリュイの心のケアを任されたシグナムは頷いたのだっ
た。

翌日、シグナムはリュイを連れて水族館に来ていた。

リュイ「しぐまま…?」

水族館を知らないのかりュイは不安な眼差しでシグナムを見た。

シグナム「大丈夫だ。安心するんだ」

不安なリュイにシグナムは優しく頭を撫でて言う。

リュイ「……………」

シグナムに言われてリュイは少し安心する。

安心したリュイを見てシグナムは窓口に行ってラインから貰った

チケットを渡した。

スタッフ『親子二名の招待券ですね』

シグナムからチケットを受け取った窓口のスタッフはチケットに

判を押した。

スタッフ『では、お楽しみください』

判を押したチケットをシグナムに返す。

シグナム「リュイ、行くぞ」

リュイ「うん…」

チケットを受け取ってシグナムはリュイに言う入り口の方へ向

かう。

シグナムとリュイが水族館に行っている時、はやてたちは管理局に出勤していた。

ライン「あの2人…大丈夫ですかね」

はやて「大丈夫や、ライン。アマゾンが出ない限りシグナムがいれ

ばリュイは大丈夫やて」

心配するラインにはやてはそう言う。

ライン「そうですね」

はやて「そうや」

リュイ「ふわあぁ…」

入り口から入って直ぐにリュイは目を輝かせていた。

目の前に多くの種類の魚たちが泳いでいる巨大水槽であった。

リュイ「しぐまま…おしゃやかにや…いっぱい…」

巨大水槽の中を泳ぎ回る魚にリュイはすっかり興奮して間近まで走っていく。

シグナム「そうだな」

興奮しているリュイを見てシグナムは心から嬉しくなっていた。

今は戦えないとは言え、その原因である恐怖心を忘れて楽しんでるリュイの姿を見たからだ。

リュイ「しぐまま…はやく…」

一緒に見たいリュイはシグナムを呼ぶ。

シグナム「ああ。今行く」

リュイに呼ばれてシグナムは側まで向かって行く。

その後、シグナムとリュイは多少トラブルに見舞われながらも水族館を満喫した。

トラブルは触れ合いコーナーでリュイが持ち上げたタコがシグナムの顔面に墨を吐いたり、イルカショーで何故かシグナムだけにイルカが水を浴びせたりしたことぐらいである。

リュイはタコと初めて触れ合って感じたことのない感触に感動したり、イルカショーでイルカとの触れ合いに参加出来たりと楽しんでいた。

シグナム「はあ…」

ベンチに座ってため息を吐くシグナム。

色々トラブルに見舞われてしまったのだから仕方ない。

リュイは近くのトイレに行っていてこの場にはいない。

シグナム（しかし良かった…リュイが笑顔になって…少しはシグマの恐怖心を忘れることが出来たのかもしれないな）

触れ合いやイルカショーで笑顔になったリュイを見てシグナムはそう思っていた。

このままいけばリュイは元に戻れるかもしれない…。

リュイ「ふう…」

トイレに行っていたリュイは手を洗って出てきてシグナムの所に向かっていた。

リュイ「しぐ…」

女性「ちよつと、大丈夫?」

リュイ「?」

シグナムを呼ぼうとしたリュイは振り向いた。

リュイが振り向いた先には男女のカップルがおり、男の方が胸を押しさえて苦しそうにしていた。

女性「ねえ、大丈夫?」

男性「……………つた……………」

女性「え?」

男性「腹が…腹が減ったんだよおー!」

心配していた女性に男性はそう言いながら顔を上げると顔にはアマゾン特有の一部が火傷をしたように爛れ、さらに体からは煙まで上がっていた。

煙は勢いを増し男性の体全身を包み、周囲に熱波が放たれた。

グ レー ビー ト ル ア マ ゾ ン 「グ ゴ ガ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

煙が晴れると灰色のビートルアマゾン（以降「グレービートルアマ

ゾン」がそこにはいた。

女

性

「きや

あああああああああああああああああああああああ!」

現れたグレービートルアマゾンに女性は悲鳴を上げて尻餅を着いてしまった。

女性の悲鳴を聞いて周りの客たちは我先にと逃げ始めた。

グ レー ビー ト ル ア マ ゾ ン 「グ ゴ ガ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

雄叫びを上げるグレービートルアマゾンは女性に近付き両肩を掴

んで抵抗出来ないように押さえると頭から噛り、捕食しだした。

喰われる前に女性は逃げようとしたが腰が抜けて動けなかったのかアツサリと喰われてしまったのだ。

リュイ「あ…ああ…」

グレービートルアマゾンの色にリュイはシグマを連想してしまい無くなっていった恐怖心が再び目覚めて動けなかった。

グレービートルアマゾン「グゴルルルルルル…」

女性を丸々一人喰ったグレービートルアマゾンは次の餌を探してキョロキョロするとリュイに狙いを定めた。

リュイ「ひっ!？」

狙いを定められたリュイのビジョンにはグレービートルアマゾンがシグマとして映り、尻餅を着いてしまった。

グレービートルアマゾン「グゴガ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

リュイを格好の餌と判断したグレービートルアマゾンは口を開け、鋭い牙を剥き出しにすると背中の中を甲羅を開き翔を出して羽ばたかせると一気に接近してきた。

接近してくるグレービートルアマゾンが見えて、あの時の恐怖心に支配されたリュイは目を瞑る。

その時、金属同士がぶつかり合う高い音がした。

リュイ「?」

何が起きたのか恐る恐る目を開けるリュイ。

シグナム「大丈夫か、リュイ!!」

レヴァンティン『Is it alright? Rui』

グレービートルアマゾンの牙を防いでリュイを守るシグナムとそのデバイスであるレヴァンティンの姿があった。

シグナム「はあああああああつ!!」

シグナムのレヴァンティンの斬撃がグレイビートルアマゾンを斬り裂いた。

グレイビートルアマゾン「グギャアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?」
斬られたグレイビートルアマゾンは悲鳴を上げながら後ろへ飛んで距離を取る。

リュイ「し、しぐ…まま…」

声を震わせてリュイはシグナムを見て呼ぶ。

シグナム「良かった。怪我は無いうだな」

怪我が無いことにシグナムは安堵した。

グレイビートルアマゾン「グゴガ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

雄叫びを上げたグレイビートルアマゾンは背中を開いて薄茶色の羽を出して高速で羽ばたかせて体を浮かすとシグナムとリュイに向かって突進してきた。

シグナム「リュイ!」

突進してくるグレイビートルアマゾンを見てシグナムはリュイを空いていた手で抱えると左に跳んで回避した。

回避されたグレイビートルアマゾンは2人がさっきまでいた場所の床に激突した。

グレイビートルアマゾン「グガゴ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

瓦礫を退かしてグレイビートルアマゾンは雄叫びを上げる。

雄叫びを上げるグレイビートルアマゾンは2人の姿を捜した。

シグナムとリュイは近くの飼育員用の通路に逃げ込んでいた。

丁度隠れられる壁まで来てシグナムはリュイを降ろした。

シグナム「リュイ、怪我やどこか痛いところはないか?」

リュイ「だい…じょうぶ…」

シグナムに聞かれてリュイは答える。

リュイ「しぐまま…ごめん…なさい…」

急に涙を流して謝り出すリュイ。

シグナム「リュイ…」

リュイ「ぼくが…こわくて…たたかえないから…しぐままに…」

本来なら自分が戦うハズなのだが未だにシグマによる恐怖で戦えず、その分シグナムに負担を掛けてしまっていることにリュイは気付いていたのだ。

その言葉を聞いたシグナムはリュイの頭に手を置いて優しく撫でた。

シグナム「リュイ…私は大丈夫だ。私はアマゾンと戦うことを負担とは思ってなどいない。ましてやお前が変身出来ずに戦えないことを責めたりしない。誰にだって恐怖心はある。私だってある程だ」

リュイ「しぐまま…」

シグナムの言葉を聞いてリュイの心に光が射し始めた。

グ レ イ ビー ト ル ア マ ゾ ン 「グ ガ ゴ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

リュイ・シグナム「!!」

の声を聞いて顔を少し出すと2人を捜して辺りを破壊しているグレイビートルアマゾンがいた。

シグナム「奴め…ここを絞ってきたか…」

破壊しているグレイビートルアマゾンを見てシグナムは覚悟を決めた。

シグナム「リュイ、お前だけでも逃げ…」

シグナムが言いかけた時、リュイが飛び出した。

シグナム「リュイ!?!」

リュイの行動にシグナムは驚いた。

グレイビートルアマゾン「グルルルル…」

飛び出したリュイを見てグレイビートルアマゾンはヨダレを出した。

シグナム「逃げろ、リュイ!今のお前は…」

「グレイビートルアマゾン」の一件から3週間が経ったある日、シグナムははやてに呼び出されて、部隊長室に来ていた。

部隊長室前に来たシグナムは扉をノックすると部屋の中から「入ってええよ〜」っと返事が返ってきた。

シグナム「失礼します」

はやてから許可を貰ってシグナムは部隊長室に入ると、はやてだけでなくヴィータ、シヤマル、リイン、アギトのリユイとザフィーラ以外の八神家の面々が揃っていた。

はやて「これで全員みたいやね」

ヴィータ「なあ、はやて。なんでみんなを緊急で呼んだんだよ?」
全員を呼んだ理由をヴィータが聞くと、はやては真剣な顔をして話し始めた。

はやて「実はなみんなに集まってもらった。アマゾン細胞を不法に研究していた製薬会社の一斉摘発があったやろ?」

はやてに言われて、全員は頷く。

まだ「アマゾン細胞」が発見されて間もない頃、とある製薬会社が管理局の研究機関からアマゾン細胞を強奪、違法な人体実験などを行い、生物兵器として売り出そうと画策していた。

それを捜査していた管理局はすぐさま鎮圧部隊を向かわせ、製薬会社所有の研究施設摘発を行った。

しかし局員たちが踏み込む寸前で研究所は謎の爆発を起こしてしまふ。

研究員は全員死亡、研究として生み出された実験体アマゾン4000体が野に放たれることになった。

はやて「その時の報告がやつと纏まってな、ウチも確認しとったんやけどその中にくつか気になる報告があったんよ…」

シグナム「気になることとは?」

はやて「実は、その製薬会社…ある人物がある実験に携わって記録があったんよ。みんなも知つとる人物…ジエイル・スカリエッティ

や」

『なっ!?!』

はやての口から出た人物の名前に全員が驚きすぎて言葉を失った。
【ジェイル・スカリエッティ】、かつて次元世界を震撼させた事件【J
S事件】の黒幕にしてギンガとスバル以外の戦闘機人であるチンクた
ちの生みの親。

古代ベルカ時代に使われた兵器である大型戦艦【聖王のゆりかご】
を復活させて自らの野望を達成するために、レリックと実在した聖王
でありゆりかごの生体コアとなった王女【オリヴィエ・ゼーゲブレヒ
ト】のクローンで、まだ幼かったヴィヴィオを利用した。

しかしはやてたちの活躍によりスカリエッティは捕縛され、事件解
決に非協力的だった4人の戦闘機人と共に軌道拘置所に収監されて
いる。

ヴィータ「だけど、スカリエッティの野郎がアマゾンの研究に関
わってるからって、アタシたちを呼び出すほどか?」

スカリエッティの存在には確かに驚きはしたが、呼び出すほどかと
ヴィータは聞くが、シグナムだけは違う反応をして言った。

シグナム「まさか、スカリエッティが関わっていたのというと…」
シグナムは先を予測するとはやては頷いて先を離れた。

はやて「せや。スカリエッティはこの頃はある研究をしとったん
よ」

アギト「それってまさか…」

はやて「プロジェクトF：フェイトちゃんやエリオ、ヴィヴィオを
生み出すきっかけとなったプロジェクト。そして、その製薬会社はス
カリエッティにクローンを作らしてそのクローンにアマゾン細胞を
移植する実験をな」

シグナム「では、リュイは誰かのクローン…」

このシグナムの言葉をきっかけとして、話が分からなかったヴィー
タとシャマルもなにかに気づいたのかハツとした。

それはリュイがフェイトやエリオ、ヴィヴィオのように誰かのク
ローンで、アマゾン細胞を移植された実験体であるということだ。

シャマル「それならリユイクんに人間の細胞とアマゾン細胞があったことに納得がいくわ」

グイータ「ようするにリユイは誰かのクローンで、産まれる過程でアマゾン細胞を移植された…」

リユイが産まれた経緯の仮定を聞いて、シグナムは奥歯を噛み締めた。

どんな経緯があれ、この世に生を受けたことは何ら罪はない。

しかし実験の為だけに産み出された命、消え行くことを前提で、人が使う消耗品のように人として、命として扱わなかつただろう研究者たちへの行き場のない怒りがあつたのだ。

はやて「今となつては研究者全員が研究施設と一緒にこの世から消えてしまつとるから詳しいことは分からへん」

シグナムの心情を察したはやても同じ気持ちながらも組織の上に立つものとして公私混同は出来ずに冷静を装いながら言う。

リイン「でもどんな風に産まれたとしても、リユイクんは私たちの家族です」

シグナム「リインの言う通りだ。リユイは私たちの家族です、産まれた経緯がどうであれ、人間なのですから」

リインとシグナムの言葉に同意するように他の面々は頷く。

リユイが誰かのクローンであつても家族なのには変わらないのだ。

はやて「せやな。リユイの産まれた経緯の詳細はスカリエツティに聞いたですつもりや。それとこの事はうちらだけの秘密や。時が来たらなのはちやんたちにも伝える。ええな？」

はやての決定にシグナムたちは頷くのだつた。

アマゾンレストラン

h u n t i n g 66

ミッドチルダの校外にポツンと1軒の洋食レストランがあった。
その洋食レストランに1人の男性が入店した。

シェフ「いらつしやいませ」

男性が店内に入るとシェフらしき小太りで物腰も柔らかそうな男性が笑顔で出迎えた。

男性「あの、ここって営業してます?」

店内を見て男性は辺りが暗く椅子もテーブルに上げられているのを見て聞いてきた。

シェフ「はい、大丈夫ですよ。ですがただ今満席ですので少々席が空くまで別室でお待ち下さい」

微笑みながらシェフはそう言って男性を案内する。

シェフが男性を案内したのは業務用の冷凍庫がある部屋だった。

シェフ「恐縮ですがここでお待ち下さい」

微笑みながらシェフは一礼して部屋を出ていく。

男性はシェフに言われて部屋に待つことにした。

しかし男性は気付いていなかった。

シェフが男性に気付かれないように部屋に鍵を掛けたことを…。

男性を部屋に案内したシェフは入口から少し奥にある部屋にやって来た。

そこには席についた数人の男女の客がいた。

客を見てシェフは一礼し、客も一礼する。

シェフ「本日はお越しいただきありがとうございます。本日も腕に頼をかけて作らせていただきます」

客にそう言ってシェフは部屋を出る。

部屋を出たシェフが向かったのは男性がいる部屋だった。

鍵を開けて部屋に入る。

シェフが入ってきたのを見て男性は席が空いたかと思い、椅子から立ち上がった。

シェフ「それではその命、いただきます」

一礼してシェフは男性にそう言った。

男性「へ？」

シェフの言葉に男性は首を傾げるとシェフの体から煙が吹き出して姿を変えた。

全身各部に鋭い棘を有した頑丈な殻を持ち、腕部には巨大なハサミを持ったアマゾンになった。

男性「なっ、うわああああああああああああ!!？」

シェフが変身したアマゾンを見て男性は悲鳴を上げた。

その後、シェフに戻ったアマゾンは厨房でミンチ肉を作る機械――ミンチ器で何かの肉をミンチにしていた。

そしてミンチにした肉でハンバーグを作り上げ、さっきの客たちに出した。

出されたハンバーグを誰も何も言わずに食べ始めた。

メガネの男性「うぐっ!!」

ハンバーグを食べて暫く、半分くらい食べたスーツを着たメガネの男性が苦しみました。

シェフ「お客様、残念ながら今すぐ店を出てください…」

苦しみました男性にシェフはそう言う。

メガネの男性「分かって…ます…」

苦しみながら男性は立ち上がった。

メガネの男性「みなさん…いままで…ありがとう…シェフも…ありがとう…」

立ち上がった男性は他の客とシェフにそう言って部屋から出て最後は店を出た。

シェフは男性を見送った。

その表情は悲しい顔をしていた。

メガネの男性「うう…うぐはっ!!」

全て捨て終わった男性は蓋をすると厨房の外へ行ってしまったの
だった。

リュイ「うん…」

目を覚ましたリュイの視界に見覚えのある屋根があった。

リュイ「おうち…だ…」

起き上がって辺りを見回したリュイは自分がシグナムたちと暮らしている家の部屋だと気付く。

リュイはベッドから降りると部屋から出た。

寝起きで少しフラついてはいるが確りとした足取りでリュイはリビングに向かう。

リュイがリビングに着くとシグナムとはやて、そしてティアナがいて何かを話していた。

リュイ「しぐまま〜♪」

何か話してはいるがシグナムを見て甘えなくなったりリュイは後ろからシグナムに抱きついた。

シグナム「リュイ。もう起きて大丈夫なのか？」

リュイ「うん…てーなの…おかげ…」

シグナムに言われてリュイはティアナを見ながら言う。

ティアナ「覚えてたんだ。私が運んだの」

リュイ「うん…ありが…とう…てーな」

ティアナ「どういたしまして」

はやて「リュイ、ティアナと少し難しい話をするからあつちでザフィーラと遊んででや」

リュイ「うん」

はやてに言われてリュイは窓際で寝ていたザフィーラに向かってダイブ、遊び始めた。

ティアナ「それで八神部隊長、例の件はどうですか？」

リュイがザフィーラで遊び始めてティアナは真剣な顔になりはやてに言う。

ティアナがはやてとシグナムと話していたのはティアナ自身が追っている事件で、どうやらアマゾンが関わっているらしくリュイに

協力を求めに来ていたのだ。

はやて「せやなあ…ウチとしては協力してもええけど、保護者はどや？」

シグナム「私は…本音を言えばリュイにこれ以上、危ないことをしてほしくない」

ザフィーラで遊んでいるリュイを見てシグナムは言う。

シグナム「アマゾンと互角に戦えるのは今の局にはいない。人々の命や財産を守りたい…だが…」

本音はリュイにこれ以上は戦いを強いたくない、だがアマゾンと互角に戦えるのは管理局にはいない。

人々の命や財産を守ろうとするばリュイに負担を強いる。

シグナムはリュイの保護者として迷っているのだ。

ティアナ「無理にとは言いません。私だってエリオやキャロより幼い子に戦いを強いたくありません…でも現状ではリュイの…アマゾン ガンマの力が必要なんです」

シグナム「……………」

ティアナの言葉を聞いてシグナムはザフィーラで遊んでいるリュイの姿を見る。

そして何かを決めたようにティアナに視線を戻した。

シグナム「分かった。リュイには私から言っておく。ただし！作戦には私も参加させてもらう!!」

ミッドチルダ某所にある洋食レストラン。

洋食レストランから少し離れた路上に1台のトラックが止まっていた。

局員A「また入りました」

局員B「これで5組目です」

モニターでレストランに入っていく客を確認する。

トラックの荷台に偽造された移動指揮所である。

中には外部カメラを確認するモニターや通信機などが取り揃えられていた。

ティアナ「分かりました。お二人は準備いいですか？」

報告を聞いたティアナはシグナムとリュイに言う。

2人はティアナに言われて頷くとトラックから降りた。

トラックから降りた2人は私服姿でレストランの方へ向かっていく。

理由はティアナが扱っている事件は何人も人間が行方不明になっており、職業・年齢・体質などはバラバラで唯一共通するのが全員がこの管理世界のレストランに入っているという。

もしかしたらアマゾンマンシヨンのように複数体がいる可能性があるため、アマゾンを感じできるリュイと援護できるシグナムが入店して数を計り、ティアナが魔導師を率いて突入することになっている。

シグナム「行くぞ、リュイ」

リュイ「うん……」

シグナムがレストランの扉を開けて入店した。

シェフ「いらっしやいませ」

2人が入店するとシェフが出迎えた。

シグナム「あの、ここやっていますか？」

初めて来た一般客を装ってシグナムはシェフに聞く。

シェフ「はい、やっております。ご案内しましょう」

笑顔でシェフは先を案内する。

着いていこうとするシグナムだが直ぐに引つ張られる感覚を感じた。

見るとリュイがシグナムの服を掴んでいた。

シグナム「どうした、リュイ」

小声で

リュイ「しぐまま…あのひと…あま…ぞん…」

シグナムにシェフがアマゾンだと伝える。

シグナム「やはりか…」

リュイに伝えられたシグナムは服の下に隠している愛レヴァンティン機を握る。

シグナム（1体だけなら私とリュイで何とかなるか…）

シェフ「どうかされましたか？」

シグナム「いえ、なんでも…」

シェフに聞かれてシグナムは答える。

シグナムの言葉を聞いてシェフは「そうですか」っと言って奥へ2人を案内する。

案内された2人が見たのは2人ずつ席についている数人の客たちだった。

部屋には子供用の椅子があるだけのテーブルがあった。

客たちはシグナムとリュイを一斉に見た。

リュイ「——!?!」

客たちが一斉に見てきてリュイはビクツとした。

シグナム「どうした？」

小声でリュイに聞く。

リュイ「み、みんな…あま…ぞん…」

シグナム「なっ!?!」

リュイの言葉にシグナムは耳を疑った。

シェフを含めてこの店にいる人間はリュイを除けばシグナム以外全員がアマゾンであると。

少なくとも10体はいることになる。

ティアナ「嘘でしょ…」

アマゾンマンションに引き続き、複数体のアマゾンが1ヶ所に集まっていることにティアナも驚いていた。

局長A「どうしますか？」

ティアナ「このままま作戦を続行するしかないわ。シグナムさん、危険かもしれませんがお願います」

無線でシグナムに指示を出した。

シグナム「分かった」

指示を聞いてシグナムは言う。

するとシェフが後ろから来た。

シェフ「あ、申し訳ありません。御子様用しかありませんでしたね。大変申し訳ありませんがお持ち込み様は別室でお待ち下さい」

シグナムに言うシェフ。

リュイ「しぐまま…」

1人なるのが不安なのかリュイはシグナムの服を強く握る。

シグナム「大丈夫だ、リュイ」

リュイにそう言って安心させるシグナム。

リュイ「うん…」

シグナムに言われてリュイは服から手を離れた。

シェフ「ではこちらへ」

笑顔でシェフは言うとしグナムと共に更に更に店の奥へ行ってしまった。

リュイ「……………」

1人になったリュイは用意されている御子様用の椅子に座って状況をみることにしたがまだ不安なのか、少々緊張していた。

一方、リュイを1人にしてシェフと移動していたシグナムは業務用の冷蔵庫がある部屋に来た。

シェフ「大変恐縮ではありますがこちらでお待ち下さい」

そう言ってシェフはシグナムに一礼すると部屋を出ていく。

シェフが出て行ってシグナムは扉のドアノブに触れるが鍵が掛けられているのか開かなかった。

シグナム「やはり、鍵は掛けられているか…」

鍵を掛けられてレヴァンティンでこじ開けられるだろうがそうすれば他のアマゾンたちにバレて逃がしてしまうかもしれないからだ。

他に脱出経路を探そうとしてシグナムは冷蔵庫を見た。

アマゾン人は人肉を食べるがなぜ冷蔵庫があるのかと疑問に思っていたのだ。

シグナム「まさか……………」

嫌な予感がしてシグナムは冷蔵庫を開けた。

そこにあつたのは全身の皮を剥がされた人の死体だった。

シグナム「なんと惨いことを…」

死体を見てシグナムは吐きそうになるのを我慢する。

シグナム「リュイ……………」

吐きそうになる我慢よりシグナムはリュイを心配していた。

その頃、リュイはシェフからハンバーグを出されていた。

シェフ「熱いから気をつけて」

子供であるリュイに言うシェフ。

シェフ「それでは皆さん、ごゆっくり」

シェフはそう最後に言うのと厨房の方へ戻って行った。

シェフが行くとリュイ以外の客は何も言わずにハンバーグに

フォークを刺してナイフで一口サイズに切り口に運んで食べ始めた。

リュイ「……………」

周りが食べているなかでリュイは食べていなかった…いや、食べたくなかった。

周りが全員アマゾンだと分かっているから食べているハンバーグ…その元が何なのか察しているからだ。

女性「何も心配することはないわ」

リュイがまだハンバーグを食べるのに戸惑いがあるのかと思ったのか女性が話しかけてきた。

女性「こうして少しずつ食べていけば…私たちが覚醒するのを防ぐの…確証はないけど、みんな静かに暮らしたいから」

リュイに優しく微笑みながら女性は言う。

リュイ「……………」

女性の話にリュイは心が少し揺らいでいた。

ただ静かに暮らしたい、アマゾンの中には人間社会に溶け込み、人間たちと変わらない生活を送りたいと細やかながら願っているところがあったからだ。

だが直ぐに揺らぎを取り払った。

リュイがハンバーグを出されて少ししてシェフはシグナムを閉じ込めている部屋に来ていた。

鍵を開けて中に入った時だった。

シグナム「はあああああー！ー！ー！ー！！」

扉を開けた瞬間、騎士服姿でレヴァンティンを構えたシグナムが扉を破ってきた。

シェフ「!?」

シグナムのレヴァンティンの刃がシェフの左脇腹をとらえた。

しかし、響いたのは金属同士がぶつかり合う高い音がした。

シグナム「くっ…」

レヴァンティンの刃は赤いハサミ—アマゾン化したシェフの腕にガードされてしまっていた。

シェフ「お前…魔導師だったか」

シグナム「ああ。既にこの店は時空管理局の知るところだ。この店は今日限りで閉店だな、シェフ」

シェフ「ふ、ふざけるなああああああああああ!!」

店を潰される訳にはいかないとシェフは体から蒸気を発して一気に沸騰するように高熱を出しながら姿を変えた。

シグナム「くっ!!」

高熱を出しているシェフからシグナム素早く離れる。

冷蔵庫の冷気とシェフから出た高熱で爆発が起きた。

爆発音と共に騎士服姿で、レヴァンティンを構えたシグナムとカニ

の姿をしたアマゾンが出て来た。

さらに店の入り口からティアナたちが突入してきた。

シグナム「リュイ!!」

リュイ「うん……!!」

シグナムに呼ばれてリュイはアマゾンズドライバーを出して左側のグリップを捻った。

【GA・M・MAー】

リュイ「あまぞん……」

【ANCI・AN・ANCIENT!!】

ポソリと呟いて再び捻るとリュイはガンマに変身した。

ガンマ「仮面ライダー……アマゾンガンマ…hunting sta

rt……!!」

変身して直ぐにガンマはカニの姿をしたアマゾンであるシェフこと【カニアマゾン】に向かっていくのだった。

射線上にはリユイに話しかけた女性だった。

カニアマゾン「危ない！」

シグナム「行かせるか！」

女性を助けようとするカニアマゾンをシグナムが妨害した。

シヨック弾が女性に命中しかけたとき、シヨック弾と女性の間にかが割って入り守った。

ガンマ「ぐうう!!」

女性を守った何か―それはガンマであった。

『!?!』

女性「あなた…何で…!?!」

人間の味方をしているガンマが自身を守ったことに女性と周りにいたティアナやシグナムたちは驚く。

ガンマ「わか…らない…でも…あなた…たちを…かること…できない…からせたく…ない…そう…おもった…だけ…」

ガンマ自身も何故、女性を守ったのかよく分からなかったようで、戸惑いを混ぜながら言う。

カニアマゾン「い、今さら味方面するな、裏切り者が!!」

怒りを露にしながらカニアマゾンはガンマにタツクルして掴むと入り口を破壊しながら外へ出た。

女性「……………」

ガンマの行動に戸惑っていた女性は我に帰ると直ぐに外へ出て逃げていく。

シグナム「待て！」

女性のを追いかけてようとするシグナムだが、人間態のアマゾンでも走る早さは本来の人間より早いために店を出て直ぐに見失ってしまった。

シグナム「逃げたか…」

女性や他のアマゾンたちを見失ってしまい、シグナムは店に戻る。

シグナム「ティアナ、大丈夫か？」

ティアナ「はい、私は…それより、シグナムさんはリユイのところ
に」

シグナム「分かった。ここは頼む」
ティアナにこの場を任せてシグナムはガンマのところへ向かう。

レストランから出たガンマとカニアマゾンは工事地帯に入っていた。
た。

作業員A「うわああああああつ!!」

作業員B「アマゾンだ!」

突然入ってきたガンマとカニアマゾンを見て作業員たちは慌てながら逃げていく。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

掴まれていたガンマは右側のアームドカッターでカニアマゾンを斬りつける。

カニアマゾン「うがああああああああつ!!」

斬られたカニアマゾンは怯んでガンマを離して、転倒してしまった。

ガンマ「グルルルル……」

カニアマゾンから解放されたガンマは地面を転がると直ぐに立ち上がって構える。

ガンマが構え終わるとカニアマゾンもまた立ち上がって構えていた。

カニアマゾン「お前達さえ……お前達さえ来なければ……まだ……あの店で……ウガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

恨み言を言いながらカニアマゾンはガンマに向かって行く。

ガンマ「うう……ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

カニアマゾンの一言にガンマは一瞬だが戸惑いを見せるが振り払って向かって行き、アームカッターで斬りかかる。

カニアマゾン「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

戸惑いを見せたガンマの攻撃を回避してカニアマゾンはハサミでガンマの首を挟んだ。

ガンマ「あが!」

カニアマゾン「コママ、挟み殺して、やル!!」

様子がおかしいカニアマゾンはハサミで首を挟むとガンマの体が持ち上げる。

右腕に付いているレジスターの目の部分が青から赤へ変化しており、薬が切れて本性が覚醒したのである。

ガンマ「あぐ…ぐつ…あ…」

気道を抑えられてガンマは息ができずに苦しみながらも何とか脱出しようとしてハサミを掴むが、力が強いのか全く動かせなかった。

ガンマ「か…あぐ…」

ハサミを離すのが無理ならとガンマは右手をドライバーに近づけてバトラীগリップを掴み、引き抜いた。

《バイオレント・ブレイク!》

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

バトラীগリップを引き抜いてアマゾンブレイドを出してカニアマゾンの腹部を刺した。

カニアマゾン「ガルガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

!？」

ガンマに腹部を刺されてカニアマゾンは驚き、ガンマの首を挟んでいたハサミを開いてしまった。

ガンマ「げほ…げほ…ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

解放されたガンマは息を吸うとカニアマゾンを蹴って突き放した。間を飽けずにガンマは立ち上がるとアクセラীগリップを捻った。

《バイオレント・ストライク!》

ガンマ「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

アクセラীগリップを捻ったガンマは少し助走を付け、跳躍してバイオレント・ストライクを放った。

カニアマゾン「うぎやあおおおおおおおおおおおおおおおおお

……………」

バイオレント・ストライクを喰らい、カニアマゾンは吹き飛ばされ、後ろに積み上げられていた錆びたドラム缶に激突。

中身が油か何かだったのか爆発が起きた。

ガンマ「……………」

爆発の炎を見てガンマはカニアマゾンや店にいたアマゾンの女性の言葉を思い出していた。

ただ、普通の人間たちのように平和に、ひっそりと暮らしていたい…それが彼らにとってはささやかな願いであった。

その言葉がガンマの…リュイの心に、微かだがしこりのようなものを残ってしまった。

リュイ「！」

変身を解いてリュイは自身の目なら涙が流れていることに気付いた。

シグナム「リュイ！」

そこへ、爆発音を聞いてきたシグナムが駆け付けてきた。

シグナム「無事か!? 怪我はないか!?!」

リュイの身を按じてシグナムは側による。

リュイ「う…うう…ごめん…なさい…ごめん…なさい……………」

側に来たシグナムに涙を流しながらリュイは抱きついて謝り始めた。

シグナム「……………」

最初は何故、謝り出したのか分からなかったが泣きじやくるリュイを見てシグナムは察して何も言わずに頭を撫でていた。

シグナム「落ち着いたか？」

しばらく泣き続けたリュイにシグナムは聞く。

リュイ「うん…」

シグナムに聞かれたリュイは頷いた。

リュイ「しぐま…おねがいが…あるの…」

シグナム「どうした？」

リュイ「もし…ぼくが…ほかの…あまぞんたち…みたいに…ひとを…はやばはや…びびおたちを…おそったり…たべようとしたら…そのときは…しぐまが…ぼくを…ころして」

シグナム「なっ!?!」

突然のリユイの言葉にシグナムは驚いてしまうのだった。

戦々恐々の狩人

cross hunting

カニアマゾンのアマゾンレストラン事件から数日後、フェイトはあ
る工事現場にいた。

辺りには無惨に散らかった鉄パイプや資材、赤く汚れて窓ガラスを
破壊されたシヨベルカーやダンプカーなどの重機、建っている鉄骨に
はポタポタと赤い液体が落ちていた。

そんな現場に複数の鑑識などが撮影と現場保存していた。

フェイトはその中で青いシートがある場所へ向かい、シートを上げ
て中へ入った。

中には体の一部あるいは半分以上を食われた工事現場の作業員の
遺体：いや、遺体だったのが並べられていた。

遺体は無惨にも食い散らかされ、バラバラにされてしまっているの
だ。

フェイト「状況はどうですか？」

近くにいた検死官をフェイトは呼び止めた。

「状況も何も…前と同じです。急所を一噛みで食い散らかされてま
す。中には死因すら分からないほどのものもありました」

呼び止められた検死官は気分が悪いのか早口で言うどフェイトに
一礼して足早に去っていった。

フェイト「これで7件目…」

遺体を見てフェイトは冷や汗を掻いてしまっていた。

「アア、ハラガヘツタゴチソウドコダー

ミッドチルダの郊外の路地裏に銀髪になり、目は紫色の青年が徘徊
していた。

徘徊している青年の前に数人のチンピラが現れた。

チンピラA「おいおい、この辺りは俺らの縄張りだぜ？」

チンピラB「通るなら有り金、全部出せよ」

青年の周囲を取り囲んでカツアゲをするチンピラたち。
ゴチソウダ、ゴチソウガキテクレタ。

自身の周囲を取り囲んでいるチンピラたちを見て青年は舌鼓を打った。

チンピラC「あ？なにニヤけてるんだよ！」

1人のチンピラが青年を殴ろうと胸ぐらを掴んだその時だ。

―イタダキマス―

殴ろうとしたチンピラの首を青年は姿を変えて噛み付いて皮を、肉を噛み千切った。

銀色の体色に、所々にオレンジ色の部分があり、顔はトカゲをモチーフにしている怪物になっていた。

チンピラC「え……」

何が起きたのか分からないチンピラCは数秒後に自身の首の一部を食われてしまい、傷口から血が噴水のように吹き出していることに気付いた。

チンピラC「あ……あ……」

自身が致命傷を受けた事にやっと気付いたチンピラCは仰向けに倒れ絶命した。

チンピラD「へ……へやあああああああああああああ!？」

仲間を目の前で食い殺されたのを見てチンピラDは驚いて悲鳴を上げて尻餅をついてしまう。

チンピラB「ば、化けm……」

チンピラBが何かを言いかけたが青年がなった怪物により肩から首を食われてしまった。

チンピラA「ひ、ひぎやあああああつーた、助けてくれー!!」

チンピラD「あ、おい、待ってく……」

逃げ出したチンピラAにチンピラDは助けを求めるが直ぐに無駄だと分かった。

何故なら自身の頭を怪物が掴んでいたからだ。

ニヤリと笑って青年は顔から出るものを全て出しているチンピラDを頭から食った。

―アト、ヒトリ―

チンピラDを頭から食った怪物は最後のチンピラAを追い掛けた。

チンピラA 「はあ…はあ…はあ…」

逃げたチンピラAは近くの廃ビルに入り、一気に階段を上がり屋上に逃げ込んでいた。

屋上から屋上へ屋根伝いで逃げようというのだ。

逃げ込んだビルの隣にも廃ビルがある。

柵を乗り越えようと片足を上げた時だ。

―ミツケタ―

チンピラA 「ひっ?!」

気配に気付いて振り向くとさっきの青年がおり、チンピラの足を掴むなりその姿を変えてアマゾンに似た怪物になった。

チンピラA 「はひ、ひい!!」

パニックっているチンピラAは急いで登ろうとするがパニックってて上手く上れなかった。

そんな中で怪物はゆっくり一歩一歩、近付いていた。

チンピラA 「ひあああああ………」

まごまごしていて遂に目の前まで怪物が来てしまい、チンピラAはお漏らしをしてしまった。

―イタダキマ…―

チンピラAの足を掴んで逃げられないようにして怪物は口を開いたその時だ。

? 「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

雄叫びと共に空から新たな影が落ちてきた。

落ちてきた影により屋上の地面は砕かれ、粉塵が舞う。

―ナンダ?―

奇襲を受けて怪物はチンピラAの足から手を離してしまっていた。粉塵が収まると1人の仮面の戦士がいた。

ガンマ 「グルルル!!」

黄色い体表面、緑色の胸部装甲、青い釣り目をした複眼を持ち、グ

ローブとブーツの部位にはカッターを持った戦士―『仮面ライダーアマゾン ガンマ』は喉を鳴らして威嚇していた。

―ゴチソウガフエタ。ウレシイ―

ガンマを見て怪物は嬉しそうにしていたのだった。

ガンマ（こいつ…いままでの…あまぞんと…ちがう…）

今対峙しているアマゾンを見てガンマは少し後退りした。

今まで相手したことの無いアマゾンだがどことなくアマゾンライダーのシグマに似ていた。

だがここで退くわけにはいかないとガンマの闘争本能は訴えていた。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

地面を蹴ってガンマは怪物に向かって走り出した。

―ゴチソウガキター―

向かってくるガンマを見て怪物は舌を出して嬉しそうに不気味に笑っていた。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

嬉しそうにしている怪物を見て気味が悪いと思っていたがガンマは跳躍して空中で回転してキックを繰り出した。

―イタダキマス―

キックを繰り出したガンマの足を掴むと地面に叩きつけた。

ガンマ「がはっ!!」

地面に叩きつけられてガンマに肺から空気が押し出される。

叩きつけるために掴んでいたガンマの足を怪物は食おうして口を開いた。

ガンマ「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

食われるわけにはいかないとガンマは体を捻って掴まれていないもう片方の足のレッグカッターで怪物の首を刺した。

レッグカッターが効いたのか怪物は掴んでいたガンマの足を離して数歩後退した。

数歩後退した怪物は傷口に触れた。

触れた個所には黒いアマゾン特有の血がついていた。

—コイツ：ツヨイ：タノシクナツタ—

怪物は自身の中で猛り踊る感情を感じて笑う。

ガンマ「グルルルル……」

方やガンマは今まで相手したことのない怪物に恐怖をしていた。

—ゴチソウ：ツヨイ：オイシソウ—

今度は怪物が先に動いてきた。

ガンマ「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

バイオレント・ブレイク!!

先に動いてきた怪物にガンマはバトラグリップを引き抜いてアマゾンブレイドを出すと逆手に持って向かって行く。

両者か交差して互いに反対側で止まった。

ガンマ「うぐっ!?!」

脇腹を押さえてガンマは膝を着いた。

ガンマの脇腹から血がにじみ出ている。

さっきの交差で怪物に脇腹をやられてしまったのだ。

—ヤット：タベレル：ゴチソウガ：タベレル—

方や怪物は手に付いたガンマの血を舐めながら接近する。

—イタダキマス—

ガンマに近づいた怪物は口を開けて捕食しようとする。

対するガンマは何とかしようと思ったが脇腹のダメージが大きいのか上手く体が動けなかった。

怪物の牙がガンマに触れかけた、その時だ。

シグナム「火竜：一閃!!」

—!?!—

突然、後ろから現れて火竜一閃を繰り出してきたシグナムに驚いて怪物は跳躍した。

ガンマ「にが……さない!!」

跳躍した怪物にガンマは跳躍してバトラグリップを捻った。

《バイオレント・ストライク!!》

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

バイオレント・ストライクを怪物の腹部に決めた。

腹部にバイオレント・ストライクを喰らって怪物は吹き飛ばされて屋上から地面に落下してしまった。

着地したガンマはすぐに下を見た。

怪物の姿は地面のどこにもなかった。

ガンマ「にげ……られた……」

怪物に逃げられてしまったがガンマは不思議と安堵感があった。

シグナム「リユイ！無事か!？」

呼ばれたガンマはシグナムの方を向くと変身を解いた。

リユイ「しぐまま……あまぞん……にげ……られた……」

シグナム「ああ、そのようだ。だが今度は私たち2人でやればきつと勝てる。さあ、主はやてが家で待ってる、帰ろう」

リユイ「うん……」

シグナムと手を繋いでリユイは帰路についた。

因みに怪物に追われたチンピラはガンマが戦っている間に気絶していたらしく、連絡を聞いてきたフェイトにより保護された。

リユイがシグナムと一緒に帰っているとき、怪物になっていた人物―シグマは森の中を歩いていた。

―アノゴチソウ：マタアツタラタベテヤル―

ガンマを食べなくて少し落ち込んでいるのかシグマは歩きながらそう思っていたがシグマはすでに今歩いている森の中はガンマがいた世界ではなく、自身がいる本来の世界だとは気づいてはいなかった。

特別回・医者で、ゲーマーで、ライダー!

Extra hunting cooking hamburger! Part 1

リュイ「あゝむ…ん…♪」

口を開けて両手でやっど持てる程の大きさはあるハンバーガーを食べるリュイは笑みを浮かべる。

シグナム「美味しいか?」

リュイ「うん…!」

ハンバーガーを食べてシグナムに聞かれたリュイは嬉しそうに頷いた。

19地区の奇跡の事件から数日後、リュイが最近なってハンバーグをねだるようになったのだ。

シグナム「……………」

ハンバーグを挟んでいるハンバーガーを食べるリュイを見てシグナムは前に言っていたお願いを思い出していた。

もしも、自分が他のアマゾンたちのように人を…シグナムやはやて、ヴィヴィオなどの親しい人たちを襲い、人肉を求めたり、食おうとしたら、シグナムに殺してほしい。

それがリュイがシグナムに頼んだことだ。

正直、シグナムはどうしたら良いか迷っていた。

そんな日は永遠に来てほしくない、だがもし本当にリュイを殺さなければならなくなった時、自分はその手に剣を握れるのか…人々を守る局員としてシグナムは一人で葛藤していた。

シグナム（私はどうしたらいいんだ…）

リュイ「?」

考えているシグナムを見てリュイは食べていたハンバーガーを一且置いてポテトを齧りながら首を傾げる。

リュイ「ん?」

ポテトを齧っていたリュイはハンバーガーをまた食べようとした

がさつきより大きい上に感触が違うことを感じた。

リュイ「ふえ!!」

感触が違うことを感じてリュイはその方向を見て驚いた。

…が、シグナムは気づいていない。

? 「ガー?」

そこにあっただのは動いてハンバーガーの乗った皿を持って振り向いてきた。

それは節分とかで被る鬼の面をしていた。

リュイ「お…に…?」

? 「ガ?」

リュイ「?」

鬼と聞いて首を傾げて、リュイも傾げた。

リュイ「えい…」

鬼の面をパツと一瞬で取ると黒で、緑の目(?)とニヤけた口がある顔が出た。

リュイ「あまぞん…じゃない…はんばーが…の…ようかい…?」

バガモン「違うガー。バガモンはバグスターだガー」

ハンバーガーの妖怪と言われて何かは「バガモンバグスター」は名乗る。

リュイ「ばがもん?」

バガモン「そうだガー。バガモンはハンバーガーが大好きだガー」

リュイ「はんばーが…たべたい…の?」

バガモンがハンバーガーが大好きと聞いてリュイは聞く。

バガモン「食べていいのかガー?」

リュイ「いいよ…たべかけ…だけど…」

バガモン「ありがとうだガー!」

リュイに食べて良いと言われてバガモンは大口を開けて嬉しそうに食べた。

バガモン「んく♪美味しかったガー!」

リュイ「よかった…」

美味しかったと言うバガモンにリュイは言う。

リユイ「ねえ…ばがもん…」

バガモン「なんだガー？」

リユイ「ばがもんは…なんで…ここに…いるの？」

バガモン「それは…あ、あぁー…！！」

リユイに聞かれてバガモンは何かを思い出したかのように大声を上げる。

バガモン「ツクルの所に帰らないと！ツクル、心配してるー！！」
慌てるバガモンはどこかへ走って行ってしまった。

リユイ「ばがもん…」

走って行ってしまったバガモンを見てリユイは追い掛けた。
因みにシグナムはいまだに気付いていないのだった。

Extra hunting cooking h
amburger! Part 2

シグナムを置いてバガモンを追いかけるリュイ。

アマゾンじゃない怪人だから気になったのだ、しかも敵意が全く無いのでなおさら余計に気になってしまったのだ。

バガモン「ツクルー!どこだガー!」

【ツクル】なる人物の名前を叫びながら走り回るバガモン。

そんなバガモンを見て周囲の人々は驚きはするが逃げたりせず、写真を撮っていた。

バガモン「はあ：はあ：はあ：はあ：ツクル、どこにいるんだガ：」

走り疲れたバガモンはその場に座り込んでしまった。

リュイ「ばがもん：」

座り込んだバガモンに追い付いたリュイは悲しそうなバガモンに駆け寄る。

その時だ。

《ステージセレクト!》

「!」

【ステージセレクト】と音声の流れると辺りの景色が変わり、古びた廃工場のような場所で、周囲には色々な色と絵柄が描かれたメダルが散らばっていた。

リュイ「ここは：：ばがもん：：?」

バガモンに聞こうとするがバガモンの姿はどこにもなかった。

リュイ「え：あれ：?」

急に古びた廃工場のような場所になって、さらにバガモンの姿がいなくなっていてリュイは混乱する。

リュイ「!」

混乱している中で人の気配を感じて行くとバガモンを含めた8人の人間がいた。

因みにリュイは気づかれないように柱の裏に隠れている。

？「不正なゲームは回収する」

？「M、俺と遊ぼうぜ」

黒いスーツを着た男性と黒いジャケットの下にカラフルな服を着た男性が言うとかセットのようなものを取り出した。

《《デンジャラスゾンビ！》》

《PERFECT PUZZLE！》

《What's the next stage?》

「変身！」

《バグルアップ！》

《《デンジャー！》》

《《デンジャー！（ジエノサイド！）》》

《《デス・ザ・クライシス！》》

《《デンジャラスゾンビ！（Wooooo！）》》

黒いスーツの男性は白いカセットのような物を腰つけた紫のバツクルに装填すると白と黒を基調とする骸骨のような姿で禍々しく、右が赤、左が青のオッドアイになったバイザー、左右非対称の装甲はロボロロになったゾンビを想起させるライダーになった。

《《デュアルアップ！》》

《Get the glory in the chain！》

《PERFECT PUZZLE！》

カラフルな服を着た男性は黒いスーツの男性と違い、カセットのスイッチを押すと青をメインカラーとし、胸の縁など金色で彩られたライダーとなると左腰部に着いたスロットに差し込んだ。

リュイ「らい…だ…!?」

ライダーに変身した2人にリュイは驚く。

そんな中で4人のライダーによる戦いが勃発する。

ゾンビのようなライダーに銃を持ったライダーが、青いライダーにハンバーガーのような色をした装甲を纏ったライダーが戦っていたが次第に銃を持ったライダーとハンバーガーのような色をした装甲のライダーは押されてしまった。

青いライダー「どれにしようかなあ…コレしよう」

辺りに散らばったメダルを青いライダーは空中に並べるとパズルのように動かして2枚を選択した。

《高速化!》

《マッスル化!》

選択したメダルは青いライダーの体に入った。

青いライダー「はっ!」

2枚のメダルを体に入ると青いライダーは目にも止まらぬ速さで動くど力強く銃を持ったライダーとハンバーガーのような色をした装甲のライダー2人を殴り飛ばした。

2人を殴り飛ばした青いライダーはスロットにあつたカセットを少し持ち上げると丸い部分を右に回した。

《パーフェクトクリティカルコンボ!!》

青いライダー「そらよっ!!」

高速で動いて2人のライダーにキックを叩き込んだ。

「うわあああっ!!」

青いライダーの攻撃に2人のライダーは吹き飛ばされて変身が解けてしまった。

するとリュイの足元にハンバーガーのような色をした装甲のライダーの持ち物かと思われるカセットが転がってきた。

転がってきたカセットをリュイはおもむろに拾い上げる。

? 「ふえ!?!なんで子供がこんな所に!?!」

バガモン「あ、あの子は!?!」

カセットを拾い上げたリュイを見てダンサーのような色をした服を着た女性とバガモンが驚く。

ゾンビのライダー「君、そのガシャットを渡したまえ」

カセットーガシャットをリュイに渡すように言いながらゾンビのライダーは近付く。

? 「だ、ダメだ!それを…渡しちや…!!」

ハンバーガーのような色をした装甲を纏ったライダーの変身者らしき男性がリュイに叫ぶように言う。

男性に言われてリュイは無意識に逃げる体勢を取る。

ゾンビのライダー「逃がすものか！」

逃げる体勢を取ったリュイを見てゾンビのライダーは拳を振り上げる。

バガモン「リュイ、逃げるガ―！」

バガモンがリュイを助けようと走り出した瞬間だった。

G A ・ M ・ M A

リュイ「あまぞん……」

A N C I ・ A N ・ A N C I E N T !!

ゾンビのライダー「なに!?ぐあああああああつ?!」

ゾンビのライダーが拳を振り上げたのと同時にリュイはアマゾンズドライダーを出してアクセラレーターグリップを捻りガンマとなるとゾンビのライダーを蹴り飛ばした。

ガンマ「かめんらいだー…あまぞん…がんま…h u n t i n g … s t a r t !!」

2人のライダーに構えてガンマは臨戦する。

Extra hunting cooking hamburger! Part 3

詠夢「ええ!?か、仮面ライダー!?!」

ポッピー「なんであんな子供が!?!」

作「な、なんで!?!」

バガモン「バガモンも驚いたガー!!」

リュイがガンマとなつたのを見て【仮面ライダーエグゼイド】の変身者【宝生 詠夢】と詠夢の仲間の女性であり、バグスターの【ポッピーピポパ】、そしてバガモンが実体化する要因のゲーム【ジューバーバーガー】を作つた【ゲナムコーポレーション】(↑ゲーム会社)の社員【小星 作】とバガモンは驚く。

ゲナム「どうやってライダーの力を…ガシヤットも無しに…」

パラドクスP「まあ、何だっがいいじゃないか。楽しくなってきた」

黒いエグゼイドこと【仮面ライダーゲナム】とバグスターであり、仮面ライダー【仮面ライダーパラドクス パズルゲーマーLV50】は言う。

ガンマ「これは…わたさ…ない!」

ゲナムとパラドクスを見てガンマは【ジュージュバーガーガシヤット】を握りしめながら言う。

パラドクスP「へえ、なかなか威勢がいいな。楽しめそうだな」

《KNOCK OUT FIGHTER!》

《The strongest fist!》

《"Round 1" Rock & Fire!》

《DUAL UP!》

《Explosion Hit!》

《KNOCK OUT FIGHTER!!》

ジュージュバーガーガシヤットを奪われないように構えるガンマを見てパラドクスは厚みに加え、赤と青の絵柄が半分ずつ描かれた丸いダイヤルが付いているガシヤット【ガシヤットギアデュアル】を

攻撃してこないガンマにパラドクスは殴りかかってきた。

ガンマ「はっ！」

殴りかかってきたパラドクスをガンマはバク転して回避する。

ガンマ「セヤツ!!」

4回バク転して回避するとガンマはブレイドを構えてパラドクスの懐に入り斬り付けた。

パラドクスF「ぬうつ…やるなあ、お前。心踊るなあ！」

ゲンム「よせ」

斬られながらも戦おうとするパラドクスをゲンムは止めた。

パラドクスF「なんだよ、シラケることすんなよ」

ゲンム「彼は仮面ライダーであるがどうやらこことは異質、すぐに消えるだろう。ここは一旦退くぞ」

パラドクスF「ガシヤットの回収はいいのかよ？」

ゲンム「レベル4のガシヤットは確かに回収せねばならないがいつでも奪える」

パラドクスF「はいはい」

少し不満なのかパラドクスはそう言うのと構えを解いて納得する。

パラドクスが納得するとゲンムはどこかへ歩いていき、パラドクスもそれに続く。

ガンマ「……………」

去っていくパラドクスとゲンムを見てガンマは構えを解いて詠夢たちの方へ歩いていく。

ガンマ「これ…」

詠夢の前に着くとガンマはガシヤットを差し出した。

詠夢「ありがとう。ガシヤットを守ってくれて」

ガンマからガシヤットを受けとる詠夢。

するとガンマの姿が消えてリュイの姿に戻ったが体がうつすらと消えかけていた。

バガモン「リュイ!？」

消えかけているリュイにバガモンは驚く。

リュイ「ばがもん…」

消えかけているリュイはバガモンを見ると笑った。
自分は大丈夫だよつという意味を込めているのだ。

リュイ「ぼがもん…みんなと…なかよく…ね…」

そう言うどリュイは完全に消えてしまった。

バガモン「リュイ…」

詠夢「大丈夫だよ、また会えるよ。きつと」

バガモン「そうだガー。リュイが来たら美味しいハンバーガー作る
ガー！」

リュイがいなくなつてしよんぼりしていたバガモンを詠夢が励ま
すとバガモンは元気になつたのだつた。

リュイ「えつと…」

ケンに聞かれてリュイは話した。

ケン「そうか、お父さんのために包丁のプレゼントを。良ければその包丁、私に作らせてくれないか？」

リュイ「いいの…？」

ケン「私もあの怪物には困っていてね。退治してくれた君に感謝のお礼だ」

リュイ「ありが…とう…！」

老人の申し出にリュイは喜んだ。

ケン「少し離れてなさい」

ケンに言われてリュイは少し離れた。

ケン「ムンツ!!」

リュイが少し離れたのを確認したケンの手から光を出した瞬間、スタツグアマゾンの牙が変化して一瞬で包丁になった。

リュイ「!？」

一瞬で包丁になった牙に驚く。

ケン「ほら出来たよ」

出来た包丁を渡すケン。

リュイ「おじいちゃん…なに…もの…？」

包丁を受け取ってリュイはケンのことを聞いてきた。

ケン「ただのサンタクロースになる前のおじいちゃんだ」

リュイに聞かれてケンはそう答えたのだった。

母の日

その日、リュイはヴィヴィオたちチームナカジマ（アインハルトは無茶が祟り、ぶっ倒れているために自宅謹慎中で、ノーヴェは付き添い）と会っていた。

「母の日のプレゼント？」

リュイ「うん…まえに…みうらが…行って…た。ぱぱのひがあるなら…ままのひも…あるよって…」

ヴィヴィオ「なるほど…確かにもうすぐ母の日だったね」

コロナ「それでどんなのをプレゼントしたらいいか分からないから私たちに相談しにきたってことだね」

リュイ「うん…」

リオ「それなら私たちに任せて！」

ヴィヴィオ「でもリュイくんのママって…」

「あ…」

意気込んだはいがリュイの母親はフェイトを圧倒したあの烈火の将 シグナムである。

プレゼントとなるとカーネーションとかのベタなのはダメな気がするからだ。

リュイ「…しぐままに…ぷれじえんと…できない…？」

少し泣きそうな声でリュイは言う。

ヴィヴィオ「うーん、と言ってもなあ。なのはママやフェイトママとかは分かるけどシグナムさんって…何が好きなんだろう？」

リオ「シグナムさんが好きなのってバトル？」

コロナ「リオ、それはリュイくんには厳しすぎるよ？」

リオ「確かに……………」

バトルマニアであるシグナムのプレゼント…バトルしかなかったがそれはリュイには厳しすぎる。

下手したらシグナムとつても厳しいものに成りかねない。

ヴィヴィオ「リオの案は却下するとして…。どうする？」

コロナ「あ、そうだ！シグナムさんも使えるのがあった！」

「「えっ？」」

何か思い付いたコロナに3人は首を傾げる。

5月12日、母の日当日。

シグナムははやてたちと共に局へ行くために玄関に来ていた。

リュイ「しぐまま…！」

パタパタと少し小走りでリュイが来た。

シグナム「リュイ。どうした？またシャマルが何かしたか？」

レヴァンティンをシャマルに向けながらリュイに聞くシグナム。

近くでシャマルが「濡れ衣ー!!」と叫んでいたがシグナムはスルーする。

リュイ「えつと…しぐまま…ははのひの…ぷれじえんと！」

小さなリボンが着いた小さな小箱を差し出しながらリュイはシグナムに言う。

シグナム「わ、私に…か？」

レヴァンティンを手放してシグナムは聞く。

リュイ「うん…しぐまま…こわいひとたちから…たすけて…くれた…いつか…おれい…したいって…おもって…たの…びびおや…ころにや…りおにてつだってもらったの…だから…ありがとう…しぐままー！」

シグナム「リュイ…」

プレゼントを受け取りながらシグナムは感激で涙を浮かべ、リュイに抱きついた。

シグナム「私こそ…こんな…こんなプレゼントをくれて…ありがとう、リュイ」

リュイ「うん…！」

2人にとつて嬉しい母の日になった。

こんな日々が続けばいいとシグナムは密かに思っていたのは誰もが気付くところであった。

2019年―2020年 年末年始

作者「いやー、今年ももう終わりますねー」

弟「いや、もう終わって2020年だからな」

作者「大丈夫大丈夫。投稿時間が23時59分59秒だから、まだ2019年判断だから」

弟「微妙過ぎるだろ。つか、全作品同じ内容でいいのかよ?」

作者「仕方ないやん、忙しかったからさあ」

弟「ニートがなにを…」

作者「ニートじゃありません!」

弟「じゃあ、ダメ社会人代表」

作者「辛辣すぎるだろ、さつきから!」

弟「そりゃあ、去年の後半ぶつ倒れて読者様に迷惑かけたのはどこの誰だよ?」

作者「過ぎ去ったことは忘れようよ」

弟「忘れられれば苦労はしねーよ、愚姉が」

作者「酷いなあ…さてさて、こんな話をしていればもう2020年! オリンピック、パラリンピック! じゃねーだろ!! 2020年と言えば『Fate/Grand Order』―神聖円卓領域 キヤメロット―、『Fate/stay night』『Heaven's Feel』『Ill. song』があって、そして『劇場版 ウルトラマンタイガ ニュージェネクライマックス』だろ!!」

弟「全部、アニ特だろーが!!」

作者「いやだって、オリンピックとかパラリンピックとか正直どうでもいい。特撮・アニメファンは特撮とアニメさえあれば生きていくのさ」

弟「じゃあ、おせち料理は無しでいいよな?」

作者「それだけは勘弁してください。マジで」

弟「特撮・アニメファンは特撮とアニメさえあれば生きていけるんだろ! なら、姉貴はおせち料理はいらんだろ!!」

作者「やーめーてー! 私が悪かったから! 正月の数少ない楽しみを

奪わないでー!!」

弟「ガキか！テメーの自業自得だろーが！」↑弟はキレると口が悪くなります。

作者「キレた!？」

弟「大体、テメーまた人に内緒でゲームに課金しただろ!?いい加減にしとかないとどぶに捨てるだけになるだろーが！今回のFGOのイベントで爆散したんだろーが！それに懲りずまた課金しやがって！この、ダメダメ社会人!!」

作者「ごふっ…ひ、ひでえ…人の…悲しみを…」

弟「知るか！これに懲りたら二度と課金すんな!!」

作者「ひゃ、ひゃい…」

弟「くそっ、愚姉を叱ったらイライラしてきた。ちよっくらその辺走ってくるからバカなすんなよ!!」

作者「あ、行っちゃった…きて、私はFGOからウルバト、シンフォギアしますか！課金はしないようにしないと殺されるわ…あ、皆様、不甲斐ないところお見せしてすみませんでした！では、また2020年の1発目にお会いしましょう♪」

シグナム「はあ…」

管理局の武装隊のオフィスにてシグナムは1人、ため息を吐いていた。

隊員A「どうしたんですか、シグナム隊長」

シグナム「ん？いや、何でもない」

隊員に聞かれてシグナムはそう答えた。

相談しなかったがため息の原因がリュイのこととなると相談できるハズがなかった。

シグナム（まさか、あの子があんなことを言うなんて…）

リュイ『もし…ぼくが…ほかの…あまぞんたち…みたいに…ひとを…はやばはや…びびおたちを…おそったり…たべようとしたら…そのときは…しぐままが…ぼくを…ころして』

カニアマゾンを撃破した時にリュイが言った言葉を思い出しながらシグナムは悩んでいた。

シグナム「はあ…」

ため息を吐いてシグナムは悩むことしかできなかった。

シグナム（私は…リュイが今まで倒してきたアマゾンたちのように殺せるのだろうか…いや、それ以前にリュイと戦えるのか？）

悩みが増えてシグナムは頭を抱える。

シグナム（仕方ない…少し気分転換でも…）

アナウンス『第19地区にて強盗事件発生！犯人は子供1人を人質に立て籠っているもよう！』

シグナム「またか…最近多いな」

アナウンスを聞いてシグナムが呟いていると着信が鳴った。

はやて『シグナム、今どこにおる!!』

通信に出ると慌てた様子のはやてが出た。

シグナム「今は武装隊のオフィスですが…」

はやて『直ぐに出撃や!』

シグナム「い、いったい何が？」

はやて『さつきザファイラから連絡があつたんやけど、強盗が人質しとる子供はリュイらしいんや!!』

この言葉を聞いてシグナムの何かがぶちつと音を立てた瞬間、シグナムの机が破壊され、近くにいた職員たちが驚いたのだった。

ミッドチルダの第19地区のとある建物の1角を警ら隊が取り囲み、建物内部にはサバイバルナイフを持った強盗犯らしき男と男の抱えられているリュイがいた。

警ら隊『犯人につぐ!』

強盗犯「なんだ!? 要求した物は用意できたのか! でないとこのガキの命は無いぞ!!」

サバイバルナイフをリュイの首に当てながら強盗犯は言う。

リュイ「ひっ…」

サバイバルナイフを首に当てられてリュイは怖がって両目に涙を溜めていた。

普段は人食い怪物であるアマゾンを相手にしているリュイだったが運動神経が人並み以上である以外は普通の一般的な男の子と何ら変わらないのだ。

で、何でこうなっているのかと言うとザファイラ（人間形態）と一緒に散歩をしていたが警ら隊に追われた強盗犯とリュイがぶつかり、そのまま人質にされてしまったのだ。

警ら隊『いや、そうではないが…』

強盗犯「じゃあ、なん…」

警ら隊の言葉を聞いて強盗犯は怒って言いかけた瞬間、建物の壁が爆発した。

爆発して空いた穴からレヴァンティンを持ったシグナムが入ってきた。

警ら隊『あー…もう手遅れなのだが、君も知っているかも知れないが今回は武装隊のシグナム隊長が応援に来たんだが…君が人質にしている子はシグナム隊長のご息らしく、物凄く不機嫌なために遺言があれば聞こう!』

強盗犯「自首します…」

シグナムの怒りが事情じやないのを感じたのか、リュイを離して犯人は両手を上に上げて言う。

リュイ「しぐまま…」

解放されたリュイは半泣きでシグナムに駆け寄る。

シグナム「すまなかつたリュイ。遅くなって」

リュイ「ううん…しぐまま…きてくれるって…おもってた…」

シグナム「そうか、なら少し向こうに行っててくれ」

ザフィーラ（人間形態）がいる方を指差しながらシグナムはリュイに言う。

リュイ「しぐままは？」

シグナム「私は…」

リュイに聞かれてシグナムは強盗犯の方を見た。

シグナム「私は少し彼とお話をするから」

笑ってる…笑ってはいるが笑ってない…我が子に手を出した輩に見せる顔ではない…。

リュイ以外の人間全員がそう思っている。

リュイ「うん…」

シグナムに言われてリュイはザフィーラ（人間形態）のいる方へ向かっていく。

シグナム「さて…私の子が世話になったな…」

レヴァンティンを向けながらシグナムは強盗犯に言う。

シグナム「ちゃんと自首するなら大目にみたのだがな」

強盗犯「は?! いやいやいや、さっきお子さん解放しただろ?! おい、あんたらも何か言って…」

警ら隊「アー…ハンニンハシグナムタイチヨウノゴシソクヲカイホウスルモイマダニハゲシイテイコウヲオコナツタタメコレヨリジツリヨクヲコウシシマス…」

片言で目を反らしながら警ら隊は言う可他の人たちも目を反らした。

強盗犯「え?! なに、そういう設定なの!？」

完全に見捨てられた強盗犯は驚く。

シグナム「さあ、大義のための犠牲となるがいい!!」

強盗犯「ぎ　　いいいいいい　　や

ああああああああああああああああ!!?」

向かって来るシグナムを見て強盗犯の悲鳴が辺りに轟くのだった。

リュイ「わんわん…しぐまま…なにしてる…の?」

少し離れた場所にて保護されたリュイはザフィーラ（人間形態）に聞く。

ザフィーラ「高町流お話の術だ」

腕を組んで呆れながらザフィーラ（人間形態）は言う。

リュイ「?」

よく意味がわからないリュイは首をかしげるのだった。

そして事件は発生から僅か1時間足らずで解決した。

後に【19地区の奇跡】と呼ばれたのだった。

小さな心を揺さぶる疑問・不安

h u n t i n g 71

ミッドチルダの都市から少し離れた場所に背が高い雑草が周囲に伸びた土地にある古びた一軒家。

そんな一軒家の一室である和室にリュイはいた。

縄で手足を縛られ、布で口を塞がれて猿轡を噛まされていた。

他に数人、リュイと同じくらいの年齢の少年少女たちが同じように縛られていた。

すると襖が開き2人の男女が現れた。

男性「さて、今日は誰を頂こうかな」

女性「そうね」

和室に入るなり、子供たちを品定めする。

子供たちは怖くて動けないのか涙を流していた。

リュイ（しぐ…まま…）

涙を流している子供たちに釣られてリュイは泣きそうになりシグナムを思い浮かべていた。

なぜこうなっているのかと言うと今から数時間前に時を遡る。

シャマル「それじゃあ、リュイくん。口開けて」

リュイ「あー…」

シャマルに言われてリュイが口を開けるとシャマルはライトでリュイの口内を照らして中をチェックする。

今日はリュイの健康診断の日で、前まではシグナムに抱き付いた上で怖がっていたのだが2人つきりになった一件以来、祖母ポジションとして懐き始めたので今は1人で椅子に座ってシャマルの診断を受けられるようになっていた。

ただ、それはそれで寂しいと思うのがシグナムだった。

シャマル「はい、もういいわよ」

一通り口内を見たシャマルが言うところリュイは口を閉じた。

シヤマル「それじゃあ、リュイクン。シグナムを呼んできてくれるかな」

リュイ「うん…」

シヤマルに言われてリュイは席を立つと外で待っているシグナムを呼びに部屋を出た。

リュイ「しぐまま…しやまばあばが…よんで…る…」

外のベンチで待っていたシグナムにリュイは言う。

シグナム「そうか。じゃあ、ここで少し待っていてくれ。それと紙袋に本が入ってるから」

リュイ「うん…」

シグナムに言われてリュイがベンチに座り、シグナムが代わりに医務室に入った。

リュイ「……………」

シグナムを待っている間、リュイはシグナムが持ってきていた紙袋から本を取り出して読み始めた。

リュイが読んでいるのはイタズラの王を目指すキツネが子分の双子のイノシシと旅をする話で、30年も前から描かれている本である。

ゲンヤがギンガとスバルが幼い時に読み聞かせた本で、捨てるには勿体ないからと譲ってくれたのだ。

初めて読み聞かせた時、リュイは大変気に入り自分で読むままでになった。

元々小学生低学年用でもあるので平仮名が多く、漢字にも振り仮名が振つてあるのでリュイでも読みやすいのだ。

それ以来、リュイは自身の診察がある日に限り外で読むようになった。

リュイ「♪」

今回はキツネが双子のイノシシと共に対立する鶴と亀のラーメン店を利用して悪事を働く話である。

？「坊や、本が好きなのかい？」

声をかけられて見上げると優しそうな面持ちをした男性がいた。

リユイ「うん…好き…だよ…」
？「そうか。じゃあ、おじちゃん家に来なさい。もつと面白い本があるよ」

リユイ「でも…しぐまママが…」

？「大丈夫だよ。お母さんにはおじちゃんが言つとくから」

そう言つて男性はリユイの手を掴むと無理矢理連れていく。

リユイは嫌がろうとしたが病院では暴れたらダメとシグナムに言われているために出来ず、男性に連れていかれてしまった。

そして男性に連れられ家に入るなり気絶させられ、気付けば他の子供たち同様に縛られていたのだ。

どうやら2人はアマゾンらしく、すでに何人もの子供が食われていて台所にはそれを裏付けるように子供と思われる足や腕、首などのバラバラにされた体があつたのだ。

男性「今日はメスにするか」

女性「そうね」

品定めしていた2人は1人の少女を選ぶと男性が少女の足を掴んでリビングへ連れていく。

少女「んく、んんく、んんく!!」

助けを求める少女だが他の子らは怖くて動けなかった。

少女「んく!!」

少女が鳴き始めたその時だった。

男性に頭突きをかます少年がいた—リユイだった。

リユイに頭突きをかまされて男性は倒れて少女から手を離れた。

リユイは共に倒れるが男性の上に乗ったが猿轡が外れた。

リユイ「みんな…はやく…にげて…はやく…!!」

猿轡が外れてリユイは子供たちに叫ぶ。

リユイに言われた子供たちは立ち上がってぴよんぴよんジャンプしながら逃げる。

女性「逃がすものですか!!」

逃げる子供たちを捕まえようと手を伸ばす女性だったが…。

リユイ「いかせ…ない…!」

女性「うわっ!？」

捕まえようとする女性をリュイは体を捻って魚のように跳ねて女性にタツクルを喰らわせて倒した。

その隙に子供たちは逃げていく。

男性「このガキ！」

餌である子供たちに逃げられて男性はリュイの腹部を思いっきり蹴る。

蹴られたリュイは飛ばされて壁に叩き付けられた。

リュイ「かはっ……」

壁に叩き付けられたリュイは肺から空気が吐き出され、さらに頭も打って切れたのか血が少々流れた。

リュイ「うう……」

リュイもアマゾンとは言え相手は大人、子供であるリュイには耐え難い傷みが体を駆け巡る。

男性「よくも邪魔してくれたな。逃げたガキはあとで捕まえてやる。だがその前にお前を食ってやる！」

そう言つて男性は姿を変えた。

光沢のある藍黒色で、喉と額が赤く、腹は白い、胸に黒い横帯があるアマゾン【ツバメアマゾン（雄）】はリュイに近づく。

リュイ「うっ……くっ……」

戦おうとするリュイだが手足を縛られた上にさっきの蹴りの一撃によるダメージが大きく動けなかった。

ツバメアマゾン（雄）「覚悟しろ！」

動けないリュイにツバメアマゾンは飛びかかるのだった。

シグナムを見てリュイは嬉しくなつて叫ぶ(周りからは叫んでないけど本人は叫んでいるつもり)。

シグナム「すまない、リュイ。遅くなった」

リュイに駆け寄り、姿勢を低くして自身に引き寄せた。

ツバメアマゾン(雄)「この…人間があ!!」

弾き飛ばされたツバメアマゾン(雄)は立ち上がり怒りの声を上げる。

ツバメアマゾン(雌)「大変だよ、管理局が家を…」

子供達を追いかけに向かったツバメアマゾン(雌)が慌てた様子で戻つて来た。

ツバメアマゾン(雄)「んなこと分かつてるんだよ!」

雌の個体に言われて、雄の個体は八つ当たりぎみに言う。

シグナム「リュイ、今だ!」

雄の個体が雌の個体に八つ当たりしている隙にシグナムはリュイを縛る縄をレーヴァテインで切る。

リュイ「うん…!」

縄を切つてもらつたリュイは立ち上がつてアマゾンズドライバーを出現させた。

【GA・M・MA】

リュイ「あまぞん……」

【ANCI・AN・AGENT!!】

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

変身したガンマは雄叫びを上げる。

ツバメアマゾン(雄・雌)「!?!」

リュイが変身したのを見てツバメアマゾン(雄・雌)は驚く。

ガンマ「よくも…みんなは…こわがらせた…ゆる…さない…!!」
珍しく怒るガンマの拳に力が入る。

ガ
ン
マ
「ガ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

怒れるガンマがツバメアマゾン(雄・雌)に向かう。

ツバメアマゾン（雄）「殺るぞー！」

ツバメアマゾン（雌）「分かってるわ！」

雄に言われて雌もアマゾン化する。

ガ
ン
マ
「ガ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

雌もアマゾン化してガンマはバトラーグリップを引き抜く。

《バイオレント・ブレイク!》

バトラーグリップから引き抜かれたのはアマゾンスピアで、横にして突撃する。

アマゾンスピアはツバメアマゾン（雄・雌）の体を捉える。

瞬間、家の窓が破壊されてガンマとアマゾンスピアに体をとられたツバメアマゾン（雄・雌）が飛び出してきた。

空中に出てガンマはアマゾンスピアを持ち直した。

ガンマ「!!」

持ち直したアマゾンズスピアでツバメアマゾン（雄・雌）を殴り飛ばす。

ツバメアマゾン（雄・雌）「がは!!」

殴られたツバメアマゾン（雄・雌）の2体は地面に叩き付けられた。

ガンマ「!!」

降下は始まっているがまだ空中にいるガンマはアマゾンズスピアを片手で持ち換えるとやり投げのようにツバメアマゾン（雄・雌）に向かって投げた。

ツバメアマゾン（雄）「このっ!!」

向かってくるアマゾンズスピアを見てツバメアマゾン（雄）はツバメアマゾン（雌）を掴んで引っ張ると自身の前に出した。

ツバメアマゾン（雌）「!？」

ツバメアマゾン（雄）に引っ張られて前に出されたツバメアマゾン

（雌）は驚いていると背中にアマゾンズスピアが突き刺さった。

ツバメアマゾン（雌）「あ、アンタ…な、なん…で…」

盾にされたことにツバメアマゾン（雌）は戸惑いながら聞くも体がドロドロになり、黒い液体となって消滅してしまった。

ツバメアマゾン(雄)「悪く思うなよ。俺だって死にたくねえんだからな」

消滅したツバメアマゾン(雌)にそう言つてツバメアマゾン(雄)は立ち上がつて逃げようとする。

が、自身の目の前に”ドスン”と何者か―ガンマが着地してきた。

ガンマ「おまえ…なんで…かぞく…のはず…なのに…」

雌を盾にしたのを見てガンマは聞く。

ツバメアマゾン(雄)「家族？俺たちはアマゾンだぞ？人間の真似をしていただけにすぎねえよ。ヤバくなつたら利用するだけ利用して使えなくなつたら捨て駒にでもするさ」

ガンマ「おまええ…」

ツバメアマゾン(雄)の答えにガンマ憤り、握り拳に力が入る。

ツバメアマゾン(雄)「怒るなら逆に聞くが、お前は何で人間の味方をする？」

ガンマ「え？」

ツバメアマゾン(雄)「人間は俺たちアマゾンより弱いクセに狡賢い。お前も利用されるだけ利用されて用済みになつたら殺されるに決まつてる」

ガンマ「そんなの…ちが…」

ツバメアマゾン(雄)「なぜ違うと言い切れる？お前は知っているんじゃないのか？人間は姿形が違うだけで忌み嫌う。俺たちアマゾンのようにな」

ガンマ「……………」

ツバメアマゾン(雄)に言われてガンマは何も答えられなかった。事実、ガンマは…リユイはカニアマゾンのレストランにて管理局員たちの目を見てしまったからだ。

その目はあの場にいたリユイを含む全てのアマゾンをまるで汚物か何かを見るような目と異形であるアマゾンを軽蔑と恐れる目だからだ。

ツバメアマゾン(雄)「人間なんざ、俺たち^{アマゾン}に食われるだけの存在なんだよ！」

ガンマ「!?、がはっ!!」

一瞬の隙を突かれてガンマはツバメアマゾン（雄）に蹴り飛ばされた。

ツバメアマゾン（雄）「シエラッ!!」

蹴り飛ばしたガンマにツバメアマゾン（雄）は羽を飛ばしてくる。

ガンマ「がっ!!」

ツバメアマゾン（雄）の羽が体に刺さり怯む。

ツバメアマゾン（雄）「止めだ!!」

怯んだガンマを見てツバメアマゾン（雄）は飛び掛かり、爪を伸ばして構えると、爪をガンマに突き刺そうと跳躍する。

ガンマ 「グウ! ウ ガ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

迫りくるツバメアマゾン（雄）にガンマはアクセラレーターを捻る。

《バイオレント・パニッシュ!!》

ガンマ 「ガ

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ツバメアマゾン（雄）「なに!？」

ガンマの攻撃に驚きながらも爪をガンマに向けて突くが姿勢を低くされて当たらなかった。

そしてガンマの攻撃に反応できなかったツバメアマゾン（雄）は胴を大型化されたアームカッターで両断された。

ツバメアマゾン（雄）「ギ イイイイイ ヤ

アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

胴を両断されてツバメアマゾン（雄）の悲鳴が響く。

ガンマ「……………」

ツバメアマゾン（雄）を両断してアームカッターも元の大きさに戻るとガンマはある方向に歩いていく。

その先にいるのは両断されたツバメアマゾン（雄）だった。

ツバメアマゾン（雄）「これで…勝ったと…思う…なよ…」

まだ息があるが途絶え途絶えに言うツバメアマゾン（雄）

ツバメアマゾン(雄)「必ず…人間は…お前を…裏…切る…今は…家族…と言つても…いずれは…お前も…俺たちの…ように…殺されるのさ…」

不適に笑いながら続ける。

ツバメアマゾン(雄)「先に…地獄…で…まつて…る…ぞ…」

そう言い残してツバメアマゾン(雄)は黒い液体となり、溶けてしまった。

ガンマはただ、それを見ていただけだった。

するとガンマの顔に冷たい感触が上から伝わってきた。

ガンマ「……………!」

空を見上げると待つていたかのように雨が降り始めた。

ガンマ「うう…」

ツバメアマゾン(雄)の言葉が頭から離れなかった。

シグナムたちのようにアマゾンである自分に優しく接してくれる人と管理局の魔導師たちのように味方だがアマゾンである自分を他のアマゾンたちのように軽蔑した目をした人がいる。

それだけでガンマの…リュイの頭は混乱してしまった。

ガ
ン
マ
「う
わ

あああああああ……………!!!」

カニアマゾンのアマゾンレストランにて出会った「静かに人間と暮らしたいアマゾンたち」に続いて、「シグナムたちのような優しい人間と局員たちのように偏見を持つ人間、どっちが本当の人間なのか」という疑問が加わり、頭の中がパニックになり、何もかも分からなくなったガンマの悲痛な叫びが響き渡るのだった。

いままでの…あまぞん…みたい…ころすの…？」

ツバメアマゾン（雄）に言われたことを気にしているのかリュイは顔を上げてシグナムに聞く。

他のアマゾンのように人を食いだしたら殺してほしい、でも正気があるうちに殺されるのは嫌だとリュイは思っていたからだ。

シグナム「リュイ…」

そんなリュイをシグナムは手をまわして抱き着いた。

そして片手でリュイの頭を優しく撫で始めた。

シグナム「大丈夫だ。誰が何と言おうとお前は私たちの家族だ。リュイがリュイであるうちは殺したり、ましてや物扱いしたりしない。もしもそのような輩がいたら、私がリュイを守ってやる。約束だ」

リュイを見ながらシグナムは撫でていた手で小指のみを立ててリュイに見せながら言う。

リュイ「やく…そく…？」

シグナム「ああ。約束だ」

シグナムの言葉を聞いてリュイはシグナムとは反対の手の小指を出してシグナムの小指と絡めた。

リュイとシグナムの親子の約束が交わされたのだが、この約束は敵わなくなる日が訪れる日はそう遠くないことはこの時の2人はまだ知らなかった。

とある管理外世界にある研究施設のような場所に「仮面ライダーアマゾン シグマ」こと「ネバー」はいた。

ネバー「頃合いか…さあて、楽しませてくれよ…人間どもよ」

腕の感覚を確かめながらネバーは不敵に笑うのだった。

その日、シグナムは困り果てていた。

シグナム「リュイ：いい加減に離してくれないか？」

リュイ「い：や：」

シグナムの足に抱きついて今にも泣きそうな声で嫌がる。

シグナム「仕事に遅れるから離してくれ」

リュイ「やあゝ：」

シグナム（な、なんなんだ今日に限って!?!リュイが頑なに嫌がるとは!?!）

頑なにシグナムが仕事へ行くのを嫌がるリュイに困惑する。

はやて「しゃーない。シグナム、今日は仕事を休みや」

シグナム「し、しかし：」

はやて「リュイの顔、見てみ」

断ろうとしたシグナムにははやては言う。

言われてリュイを見ると不安な表情でシグナムを見ている顔が映った。

はやて「こないな不安な顔したリュイは初めてや。こんな時こそ母親であるシグナムがおらんとあかん」

シグナム「ですが：」

はやて「これは夜天の書の主兼八神家当主（的な立場）の命令や！」

シグナム「うっ……」

ビシツと言われてまじめな性格のシグナムは従わざるを得なかった。

結局、シグナム以外の面々が仕事へ出かけ行き、シグナムはリュイと留守番することになった。

リュイ「……………」

リビングにてリュイはシグナムに抱き着いたまま動こうとしなかった。

シグナム「どうしたんだ、リュイ？」

抱き着かれたままのシグナムはリュイに聞く。

ツバメアマゾンの事件でリュイが変身できない状況でありながら果敢にも食われそうになった女の子をかばったこととその女の子が事件後にお礼を言っていたことを言う。

シグナム「それに大丈夫だ。例えば、世界中がお前を嫌っても…私だけは母として絶対に守り抜いて見せる。だからそれまで人間を信じなくていいか？」

精一杯に考えてシグナムはリュイに言う。

リュイ「しぐ…まま…」

シグナムに言われてリュイは少し不安が消えてそう言った。

母親という存在に人は安心を感じるもの、リュイも母として慕っているシグナムが味方でいてくれるということが分かって安心したのだ。

リュイ「す…す…」

安心しきったリュイはシグナムにしがみついたまま眠ってしまった。

色々と自分なりに考えたりして疲れてしまったのだろう。

シグナム「リュイ…」

眠っているリュイを見てシグナムは微笑んでいた。

その時シグナムは思っていた、”リュイがこんな風に不安もないまま穏やかに育ってくればいいのに”と…。

それが叶わぬとは分かっていたが、自身に目覚め始めた母性がそう訴えていたのだった。

再戦・最凶の狩人

h u n t i n g 75

その日、リュイはシグナムとティアナと共にアルトが操縦するヘリに乗っていた。

理由は湖があるキャンプ施設にレジスターによる覚醒したアマゾンの反応が確認されたために撃破へ向かっていたのだ。

近隣住民は避難をしているが

リュイ「く〜く〜」

ヘリの中でリュイは紙に何かを書いていた。

ティアナ「あの、シグナム隊長。リュイは何を書いているんですか？」

シグナム「ん？ああ、あれはヴィヴィオたちへの手紙だそうだ」

ティアナ「ヴィヴィオたちに：ですか？」

シグナム「ああ。少し前にストライクアーツがようやく再開したらしくてな。明日、ヴィヴィオとミウラの試合だったが今日のアマゾン騒ぎで行けなくなったから手紙を書いてアルトに送ってもらおうとしているんだ」

ティアナ「なるほど。友達思いなんですね」

シグナム「まあな。あの子はアマゾンである前に1人の人間の子だからな」

友達のために応援メッセージの手紙を書くリュイを見てそう話す。

アルト《シグナム隊長、ランスタター執務官、もう間もなく目的地に到着します。降下の準備をお願いします》

シグナム「もうか。リュイ、こっちに来るんだ。そろそろ降りるぞ」

ヘリを操縦するアルトの報告が聞こえてシグナムはリュイを呼ぶ。

リュイ「うん」

呼ばれたリュイは手紙をさつきまで座っていた椅子に置き、その上に重しとして近くにあった工具箱を置いてシグナムの方へ近寄る。

近寄ってきたリュイをシグナムは抱えるとベルトを出して自身とリュイの体を繋いだ。

目的地に着くとシグナム、リュイ、ティアナの3人はヘリから飛び降りる算段であるのだが変身前のリュイは並の子供くらいの身体能力しか持ち合わせていない為、飛び降りた際に怪我でもされたら大変なのでシグナムが抱えて一緒に飛び降りることになったのだ。

アルト《目的地周辺に到着ですのでハッチを開きますね!》

アルトがそう言うのとヘリのハッチが開いた。

アルト《周囲に覚醒したアマゾンの反応はありません》

シグナム「分かった。行くぞ、リュイ」

アルトからの報告を聞いてシグナムは言うどリュイの方を見てに飛び降りることを伝える。

リュイ「うん…あると…びびおたちへの…おてがみ…おねがい…」

シグナムに言われてリュイはアルトにそう伝える。

アルト《まっかせて!ちゃんと皆に届けるから。リュイくんも頑張ってね!》

リュイ「うん…!」

アルトの言葉を聞いてリュイはギュッとシグナムの服にしがみついた。

それを見たシグナムはヘリから飛び降りた。

シグナムが飛び降りるとティアアナも続いて飛び降りた。

着地してシグナムは自身とリュイを繋いでいたロープを外してリュイを降ろした。

3人が降りたのを確認するとヘリはハッチを閉めて方向転換すると元来た場所へ戻っていった。

シグナム「どうだ、リュイ。アマゾンに近くにいるか?」

リュイ「うん…こっちにくる…」

アマゾンであるリュイも他のアマゾンの気配(覚醒したかどうかまでは分からない)を感じ取れるので、その気配がこっちに來ていることを伝える。

ティアアナ「私たちに気付いての迎撃でしようか?」

シグナム「分からないが向こうから近づいてくれるなら探す手間が省けた。行くぞ」

向かってくるアマゾンを迎え撃とうと準備をする。
リュイ「まって…！」

準備をしようとした2人をリュイは止めに入った。
シグナム「どうした？」

リュイ「この…かんじ…ふつうの…あまぞん…じゃない…」
「!？」

リュイの言葉に2人は驚く。

リュイ「あまぞん…のかんじ…する…でも…いきて…ない…」
ティアナ「それってどういう…」
? 「こういうことだ」

リュイの言葉に混乱して質問しているティアナに答えるように3人の前に何かが落ちてきた。

落ちてきたのは内側にびっしり生えた無数の棘がある腕輪—アマゾン達の発信機である『アマゾンズレジスター』であった。

レジスターが投げられた方向を見ると忘れられるハズもない1人の人物がいた。

シグナム「貴様は!!!」

人物を見るなり怒りを露にするシグナム。

3人の前に現れた人物—前にリュイを襲い、1度は深手を負わせた唯一の存在。

リュイと同じアマゾンライダーの1人「仮面ライダーアマゾン シグマ」こと「ネバー」であった。

ネバー「久しぶりだな、小僧。まさかあの傷で生きているとはな—
一度自身が完膚なきまでに倒したリュイにネバーは挑発するよう
な口調で言う。

リュイ「そんなちよーはつに…もう…のら…ない！」

「GA・M・MA—」

リュイ「あまぞん…」

「ANCIENT!!」

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

ネバーの挑発に乗らず、リュイは「仮面ライダーアマゾン ガンマ」

となり、雄たけびを上げる。

ネバー「へえ、少しは前より楽しめそうだな」

雄たけびを上げるガンマを見てネバーもアマゾンズドライバーを出した。

〔S^シI・G^グU・M^マA〕

ネバー「アマゾン！」

ネバーもシグマに変身して臨戦する。

ネバー「楽しめそうだが…今回はきつちり4手で潰してやるよ」

前と同じくガンマを倒す己の攻撃回数を宣言するシグマ。

ガンマ「もう…にどと…まけない!!」

高ぶり、先走りそうになる感情を抑えながらガンマはシグマを睨むのだった。

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」
シグマ「ヌアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

ガンマとシグマ、2人のアマゾンライダーはそれぞれを攻撃しようと拳とアームカッターを放つがタイミングが同じなためにそれぞれ空を切る。

ガンマ「ウオアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

攻撃が空を切ったがガンマは左足を上げて踵落としを繰り出した。
シグマ「ヌウウンツ!!!」

ガンマの繰り出した踵落としをシグマは左腕を盾にして頭への直撃を防ぐ。

シグマ「ウオラアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

踵落としを防いだシグマは空いている右腕でガンマの腹部を殴った。

深々とシグマの右拳がガンマに突き刺さる。

ガンマ「あぐっ、グガアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

だがガンマもただで殺られず、右足を上げてシグマの側頭部に蹴りを叩き込んだ。

両者それぞれの攻撃を受けて互いに吹き飛ぶ。

シグマ「…効かねえな」

吹き飛んで地面に激突する寸前で態勢を整えたシグマはノーダメージであるように起き上がって言う。

逆にガンマは地面に激突してまだ立ち上がっていない。

シグマ「スキあり!!!」

好機を逃すハズの無いシグマは一気にガンマとの距離を詰めに掛かる。

シグナム「させるか!!!」

そこへシグナムがレヴァンティンで斬りかかってきた。

シグマ「おっと!!!」

シグナムの斬撃をシグマは右腕のアームカッターで防御した。

ティアナ「そこッ!!」

シグナムの攻撃を防御して動きが止まったシグマにティアナが射撃する。

シグマ「ふん」

ティアナの射撃で放たれた弾をシグマは空いていた左手で掴むように防いだ。

シグマ「そんな弾が当たると思ったか？」

弾を全て防いでシグマは言う。

ティアナ「ええ、でも時間稼ぎくらいにはなったわ」

シグマ「なに？」

《ヴァイオレント・ストライク!》

シグマ「なに!？」

聞き覚えのある音声を聞いてシグマは空を見上げると左足を突き出したガンマが急降下してきていた。

迫るガンマにシグナムは素早くシグマから離れる。

シグマ「くそ!」

迫りくるガンマに対抗しようとシグマはアクセラレーターを捻り、左前腕部のアームカッターを大型化させる。

《バイオレント・パニッシュ!》

ガンマ・シグマ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!

ストライクとパニッシュ、2つの必殺技が互いを殺そうと交差する。

”ズドオオオオオオン” っと激しい地響きと爆音が辺りに響き、爆煙が周囲から視界を奪う。

シグナム「リュイ!!」

視界を奪われてシグナムは叫ぶ。

薄れる爆煙の中で1つの人影が見えた。

小さな体をした影、色が見えるくらいまで視界が戻るとガンマが立っていた。

その足元には赤い血液が水たまりのように広がっていたがガンマ

の視線は前を向いていた。

その視線の先にいたのは……。

シグマ「……………」

無傷の姿で立っているシグマがいた。

シグマ「今のは効いたぜえ…だが、俺を殺るにはまだまだみたいだな。それに引き換え…」

シグマは痛みを感じ亭なのか何事も無いように話すとガンマの体がグラリと揺らいで膝をついた。

ガンマ「くっ…がはっ!!!」

膝を着いたガンマは瞬間にマスクの隙間から大量の血液が流れ出した。

シグマ「不意打ちを狙ったつもりだろうが生憎と俺には通じなかつたな」

ガンマ「それは…どう…かな…?」

シグマ「あん?」

余裕のあるシグマにガンマが不敵に笑って言った瞬間だった、”ボトリ”と何かが地面に落ちる音がした。

その方をシグマが見た、それは…丸ごと切断され、切り口から大量の血が噴き出しているシグマ自身の左腕であった。

シグマ「なに!?!」

自身の左腕が丸ごと斬られたのを見て驚くシグマ。

ガンマ「おまえが…いたい…かんじなの…わかった…だから…ひるまない…ひるまない…すき…できない…でも…いたい…かんじないと…じぶんの…からだの…げんかい…きづかない…」

今までの戦闘でガンマはシグマが痛みを感じないで戦っていたことに気づいた。

それは痛みからくる怯みを無くす事が出来るが逆に自身に来る体へのダメージ限界に気づきにくいという弱点があったのだ。

シグマ「痛覚遮断の処置が裏目に出たか…しかも相打ち覚悟である技を繰り出すとは…凄いな、ガンマ…」

自身に施した痛覚遮断が裏目に出てアドバンテージを取られたこ

とにシグマは納得し、相打ち覚悟で技を繰り出したガンマを称賛する。

するとガンマの隣にシグナムとティアナが来た。

シグナム「もはや貴様に勝ち目はない！大人しく投降…」

シグマ「ククク…クハハハハハハハハハハツ!!!」

投降するようにシグナムが通告した瞬間にシグマは笑い始めた。

シグマ「そうだ…そうこなくっちゃなあ…これからますますお前を殺すのが楽しみになったぜ…」

笑い終わってそう言うのとシグマは右足を上げて地面に向かって振り降ろした。

振り降ろされた足に地面は碎けて周囲を土煙が覆った。

ガンマ「シグマ…ツ!!!」

逃げると予想して追撃しようとするガンマだったがシグマの”バイオレント・パニツシュ”のダメージによる痛みで動けなかった。

土煙が晴れるとシグマの姿も、斬り落としたシグマの左腕も消え、あるのは出血し地面に落ちた血液だけであった。

ガンマ「……………」

シグマがいなくなつてガンマはリュイの姿に戻るとフラリと倒れ始めた。

ティアナ「おっと」

倒れるリュイをティアナが地面に倒れる前に支えた。

シグナム「すまない、ランスター」

ティアナ「いえ。凄く頑張りましたから、リュイくん」

変身後の反動でスヤスヤと眠っているリュイを見ながらティアナは言う。

シグナム「ああ。だが相打ち覚悟の攻撃はいささか褒められたものとは言えんな。起きたら叱らなくては…」

ティアナ「で、出来るんですか?」

シグナムがちゃんとリュイを叱れるかティアナは心配になって聞く。

どういう訳かリュイに関わるとシグナムはいつものクールさが消

えてデレデレになってしまおうほどリュイを溺愛している。

そんなシグナムがリュイを叱れるのか心配であったからだ。

シグナム「わ、私だって言うところはちゃんと言うに決まっているだろ！」

ティアナに心配されてシグナムは少し向きになって言い返したのだった。

この後、連絡を聴いて迎えに来たアルトのヘリで無事に帰還。

帰還後、八神家の家で目を覚ましたリュイをシグナムは叱ることが結局できず、代わりにはやてが叱ったのは別のお話…。

シグマ「……………」

戦線を離脱したシグマは自身の斬り落とされた腕をくっ付けていた。

腕はまるで糸で結ぶかのように組織が絡み、元の状態に戻った。

シグマ「……………」

何事も無いようにシグマは腕の感覚を確かめる。

シグマ（あの時…あの騎士に斬られた時か…でなければここまでのダメージではないはず……）

自身の左腕が斬り落とされたそもその原因を思い出すシグマ。

傷の治療していた時に現れた1人の騎士と戦闘したことを思い出していた。

互角に戦いそのあと戦況が不利になるなり撤退した、その時自身の左腕に切れ込みを入れられたと考える。

シグマ（いずれヤツとも決着を付けてやる）

その騎士との決着を期待しながら、シグマはその場を後にするのだった。

小さな狩人と優しき狩人

h u n t i n g 75

仮面ライダーアマゾン シグマとの予期せぬ遭遇戦を繰り広げた仮面ライダーアマゾン ガンマことリュイは倒すことはできなくてもシグナムたちやシグマの特性を逆手に取った戦いで撃退することに成功する。

それから数日後、リュイはシグナムと一緒にある教会にいた。

リュイ「……………」

? 「……………」

? 「……………」

リュイの前に縛られて木にぶら下っている2人のシスターがおり、内1人は頭にたんこぶがあり気絶していた。

シグナム「リュイ、あまりあんなものを見るな」

リュイの目を塞ぎながらシグナムは言う。

セイン「あのー、それを言うなら下して…」

木にぶら下っているたんこぶの無い方のシスター、前にリュイがヴィヴィオたちの合宿に参加した時にお風呂を覗いた「セイン」は言う。
う。

シグナム「すまんがお前のことはリュイから聞いた。勝手に人の息子の入浴を覗いたそうじゃないか」

セイン「あ、口止めするの忘れて…」

シグナム「今すぐ斬りたいがここは上司に言っておくとする」

セイン「それ完全にアタシからしたら最悪じゃん！ねえ、ちよつとお!!!」

シグナムに言われてセインは言うがすでにシグナムはリュイを連れて協会内へ入っていった。

カリム「ご無沙汰しています、シグナム隊長」

シグナムに挨拶をする金髪で、シスターの服を着た女性はこの聖王

教会の上層部のメンバーである騎士で、はやての古くからの友人で時空管理局少将でもある【カリム・グラシア】である。

シグナム「こちらこそです、騎士カリム」

カリム「えっと、そちらが噂の…」

挨拶を終えて、シグナムの後ろに隠れているリュイを見てカリムは言う。

シグナム「はい。ほら、リュイ」

隠れているリュイを前にだしてシグナムは言う。

リュイ「う…あ…」

知らない人で、さらに苦手な金髪の女性を見てリュイは少し緊張気味であった。

リュイ「や、やがみ…りゅい…です…」

でも、何とか臆せずに名乗れたがすぐにシグナムの後ろに隠れてしまった。

シグナム「す、すみません…」

隠れてしまったリュイを見てシグナムは謝罪する。

カリム「いえいえ。誰だつて知らない人に挨拶するのは緊張しますよ。泣いたりせずにはっきり挨拶できたからよしとしましょう」

頑張つて挨拶したリュイを見てカリムは言う。

シグナム「貴女がそうおつしやるなら。それで今日はどのようなご用件でしょうか？」

カリム「実はここ最近教会近くの森にアマゾンらしき怪物を見たという情報が多く寄せられました…」

シグナム「やはり…」

リュイと一緒に呼び出された時からシグナムはある程度予感していたのかそう呟いた。

シグナム「被害の程は？」

カリム「それがここではないのですが別の教会のシスターや周辺の住人の方が襲われて…ただ命に別状はなく全員が無事です」

被害の状況を聞いてシグナムは首を傾げたくなった。

シグナム（アマゾンが人を襲って命を取らない？）

基本的にアマゾン人は肉食性で、本能の赴くままに人を襲い、食らう。だがリュイのように人を襲うことを嫌い、静かに暮らそうとしているアマゾンも何体かいることも確認されていた。

「というのも今回は、人を襲うが命は取らない」というアマゾンは初めてのケースであったからだ。

カリム「デイトやオットーたちが何回か搜索したのですが結局見つからず…ですから八神司令に相談したらリュイくんのことを聞いて協力をお願いしたのです」

シグナム「そうですか…そういうことなら協力します。な、リュイ」
リュイ「うん…」

シグナムに言われてリュイは返事をする。

カリム「良かった。それではさっそくシグナム隊長はこれに着替えてください」

引き出しから折りたたまれて袋に包まれた服を出してカリムは笑顔で言う。

シグナム「……は？」

それを見たシグナムは目が点になった。

聖王教会の騎士であるカリムからアマゾンの調査を依頼されてリュイは着替えを終えたシグナムと案内役のセイン、そして聖王教会所属の修道騎士で、カリム・グラシアの秘書でシグナムとは【剣友】の間柄の【シャツハ・ヌエラ】と共にアマゾンが潜伏している山に来ていた。

セイン「うー…なんでアタシまで…」

シャツハ「文句を言わない。今までサボっていた分の罰です」

文句を言うセインにシャツハは言う。

セイン「うう…否定できないのが辛い……」

凶星らしくセインは言う。

セイン「それにしても……」

振り向いてセインは後ろで付いてくるリュイとシグナムの方を向く。

セイン「よくお似合いで」

少しからかうようにセインは言う。

シグナム「一応、弁解しておくが好きで着たわけではない!!」

セインにからかわれて、聖王教会のシスターの服を着たシグナムは言う。

実はカリムが出してきた服とはこのシスターの服で、断ろうとしたのだがどういいうわけか今回のアマゾンにはシスターを狙っているものと判断されたらしく渋々着る羽目になったのだ。

シグナム「くっ、任務出なければこのような格好……」

リュイ「しぐまま…にあってる……よ」

普段なら着ないような服を着て嫌々なシグナムにリュイは言う。

セイン「ほらほら、この子だってそう言ってる……」

シャツハ「いい加減にしなさい!!」

またもからかうセインにシャツハの怒声と鉄拳が耳と頭に叩き込まれた。

セイン「うう…すごく痛い……」

殴られた頭を押さえてしやがみ込むセイン。

リュイ「せいん…だいじょうぶ…？」

しやがみ込むセインにリュイは少しだけ心配した様子で聞く。

シャツハ「全く…それにしても貴女に子供ができるなんて予想外でしたよ」

シグナム「リュイは養子だがな…まあ、確かに私自身も予想外だった。まさか私を母親として慕ってくれている子ができるなんてな」

リュイを見ながらそう話す2人。

そんなリュイはセインのたんこぶをツンツン突き、セインはその痛みで悲鳴を上げていた。

リュイ「！」

たんこぶをツンツンしていたリュイは急に周囲を警戒するように見回した。

シグナム「リュイ、まさか…」

警戒するように周囲を見回しているリュイを見てシグナムは聞く。

リュイ「うん…ちかくに…あまぞん…いる…」

聞かれてリュイはシグナムに言う。

それを聞いて3人は警戒する。

リュイ「来た!!」

同時に4人の足元の地面から1体のアマゾンが飛び出してきた。

シグナム「地中からだど!」

地中から奇襲を仕掛けてきたアマゾンに驚きながらも回避する。

【GA・M・MAー】

リュイ「あまぞん…」

【ANCI・AN・ANCIENT!!】

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

回避して着地するとすぐさまアマゾンズドライバーを出してグリップを捻って変身し、臨戦した。

モグラアマゾン「み、水澤くん!」

変身したガンマを見てモグラのアマゾン「モグラアマゾン」は誰かと勘違いしたのか驚いていた。

ガンマ「みず…さわ？」

対してガンマは勘違いされて首を傾げていた。

モグラアマゾン「いや違う。水澤くんに似てるけど…でも誰だろう
とここからは通さない!!!」

ガンマの反応を見てモグラアマゾンは勘違いしていたと気づいて
臨戦する。

ガンマ「グルルルル、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオツ!!!」

臨戦したモグラアマゾンにガンマも構えると向かって走りだした。

モグラアマゾン「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アツ!!!」

向かってくるガンマにモグラアマゾンも真っ向から対抗しに来る。

ガンマのアームカッターとモグラアマゾンの硬化クローがぶつか
り甲高い金属音が周囲に響く。

アームカッターと硬化クローがぶつかり合ってガンマはすぐに左
足を振り上げてレッグカッターをモグラアマゾンの首にめがけて振
り下ろした。

しかしモグラアマゾンは戦い慣れているのか硬化クローをガンマ
の腋に潜らせると力いっぱい持ち上げて投げ飛ばした。

ガンマ「ぐっ!!」

左足を振り上げていて片足立ちであったガンマは容易に投げられ
てしまい地面に叩きつけられてしまう。

モグラアマゾン「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アツ!!!」

投げて地面に叩きつけたガンマにモグラアマゾンは追撃として硬
化クローを放つ。

ガンマ「グルラアツ！」

《バイオレント・ブレイク!!》

向かってくるモグラアマゾンの硬化クローをガンマはバトラীগ
リップを引き抜いて槍である武器、アマゾンスピアを出して柄の部分
で受け止めた。

モグラアマゾン「!?」

アマゾンスパアで受け止められたのを見てモグラアマゾンは驚く。その隙にガンマは起き上がるとモグラアマゾンの腹部を蹴って突き離れた。

モグラアマゾン「ぐはっ!!!」

蹴られたモグラアマゾンは大木の木にぶつかった。

ガンマ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

モグラアマゾンが大木にぶつかったのを見てガンマはアマゾンスパアを投擲した。

モグラアマゾン「くっ!」

投擲されたアマゾンスパアを見てモグラアマゾンは素早く体をかがませると地面を掘り、その姿を眩ませた。

ガンマ「!?!」

地面を掘って姿を眩ませたモグラアマゾンを見てガンマは周囲を警戒する。

するとガンマの背後の地面に大きな穴が開いた。

ガンマ「そこっ!!!」

背後を警戒していたガンマはすぐに攻撃したがそこには誰もいなかった。

ガンマ「なっ!?!」

誰もいないことに驚いていると今度は逆方向の地面に穴が開いて中からモグラアマゾンが姿を現した。

モグラアマゾン「もらった!!!」

ガンマ「しまっ!?!」

完全に裏をかかれてしまいガンマは防御が間に合わなかった。

モグラアマゾンの硬化クロウがガンマに向かって放たれたのだ。た。

モグラアマゾンの硬化クローがガンマに迫っていた。

硬化クローがガンマに刺さりそうになった刹那、板のような物が硬化クローを受け止めた。

モグラアマゾン「なに!？」

自身の硬化クローを受け止められてモグラアマゾンは驚く。

シグナムがレヴァンティンでモグラアマゾンの硬化クローを受け止めていたのだ。(リュイがピンチであったために服装はまだシスター服であるが)

シグナム「今だ!!」

モグラアマゾン「!？」

シグナムが叫ぶとモグラアマゾンの後ろから双剣型のアームドデバイス「ヴィンデルシャフト」を構えたシャツハが飛びかかってきた。

モグラアマゾン「くっ!!」

シャツハの斬撃をモグラアマゾンはもう片方の硬化クローで受け止めて直撃を避ける。

シャツハ「流石はアマゾンですね…ですがこれでアナタは動けなくなっています!!」

モグラアマゾン「しまった!？」

シャツハに言われてモグラアマゾンは自身の状況に気付いた。

唯一の武器である両手の硬化クローはシグナムとシャツハの2人の攻撃を防いでいて動きが取れなくなっつてしまっていた。

ガンマ「はあああああああッ!!!」

《バイオレントパニッシュュ!!!》

この好機をガンマは見逃さず、アクセラレーターを捻り両腕部の「アームカッター」を大型化させてモグラアマゾンに斬りかかった。

後少してアームカッターがモグラアマゾンの体を切り裂こうとしたその時だった。

《O・ME・GA!!》

? 「アマゾンツ!!」

つかり合う。

”ギリギリ”と刀のつばぜり合いのように互いに押し合う。

？「君は…アマゾン、なのか？」

恐る恐るつとというように緑のアマゾンライダーはガンマに聞く。

ガンマ「ぼくは…あまぞんで…にん…げんだ!!!」

聞かれたガンマは純粋なアマゾンであるかどうかと解釈して言う。

？「そうか…なら僕たちは敵対することはない」

ガンマ「え？」

ガンマの答えを聞いて緑のアマゾンライダーが言う。ガンマの集中力が途切れた。

？「はっ!!!」

その隙を突いて緑のアマゾンライダーはガンマの腹部を蹴って吹き飛ばした。

ガンマ「あぐっ!!」

蹴られたガンマは少し離れた木に激突した。

ガンマ「この…」

立ち上がって再度集中するガンマ。

？「……………」

しかし緑のアマゾンライダーは戦う意思がもう無いのか背を向けた。

？「君と僕は似ている。アマゾンであり、人間であり、どちらか分からなくなりそうな狭間に葛藤してしまう…どちらか一方しか守れない、一方にしか付けない。そんな狭間でどちらかを捨てる覚悟がいずれ訪れる。その時、悩んだりしたら僕の言葉を思い出してほしい。”自分の気持ちに正直になって、自分の信じた道を貫くんだ”。これが僕と同じ…いや、似ている君に送る言葉だよ」

緑のアマゾンライダーはガンマに言い残すとモグラアマゾン連れて森の奥へ入っていった。

ガンマ「……………」

攻撃のチャンスであったがガンマは緑のアマゾンライダーを攻撃する気になれなかった。

それでガンマは緑のアマゾンライダーとモグラアマゾンを見送るしかなかった。

ガンマ「……あ…しぐまま…と…しやは…」

緑のアマゾンライダーとモグラアマゾンが見えなくなつてガンマは我に帰つてシグナムとシャツハを思い出して探し向かつていった。

後々で分かつたが聖王教会のシスターを襲つていたアマゾンはモグラアマゾンとは別のアマゾンであつたことが判明した。

今回の戦いで失つたガンマの体力が回復した翌日に無事に討伐されたのだつた。

因みにこの戦闘のために匣でシグナムがシスターの格好をする羽目になつた。

加えてはやてがリユイにシスター・シグナムの写真をこっそり撮るように言つていて撮つていたことが分かつた。

この写真ははやてがシグナムファンの職員に闇取引で売り捌いていたのだつた。

ボトリと地面に落ちたそれは…ガンマの腕であった。
ガンマ「:!?!」

落ちた腕を見てガンマは自身の右腕を見た。

そこには本来あるべき右腕は無く、傷口からアマゾン特有の黒い体液と赤い鮮血が流れていた。

ガンマ「う、うう…」

今まで見たことのない傷にガンマの恐怖心が加速する。

リュイ「う わ あ ああああ ああああ ああああ ああ

あああああああああああああああああああツ!」

悲鳴を上げながらリュイは飛び起きた。

シグナム「どうした、リュイ」

飛び起きたリュイにシグナムも起きて聞いてきた。

リュイ「うう…」

赤いアマゾンライダーがよほど怖かったのかリュイは今にも泣きそうな声でシグナムに抱き着いた。

シグナム「ど、どうしたというんだ、本当に」

リュイ「う…」

急に抱き着かれて驚きながらもシグナムは聞くが、リュイは恐怖で一杯なのか、何も言わずにシグナムの体に顔を埋めて答えようとはしなかった。

男性「つあ…」

ある世界にあるとあるアパートの一室に1人の髭を生やし、野性味溢れた男性が起き上がった。

女性「どうしたの？」

隣で寝ていた女性が起き上がった男性に聞いてきた。

男性「んー？ちょっと夢でアイツに似たアマゾンと戦ってた」

女性「アイツって、前に連れてきたあの子？」

男性の言っている”アイツ”が誰なのか心当たりがあるのか女性
は聞く。

男性「ああ：それにしても、よく似てたな…」

女性の問いに答えながらガンマを思い出して男性は言う。

女性「また会ったらどうするの？」

男性「決まってるんだろ。アマゾンは一匹残らず殺す。この俺がな」

七羽「仁らしい」

仁「ふっ：お前に言われるといい気分だ」

女性【泉 七羽】に言われて男性【鷹山 仁】は少し嬉しそうにしていたのだった。

懐かしき思い出

h u n t i n g 78

その日、リュイはシグナムと管理局の本部に来ていた。

子供を連れてくるシグナムに男性・女性職員の視線が注がれ、その視線はリュイにも向けられていた。

実は管理局内でリュイのことが噂になっており、あの凛々しく、ガードの硬いシグナムに子供が出来たというので一目見ようと集まってきたのだ。

リュイ「……………」

視線を向けられてあまり人に慣れていないリュイは不安になってシグナムの服を強く握る。

シグナム「大丈夫だ。私が付いている」

強く握ってきたリュイにシグナムは微笑みながらさういう。

リュイ「うん…」

微笑んだシグナムに言われたが、まだ不安な様子でリュイは頷く。

シグナムがリュイを連れてきた理由は前にリュイがアマゾンマンション事件で使用したバイク「ジャングレイダー」のことが分かったらしいのだ。

受け付けでリュイの入管許可証を貰ったシグナムは時空管理局の魔導師たちが演習する演習場に来ていた。

リュイ「ひろい…」

だだっ広い演習場を目の当たりにしてリュイは少し興奮していた。

マリエル「シグナム隊長、お疲れ様です」

シヨートカットで、緑色の髪の色で、メガネを掛け、局員の制服の上に白衣を着た女性「マリエル・アテンザ」（愛称：マリー）が来た。

マリエル「その子がリュイクんですね。こんにわ」

リュイを見つけてマリエルは屈んで挨拶する。

リュイ「こ、こん…にち…わ…」

シグナムに隠れつつリュイはマリエルに挨拶する。

マリエル「うーん、少し警戒されてますよね？」

シグナムに隠れて挨拶したりリュイを見てマリエルは聞く。

シグナム「おそらく。金髪ではないが白衣の部分で警戒しているのでは…？」

シグナムも確証は持っている訳ではないので絶対とは言い切れない感じに言う。

マリエル「あー、やっぱり…話を聞いた時から白衣これは不味いかな…っとは思ってたんですけどね。でもここで少しでも目立たないと今後出番が、ブツブツ…」

シグナム「な、なんの話だ？」

少しメタい話を出してきたマリエルにシグナムは少し引き気味になる。

シグナム「そ、それより！主はやてから例の物の解析に協力してほしいと連絡があったのだが」

話題を変えようとシグナムは今日ここに来た理由を言う。

マリエル「ああ！はい、そうなんです！こつちに用意してますから見てください!!」

用事を思い出したマリエルは2人を演習場からほどなく離れたシャッターが閉まった倉庫のような場所に案内した。

案内したマリエルは倉庫のシャッターを上げて開いた。

倉庫の中には1台のバイクが置かれていた。

リュイ「しぐまま…この…ばいく…」

置かれていたバイクにリュイは見覚えがあった。

シグナム「覚えていたか。そうだ、リュイが乗ってきた物だ」

バイクー女王アリアマゾンを頂点とした大多数のアリアマゾンのよる『アマゾンマンション事件』にて潜入したシグナムとヴィータの元へ駆けつける為にリュイが乗ってきたバイクである。

マリエル「とりあえず、名称としてジャングレイダーって呼んでます。それでリュイくん、このジャングレイダーはリュイくんにしか動かせないみたいなの。だから少しだけこれに乗ってくれないかな？」
そう言つてマリエルはお願いする。

リュイ「うん…いい…よ…」

お願いされてリュイは断る理由もないので了承した。

マリエル「ありがとう！じゃあ、さっそく乗ってもらっていいかな？」

リュイ「うん…」

マリエルに言われてリュイはシグナムから離れるとジャングレイダーの前まで近づいた。

リュイ「……………」

ジャングレイダーを前にしてリュイは少し不安になった。

理由は最初に乗った時、一瞬だけ電気が走って痛い思いをしたからだ。

事件解決後に取りに来たときはハンドルではなく、後ろから押す感じで持ってきたのだ。

そんな怖さがある中で、恐る恐るリュイはジャングレイダーのハンドルを握った。

ハンドルを握っても電気は走らず、痛みは無かった。

リュイ「……………」

痛みが無いと分かるとリュイは跨ってバイクに乗った。

マリエル「じゃあ、動かしてみて」

リュイが乗ったのを見てマリエルが言うどリュイは頷いてジャングレイダーのハンドルを捻った。

すると”ブオオオン”とエンジンが掛かる音がした。

シグナム「掛かった!？」

自分たちではエンジンすら掛からなかったジャングレイダーがリュイが動かすとエンジンが掛かったことに驚く。

マリエル「凄い、すごいよ、リュイくん！」

少し興奮気味に喜んでマリエルは言う。

リュイ「そう…かな…?」

興奮しているマリエルにリュイは不思議そうな顔をして言う。

マリエル「うん！そうだよ!!」

不思議そうな顔をしているリュイにマリエルは言う。

マリエル「じゃあ、この広場をぐるりと一周してきてくれるかな」
リュイ「うん…」

マリエルに言われてリュイはそのままジャングレイダーを動かそうとした時だった。

シグナム「リュイ、ヘルメットを被っておけ。怪我でもしたら大変だ」

そう言っつてシグナムは子供サイズのヘルメットを手渡してきた。

リュイ「ありがと…しぐまま…」

ヘルメットを受け取って被るとリュイはジャングレイダーを動かした。

リュイ「いつてきます…」

シグナムとマリエルの2人に言うのとジャングレイダーを走らせて演習場を走り始めた。

シグナム「しつかりと動いているな」

マリエル「ええ。正常に…」

走り始めたジャングレイダーを見て2人は言う。

シグナム「どうしてリュイだけが動かせるんだ？」

様々な方法でジャングレイダーを動かそうとはしたがエンジンすら掛からなかったのにリュイが乗ると動き始めたのが不思議でシグナムは聞く。

マリエル「これはあくまで私の仮説なんです…ジャングレイダーはもうリュイくんしか動かせないと思っています」

シグナム「リュイだけが？」

マリエル「はい。リュイくんの証言だと触ったときに一瞬だけ痛かったとか。恐らくそれが持ち主を登録するもので、それ以外の人間が扱えないように生体ロックが掛かっているんだと思います」

ジャングレイダーがリュイ以外に動かせないことをマリエルは彼女なりの推測を言う。

シグナム「仮にそうだと…誰があんなものを…」

マリエル「さあ、流石にそこまでは…解体も碌にできなかつたので…」

誰がなんのためにジャングレイダーを作ったのか、その疑問が残ることになった。

しかし、それどころではないことがすぐに起きた。

理由はリュイがジャングレイダーで爆走している最中にバランスを崩して転倒してしまっただのだ。

「あ……」

転倒したリュイの姿を見て驚愕した。

マリエル「り……」

シグナム 「リュ

イイイイイイイイ

イ!

マリエルが動こうとした瞬間にシグナムが人間ならざる猛ダツシユで転倒したリュイの元へ向かった。

マリエル「はやっ!?!」

人間ならざる猛ダツシユしたシグナムを見てマリエルは驚くのだった。

シグナム「リュイ、無事……!!」

数分で到着するはずだったのを数秒でリュイの元へ到着したシグナムが見たのは地面に倒れて眠っているリュイの姿だった。

シグナム「ね、寝ているだど?」

寝ているリュイにシグナムは少し呆れてしまった。

シグナム（だが、怪我は無いようだな。良かった）

奇跡的に怪我が無いことに嬉しさを感じながらシグナムはリュイを背負っておんぶした。

シグナム（しかし何故リュイが急に?まるで変身した反動のような……）

おんぶしたシグナムは眠ってしまったリュイを見て新たな疑問を浮かべながらマリエルの方へ歩いていくのだった。

番外編 4

h u n t i n g (?)

それはシグナムが部下への訓練を終えて定時になって帰ろうとしていた時だった。

シグナム（ん？なんだ、これは）

着替えて帰ろうとして更衣室前まで来てふと扉の下を見るとブロマイドのようなものが落ちていた。

シグナム「誰か落としたのか？全く、落としたことに気づかぬとはたるんでい…?!?!」

ブロマイドを拾い上げて写真を見たシグナムは絶句した。

その写真は1人の少年の寝顔が映っていた。

その少年にシグナムはありすぎるくらい見覚えがあった。

なぜならその少年はリュイであったからだ。

シグナム「な、なんだこれ
はあああああー……」

全く身に覚えにない我が子のブロマイドにシグナムは驚愕して絶叫した。

女性局員「すいません、このあたりでブロマイドをみま、あ…」

そこへ後ろから女性局員がシグナムとは知らずにブロマイドのことを聞いてきたがすぐに話してならない相手だと気づいた。

しかし時はすでに遅かった。

シグナム「ほお…これは貴様のか…」

不気味な声を出しながらシグナムは女性局員を睨むとレヴァンティンを出した。

シグナム「少し話があるのだが、付き合ってくれるだろうか？」

プレッシャーを放ちながらゆっくりと近づく。

女性局員「ひいッ!!!」

シグナムのプレッシャーに女性局員は恐怖で怯えて泣き出ししてしまっていた。

リイン「いいんですか、はやてちゃん。こんなものを作って」
リュイのブロマイドを見ながらリインははやてに聞く。

はやて「大丈夫やて。買っていく人にはしつかりと秘密を厳守して
もろうとるからな。それにレアな表情程高く女性局員に売れるんや。
この調子でガツポリ儲けて六課の予算を何とか都合するんやあ!!!」

リイン「まあ、それはいいんですがこんなことが勝手にしてシグナ
ムにバレたら大変ですよ?」

はやて「大丈夫大丈夫。シグナムにバレんようにしつかりと隠ぺい
はしと:」

シグナム「ほお:やはり貴女でしたか。黒幕は」

「?!?!」

聞き覚えのある声に驚いていると部隊長室の扉が壊されてレヴァ
ンティンを持ったシグナムが入ってきた。

はやて「し、しししししし、シグナム:」

明らかにキレているシグナムにはやては恐怖した。

シグナム「これはどういうことですか。主はーやーてえー?」

はやて「いや、あの、それは、そのお……」

キレているシグナムにどう言い訳するか考えるはやて。

六課の為と言えがいいが今のシグナムにそんなことは通じない。

リュイを使うぐらいならばやてのヌード写真でも出せと言われか
ねないからだ。

シグナム「ああ。どうして私がここを突き止めたかお話ししてませ
んでしたね。簡単ですよ。1人1人、リュイのブロマイドを持って
る奴から聞き出してきたんですよ」

はやて「か、簡単って:結構根気いるで……」

根気のいることを平然とやってのけて、自身にまでたどり着いたシ
グナムにはやては驚いていた。

シグナム「まあ、そのことはもういいでしょう。それで、これはど
ういうことですか?」

黒い笑みを浮かべながらシグナムは愛機レヴァンティンを出す。

片や愛機であるレヴァンティンは無言で炎を出す。

どうやらシグナムの怒りに触れないように無言となってしまうた
ようだ。

はやて「す、すみませでしたあ!!!!」

レヴァンティンを構えたのを見てはやてはマツハで席を立つて
シグナムに向かって土下座をした。

シグナム「主とは言葉え許す

かあああああ-----

!!!!!!
「はやて「ぎやあああああ-----!? やらば
りいいいい-----!!!!」

土下座をしても許されず、はやての悲鳴が管理局全体に響き渡つ
た。

この後、リュイのブロマイドを購入したであろう女性局員全員が一
斉にしばらく有給休暇（と言う名の入院）をする羽目になった。

そしてはやてはシグナムによりヌード写真集は売り出されなかつ
たが代わりに嫌というほどの書類仕事となのはとの模擬戦をさせら
れたのは言うまでもない。

特別編 混血と狩人と異世界の敵
特別編 暗黒との邂逅（前編）

その日、リュイはヴィヴィオたちの誘いでルーテシアのいるカルジーナに来ていた。

勿論、ヴィヴィオたちのストライクアーツの特訓となのはたちの対アマゾン戦の訓練を兼ねた対戦相手役としてだ。

が、実際の目的は別にあった。

最近、ルーテシアたちにいる宿の周辺にアマゾンの目撃情報があり、なのはたちの責任（保護者代理）としてリュイが討伐しに来たのだ。

しかし、それが大事件の始まりとなるとは誰も思わなかった。

その日、ヴィヴィオたちのストライクアーツの訓練となのはたちの対アマゾン戦の特訓を終えて、晩御飯前の夜になった時間帯である。

ルーテシアが作った宿泊施設のログハウスのベランダで夜空に煌めいている星々を見ていた。

ヴィヴィオ「宝石が空に浮かんでるみたい！」

リオ「ミッドじゃ、なかなか見れないね！」

コロナ「うん！」

宝石箱をひっくり返して宝石を全部出したかのように満遍なく夜空に輝く星を見て一同は感動していた。

リュイ「ほしが…いっぱい…きれい……」

リュイも夜空に輝く星々を見てアマゾンと過酷な戦いをしてきた日々をこの時は忘れられていた。

それにミッドではなかなか見られないほどにある沢山の星に感動を覚えていた。

すると夜空の星の中で一筋の光が落ちていった。

リュイ「ほしが…」

落ちていく光を見てリュイは目を見開いた。

リュイ「びびお…いまの…」

落ちた光を見てリュイは隣にいたヴィヴィオに聞く。

ヴィヴィオ「ああ、あれは流れ星だよ」

ヴィヴィオも流れ星を見ていたのかリュイに教える。

リュイ「ながれ…ぼし…？」

流れ星が分からないのかリュイは首をかしげていた。

リオ「リュイくん、流れ星見るの初めて？」

リュイ「うん…」

流れ星を初めて見るリュイは聞かれると頷いた。

コロナ「そつか。流れ星っていうのは夜空に流れる光で、大抵は米粒程度の塵で大気圏突入途中で燃え尽きる時に見えるものだよ。その中で大きくて燃え尽きなかった場合は隕石、流れ星が沢山現れる現象を流星群って言うんだよ」

リュイ「お…：…ころ…：ものしり…：すごい…」

半ば難しくってよく分かってなかったが、コロナが

コロナ「えへへ、少し星について勉強してたんだ」

ヴィヴィオ「そいえば学校でも星座とかの授業があるもんね」

リオ「うう…：それって88もあるんだよね…：。覚えきれないよ…：」

？「正確には88じゃないんだよね」

88星座の話をしていると後ろから1人の女性が言いながら来た。

ヴィヴィオ「なのはママ！」

コロナ「どういうことですか？」

やって来た女性、なのはにコロナは聞く。

なのは「星座には88星座の他にもγ線天体の22星座、風刺作家で植物学者の【ジョン・ヒル】って人が作成した15の星座、今は使われなくなった星座もあるの」

リュイ「せいぎ…：いっぱいあるんだ…」

リオ「うう…：そんなに沢山あるなんてえ…」

88星座以外にも沢山の星座があることにリュイは驚き、リオはうへーっとしていた。

なのは「そうそうリュイくん。流れ星にはね、消える前に三回同じ願い事を唱えるとその願いが叶うって言われてるんだよ」

リュイ「そうなの？」

なのは「そういう迷信だけどね」

ヴィヴィオ「もー、なのはママ！ロマン無さすぎー！」

なのは「ごめんごめん」

ロマンチックなことをリュイに言っておきながらそれを壊すようなことをヴィヴィオに言われてなのはは謝る。

リュイ（ぼくが…ねがうこと……）

流れ星を見てリュイはあることを願った。

ルーテシア製宿泊施設から山1つ越えた泉のある森林に渦を巻いた黒い穴が開き、1人の青年が出てきた。

？「ようやく着いたか。全く、なんで僕がこんな事を…まあ、いいか」

穴から出てきた青年はそうぼやきながらその場を後にした。

青年が後にすると穴は縮んで消滅してしまったのだった。

ステイシー「僕の名はステイシー。君には恨みは無いが、少し痛めつけさせてもらおうよ…」

現れた美男子「ステイシー」は名乗るなり、ガトリングガン型のアイテムを出すと上部に歯車型の相手をセットした。

ステイシー「暗黒チェンジ！」

ガトリングガンのハンドル部分を回す。

《邪バーン！》

《ステー・イ・シーザー…!!》

ガトリングガンの銃口を右腕に押し当て注射するかの如く身体へ直に注入。

ガンマ「!？」

変身した青年を見て驚いていると名乗りを上げた。

ステイシーザー「暗黒のパワー…ステイシーザー!!」

突然現れた謎の青年ステイシーが変身した「ステイシーザー」は名乗りを上げたのだった。

特別編 暗黒の戦士

ステイシーザー「行くぞ!!」

変身したステイシーザーはガトリングガン型の武器であり変身アイテムであるギアトジンガーを発砲する。

ガンマ「ガアアアアアアアアツ!!」

跳躍してギアトジンガーの弾丸を回避してアームカッターで斬りかかる。

ステイシーザー「はっ!!」

だがステイシーザーはすぐに反応してギアトジンガーを上に向けて発砲する。

ガンマ「ぐ、ガアアアアアアアアアアアアアツ!!」

《バイオレント・ブレイク!!》

胸部の右と左肩に1発ずつ喰らいながらもガンマはバトラীগリップを引き抜いて「アマゾンスピア」を出してステイシーザーに放った。

ステイシーザー「なに!?!ぐあっ!!」

思わぬ反撃にステイシーザーは反応できずに胸部に喰らうがスーツにより刺さらずに弾じかれてしまう。

ステイシーザー「やるじゃないか。だが、これならどうだ!!」

攻撃を受けながらも反撃してきたガンマにステイシーザーは言う
と縁が紫色で黒色に銀色でステイシーザーのような仮面の戦士と左側に03と数字が書かれた歯車を出すと変身時と同じように上部分に歯車をセットしてハンドルを回した。

《邪バーン!》

《バートルファイバー…!!》

何回か回したあと、トリガーを引くと錆びた像のように5人の戦士たちが現れたかと思いきや錆び部分が剥がれて赤、橙、青、黒、桃の色になり、スーパー戦隊3番目「バートルファイバーJ」のフェイクが現れた。

ステイシーザーはギアトジンガーに自身以外の戦隊のギアである

「ダークセンタイギア」をセットすることで歴代スーパー戦隊のフェイクを召喚出来るのである。

ガンマ「!?!」

なのは「なにあれ!?!」

フェイト「アイツと似てる!?!」

スーパー戦隊を知らないなのは、フェイト、ガンマはステイシーザーの召喚したバトルファイバーJに驚く。

ステイシーザー「行け!!」

バトルファイバーJのメンバー（バトルジャパン、バトルケニア、バトルコサツク、ミスアメリカ）たちがガンマに向かって行く。

ガンマ「くっ!?!」

カブトガニアマゾンとの戦闘直前で消耗した状態で、しかも4対1と数的にも厳しいため防戦一方にならざるを得なかった。

なのは「相手はリュイクンだけじゃないんだよ!?!」

フェイト「私たちも相手になるわ!?!」

ステイシーザー「ならお前たちにはコイツらだ!?!」

《邪バーン!》

《デーカレンジャー!?!》

《マージレンジャー!?!》

《ゲーキレンジャー!?!》

《ニンニンジャー!?!》

ガンマは加勢に入ろうとしたのはとフェイトに対して、ステイシーザーは再度ダークセンタイギアをギアトジンガーにセットして、スーパー戦隊28番目【特捜戦隊デカレンジャー】、29番目【魔法戦隊マジレンジャー】、31番目【獣拳戦隊ゲキレンジャー】、39番目【手裏剣戦隊ニンニンジャー】の四大スーパー戦隊のフェイクを召喚した。

なのは「なっ!?!」

フェイト「さつきより多い!?!」

計20人もいる相手に流石のなのはとフェイトは驚く。

ステイシーザー「行け!!」

ステイシーザーの指示でデカレンジャー、マジレンジャー、ゲキレンジャー、ニンニンジャーはなのはとフェイトに襲い掛かった。

なのは「うわっ!!」
フェイト「くっ!!」

デカレンジャーの銃撃（デカレッドの二丁拳銃ディーマグナム、ブルーのディースナイパー、グリーンのディーブラスター、イエローとピンクのディーショット）、マジレンジャーの魔法（マジレッドの炎、ブルーの水、イエローの雷、グリーンの岩石、ピンクの旋風）、ゲキレンジャーの拳法と武器による武術（ゲキレッドの獣拳タイガー拳と鮫を模した柳葉刀の双剣【ゲキセイバー】による剣術、ブルーの獣拳ジャガー拳と蝙蝠を模した鉄扇【ゲキファン】による鉄扇術、イエローの獣拳チーター拳と像を模した鎖鉄球【ゲキハンマー】による鎖鉄球術）、ニンニンジャーの忍術（5人による連続手裏剣忍法）になのはとフェイトは回避するだけで精一杯だった。

ガンマ「にやによは！ふえーと！」

四大スーパー戦隊に苦戦するなのはとフェイトを助けようとするが、ステイシーザーが立ち塞がった。

ステイシーザー「君の相手は僕だつて言っただろ!!」

立ち塞がったステイシーザーはギアトジンガーのハンドルをしてエネルギーをチャージする。

ガンマ「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

《バイオレント・ストライク!!》

ガンマも跳躍してアクセラードグリップを捻り、バイオレント・ストライクを発動させて繰り出した。

ステイシーザー「シーザーあんこくじゃばくげき暗黒邪爆撃!!」

ギアトジンガーにエネルギーをチャージするとトリガーを引くと邪悪な帯を模したエネルギー弾を発射した。

バイオレント・ストライクを放っているガンマを拘束すると爆発した。

ガ　ン　マ　「う　わ

あああああーーーーー

!!!!!!

これまでの疲労とダメージによりガンマは変身が解除してじい、リュイに戻ってしまった。

なのは・フェイト「リュイくん!!」

四大スーパ―戦隊に囲まれながらも何とか被弾を最小限にしていたのはとフェイトは助けに行きたかったが囲まれた状況では助けに行けなかった。

リュイ「う…あ……………」

ダメージがかなり入っているのかりュイは立とうとしたが立てずに倒れ、気絶してしまった。

気絶したリュイをステイシーザーは拾い上げるようにして抱え、と空を見上げた。

ステイシーザー「来い、バトルシーザーロボ!!」

ステイシーザーが叫ぶと暗雲が突如として青空の一角に現れ、中から巨大ロボ【バトルシーザーロボ】が現れて地上に降りた立った。

なのは・フェイト「ロ、ロボットオ!?!」

現れたバトルシーザーロボなのはとフェイトは驚いて声を上げてしまう。

ステイシーザー「もう、目的は果たした。じゃあな」

リュイを抱えたステイシーザーは着陸したバトルシーザーロボに跳躍して乗り込むとバトルシーザーロボは飛翔して暗雲の中へ入ると暗雲と共に消えた。

ステイシーザーがバトルシーザーロボと共にリュイを連れ去ったのと同時に四大スーパ―戦隊のフェイクは消滅した。

なのは「き、消えた…」

急に消えた四大スーパ―戦隊に驚愕と呆気にとられてしまう。

フェイト「なのは、早くこのことをはやてたちに!」

なのは「うん!」

リュイが拐われてしまったことをリュイの保護者である八神家に伝えるために2人は急いで宿泊施設へ戻るのだった。

特別編 邂逅の混血たち

リュイ「ん……?」

目が覚めたリュイはコックピットのような場所の端に転がされていることに気付く。

リュイ「ここは…」

手足を動かすが手錠のようなもので動けなくされているのか僅かにしか動かなかつた。

ステイシーザー「悪いけど、そのまま大人しくしててもらうよ」

リュイが目を覚ましたのを感じたのかステイシーザーは奥から歩いてきて言うと言身を変身を解き、ステイシーに戻った。

リュイ「ぼくを…どうするの…?」

ステイシー「さあね。僕はただ、アイツに言われただけだから」

理由を聞かれたステイシーは素っ気なく答える。

リュイ「あいつって?」

ステイシー「悪いけど、もうこれ以上は話すことはないよ。大人しくしてな…!」

リュイの問いにステイシーはそう返答した瞬間だった、バトルシーザーロボのコックピットが激しく揺れた。

ステイシー「なんだ!」

突然の揺れに驚いて、状況を確認しようと外部カメラを起動させるとバトルシーザーロボの隣に左右対称なカラーリングが特徴で、船体と目に当たる部分がそれぞれ金と銀、赤と青と言う組み合わせになっているワニ型の巨大戦艦がおり、攻撃してきていた。

ステイシー「くそ! 界賊か!!」

ワニ型の巨大戦艦を見て、ステイシーは苛立ちを見せていた。

するとワニ型の巨大戦艦が放ったミサイルがバトルシーザーロボに命中、装甲が破壊された。

リュイ「うわっ!」

ステイシー「しまった!!」

破壊された装甲からリュイは外へと吸い出されてしまった。

とある世界の学校では学生たちがプール掃除を行っていた。

？「あー、かつたりー…なんで今日に限って、俺らがプール掃除なんだよー」

ブラシで水の抜かれたプールを磨きながら赤いカラーのY〇〇T
〇〇〇〇のマークが入ったタオルを被っている青年が文句を言う。

？「文句言わない。みんなでやれば早く終わるでしょ」

文句を言う青年に水色の髪に、小さな角が生え、顔は美人の部類に入りスタイルもいい少女が言う。

？「だけどよー…」

？「おーい、カゲチヨー。あんま文句言ってるで残りの作業、お前だけにさせるからなー」

カゲチヨ「なんで俺だけなんだよ!?!」

青年【カゲチヨ】が文句を言っていると黒髪に眼鏡、無精髭を生やした男性が言う。

カゲチヨ「つーか、お前は何もしてねーだろ!!」

男性に向かってカゲチヨは指さしして言う。

？「あ？そりゃあ、俺はお前らの先生だから生徒がしっかりしているか見守らないといけないだろ」

生徒「神谷先生、これどこに片づけければ…」

神谷「ああ、それは用具室の奥にしまっといってくれ」

生徒「分かりました」

カゲチヨの反論に真つ当な発言で返す男性【神谷】教師は別の生徒にビート板をどこに片付けるかを聞かれて指示していた。

神谷「つてことで、文句言う前にしっかり動けよー」

指示し終えた神谷はそう言っつて別の班の方へ歩いていく。

カゲチヨ「くそー、神谷の奴覚えてろよ…」

握り拳を作りながらカゲチヨは神谷（生徒と先制の関係なのに）を睨みつけていた。

？「それよりカゲ、今日のカレコレの依頼はどうするの？」

カゲチヨ「あー…今日はヒサとシデイで頼む」

隣でずっとカゲチヨを諫めていた少女【ヒサメ】に【かれこれ屋】の依頼について聞かれたカゲチヨはめんどくさそうに言う。

ヒサメ「分かった…!?」

カゲチヨに依頼を自身と【シデイ】と呼ばれる人物だけで頼むと言われた瞬間だった、青い空に黒い穴が開いたかと思いきや、巨大な何かが飛来して真下にあった建物を破壊され、爆発が起きて黒煙が上がった。

カゲチヨ「なんだ!?!」

建物が突然破壊されたことに驚いていると、黒煙からバトルシーザーロボが姿を現した。

カゲチヨ「うおー!なんだ、あのロボット!超カッケー!!!」

ヒサメ「小学生かっ!!」

バトルシーザーロボを見て興奮するカゲチヨにヒサメは呆れながら突っ込む。

ヒサメ「ん?…ちよつと、あのロボットに誰か追われてるよ!」

カゲチヨ「え?うお、マジか!?!」

ヒサメに言われてバトルシーザーロボの歩いている先を見ると小さな影が逃げていた。

その小さな影は必死で、バトルシーザーロボから逃げていたが、石にでも躓いたのか、転倒してしまった。

カゲチヨ「あぶねえ!!」

転倒したのを見て、あのままではバトルシーザーロボに踏み潰されてしまうと思った時、バトルシーザーロボがその動きを止めた。

ヒサメ「止まった?」

カゲチヨ「アイツがあロボットのパイロットか?」

バトルシーザーロボが止まり、中からステイシーザーが降りてきたのが見えた。

ステイシーザー「ようやく追いついたぞー!」

バトルシーザーロボから降りてきたステイシーザーは立ち上がるうとするリュイに銃口を向ける。

リュイ「くっ！」

ステイシーザー「させるか！」

アマゾンズドライバーを出して変身しようとしたリュイをギアトジンガーのトリガーを引いて太ももを撃ち抜いた。

リュイ「いつ!!」

太ももを撃ち抜かれて、リュイは変身できなかった。

リュイ「うう……」

血がどくどくと流れる太ももを押さえて、リュイは痛みでうずくまってしまう。

ステイシーザー「手間取らせてくれたな。手足のもう1、2本撃ちぬいておくか…!？」

ギアトジンガーを構えてリュイの四肢を撃ち抜こうとした矢先、赤い糸のようなものが奇襲のような形で襲いかかってきた。

ステイシーザー「誰だ!!」

糸を回避したステイシーザーは叫ぶ。

カゲチヨ「小さい子供相手に随分と大人げねーじゃねーか！」

ヒサメ「君、大丈夫？」

それに答えるようにカゲチヨがステイシーザーの前に現れ、ヒサメがその後ろでうずくまるリュイに駆け寄る。

ステイシーザー「僕の邪魔をしないでくれるかな？」

邪魔をされたステイシーザーはカゲチヨたちに言う。

カゲチヨ「小さい子供を、デカイロボットで追いかけてまわして脚を銃で撃ったお前の邪魔をしないほうが変だろ」

腕から赤い糸状にした自身の血液を展開しながら臨戦する。

ステイシーザー「そうか、邪魔をするというのなら……」

臨戦するカゲチヨにステイシーザーはダークセンタイギアを出してギアトジンガーにセットした。

《邪バーン……!》

《リュウソウジャー……!!》

セットされたダークセンタイギアからギアトジンガーを經由で呼び出されたのは43番目のスパー戦隊【騎士竜戦隊 リュウソウ

ジャー」のフェイクであった。

ステイシーザー「行け！」

現れたステイシーザーの指示で、リュウソウジャー（レッド、ブルー、ピンク、グリーン、ブラック）がカゲチヨにリュウソウケンで襲い掛かる。

カゲチヨ「なっ!?!んなのありかよ!?!」

いきなり5人も召喚してきたステイシーザーに言いながらカゲチヨはリュウソウジャーの攻撃を回避する。

ステイシーザー「そのままそいつを抑えてろ！」

リュウソウジャーのフェイクにカゲチヨの足止めを任せ、ステイシーザーはリュイを捕らえようとヒサメに接近する。

ヒサメ「行かせないんだから!!」

接近してきたステイシーザーにヒサメは電撃を放った。

ステイシーザー「!?!」

電撃はステイシーザーには直撃しなかったが、足元に命中して接近を妨げた。

ステイシーザー「雷の超能力者か？だが、僕の敵じゃない!!」

ヒサメが電撃を放ったことに少し驚きはしていたが、敵ではないと判断して走り出した。

ヒサメ「私の能力が雷だけと思わないでね!!」

そう言ってヒサメが手を地面に付けると、走ってくるステイシーザーに向かって氷柱が伸びて下半身を凍りつかせた。

ステイシーザー「なに!?!」

雷だけでなく冷凍能力を有していたことは予想外だったのか、凍りついた下半身を見ながらステイシーザーは驚く。

さらにヒサメはリュウソウジャーのフェイクにも向かって冷凍攻撃を行い、下半身を凍りつかせた。

ヒサメ「今のうちに!」

カゲチヨ「おう!」

ステイシーザーとリュウソウジャーのフェイクを凍りつかせ、ヒサメはリュイを抱えて言いとカゲチヨと共に逃げていくのだった。

ステイシーザー「くそ！待て!!」

リュイを連れて逃げていく2人を見てステイシーザーは追いかけるようにするが、下半身を凍りつかせられて動けなかった。

カゲチヨ「とりあえず、ここまでくれば大丈夫だろう…」

ステイシーザーから逃れたカゲチヨたちは人通りの多い商店街の裏路地に隠れていた。

ヒサメ「そうだね。ねえ君、大丈夫…」

リュイ「すー…すー…」

振り切ったと思ったヒサメは心配してリュイに聞くが、リュイは変身した反動の睡魔に襲われてしまい、ヒサメの腕の中でぐつすりと眠っていた。

ヒサメ「ええ!?寝てる!?!」

カゲチヨ「どんな神経してんだよ!?!」

ぐつすり眠っているリュイに2人は驚く。

カゲチヨ「つて、そういえばコイツ、脚撃たれてたろ!」

ヒサメ「そうだった!今のうちに傷を…つて、あれ?」

カゲチヨに言われて、リュイがステイシーザーに射たれていたことを思い出したヒサメはすぐに患部である脚を見るが首をかしげた。

カゲチヨ「どうした、ヒサ」

首をかしげている

ヒサメ「傷が…無くなってる…」

カゲチヨ「んな馬鹿な!?!」

射たれた傷が無くなっていると聞いてカゲチヨも確認すると確かにステイシーザーに射たれた傷がすでに塞がっていた。

カゲチヨ「いったい、どうなってるんだよ…」

眠っているリュイを見ながら、その回復力の高さにかゲチヨは何かを感じていた。